

①

有島武郎研究

増子正一著



新教出版社



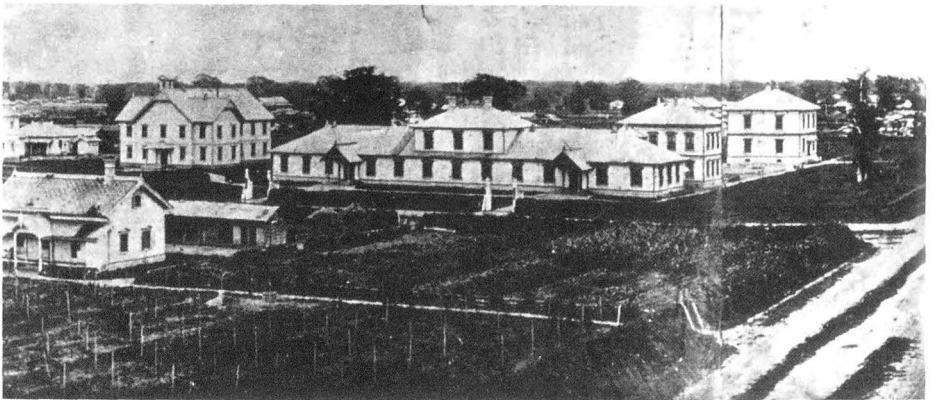
明治21年頃。後列右より武
郎(学習院の制服制帽姿)、
松岡廣一、佐山英男、前列
右より弟壬生馬、杉田一貫



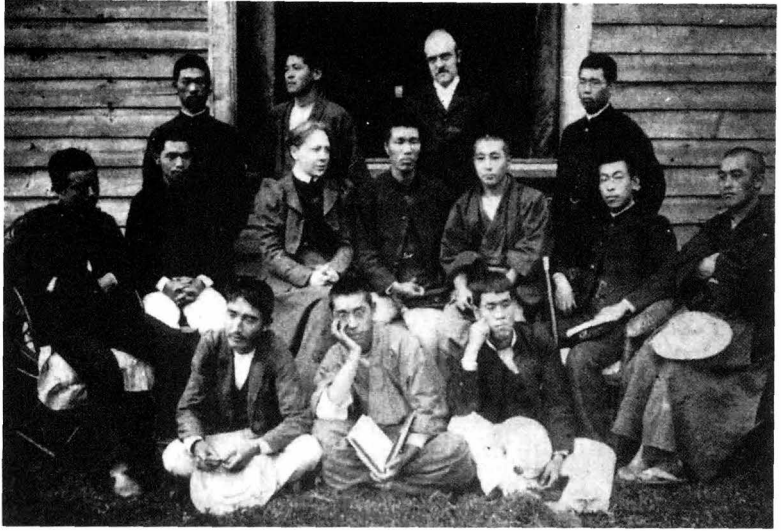
母方の祖母山内静



明治29年8月、初めて
北海道へ渡る直前の武郎



明治9年、創立当時の札幌農学校



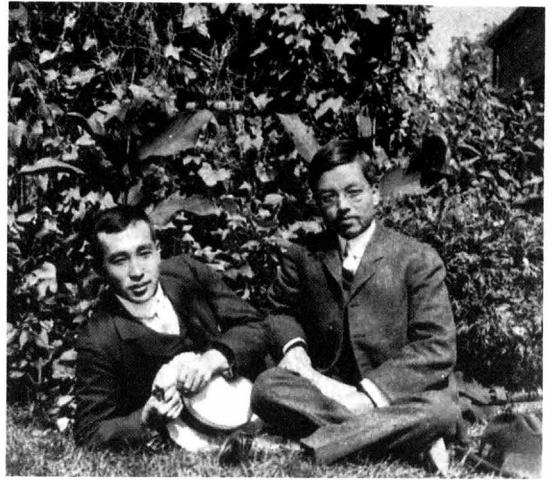
札幌農学校ドイツ語クラス、後列右より神田勝玄、ピアソン、鈴木真吉、
 広瀬平、中列右より星野勇三、森広、武郎、伊藤清蔵、ピアソン夫人、
 笠原十司、森本厚吉、前列右より明峰正夫、半沢洵、詫臣弼



明治36年、武郎渡米記念に麴町六番町の家で。前列右より行郎、愛子、母幸子、父武、シマ子、
 英夫、後列右より隆三、山本直良(愛子の夫)、武郎、高木喜寛(シマ子の夫)、壬生馬



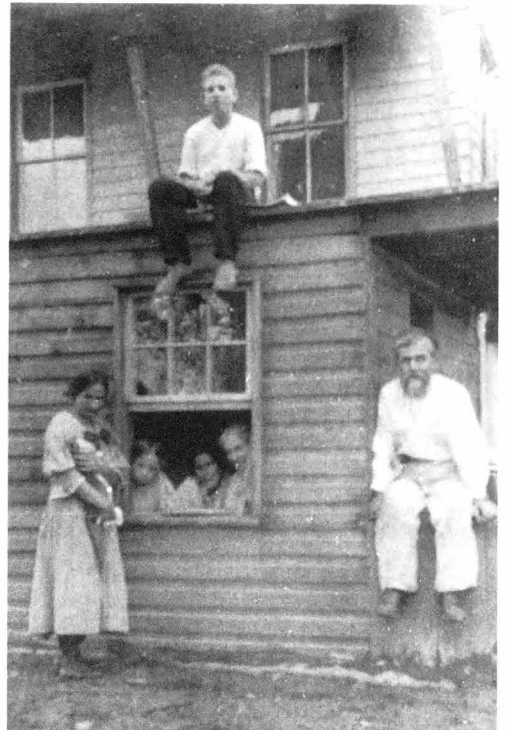
ファニー（フランセス）



森本厚吉（右）と武郎（明治36年8月、シカゴ?）



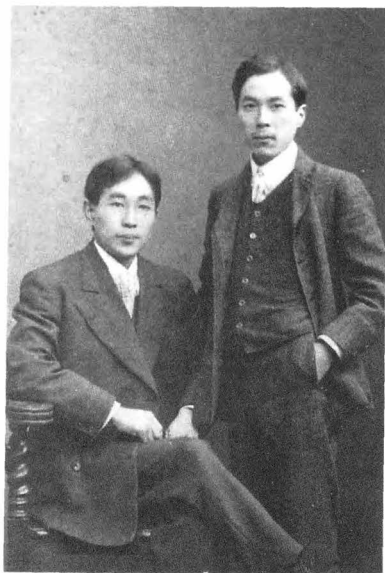
「聖フランシス」（明治36年画）。アーサー・クロウエルの妹ファニーであろう



ハヴァフォード大学の友人アーサー・クロウエルの家族たち。ここで妹のフランセス（ファニー）を知る



アメリカ留学中。武郎（中央）と友人2人



明治39年、ベルリンにて生馬と



明治42年3月、神尾安子と結婚



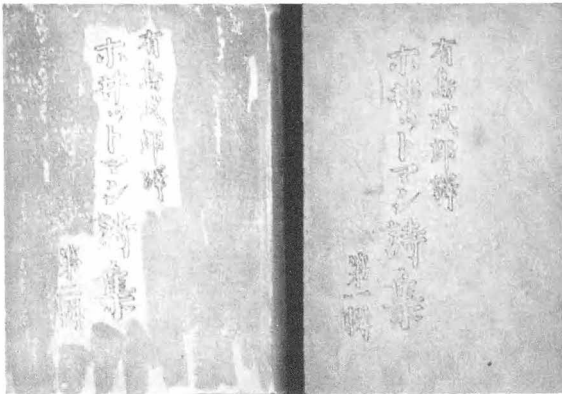
大正6年，麴町六番町の家の書齋にて



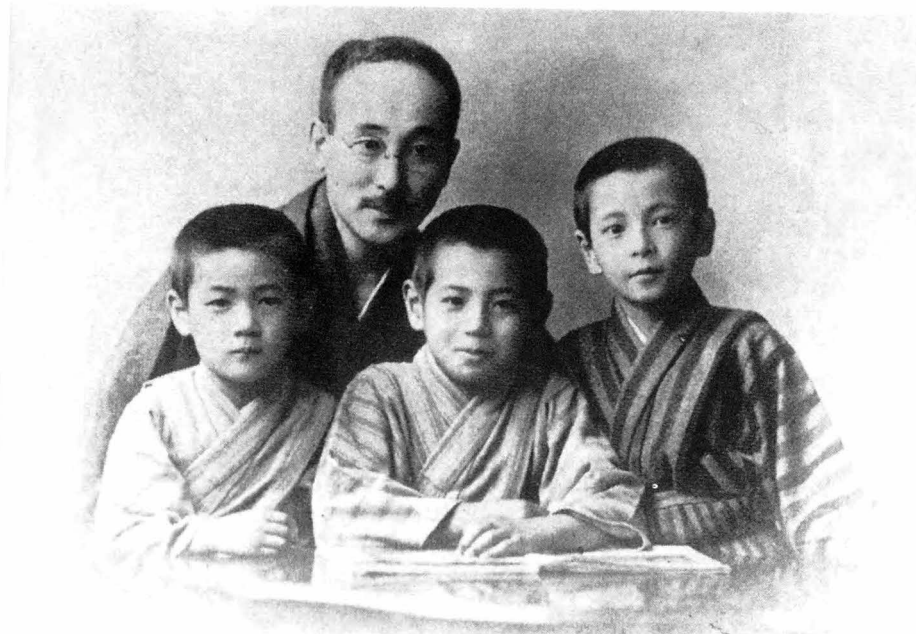
「一房の葡萄」を発表した大正9年8月号の『赤い鳥』



大正11年11月，叢文閣刊



大正12年2月(第二輯)，大正10年10月(第一輯)，叢文閣刊



大正9年6月、3人の子供（右より敏行、行光、行三）と武郎



右高農場事務所の前で。右端吉川銀之丞、その隣が武郎（大正11年）

推薦のことば

小嶋 潤

科学的素養と緻密な思考力をもつ驚くべき精力家、努力家の増子正一君の長年の研究成果がここに結晶したことは、まことに喜びに堪えない。しかもそのテーマが近代日本文学の一翼を代表する有島武郎の研究とあつては、なおさら矚目に値する。

今一つ注目すべきは、その研究角度がキリスト教、殊に聖書中心の視点からなされていることである。そしてそれが科学者らしく統計的に客観的に試みられ、その点から有島武郎のキリスト教理解が解明されると共に、何ゆえ彼が棄教するに至ったかの洞察が展開されている。

いわゆる文学評論でもなく、人物論でもなく正に内面的な懊悩と苦悶のドキュメントといつて過言ではない。われわれは、そこから彼の生きた時代と環境の思想的・社会的背景をも察することができる。それはまことに過渡的な日本の揺籃期であった。特権階級に生まれ、多感な青年時代を揺れ動く世相とイデオロギーにもまれつつ過ごした一知識人の偽らぬ告白に、われわれもまた懐旧の念を禁じ得ないのである。

その死は関東大震災の僅か二か月余り前のことであつた。その後の日本の激変と激動の数十年を知るものにとつては、彼の死とともに日本の旧約時代は終つたの感が深い。だが新約時代はまだ来ていない。この時に当たつて増子君のこの業績は一顧に値するといわなければならぬであろう。われわれはそこから新しいものを見出してゆかなければならないのである。

一九九四年五月

目

次

推薦のことば……………小嶋潤……………i

関係地図……………xvi

1 北海道……………xvi

2 札幌……………xv

3 アメリカ……………xvi

4 ヨーロッパ……………xviii

第一編 有島武郎とキリスト教……………一

第一部 札幌独立教會脱会前と聖書……………三

はじめに……………iv

第一章 二重決定論的思考……………五

第二章 聖書誤解……………六

第三章 パウロよりヨハネ……………三

第四章 行為義認……………六

第五章 信仰動揺……………五

感情と感激の宗教	三六
神がかり的表現	四一
第六章 自由主義神学との関係	四九
第二部 裏切者意識と潜在信仰	七三
第一章 キリストに対する裏切者意識	七四
第二章 社会に対する裏切者意識と自殺	八〇
第三章 カール・バルトのユダ観と有島との共通性	八三
第三部 増子方式	八七
はじめに	八八
第一章 有島武郎とヨハネ伝	九二
はじめに	九二
「有島武郎と聖書」回数別順位	九三
有島武郎全集とヨハネ伝一覧表	九七
観想録（日記）とヨハネ伝福音書	一二一
「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位	一二三
おわりに	一三〇
第二章 ヨハネ伝内容別順位1～21位解説	一三三

「聖餐」登場人物の「台詞と卜書」回数	一三〇
総括	一三三
第三章 有島武郎と創世記	一五
はじめに	一五
有島武郎全集と創世記一覧表	一五
観想録（日記）と創世記	一七
「有島武郎と創世記」の中の内容別順位	一九
「有島武郎と創世記」の中の内容別順位について	二三
アブラハムとヨセフが話題にない原因	二五
第四章 有島武郎とマタイ伝	二七
はじめに	二七
有島武郎全集とマタイ伝一覧表	二八
観想録（日記）とマタイ伝福音書	三一
「有島武郎とマタイ伝」の中の内容別順位	三三
新「有島武郎と聖書」回数別順位	三五
第五章 増子方式の成果	三七
第四部 日記で話題にした聖書	三七
はじめに	三六

觀想錄 (日記) とヨハネ伝福音書	二六六
觀想錄 (日記) とマタイ伝福音書	二七九
觀想錄 (日記) とルカ伝福音書	二八八
觀想錄 (日記) と創世記	二九四
觀想錄 (日記) とローマ人への手紙 (ロマ書)	二九八
觀想錄と共観福音書	三〇六
觀想錄と四福音書	三二二
觀想錄 (日記) と詩篇	三三七
觀想錄 (日記) とマルコ伝福音書	三三三
觀想錄 (日記) とイザヤ書	三三九
觀想錄 (日記) とヨブ記	三四三
觀想錄 (日記) とコリント人への第一の手紙 (コリント前書)	三四七
觀想錄 (日記) とヨハネの第一の手紙 (ヨハネ第一書)	三四一
觀想錄 (日記) と使徒行伝	三四三
觀想錄とコリント人への第二の手紙 (コリント後書)	三四四
觀想錄 (日記) とテモテへの第一の手紙 (テモテ前書)	三四六
觀想錄 (日記) とヤコブの手紙 (ヤコブ書)	三四八
觀想錄 (日記) とヨハネの黙示録	三五〇
觀想錄 (日記) と出エジプト記	三五三

観想録（日記）と雅歌	三五五
観想録（日記）とテサロニケ人への第二の手紙（テサロニケ後書）	三五六
観想録（日記）とヘブル人への手紙（ヘブル書）	三五七
観想録とペテロの第一の手紙（ペテロ前書）	三五九
観想録（日記）と申命記	三六一
観想録（日記）と列王紀上	三六二
観想録（日記）と箴言	三六三
観想録（日記）とテサロニケ人への第一の手紙（テサロニケ前書）	三六四
観想録（日記）と不特定	三六六
第五部 作品で話題にした聖書	三七二
はじめに	三七三
ヨハネ伝	三六〇
第六部 有島武郎が使用した『新約全書』	三九二
はじめに	四一〇
有島武郎が『新約全書』に記した箇所	四一七
第七部 悲運、有島武郎	四二九

第二編 作品研究	三三
Ⅰ 『二部曲』	四五
『三部曲』序論	五七
第一部 本論「大洪水の前」	五七
第一章 あら筋	五九
第二章 登場人物評	五九
第三章 思想的考察——有島の問題提起	六七
第四章 他の作品との関連	六七
第一節 横光利一「碑文」との比較	六六
第二節 「首途」と予定説	六八
《展開》「大洪水の前」思想的考察——ノアの息子達と思潮	六一
はじめに	六二
第一章 有島「大洪水の前」と聖書「洪水」	六九

第二章	〈セム〉十八世紀以前の思潮……………	四九
第三章	〈ハム〉自然主義的思潮……………	五〇
第四章	〈ヤペテ〉到来すべき思潮……………	五三
第五章	「ノアの台詞」「レメクの剣の歌」……………	五五
第二部	本論「サムソンとデリラ」……………	五七
	はじめに……………	五八
第一章	聖書学的準備……………	五九
第二章	あら筋、未定稿と定稿……………	五九
第三章	戯曲と士師記との相違点……………	五七
第四章	他の作品との関連……………	五七
第五章	第一主題と有島の聖書理解……………	五七
第三部	本論『三部曲』試論……………	六一
	はじめに……………	六一
第一章	武郎と信子……………	六三
第二章	恋愛本能抑圧代償……………	六五

第三章	『三部曲』旧約劇……………	五九六
第四章	「聖餐」マゲダラのマリヤ……………	五九六
II	有島武郎の児童文学……………	六〇七
序	論……………	六〇九
第一部	有島童話と児童観……………	六二七
第一章	童話鑑賞……………	六二八
第二章	児童観……………	六四六
第二部	童話成立過程とその前後……………	六五九
はじめに	……………	六六〇
第一章	翻案・翻訳童話とその前後……………	六六三
第二章	深層心理学と童話成立過程……………	六七四
第三章	他の作品と童話との関連……………	六八六
第四章	有島の少女偏愛……………	七〇〇
第五章	キリスト者有島武郎……………	七〇五

第三部 有島武郎の童話の特徴——ユング心理学の立場からみて……………	七二
第四部 「片輪者」の原典……………	七九
Ⅲ その他の作品……………	七三
「迷路」について——有島武郎の棄教への一考察……………	七五
「卑怯者」——有島武郎の性格の一面……………	七五
「老船長の幻覺」試論……………	七九
有島武郎の「實驗室」について……………	七三
「實驗室」……………	七五
Ⅳ 葛藤文学……………	八五
はじめに……………	八七
一 概観……………	八七
二 有島武郎とトルストイ……………	八八
おわりに……………	八三

有島武郎年譜	八五
参考文献	八五
収録論文初出一覧	八〇
あとがき	八三
索引	1
聖句索引	3
人名索引	17
事項索引	28

箱の筆蹟は『生れ出づる悩み』原稿（部分拡大）

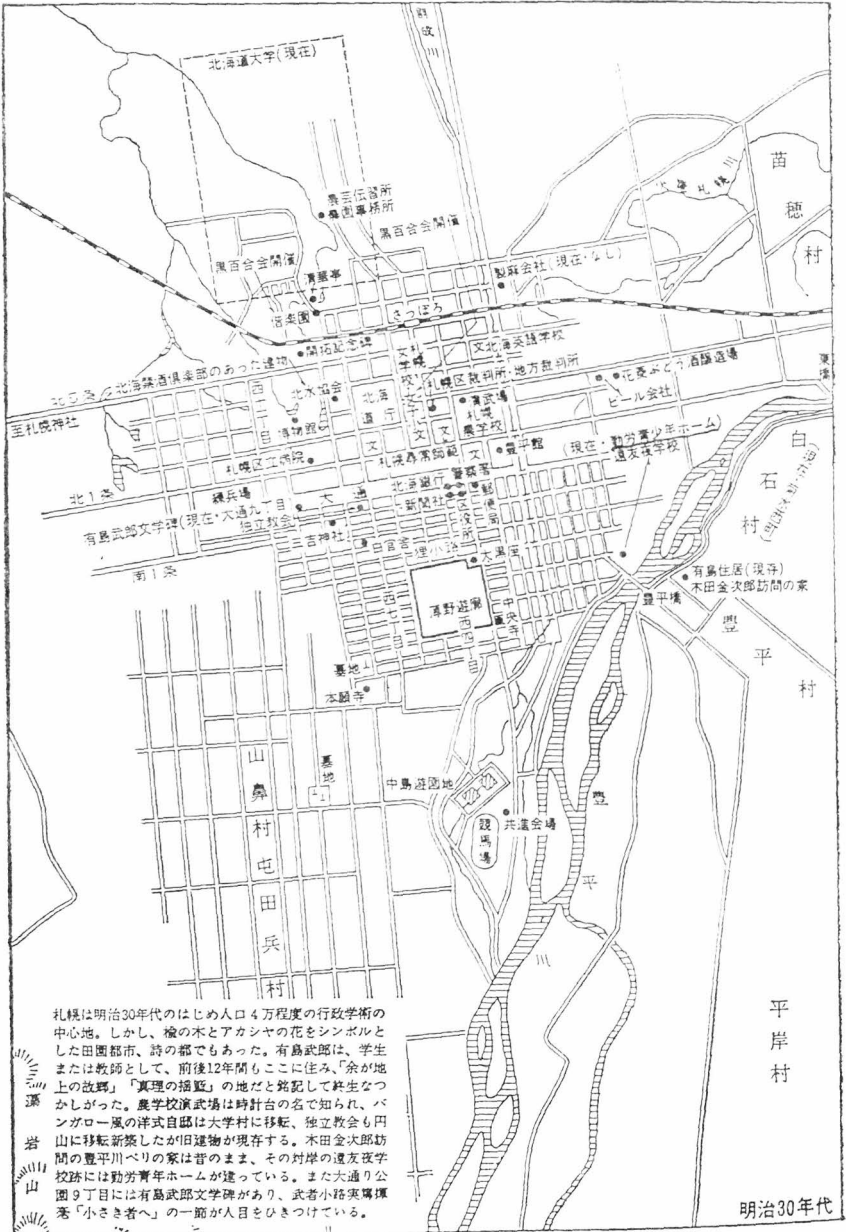
装釘 山崎 晨

関係地図 1 北海道——「カインの末裔」「生れ生づる惱」「星座」「潮霧」



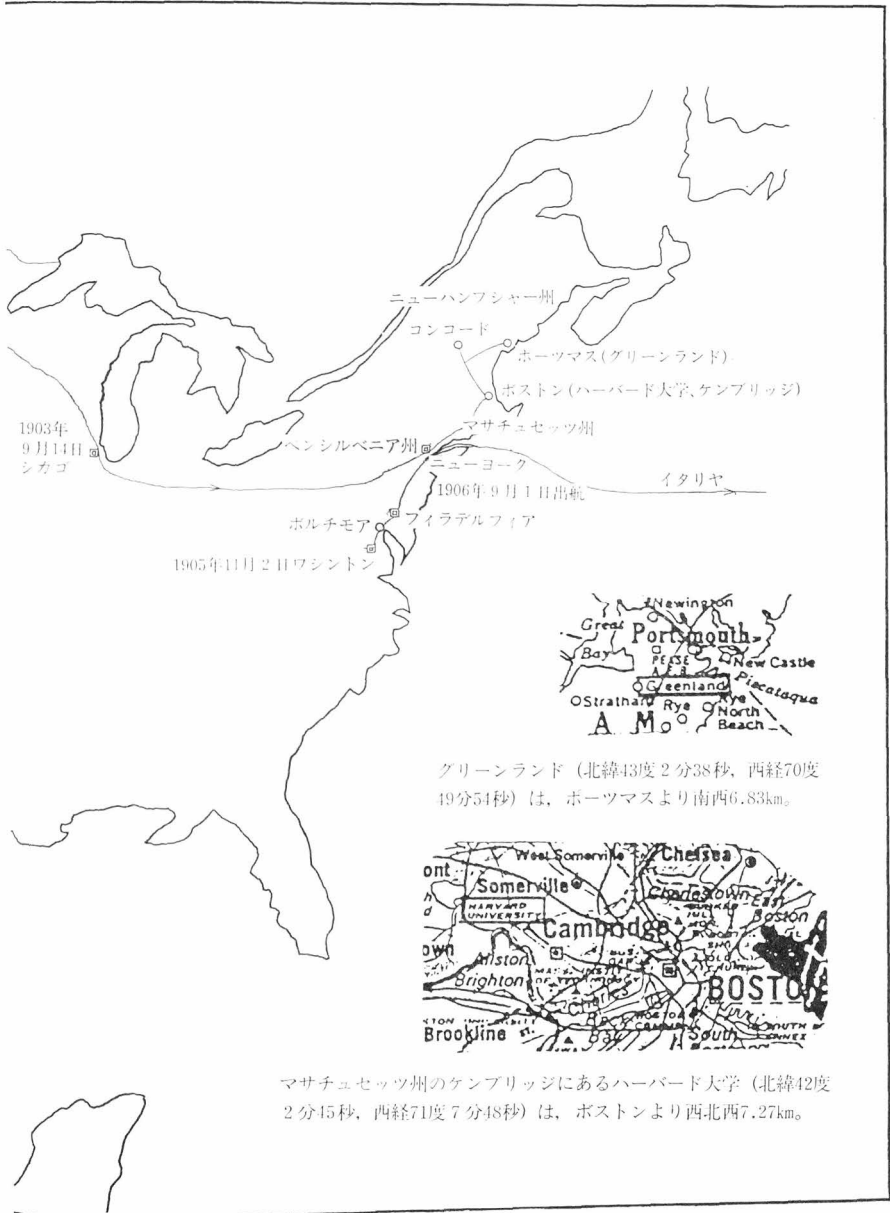
きらいな蛇のいない北海道。このイメージは、伝統や因襲に縛られない自由の新天地・北海道のメタファーである。有島武郎は、それゆえに北海道を精神の「一大母炉」として人格形成の思想を純粹に培うことができた。「星座」はその未完の決算書。「星座」の主要舞台は札幌・千歳・小樽。「生れ出づる惱み」は札幌狩太(現在ニセコ)・岩内。岩内の雷電海岸には有島武郎文学碑がある。「カインの末裔」は狩太・函館。後方手稲山の直下、有島農場の現在地には農場解放記念碑と有島記念会館がある。——石狩・胆振・後方(くなしり)の三地方に聚中している作品の舞台は、武郎が足跡を印したゆかりの地。武郎は北海道の人と東北とを隔りなく愛した。代表作に北海道取材作が多いのも当然である。

関係地図 2 札幌——「生れ出づる悩み」「星座」「お末の死」

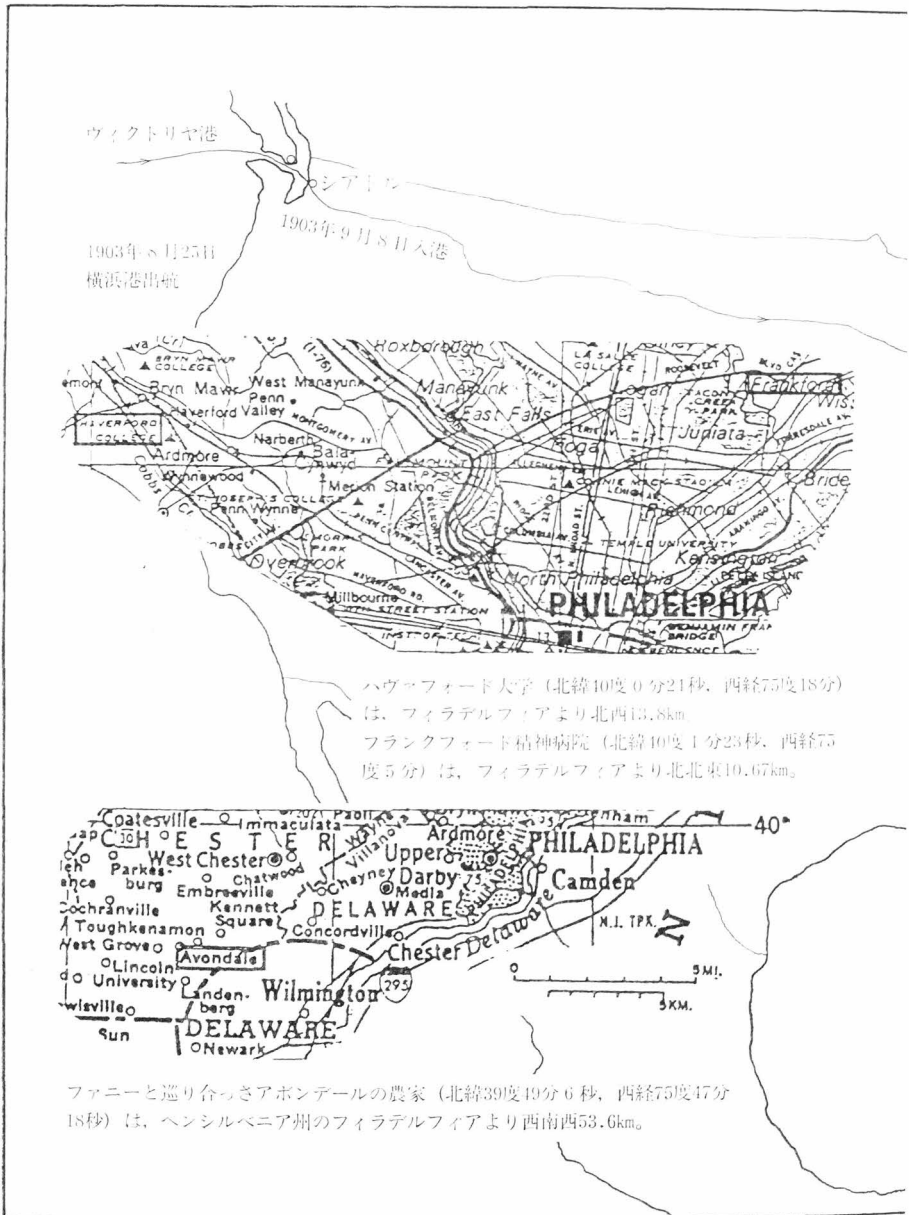


札幌は明治30年代のはじめ人口4万程度の行政学術の中心地。しかし、檜の木とアカシヤの花をシンボルとした田園都市、詩の都でもあった。有島武郎は、学生または教師として、前後12年間もここに住み、「余が地上の故郷」「真理の描筆」の地だと銘記して終生なつかしかった。農学校演武場は時計台の名で知られ、バンガロー風の洋式自邸は大学村に移転、独立教会も円山に移転新築したが旧建物が現存する。木田金次郎訪問の豊平川べりの家は昔のまま。その村屋の遺友夜学校跡には勤労青年ホームが建っている。また大通り公園9丁目には有島武郎文学碑があり、武者小路実篤揮毫「小さき者へ」の一節が人目をひきつけている。

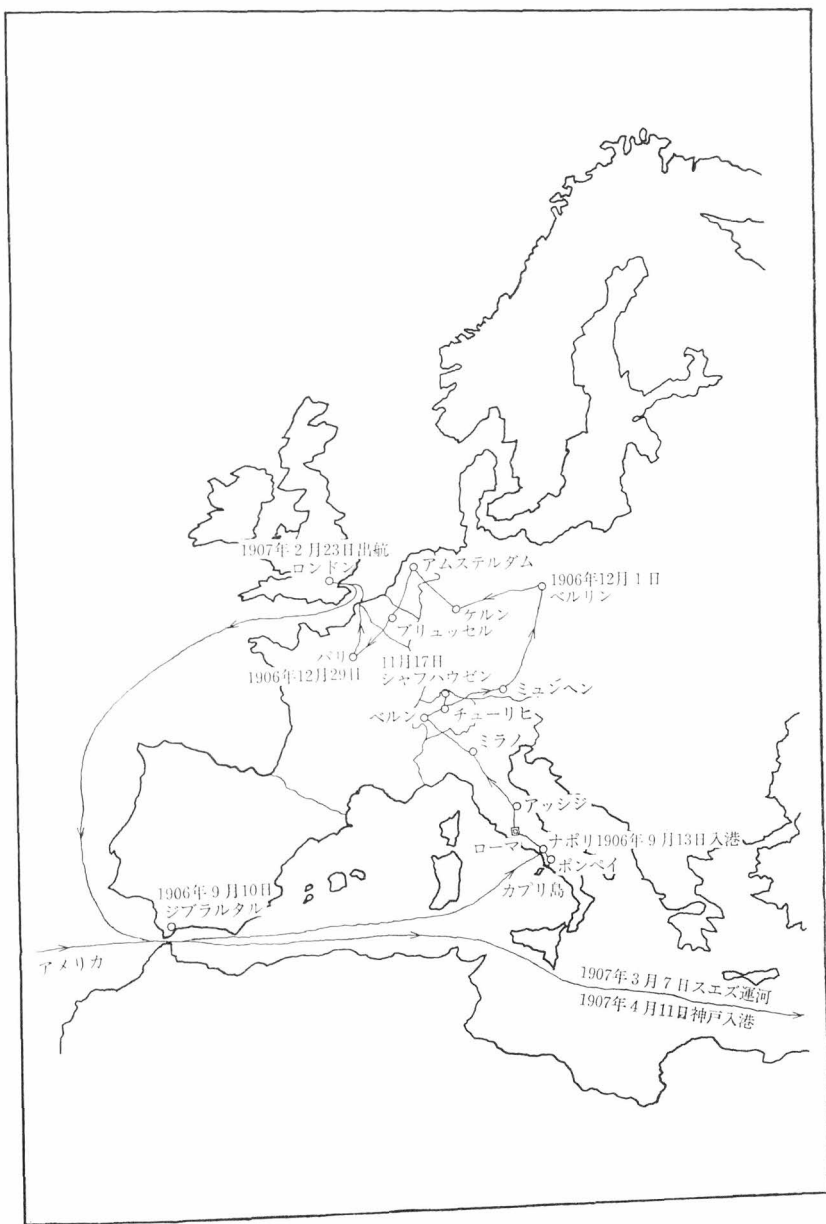
明治30年代



関係地図3 アメリカ——「迷路」「観想録」「フランセスの顔」



関係地図4 ヨーロッパ——「クララの出家」「旅する心」「観想録」



第一編 有島武郎とキリスト教

第一部 札幌獨立教會脫會前と聖書

はじめに

昭和四十九年十月二十七日、日本近代文学会主催の秋季研究発表会（上智大）で、有島武郎「札幌獨立教會脫會前と聖書」と題して発表した。即ち明治四十三年五月、教会脱会までの「有島武郎とキリスト教」論である。次の六章から成っている。第一章 二重決定論的思考、第二章 聖書誤解、第三章 パウロよりヨハネ、第四章 行為義認、第五章 信仰動揺、第六章 自由主義神学との関係。本稿は、発表当時の原稿を元に、その後の研究を加えて成った論文である。

第一章 二重決定論的思考

本稿の結論を最初に述べておこう。有島の背教原因については、これまで様々な見方がなされて来た。例えば、森本への同情と非主体的入信、自然神学的神認識と贖罪論否定、内村鑑三との出会い、北欧文学心読、フレンド派神秘主義の影響、金子喜一を通しての社会主義とピイボデイを通してのホイットマンの影響、というような見方がある。しかし私は調査研究の結果、次のような結論に達したのである。すなわち、背教の根本原因となったのは、やはり超理想主義、徹底完全主義、二元分裂的性格の有島がパウロと四つに組んだ対決をしたことにある。そして更に核心を云うなら予定説を二重決定論に誤解したためである。

さて、二重決定論とは予定説の誤解論である。すなわち、神による選びと棄却とが既決していると強調する論である。それでは予定説を二重決定論と誤解した有島の二元分裂的性格はどのようにして形成されたのであろうか。現在までのところ次の二つの要因が考えられる。

第一要因 幼少年時代。明治十七年、六歳にして非人間的スバルタ式武家教育と欧米流のキリスト教的自由な人間教育を同時に受けたためである（「有島武郎伝」 幼少年時代」瀬沼茂樹『文芸』昭38・7）。そして更に次の三つの対立事

項も第一要因に加えておかなばならない。

- 1 敵父の長男教育、対優しい母方祖母（明治十七年六歳）。
- 2 学習院儒教教育、対寄宿舎での男色、圧迫（明治二十年九歳）と中年寡婦誘惑（明治二十五年）。
- 3 父の郷土先輩森有礼暗殺事件契機に海軍から農業へ志望変更。世間的功名疑い厭世観へ（明治二十二年二月十一日、十一歳）。

このように矛盾した極端な対立を数多く経験していたことにより、武郎の臆病な性質と二元分裂的性格の原形は幼年時代に次第に形成されたのであると云えよう。

第二要因 青年時代。厳格なカルヴィニズムの流れをくむピュリタンキリスト教の影響を受けたためである。明治二十九年九月、十八歳の武郎は札幌へ渡り、農学校予科五年に編入学した。明治二十九年頃には既に清教徒クラーク博士の影響下、内村鑑三、新渡戸稲造、宮部金吾、等によつて札幌バンドが形成されていた。さて英国から新大陸へ渡つた清教徒の神学は、カルヴィニズム神学（ルター十子定説）であつた。そしてこのカルヴィニズムの態度は、信仰に真剣敵愾を与え、個人生活に禁欲と清貧を重んじ、社会生活に責任を尊重する気風を生み出していた（『キリスト教大事典』教文館238頁、以後「事典」と略記す）。そういえば内村の信仰が正にカルヴィニズムの信仰であつたことに気付くのである。そして寛容温厚な新渡戸よりも、有島は自分と逆のタイプ・強烈な意志の人・内村に引かれていたという笹淵友一説も肯定できるのである（『明治大正文学の分析』明治書院 昭45、690、698頁、以後、笹淵説はこの書の頁数で示す）。

ここで注目すべき事実は、青年時代の武郎は、自慰行為の罪意識に自己嫌悪していることから分るように、肉体的に健康な体になつていた、という事実である。（私は次の日記の記述を自慰行為の意味と見做している。即ち、へ森

本君をしてかゝる舉動……畢竟余が鍛錬の至らざる罪遂に累を森本君にまで及ぼさしめぬ。(明31・12・30)、(兄弟が毎夜の如く或る好ましからざる情にからるゝを見て)(明32・1・5)という記述である。笹淵氏も自瀆行為であるが(703頁)、本多秋五氏は男色説である(『白樺派の作家と作品』未來社 昭43)。さて、(其他種々の病は屢々余を襲ひて、余をして屢々死に瀕せしめぬ)(明32・6・14)とあるように、確かに幼少年時代は病弱であった。しかしさすがに精力家有島武の長男である。武郎は旺盛な精力を内に秘める青年になっていたのである。であるから理想主義者・武郎は、カルヴィニズム影響下にあつて、聖書と性欲、霊と肉、という深刻な二元分裂に煩悶し始めたのである。以上のような二つの要因が有島の二元分裂的性格形成にあずかったと考えられるのである。

武郎とキリスト教との出会いは、明治十七年、六歳の時、美普^{メソヂ}教会系の(山手甘番の英和学校)で欧米の教育を受けた時が最初である。この学校は横浜山手居留地一二〇番館にあつたブリテン女学校のことであり、小学科は男女共学であつた。「校長は毎朝全校生に教義問答^{キヤタキズム}を教え、旧約聖書の教えをといた」(瀬沼)とのことである。かくして幼い意識の底にキリスト教の影響が入り込んだのだが、武郎とキリスト教信仰となるとやはり札幌時代が問題になって来る。明治三十二年二月の入信から、明治三十七年夏の精神病院看護夫当時までの五年半、即ち、二十一歳から二十六歳までの「觀想録」(日記)には、青春時代の有島の生々しい心情が記されている。内容は、信仰、学問、恋愛、軍隊生活、友情、社会的行動、等多方面にわたっているが、この期間の日記からキリスト教信仰に関する記事をあげみると、重複する記事もあるが次の表の通りである。

<p>略) 話題にした聖書(年月日)</p>	<p>予定説</p>	<p>罪の悩みと贖罪論 神との直接の出会い絶無、信仰の危機</p>	<p>(神に祈る) 信仰者としての記事</p>
<p>ヨハネ伝(19回)。ロマ書(6回)。マタイ伝(5回)。創世記(5回)。ヨハネ第一の手紙(3回)。マルコ伝(3回)。ルカ伝(2回)。テサロニケ後書(2回)。ヨブ記(2回)。イザヤ書(2回)。黙示録。ヤコブ書。テサロニケ前書。コリント前書。コリント後書(6章)。ヘブル書(5章)。</p>	<p>9月26日(スコット氏の自殺)。 明治34年5月26日(永遠に救われざるもの)。 2月5、25日。4月20、21日。9月1日(罪人)。明治37年8月16(スコット)、17日(二重決定)。 明治36年1月8日(皇太子、新渡戸、自由意志)。</p>	<p>明治32年1月5日。4月17日(夢精)。明治34年3月18日。5月26日。明治36年4月21日(二重決定、『求安録』)。7月22日(内村、St. Francis)。9月1(自由意志)、14日。 明治34年5月23日。明治36年2月25日。3月3、19日。9月14日(感情に過ぎず)。</p>	<p>明治31年12月29日(祈祷)。明治32年2月20、21日(入信)。3月16日。4月4、9、15、17、23日。5月13日。7月7日。8月17日。12月31日。明治33年(一九〇〇年)5月25日。6月12、31日。明治34年3月6、23日。4月21日『用無全集』。5月10、12、26日。6月4、18日。7月23、25日。11月20、24日。12月26日。明治35年12月31日。明治36年正月元旦(ヨハネ伝)、1月11(赤児の信仰)、25日(宮崎湖處子の説教・同情)、1月4日、6日(聖フランチェスコ)。 2月7、8、12、14、19、20、23、26日。3月1、2、4、5、6、7、8、9、14、16、19、22、23、24、25、26、27、28、31日。4月3(伝道)、9、11、21、22、29、30日。G. Vadsis。5月4、7、8、13、14、15、17、20、21、29日。6月17、19、28、29日。7月1、4、19、22、28日。8月25、30日。9月1、4、6、10、14(神實在)、21、22、23日。10月8日。明治37年2月10日。3月29。7月19(神の導き)、20、24、25、26(トルストイ)、29日。8月2、3、5(リリー)、6、11、16、29、30。9月3、7(日露戦争)、2、3、5、16、18、19日。 明治34年5月23日。明治36年2月25日。3月3、19日。9月14日(感情に過ぎず)。</p>

パウロ批難とヨハネ支持 「聖餐」のヒロイン・姦淫の女	明治36年2月5、25日。4月20日。明治37年7月20日。8月2日、3日(14章18〜20節)。
	明治34年11月24日。明治36年2月8日。4月30日。5月29日。6月30日。8月1日。

(+印は十字架の用語あり。|印は重要。)

本稿は以上の一覽表を参考にしながら論を進めることにする。

まず表の三番目に贖罪論がある。有島は真剣に自己分析した結果、人間の罪は神に責任あるとして、贖罪論を否定したのである。入信後、親友本厚吉と共に角筈の内村鑑三を訪問し、復活と贖罪論について質問したことがある。そしてへ余は氏の持説に對しては、遺憾ながら賛成の意を表する能はざるもの(明36・7・22)とあるように、よく理解できなかつた。その年の秋、有島は自己を二元的に分析して、次のような考えに至つたのである。Free will を分解すれば神意に従順なる力と、之れに逆行する力との二つに分たるべし。罪を犯すとは所謂第二の力が第一の力を壓するなり。苟も第一の力第二の力より勝りて誰か好んで罪を犯すものあらんや。不幸にして第二の力第一のそれに勝るが故に、罪人なるものは寧ろ勢罪を犯すに至るにあらざるや。(明36・9・1)即ち有島の心情はこうである。第一の力より第二の力を強くしておいた神に責任があり、結局、自由意志は人間に与えられていないことになる。人間を罪人・神意にさからう在在に作つておきながら贖罪論とは何事か、というのが有島の心情であつた。そして脱会后、人間に意志の自由が許されてゐない以上は罪の自覺に對する責任感も生じては來ない筈だ。……その責任は勿論神になければならぬ。(『リビングストーン傳』の序―第四版の序―)大正8・3・22。以後「序」と略記する。)と云つて、激しいキリスト教攻撃と共に贖罪論を否定したのである。

周知のことだが有島をキリスト教信仰に直接近づけたのは、同級生森本厚吉の誘いが元であった。有島研究家の中には森本を悪者扱いしている人もいる。確かに脱会後の交友はほとんどない。しかし有島に近づいた頃の森本は、内村の贖罪信仰と自己との矛盾に苦しむ真摯な青年であった。類は友を呼ぶ。ように二人には互いに共鳴するところがあった。笹淵氏は「彼らを特別に結びつけたのは資質の共通性、(キリスト教徒の偽善性批判と共通する厭人思想)、農業という専門の勉強だけに没頭しえない彼らの精神的飢渴であった。」(11頁)と云っている。確かに偽善的キリスト者批判と反俗精神において二人は共通していた。例えば「懶惰虫の一種に耶蘇虫と稱す可きあり、當今流行せる似而非クリスチャンを云ふなり。」(「新渡戸先生を追懐し所感を綴る」札幌農學校學藝會雜誌三三號、明33・6)、(余は飽くまで俗人と居る事能はず、余は如何になるとも俗人を頭より撲滅したし(明32・2・15)という森本の怒りの言葉と、(芝教會の説教を聞く。其處に偽善の祈禱あり、虚偽の讚美歌あり(明36・1・11)、(函館美以教會から……前に寄贈して来た七百餘圓を卽座に電報爲替で返却せよとの催促……。金錢で人の良心を彼是れしようとするのは、俗人の中の俗人が慣用する手段であります(「札幌獨立基督教會沿革」)という有島の憤りの言葉とは、偽善批判と反俗精神という点で一致しており、やはり資質の共通性を明記している一例と云えよう。

更に資質の共通性として最も重要な点は、多少であれ森本にも二重決定論的思考癖があったという点である。森本の苦悩は白紙の有島に最初にして消し難い影響を与えたはずである。それではまず二人の交友から見ていこう。明治三十年九月二十三日、年令と農學校生徒としても一年、求道者としても先輩の森本が、まず真面目そうな有島を農園の散歩に誘った。曰く、(我と萬障を排し眞理に向つて歩むと云ふの交語を爲せ)有島、(我又元より眞理を躡まんと希ふもの、即ち直に然諾せり)というわけで交友は始まった。それから半年後、森本から信仰に関する極端な二元対立の苦悩を聞かされた。即ち森本は、(余常に天神の存在を確信)と云うそばから(無極の大罪人なり。銃を取つて自ら殺さんかと思ふ(明31・3・8)であり、(黙禱する時神の清音に接するを得るなり)と云う直後に(余が

罪責に至れば滿身唯慚愧轉輾反側、時に銃を取つて自ら殺さんとす。》(明31・3・13)ともらす有様である。正に天国と地獄、生と死の間をゆれ動く森本の心情である。ここに二重決定論的思考が読み取れよう。更に《神の現在を否定せず、され共承認もせず、余の心は地獄に行く可く墮落せり。》(明32・2・15)と絶望的に煩悶は継続している。即ち森本の信仰の不安には、《余は罪人、……、果して生くるの必要あるものか、……既に神より無能者と認められたるを知る》(明32・2・10)という悲壯な言葉が示すように、神に呪われた側に自分は属しているのではないかという絶望のちらつきがあった。この友に同情した有島は《死に臨んで考へて果して神の在在を心の中に知る事を得ば之れを以て君に遺品となさん。》(明32・2・15)と決意。しかし互いに押し問答した結果、《遂に相共に死なん》(明32・2・16)となつて、二月十九日夜から二十三日までの定山溪心中未遂と信仰体験へと発展するのである。そこで有島は《宗教的有頂天》(二序)を体験して、《神よ、我は今全く我が身も心も君に委せ奉りぬ。》(明32・2・21)と信仰を告白した。《我等は確かに死に面して神を求めたり、……。我等は先づ世と相去り専心神を求め》(明32・2・21 傍点は筆者)とあるように、この時共に森本も信仰への道を決意したらしい。そして森本は翌三十三年十一月十八日、札幌独立教会で受洗、有島も、三十四年三月七日の洗礼晩餐廃止決定後、三月二十四日に入会した。廃止決定後の独立教会では、会員有志が自由に説教を担当していた。

明治三十四年五月二十六日、日曜の夕拝説教を森本が担当し、有島は司会を務めた。森本が十字架の意義を解釈した後、神に棄却された側に言及した際、有島は強く心を打たれている。《全然的に十字架を負うて基督の跡に従はざれば、眞正の基督教信者と稱す可からざるを云ひ、偽善のみが此世界に於て永遠に救はれざるものなる事説けり。余の心は痛く打たれたり。》この感激は、元々二元分裂的性格の有島をして、以後、二重決定論的思考へと加速させる契機となっていた。《偽善》とか、《永遠に救はれざるもの》という言葉が気にかつたのである。こうなると二人とも、新渡戸の聖書講議の影響もあるのだが、それ以上に内村の贖罪信仰に強く印象づけられていたということが察

知されよう。ここまでの叙述が農学校時代の有島と森本との関係である。

幼少年時代、既に形成されていた二元分裂的性格の有島は、農学校入学後、贖罪論を否定するだけでなく、次第に予定説を二重決定論に誤解して行くのである。

〈宇宙の活動は救はれしものと救はれざるものとの活動なり。……。嗚呼神よ、爾は僕をその何れに選び給ひしぞや。……。信じて行ふもの唯克く救はれん。其他共に非なり。〉(明36・4・21。留学四ヶ月前。傍点は以後すべて筆者) どのように二重決定論的思考を続ける有島は、既にパウロに立腹していた。即ち、選びの排他性、偏狭性とパウロ個人の傲慢さに立腹していたのである。〈哥林多前書九章を読み、二十四節以下に到り、云ふ可からざる不快の念に打たれて思はず鉛筆もて其文を塗抹しぬ。我の傲慢かくなさしめしか、パウロの傲慢かくなさしめしか我知らず。されどもパウロを神の如く敬ふものは基督を人の如くするものなり。〉(明36・2・25)と憤慨している。九章二十四節以下には、果せるかな「競技場で走る者は、みな走りはするが、賞を得る者はひとりだけである。朽ちる冠、朽ちない冠、失格者」というように、有島には気にさわる言葉があった。それで有島は「賞を得る者」対「賞を得ない者」、「朽ちない冠」対「朽ちる冠」、「合格者」対「失格者」という対立を想定し、更に「救われし者」対「救われざる者」、「永遠の愛に居るもの」対「永遠の刑罰にあるもの」という以前からの対立概念を連想し、その文面に含まれている排他性、偏狭性、パウロ個人の傲慢さに立腹したのである。結局この立腹は、予定説を二重決定論に誤解していたことに起因している。

さてここで先行論文を整理し、「有島の入信と信仰について」の諸氏の見解を見ておこう。

1 多数の背教の実例に接したが、有島君のそれは最も悲しきものであった(内村鑑三「背教者としての有島武郎」万朝報 大12)。

- 2 イエスをキリストと告白する恩寵の体験を持っていなかった（佐古純一郎『有島武郎における虚無への転落』春秋社昭35）。
- 3 「序」「奪ふ」「観想録」中の信仰否定記事は、信仰者としての青春への挽歌。二十代における有島の信仰の眞実は否定できない（桑島昌一「有島武郎日記をめぐる問題」『国文学』昭39・8）。
- 4 「二人相死せんと決せし時はこよなく逸^はりたるきたなき心なりしなり」（明32・2・21）を引用、やりきれぬ青春の美しくかつ醜い茶番劇、しかし武郎の心に大きな変化が訪れたことは確実である（野島秀勝『文学界』昭40・1）。
- 5 「聖書」は、この文学者にとって滅びの書物でもあった（「有島武郎と聖書」荒正人『キリスト教と文学』修道社昭41）。
- 6 死ぬる意志よりも親友の見神の霊的体験が得られぬ苦しみに同情（山田昭夫『有島武郎』明治書院 昭41）。
- 7 入信もそれ以前の有島の思想と生活態度とを革命的に変えるものではなかった（安川定男『有島武郎論』明治書院昭42）。
- 8 森本と豊平川で月光を浴びながら祈り、その溺れの中に神が実在するような気がした（高原二郎『有島武郎』清水書院 昭42）。
- 9 定山溪心中未遂事件にも、身近かなものの苦痛に引き摺られがちな有島の性格が見られる（本多秋五『白樺派の作家と作品』未來社 昭43 266頁）。
- 10 定山溪の回心の体験が——その「宗教的有頂天」の実体については十分明らかではないけれども——有島の信仰者としての態度を決定したことには疑問の余地はない（笹淵友一 113頁）。
- 11 森本に同情した非主体的入信（西垣勤『有島武郎論』有精堂 昭46）。
- 12 信じ続けることのできなかつたキリスト教の「神」のかわりに、「自己の愛——エロース」を生きる目標とし

た（川鎮郎「有島武郎とキリスト教」『有島武郎研究』右文書院 昭47）。

13 北欧文学との出会いは、武郎の敬虔な信仰の中にひそんでいた、人間の罪と自由意志に関する一点の懐疑を突破口として、ついには彼の信仰をつき崩すに至った（上杉省和「有島武郎のキリスト教離反について」『有島武郎研究』右文書院 昭47）。

14 自然神学的神認識の域を出ることなく終始した。そしてそれは有島を贖罪を伴わぬ歓喜にひたらせることによって正統的信仰より遠ざけ、……戒律的側面に近づけた（宮野光男『有島武郎の文学』桜楓社 昭49）。

15 ひとたびキリスト教徒となった人間は、たとえ背教者となっても、キリスト教的課題から遁れることは不可能になる（小泉一郎『神と人とのあいだ』笠間書院 昭50）。

16 彼はイエス自身は愛したが、人間が入り込んだ基督教と基督教会は嫌った（小玉晃一『比較文学ノート』笠間書院 昭50）。

以上の十六見解の中、確かに大きな影響を受けたが、結局は背教者となったという見解が十二もある。そして今日、この見解が定説のようである。

ここで入信当時の日記を見ておこう。〈二人とも再び覺悟をし直し斷然身を神に捧げて今一度浮世の荒波を凄く可略く決したり。〉（明32・2・20 ルビは筆者）、〈神よ、我は今全く我が身も心も君に委せ奉りぬ。〉（明32・2・21）そして定山溪から豊平川へ下り、〈彼の月を見よ、彼の水を見よ、嗚呼我に何をか教へんとはするぞ。……。定山溪に我がなしたる決心は、此に再び確かめられたるが如き感なくんば非ず。〉（明32・2・23）以上が入信当時の日記からの抜粋であるが、聖書の言葉がない。定山溪の〈自然の絶美〉（明32・2・23）を眺めて〈宗教的有頂天〉（「序」となり、〈我は全く感激によりて、基督と神とに到〉（明36・2・25）だったのであろうか。聖書の言葉を媒介として（聖霊の働きに

より) イエスこそキリストであるという信仰告白の記事が、入信当時にはない。それで私は、有島には「確固たる信仰体験がなかった」(「悲運、有島武郎」『文学論漢』25号東洋大 昭38)と論じたことがあったが、現在では次のような見解に変わっている。

もし定山深入信が確固たる信仰体験でなかったと仮定しても、四年後の明治三十六年二月七日の日記には「基督が我等全人類の爲めに——義人の爲めに而して悪人の爲めに——涙を流し給ひ、十字架にまで懸けられ給ひし其事實は忤む事が出来ません。」という明確な信仰告白記事があり、教会脱会後でさえ、基督を強く意識し続けていた多くの事實を考慮し、有島という人間全体から判断するならば、最後まで信仰は潜在していた、というのが私の見解である。(多くの事実に関しての詳細は第二部「裏切者意識と潜在信仰」を参照されたい。)

尚、有島の二重決定論的思考は、彼の芸術家としての資質に負うところもあると考えられる。本来、芸術家は、聖俗、陽陰、強弱、等の極端な対立を想像する傾向が強いようである。有島は野性的豪快な男と清纯可憐な乙女を描くに長じた作家である。「カインの末裔」の廣岡、「或る女」の倉地、「サムソンとデリラ」のサムソン、一方、「星座」のおぬい、「お末の死」のお末、「フランセスの顔」のフアニー、「迷路」のフロラ。彼等彼女達は皆、柔和な顔と旺盛な性欲を持つ内向型熱血漢・有島武郎によって生み出され愛された人物である。豪快といえは「生れ出づる悩み」第六章にある嵐の海上での遭難描写は、その迫真性において他の海上文学に比類なしである。二元分裂の性格に加えて(この性格が資質に関与しているのであろうが)、このような芸術家としての資質を有する有島が二重決定論的思考を続けていたことは、容易に考えられることである。

第二章 聖書誤解

明治三十六年二月五日、二十六歳の有島は、日記にロマ書難解を書きつけた。〈朝聖書を読んだ。羅馬書である。難解の文は實に此書である。疑問と思はるゝ個處が尠くない。僕が疑へる所は彼の書に於ては直覺的にローロの結論のみが示してあつて、其所以が説いてないと思ふ様な所がある。又基督の基督教にあらずしてローロの基督教と推せらるる所も尠くない。〉このように既に反パウロの考えを示している。その後、九章（明36・2・14）、十三章（明36・2・17）、十一章（明36・3・29）、七、八、九章（明38・1・13）と熱心にロマ書を読み続けている。九章には予定説で問題のイサクとヤコブの話がある。有島はロマ書難解を記して二カ月半、今度は創世記でアブラハムの家系を調べた。

〈朝創生記を読み、イサク、ヤコブの事蹟を読む。……。此の如き傳説より基督教的精神を發見せし事は餘程の難事なり。……。極めて僻見なる、極めて畏怖すべき、極めて感情的なる、極めて怒り易き、極めて不公平なる神として顯るゝを見る。……。ユダヤ教の眞髓を極めたる Paul が多少かかる思想の拘縛する所となりしは怪しむに足らざるなり。〉（明36・4・20）アブラハムの家系を調べた結果、有島はイサクとヤコブの事蹟を知つて、極めて不公平なる神と批判し、この神を信奉するパウロにも立腹しているのである。それではイサクとヤコブの事蹟を簡単に紹介しておこう（創世記16 17 21 22 24 25 26 27章）。

八十六歳のアブラハムは生まず女の妻・七十六歳のサラに娶められ、侍女ハガルに子をませた。妊娠中のハガルに天使は「名をイシマエルと名づけなさい。彼はすべての兄弟に敵して住むでしょう。」と告げる。百歳になったアブラハムに神は「妻サラは男の子を産むでしょう。名をイサクと名づけなさい。私は彼と契約を立てる。」と告げる。次男イサクは妻リベカとの間にエサウとヤコブ（イスラエル）の双子を得た。飢え疲れた兄エサウは弟ヤコブに謀られ、赤い豆スープと長子の特権を交換してしまふ。弟を愛する母リベカの策略に乗って、ヤコブは父イサクから唯一度の祝福を偽って奪い取る。

この話を聞けば、不公平なる神に誰もが憤慨するであろう。すなわち有島は、胎内にいる時から既に、次男イサクとヤコブには恩寵が与えられ、長男イシマエルとエサウは一方的に呪われていることになると思つた。長男に同情した有島は、えこひいきの神、〈極めて不公平なる神〉に反抗し、このような旧約ユダヤ教の神に基づいてロマ書の九、十、十一章を書いているパウロに立腹したのである。

さて、予定説が論議される時は、イサクとヤコブの相続権と関連して、必ずロマ書の九、十、十一章が根拠として引用される。そして予定説の正しい見方は、今日のプロテスタント教会では、カール・バルトの見解に代表されると言われる。見解を解説しよう。

この予定説は、「わたしはあなたをまだ母の胎につくらぬさきに、あなたを知り、」（エレミヤ書1・5）とあるように、紀元前六二七年エレミヤ時代、既に普及していたと言われる。問題になったのは、カルヴェイン主義者とオランダのアルミニウス（Arminius, Jacobus 1560—1609）との神学論争の時からである。その後、二重決定論に墮した主義者と万物復興を唱えるアルミニウス主義者との論争が続いた。この両者の説を修正したのがバルトの予定説である。

すなわちバルトは、カルヴィニストではあるが、滅びの決定を人間が強調することに反対し、教会は恵みの強力さとそれに対する人間の悪の無力を説教すべしと言う。カルヴィンは予定説を御馳走くわんぎんぎちのものにしたが、本来予定説は福音の塩の役目を果すものである、というバルトの言葉は名言であると言えよう（菅圓吉譯「バルト 神學の根本問題」三笠書房 昭15 178頁、その他）。

さて有島の憤慨は、当然ながら聖書の理解不足による誤解が原因であると考えられる。であるなら「有島武郎とキリスト教」の論究を続ける以上、少しでも誤解を正しておかねばなるまい。哲学者ソクラテスは、学問理解のためには問答形式が最上である、という。少々おおげさになるが、私も有島バルト問答形式で聖書誤解を正しておきたい。すなわち有島の〈疑問と思はるゝ個處〉を、当然質問するであらう個處を、有島に代ってバルトに質問してみよう。

解答はバルトの初期の代表作・一九二二年改訂版「ローマ書」から聞くことにする。（翻訳書は次の二冊を使用した。バルト、川名勇訳『ローマ書新解』新教出版、昭41、吉村善夫訳『ローマ書』、バルト著作集14 新教出版 昭49）

問1 神はアブラハムの子では兄イシマエルを排除し弟イサクを選び、イサクの子では兄エサウを排除し弟ヤコブを約束の子として選んでいる。この一方的な選びと排除は〈極めて不公平〉であり、神の側に不正があるのではないか（ロマ書9・11―14）。

解答 断じてそうではない。神は兄弟をそれなりに必要とし、両者を用いることを欲し給うからである。それは実に憎まれ排除されたエサウにおいても言える。我々は排除された者を見る時、どのような場合にも福音の外に排除された者としてではなく、福音自体によつて排除された者と考えるべきである。それは排除のためではなく、包含のため

めなのである（川名訳 179～183頁）。

問2 不従順も神のあわれみに仕えるほかないとしたら、その不従順は従順になるはずではないか。それなのに、故神はなお人を責められるのか（ロマ書9・19）。結局、人間が所謂罪といはるべき行ひをした場合、その責任は勿論神になければならない（「序」ではないか）。

解答 問2は、神の自由と独裁権は「人間に責任なし」を帰結し、罪を克服する神の恩寵の普遍性は善と共に、悪をなす可能性を帰結する、という神批判・抗論である。《おお人間よ！ いかにも、だが神に言い逆らおうとするお前は何者か》（ロマ書9・20）この抗論は神と人間との間の無限の質的差別を見逃がしている。神の自由は、その存在によって人間の目を明るくしたり暗くしたりする光であり、無限者であり、審判者の宣告である。人間自身の自由と神の自由との関係が非直接であるということこそ、かえって人間の自由の相対的な必然性と敵愾性と秩序とを樹立し、かつ保証する。したがって神の自由と権能と恩寵を知れば、かえって人間はその軌道から投げ出されることがないであろう。何故なら、それを知ることとは、人間が人間であって、神でないということを知ることと不可分の一体なのであるから。抗論を発すること自体、それは真理に堪えることのできない人々の責任である（吉村訳47～48頁）。

以上、私の要約したバルトの解答文にも疑問はあろうが、有島の聖書誤解の一部でも正し得たであろうか。問1、問2、共に有島にとっては切実な問題であった。尚、ロマ書九、十、十一章全体の結論は「神はすべての人をあわれむために、すべての人を不従順のなかに閉じ込めたのである。」（ロマ書11・32）、「万物は、神からいで、神によって成り、神に帰するのである。」（ロマ書11・36）の二節であるとバルトは強調している（川名173頁）。

ロマ書に限らずパウロ書簡に関しては、有島の誤解は多い。例えばコリント前書第七章一、二、八、九、三十六、三十七、三十八節にある結婚奨励せずの文面が癩に障っていた。〈保羅が人に勧めて「若し出来るなら人は結婚しない方がいゝ。然し結婚しないでは結婚した以上の墮落に陥るだらうから、そんな人は結婚するがいゝ」と言つた言葉は私の癩に障る言葉だつた。〉(二序) 有島が〈そんな人は〉と誇張して憤慨したわけは、「わたしのように、ひとりでおれば、それがいちばんよい。しかし、もし自制することができないなら、結婚するがよい。」(コリント前書7・8、9)という文を曲解して、パウロは自制できない人を軽蔑していたと解釈したからである。そうなるると超理想主義、徹底完全主義の有島である。「パウロへの抵抗意識から、新婚生活中半年間も夫婦の交渉を断つた……。しかしこの完全主義は事実上は実現困難であるから、有島は偽善者意識の宿命に捉えられざるをえない。」(笹淵72頁、二序)のである。

山谷省吾著『新約聖書解題』(新教出版 昭23)の「パウロの手紙」によれば、「パウロは禁慾的傾向の強い時代に生き……。パウロの理想は独身であり、止み難い場合の他は結婚をよしとしない(52-53頁)。主の再臨の近き時……。時期は何人も知り得ず、唯神のみ之を知り給ふこと、然し急激に來るから平素の修練・準備の大切なる所以を説き(30頁)」とある。確かにパウロは「現在迫っている危機のゆえに、人は現状にとどまっているがよい。時は縮まっている。」(コリント前書7・26、29)と高調している。だからこそパウロは「ひとりでおれば、それがいちばんよい。」と言つたのである。すなわち内村鑑三も次のように注解している。「彼はこの世の終末の近きを予想しつつ論じているのである。ゆえにむしろ結婚せしめざるを善しとすというたのである」(『聖書注解全集』第十二卷 教文館 昭35 77頁)。(山谷省吾『パウロの神學』長崎書店 昭11 285頁にも同内容の記事あり) 有島は、終末論的再臨信仰で一貫しているパウロの言葉に対抗し、その言葉をそのまま自己にあてはめて苦しんでいたのである。その結果、パウロを〈偏靈主義〉者と批難するわけである(二序)。(尚「序」は、農学校時代から離教後、作家生活中の大正八年までの略歴と心奥を回

想した日記縮少版であつて、『リビングストーン傳』とは直接関係のない序である。明治四十二年三月結婚した有島が、パウロへの對抗意識から新婚半年間も夫婦の交渉を断つた事情は、明治四十三年五月の教会脱会前の事実であるから、本稿の題の範囲に入るわけである。

おわりに

これまで見てきた通り、有島は、ロマ書九章の予定説を、二重決定論に誤解し、コリント前書七章でも独身者と自制できない既婚者を対立させて憤慨し、同じコリント前書九章の競技場で走る者に、合格者と失格者を対立させてへ不快の念に打たれたりしている。言うならば、パウロ書簡に接する度に、必ず二重決定論的思考を続けて聖書を誤解し、一人相撲に苦しんでいたことになる。新約聖書の約三分の二を占めるパウロ書簡につまづいては、信仰生活も動揺するであらう。

しかし有島は、常にヨハネには傾倒していた。次の章で論究したい。

第三章 パウロよりヨハネ

有島は（僕はどうしてもポーロよりはヨハネに行き度くなる。僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。）（*明* 36・2・5）と強調している。パウロに反抗する有島が、その反動として愛のヨハネに傾倒していったことは考えられる。それで、このことについて検討したい。まずパウロとヨハネの神学を整理しておこう。

〔パウロ神学の概略〕 ① 中心原理はルターが指摘するように信仰義認である（ロマ書、ガラテヤ書）。〔伝道神学。② 近代のパウロ研究家パウル（F. C. Bauer 1792—1860）によれば、ロマ書、コリント前後書、ガラテヤ書などには律法主義と対決する反ユダヤ教的パウロ思想が明らかになっているという。更にパウルは、霊と肉との対立に対する贖罪における統合という見方でパウロの思想内容を解明した。③ パウロ神学の特徴である二元対立には、霊と肉、義と罪、自主と奴隸、生と死、などがある。④ 礼拝、バプテスマ、聖餐、等の教会儀式（聖礼典）の実践を重視した。更に、監督、長老、執事などの教職の職務にも詳細な注意を与えている。組織制度確立と教会の基礎作り。〔新聖書大辞典〕キリスト新聞社 昭46 「パウロ」の項 竹森満佐一 以後『辞典』と略記す〕 ⑤ 神の愛は、十字架上の贖罪愛に具体化されている。（山谷省吾『基督教の愛について』基督教思想叢書刊行會 昭12 一四八頁）

〔ヨハネ神学の概略〕 ① ヨハネ神学を代表する言葉は『ロゴス、生命、光』である。この言葉の關係の具体的内

容は『^{アガペー}愛』である（ヨハネ伝、ヨハネ第一の手紙）。神の愛、兄弟愛が強調されている。奇跡も『しるし』。（『キリスト教大事典』教文館 昭43 「ヨハネの神学」と「ヨハネによる福音書」の項 竹森満佐二）② 罪人の救いのために「己れの御子をも惜まで」賜ふ神は、「愛」と言う賓辭を以て説明するのが、最も適當である。しかもこの形式はパウロにはつひに見ることが出来なかつた。それはヨハネに至つて初めて現はれてをる（ヨハネ第一書四ノ八、十六）。この形式に於て愛は最高頂の表現に到達したのである。ヨハネは人間の窮極の救を「罪の赦」ではなく「限りなき生命の獲得」と言ふ形式を用ひてあらはした。「彼を信する者の亡びずして永遠の生命を得ん爲めなり」（ヨハネ伝三ノ十六）。（山谷省吾 一五八、一六一頁）③ パウロほどの強い伝道的意図がなかつたので、福音書にも教会を直接さし示す言葉はない。そして聖礼典についても儀式そのものに興味を示していないが、象徴的面が強いのでその内的意味は重視していたいと思われる。（『辞典』の「ヨハネによる福音書」の項 間垣洋助）④ 神学的な高遠さ。教理知る人相手の福音書。（パルパローデル・コル『旧約新約 聖書』ドン・ボスコ社 昭43）

以上のように整理した神学の概略を参考に、有島がパウロに反抗し、ヨハネに近づいて行つた心情を推察してみよう。

第一 有島の靈肉二元対立は靈的婚約時代、肉結婚生活で知られている（「序」、「觀想錄」）。パウロ神学②に、靈肉二元対立は贖罪を信することで解消、という意味の記述があるのだが、既に第一章で考察した通り、有島は贖罪に懐疑的であつたため対立解消できず悩み続けていた。（「觀想錄」には贖罪を信する記述も少しはあるのだが、へ基督が我等全人類の爲めに——義人の爲めに而して悪人の爲めに——涙を流し給ひ、十字架にまで懸けられ給ひし其事實は否む事が出来ません。（明36・2・7）この対立はパウロの「結婚奨励せず」の文面を誤解したことに呼応しているわけである。有島から

見れば、バウロは傲慢な偏霊者であったのである。

第二 バウロ神学⑤とヨハネ神学①②を対比すれば、有島に關しては次のようなことが言える。すなわち、贖罪に懷疑的であつた有島は、バウロが説く十字架上の贖罪愛よりも、ヨハネが説く「永遠の生命を賜う愛」を「普遍的愛」と信じて傾倒して行つた、ということである。ヨハネ神学②を繰り返すが、山谷省吾氏は特徴を次のように評している。ヨハネは人間の窮極の救を「罪の赦」ではなく、「限りなき生命の獲得」と言う形式を用いてあらわした。この評に着目すれば、有島がキリストの愛に感動した例として、ヨハネ伝八章「姦淫の女」の話を挙げる事ができる。すなわち、石で打殺されるべき女を「我も亦汝を罪に定めず」とイエスが救つた話である。ここには、「悔い改め」と「最後の救いへと至らせる」間垣洋助『ヨハネ福音書』聖文舎 109頁 昭41）イエスのキリストとしての姿がある。有島は「殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。余は之れを讀む毎に云ふ可からざる美感胸に逼りて、余の如きすら清き高き涙に誘はれざるを得ざるなり。」（明36・2・8）と感激を記した。そしてこの感激が聖書劇「聖餐」（大正8・10）を執筆する第一の動機となつていたのである。「聖餐」では、姦淫の罪を赦されたマгдаラのマリヤは、イエスを敬愛し、ついに最後の救い、すなわち、限りなき生命を獲得する信仰をもつヒロインとして登場している。すなわち、「弟子達が絶望の餘り一人残らずキリストを離れ去つた時にも一人もとの信仰に踏み止まつてキリストの信仰をこの地上に繋ぎ止めた」（「聖餐」に就いて）女性として登場している。有島の愛する女性像が早月葉子から「聖餐」のマリアへと発展し得たのは、ヨハネ伝からの影響が大きく働いていたのである。

また、有島がヨハネに近づいて行つた理由として次のような推測を加えておこう。すなわち、出来事や奇跡を《しるし》《象徴》とする思想的、観念的なヨハネ伝の文章が（二例として「言は肉體となり」1・14）、論理的思考にも強い思想家としての有島の関心を引きつけた、という推測である。

第三 パウロ神学④とヨハネ神学③を対比し、有島に関連して言えば次のようなことが明白になってくる。すなわち、信徒や教会指導者の偽善を見出し、教会の儀式制度に関心のなかった有島が、パウロよりヨハネに近親感を抱くのは当然である、ということである。〈煩雜なる禮拜儀式の束縛を厭ひ〉(札幌獨立基督教會沿革)、〈制度としての宗教に對しては自分は全然同情もなく其鳴を持つてゐない。〉(「反キリスト教問題より一般宗教批判へ」)、〈現代の宗教なるものは、あまりに宗教制度に囚はれ過ぎ、〉(「人間生活から光を奪ふ」 山田昭夫・内田満『有島武郎 上』所収 桜楓社 昭和50) という意見は、「教会儀式の実践を重視」するパウロではなく、「儀式そのものに興味を示していない」ヨハネに近いことを示している。教会の儀式や教義に関心を示さないと云えば、次の日記文もそれを物語っている。ヘカソリックとか所謂正教的キリスト教は、過去の事である。傳統と儀禮から解放された眞の宗教的欲求は、一度、セント・アウガステンやルーテルによつて叫ばれた信仰には、決して安心立命し得ないのだ。それ等の教義は、一度教義として信服してみると、笑止にも現代の思潮とは餘りに相反するを見る。(明39・9・11 米國より伊太利への船中) (「眞の宗教的欲求」とは、有島が敬愛するトルストイの宗教的欲求と同様、原始キリスト教の信仰への欲求を指していると思われる。ヘトルストイの『我が宗教』を讀む。熟讀大に得る所あらん。)(明36・3・22) (「光あるうちに光の中を歩め」)

↑原始キリスト教時代の物語―トルストイ全集9巻 河出書房新社 昭48) このように見て来ると、教会の偽善に批判的であつた有島には、やはり札幌バンドの影響が大いに働いていたことを見逃してはならない。すなわち関根正雄氏によれば、札幌バンドの生みの親である農学教師クラークは、牧師ではなくいわば素人伝道者であり、儀式や形式に無頓着であつた、という事実があるからである。彼の清教徒としての信仰が学生たちに堅固な倫理的影響を与えていた(関根正雄『内村鑑三』清水書院 22頁)。門下生である内村鑑三も新渡戸稲造も、その後、聖礼典の儀式には惑わされない信仰生活態度を取っているのも周知のことである(無教会主義、フレンド派)。そしてこの二人の先輩の間を有島

は行き来していたのである。

なお、明治三十二年二月の入信以来、三十七年夏の精神病院看護夫当時、すなわち、二十一歳から二十六歳までの五年半の日記から、キリスト教信仰に関する記事一覧表を第一章で掲げておいた。その表中の「話題にした聖書」には、ヨハネ文書45回（ヨハネ伝36回、ヨハネ第一の手紙5回、ヨハネ黙示録4回）、パウロ書簡37回（ロマ書25回、テサロニケ後書2回、テサロニケ前書1回、コリント前書5回、コリント後書4回）と、有島の聖書の読書傾向が数値で示されている。すなわち、分量で少ないヨハネ文書の方が、パウロ書簡の約一・二倍に相当する回数である。（その後の調査で昭和五十二年十月の発表時より回数はふえている。）

以上のようにパウロとヨハネの神学を参考に、有島がへどうしてもポーロよりはヨハネに行き度くな^レった心情を、第一、第二、第三とわたって推察してきた。これでそのわけが少しでも解明されたであろうか。

ここで比較作家論の一助として、藤村がヨハネでなくパウロに傾倒していたことを簡単に紹介しておこう。伊東一夫「島崎藤村と新約聖書」〔キリスト教と文学〕研究会会報第1号 昭41）なる論文には、綿密な調査報告がある。すなわち、晩年の藤村が聖書に施線した部分の章節を調査した報告である。それによつて、四福音書では共観福音書だけがとりあげられヨハネ伝が除かれていること、藤村が注意を払ったのはパウロ書簡、特にロマ書であることが明らかになった。そして伊東氏は、「論理的思考に弱い藤村にとつて、ヨハネ伝の原理的な論述が妨げとなった」、罪と再生（復活）に関する記述内容が藤村の心を捉えていた、と解説している。確かに藤村がロマ書に傾倒したわけは、罪意識から解放され新生するためにはパウロの贖罪、愛の言葉が一番励ましとなったからである。ねばり強く生き抜く藤村を晩年ついに救った聖書、完全な基督者であるべく努力した青年武郎を躓かせた聖書、それはパウロ書簡、特にロマ書であったのである。（藤村自身、排他性または差別という現実には慣れていたことも、パウロに躓かない理由の一

つと思われる。)

最初にパウロとヨハネの神学を対比しては見たが、両者の意図が本質において全く同じであることは、次の文章からも明らかである。「神の愛キリストの愛が人間の愛の動機と推進力とである。それに効つて人は神を愛し兄弟を愛することを知るのである。ヨハネに於てはこの兄弟への愛がより多くより熱心に説かれてをるが、それはパウロに於てもイエス自身に於ても同様である。」(山谷省吾 一六五頁)

以上、論述してきた通り、確かに有島はパウロに反抗しヨハネに傾倒していったのであるが、それでもパウロへにある多少の缺點を除く時は(人なり。彼に缺點なからざらんや)彼に於て余は強き聲を聞くなり。彼の向上的獻身的勇氣は世の未だ嘗て見ざりし所なるべし。基督教には確かに彼なかる可からざるなり。(明36・3・12)というように、パウロが基督教の中でいかに大きな役割をになっているかは認めていた。有島がこのように日記に書いているのは、前日、新渡戸氏から借りた聖書注解書「The 20th Century New Testament」の中の「テサロニケ前、後書」を読んでいる時である。そしてまた、「ロマ書」の中で予定説を問題にしている九、十、十一章では、全体の結論の一つである十一章三十二節を、既に有島も日記に書きとどめているように(明36・3・29)、パウロ書簡の読み方も的確である時もあるのだが、しかし明治三十六年二月五日、二十五日以来、予定説を二重決定論と誤解することによって受けた決定的な反パウロ感情を払拭することは、その後もできなかったのである。

第四章 行為義認

有島が信仰義認のパウロに反抗していたことは、有島自身が実際に行為義認的意識を持つていたことを裏づけしている。「自分には信仰があると称していても、もし行いがなかったら、なんの役に立つか。」(ヤコブ書2・14)というへヤコブ書の價値の容易ならざるを認めざるを得ない。人々は何故ヤコブ書を重んぜぬのであろう。(明36・2・5)と不審に思っている有島である。ヤコブ主義実践は、完全なキリスト者でありたいと願う有島の超理想主義、All or Nothing 主義的性格を反映しているわけである。

有島の場合だけでなく、一般に日本人には行為義認的宗教観が根付いている。(この件については別に考える必要がある。)宗教を道徳と同一視する傾向は、今日でもよく聞かれる「クリスチャンのくせに……」という批判的口調に端的に表われている。基本的なことであるが、神への信仰が牧師やキリスト者と称する人の行為を見聞することで動揺させられるものではない。それでは有島が行為義認的意識を持つていたことを示す事項を四点挙げて考察を加えておこう。

第一点 偽善的キリスト者、偽善的教会運営を知って信仰から離れる一つの契機となっていることこそ有島に行為義認的意識があったことを示している。信徒、牧師に反感を抱いていた事実の一例に明治三十六年一月十一日の日記

がある。

へ芝教會の説教を聞く。其處に偽善の祈禱あり、虚偽の讚美歌あり。自ら聖別せられたるを以て誇となし、不信者を禽獸視する教徒。會堂の建築と聴衆の多からん事に注意して、靈魂の建築（透谷「人生相渉論」と同じ用語）と信仰の上に多きを置かざる教師。〳

更に札幌においても有島は教界内の醜悪さを見聞している。「札幌獨立基督教會沿革」（二十五周年記念 明治四十二年 武郎三十歳）で見えておこう。明治十年八月、函館美以教会宣教師MCハリスが来札した。そして米国美以教会は札幌バンド青年たちに七百円を寄贈する。しかしこの寄贈は、札幌監督教会（聖公会）に対抗し、札幌バンドを美以教会の勢力内に抱込もうという下心からのものであったことが、青年たちに知られてしまう。それで函館美以教会は明治十五年元旦の夕方、寄贈したへ七百餘圓を即座に電報爲替で返却せよとの書状を青年たちに届けた。貧乏書生たちに同情し、美以教会の卑劣な行為に憤慨した武郎はへ金錢で人の良心を彼是れしようとするのは、俗人の中の俗人が慣用する手段であります。〴と記した。かくして、どの宗派にも属さない札幌獨立基督教會は明治十五年十二月二十八日に設立されたのである。それにしても、このような札幌市内での宗派の争いを知った有島がキリスト教界に対して嫌悪の念を抱いたのも当然ではあった。

この嫌悪の念は作品にも生かされている。「半日」では有島のモデル相島雪雄が、教会で讚美歌集を閉じ〵くだらん〳「もう少しゆるく歌へば好いんだ、さうすれば基督教なんぞは滅びて仕舞へるのに」〵と同席の教会員に立腹している。「或る女」でも、基督教婦人同盟会長五十川女史らの俗物、キリスト者、に、対決する葉子の言動が執拗に描かれている。

第二点 靈肉二元対立に煩悶し、自分は肉に属する者でありパウロは偏霊者であると批難し（「序」）、禁欲精神に躓いたこと自体、明らかに行為義認的意識と完全主義的性格のもたらす結果である。有島が最も愛読したヨハネ伝の

八章には、「姦淫犯さざる者なし」という意味の物語があったはずであるが。

第三点 へ日露戦争によつて基督教國民の裏面を見せられた。(二序)と言つて留学中の米国に憤慨していた気持も行為義認的意識を表わしている。へ小犬が大犬に勝つたのを面白がるやうな下心の潜むのを見て、私はこの上なく不愉快に思つた。(略)一体基督の血は彼等の何處に流れてゐるのだらう。(二序)と立腹する有島の気持は、基督教國民は道徳的にも立派であるはずである、という先入観からくる失望の気持である。

第四点 クラークにより清教徒精神の影響を受けた新渡戸、更にプロテスタントの正統派信仰カトリックをも受け継いだ内村、その後はクエーカーリズムと無教会主義との違いはあつても、彼ら札幌バンドの面々は信仰義認の生涯を全うしている。この事実は結果的に有島の信仰に行為義認的意識があつたことを物語っている。新渡戸も内村も聖礼典の儀式には惑わされない信仰生活態度をとつていった。クラークの人格の影響と信仰態度によるところ大であるからである。二人共入信以前は、儒教的倫理や武士道の伝統によつて確固たる主体性を養つていた。この儒教的倫理や武士道精神がクラークがもたらした倫理的禁欲主義、社会的責任感と結び付いて、ことに注目しなければならぬ。この二人に接した有島の場合にも同じ結び付きがあつた。⁽¹⁾すなわち禁欲主義(性欲抑制、結婚三十一歳童貞、「序」)、社会的責任感(日曜学校教師、校長、精神病院看護夫)、救貧事業精神(遠友夜学校教師)、等の清教徒精神を受け継ぎ実践している。注意すべき点は、清教徒精神実践は有島の場合、行為義認としての実践であつた、という点である。これを示す一例として精神病院看護夫時代の日記が挙げられる。将来牧師を希望する二十八歳の神学生ロバーツが武郎と同じ看護夫として働いている。そのロバーツを批難する武郎の気持を見ておこう。へ余は彼の行為に満足する事能はず。患者の行為を憤りて屢々これに復讐に似たる擧をなす。彼に見る厭はしき Americanism を余は厭ふ。小なる權利と義務とを争ひて——しかも患者と共に——何の用ぞ。余は彼が牧師たらんと企圖を危む——彼が今有せる如き性癖を脱するにあらざれば——。(明37・7・27)へ夜、ロバーツと共に散歩す。人の痛みに同情し得る人にあらず。(明37・8

・9) 日記の拡大再生産版「迷路」序論「首途」にも「ロバーツは患者とくだらない喧嘩をして今日病院を出て行ってしまった。」とある。武郎の優しい真面目な性格と行為義認的意識とがロバーツの人情なき行為を批難させているのである。

以上、有島が行為義認的意識を持っていたことを示す事項を見て来た。有島はパウロに反抗していたのであるが、そのパウロが「信仰によって義とされる」(『ロマ書3・28』)と強調したのは、不道徳な違法行為を容認してもよいと言っているのではない。「かえって、信仰によって律法を確立するのである。」(『ロマ書3・31』)決して「ヘヤコブ書を重んじていないわけではないことは明らかである。すなわちカール・バルトに言わせれば、アブラハムを「義人としたのは、行ないでも割礼でも律法でもなく、彼が信じたということ」を強調するためである」(『バルト ローマ書新解』川名勇訳 新教出版 77頁)。

ここで少し私説を述べておきたい。私は先に、神への信仰が牧師やキリスト者と称する人の行為を見聞することで動揺させられるものではない、と述べた。むしろ教界には、古今東西を問わずやはり人間社会である限り、俗物指導者がはびこったり偽善的教会運営が行なわれたりしたことも度々あったのである。となると入信まもない有島が醜悪な教界環境に遭遇してしまったことはやはり不幸であったのだが、その不幸な有島を次のような犠牲者と見做すこともできよう。すなわち私は、有島は神学的基盤の固まらない日本キリスト教界の動揺による犠牲者である、見做している。私が有島をこのような犠牲者と見做すには、予定説を二重決定論と誤解(第一章、神の愛についてパウロの主張もヨハネの主張も本質は同じであることを理解できなかったこと(第三章)、等いろいろ根拠はあるのだが、この章について言えば、もしそのような犠牲者でないとするならば、へ人々は何故ヤコブ書を重んぜぬのであらう。」(明36・

2・5)という疑問を抱くことはまずないからである。

中世キリシタン迫害時代を経て、明治維新以後、多くのプロテスタント宣教師が上陸して来た。CMウィリアムズ、JCヘボン、GFフルベッキ、SRブラウン、そして農学博士WSクラーク(比屋根安定『日本基督教史』教文館)。しかし伝統のない日本の諸教会は宣教師たちの神学思想を通してのキリスト教理解のレベルを越えることができなかった。すなわち明治・大正期の日本の教会には、さまざまなキリスト教が入って来ているのに、神学研究に目覚めようという気運がまだなかった。欧米でさえリッチル派の歴史家ハルナック(A. Harnack 1851~1930)らの自由主義神学がもたらす嵐によって、全教会が動揺させられていた時代であった。大正十年、二十世紀初頭における世界文化史の一つの転換の起点としての役割を果たしたバルトの「ローマ書」が発表されたが(吉村善夫訳『バルト著作集14』新教出版)、バルト神学が輸入され始めたのは昭和五年頃からであった(菅 田吉著『カール・バルト研究』教文館)。であるから有島をはじめ多くの有能な士たちは、一度黙くとそれを契機に信仰の深化へと飛躍することができなかったのだ。

(一) 内村、新渡戸、有島の場合(明治初期に入信した士族の子弟のその多くの場合に言えることだが)、彼等が幼少年時代に教育を受けたために精神的支柱となっていたその儒教的倫理や武士道的精神が、クラークがもたらした倫理的禁欲主義と社会的責任感とに結び付いている、ということについて簡単に論証しておく。

内村鑑三は文久元年三月、上州高崎藩士、内村金之丞宜之の長男として生まれている。まず関根正雄『内村鑑三』(清水書院)にある次の記事が結び付きについての論証の一資料となる。「父宜之の与える厳格な儒教教育、特に儒教的倫理、武士道的倫理に親しみ、これを徹底的に体得した。この儒教的感化、武士道的倫理は、後年かれが『武士道に接本されたキリスト教を標榜した際の、あの身分制的性格を抜きにした武士道精神であった。かれは中でも勇氣、節操、正直、清廉、親切、忍耐といった面を重んじ、明治の先駆的基督者のはとんどがそうであったように、これらの倫理をキリスト教に結合させたのである。』(13頁、傍点はすべて著者)ここで、勇氣、忍耐、節操、清廉、正直、親切という面は、厳格なカルビニズムの流れをくむ清教徒の態度である、真剣、厳肅、禁欲、清貧、責任という面と共通する要素であると言えよう。次に『近代日本とキリス

ト教」—明治篇—(創文社)の中で亀井勝一郎氏は次のように語っている。「当時北海道に渡来したアメリカ人の多くは、南北戦争生残りの勇士達であり、生粋のビュウリタンが多かった。」(51頁)確かにクラークも南北戦争に参加した陸軍大佐であり、元来厳格な清教徒の家に生い立った人である。亀井発言を受けて久山 康氏は結び付きについて語っている。「札幌バンドのことで亀井先生が注意されたように、アメリカから初め日本に来た宣教師の中にもビュウリタン的であるとともに、南北戦争直後の武士的精神がこもっていて、これが日本の士族の真摯剛直な精神と結びついたことは、大切な点ではないでしょうか。」(58頁)そして更に「両者の精神が、真によく一致融合してゐた」という海老名弾正の言葉を付け加えている。

新渡戸稲造は文久二年八月、奥州南部藩士、新渡戸十次郎の三男として生まれた。盛岡での幼年時代、武士の子弟として寺小屋で大学、論語などの素読を学んでいる。明治九年、稲造は東京英語学校学生で十五歳、明治天皇が新渡戸家に立寄りられ開拓に献身せる祖父、父の功績を賞し金一封を賜われる。稲造は感激し農学決意したという。注意すべきことは稲造にも金一封の一部が与えられたが、それで金縁の英語聖書を東京で購っていることである。砂川萬里氏はその著書『内村鑑三・新渡戸稲造』(東海大学出版会)の中で結び付きを示唆するような論を述べている。「しかしこれはこれをあまり人には公表しなかつたようである。時勢をはばかってかれはこれを他に語るのを避けたようである。しかしかれのなかにすでに欧米の進める宗教であるキリスト教へのすくなからざる関心があったことをこれは示すものであった。」(170頁)であるから翌明治十年十月、クラーク前校長の残した「イニスを信する者の誓約」に第二期生のトッブを切つて署名している、ことも理解できるのである。(第一期生の求道強制に対して内村は最初署名に反対している。)さて、新渡戸の結び付きは接木型の一典型であると武田清子氏は次のように論じている。「仏教、神道、儒教などを淵源とする武士道にキリスト教を接木しよう」と試みている。新渡戸の信仰は、日本の精神的伝統(文化)のまっただ中にキリスト教を迎え入れよう、キリスト教を受容し根づかせようとする積極的な実践性をもった信仰であり、その実践性がこころした寛容と自由さをもたしめたとも言える。」(武田清子編『思想史の方法と対象』創文社 262頁)。

日本近代文学大系33『有島武郎集』(角川書店)の解説(頼沼茂樹)に有島氏の系譜が説明されている。武郎の祖父有島宇兵衛は薩摩藩の島津氏の陪臣、つまり下級武士であった。父武は大蔵省国債局長になっている。母幸子は山内氏、奥州南部藩の江戸表留守居役の家の出である。祖母静子は久留米藩の出身。さて既に第一章でも触れておいたが、儒教的倫理によって、国家主義的な信念をいだいていた両親は、幼い長男武郎に厳格な武家教育をほどこした。大学や論語を素読させ、示現流、荒修業

の剣法を仕込んでゐる。しかし同時に武郎は横浜のミッション・スクールで自由な人間教育とキリスト教倫理による躰を受け、日曜学校にも通つてゐた。であるから幼少年の頃に両者の結び付きの原型はつくられていたと言えよう。(同時に二元分裂的性格の原型もつくられてゐるのだが。)その時から約十二年後、明治三十年当時の札幌農学校全体がまだ清教徒的な気運に満ちてゐる時、内村、新渡戸両氏からの影響を多かれ少なかれ受けたとなれば、幼少年の頃に仕込まれたところの儒教的倫理や武士道精神が、クラークがもたらした倫理的禁欲主義や社会的責任感と結び付くことは、内村や新渡戸の場合よりも有島の場合の方がはるかに容易であつたわけである。

以上のように論証することで、結び付きが三者の場合にもあつたことを不十分ながら確認できたと思う。三者の中で内村と新渡戸は信仰の生涯を全うした。しかし有島は入信当初からパウロを誤解しており、その反動もあつて行為義認的意識をもち続けていたことは本文の論述の通りである。

第五章 信仰動揺

正統信仰とは、二世紀後半の「ローマ信条」(洗礼告白文)に基づく「使徒信条」(信仰告白文)、三二五年の「ニカイア信条」(三位一体的信仰定式)、四五年の「カルケドン信条」(キリストの神人二性一人格)のような基本信条によって表示されている信仰と考えられている。『事典』の「正統信仰」「ローマ信条」「使徒信条」「ニカイア信条」「カルケドン信条」、等の項目を参照されたい。)そして現在、正統信仰を伝承していると自負する四つの教会がある。東方正教会、西方ローマ・カトリック教会、英国教会、プロテスタント教会、である。本稿では、十六世紀の宗教改革当時の信仰を伝承し、カール・バルトに至るプロテスタント教会の信仰を正統信仰として採っていることを断わっておきたい。

さて有馬に、正統信仰成立時期ありとすれば、明治三十六年頃である。第一章に示した日記調査結果の一覧表「神に祈る信仰者としての記事」によれば、明治三十六年には三十六回もの信仰者としての記事があるからである。(31年1回、32年9回、33年3回、34年9回、35年1回(在營回想録)、36年36回、37年19回)一例として明治三十六年二月七日の記事を見ておこう。

へ父様、此卑しき僕には、此宇宙に對し少なからざる多くの疑問を有しますが、唯あなたの御在在と、基督が我等全人類の爲めに――義人の爲めに而して悪人の爲めに――涙を流し給ひ、十字架にまで懸けられ給ひし其事實は否む

事が出来ません。どうか僕の弱く消え易き信仰を勵まして下さい。隣人を自分の様に愛する事が出来る様にさせて下さい。此小兒の如き心を、本當に尊敬が出来る様にして下さい。

この記事が示す限りでは、有島のキリスト論は正統なものであると言えよう。川 鎮郎、上杉省和、両氏も三十九年正統信仰成立期と見做している（瀬沼茂樹・本多秋五編『有島武郎研究』右文書院刊所収「有島武郎とキリスト教」「有島武郎のキリスト教離反について」）。

しかし彼の信仰には常に動搖があった。有島は明治三十四年三月二十四日、独立教会に入会している。二ヶ月後の五月十二日には「余は、神が云はせ給ふ如く覺えて、友情の如何に尊むべきものなるかを云ひ、此數人の交誼が永く地上に天上に結ばれん事を乞ひたり」と円山での恵まれた祈禱会を持てたのだが、二十三日には「己れを欺きて姦淫の罪を犯せり（世の人の云ふ姦淫の罪にあらず）。余は此時より神の前に祈禱を捧ぐる事を得ずなりて、心の中には癒す可からざる空虚を感じたり」という状態になっている。かと思うと三日後の二十六日（日曜日）の夕拝には司會者として出席し、森本厚吉から「十字架の意義」の説教を聞いて感激し、「神の指軽く我が胸に點じたるを覺えて、余は垂死の病者が僅かに良藥を服し得たるが如き感をな」し、更に月夜の豊平河畔で次のように祈っている。

「然るに主は、此汚れに充ち満てる此罪人の長をも尙捨て給はず、余の心中には火の投ぜられたるを覺え、忽ちに胸中亂れて眼よりは涙潸然として下り止まず。遂に黙するに堪へずして余は余の罪を忘れて祈禱を捧げぬ。余は神の前に跪きて云ふ可からざる苦痛を感じしと共に無限の懽喜に満ち、祈禱を廢する事と涙を拭ふ事の惜しく覺えて永く其儘に飲泣せり。」

このように十四日間という短い期間中に、恵まれた「祈禱會」、祈禱を捧ぐる事を得ず、「祈禱を捧げぬ」というように変動しているのである。動搖は十四日間という期間中に生じていたばかりではなく、唯一日の日記の中にも読

み取ることができる。例えば明治三十六年九月十四日の日記を見てみよう。(武郎がシカゴに到着した日である。)

「余の眞の信仰と思ひて堅く頼みたりしもの、須臾にして一片の感情に過ぎざりし事あり。……(中略)……心の深く響く眞底より我信すと云ひ得んは何日なる可きぞ。奇怪なるは余が心状なり。余は余が主なる基督が、余等の爲めに余等の犯せる罪の爲めに十字架にさへ就き給ひしを知り、信じて云ひ盡し能はざる感謝を覚えるものなり。此事實は餘りに顯著なり。(この二つの文に關する限り、贖罪論を肯定していることになる。著者)……。されども此大事實も今の余には常住の信仰を興へず。……。「汝の行爲學者とハリサイ人より勝れずば」云はれし聲雷の如く余が耳に響きと來る時余は何を以て、余は信仰篤し、余は基督信仰者なりと云ひ得可きや。(行爲義認的意義あり。著者)されども余は感謝す。余は余の懷疑を神の在否、基督の聖否等に挿まざるなり。余は實に惡鬼の爲せし如く是を信じて戰くなり。このように動揺し続ける信仰であるので、有島は今日でも研究者泣かせになるのである。「觀想録」の中でも、この日の文章は注目すべきである。

まず笹淵友一氏は次のように解釈しておられる。有島の信仰が「一片の感情に過ぎざりし事」であつたとしても、神の存在について疑うことがなかつたのは「余は余の懷疑を神の在否、基督の聖否等に挿まざるなり」という一節によつても明らかである(七二四頁)。

一方、川 鎮郎氏は「この時点の彼の日記記事に対する笹淵友一氏の解釈には同意しえない。」と述べている。すなわち渡米留学前までに、人間が罪を犯すその責任は、そのように造つた神にあるのかという神義論的懷疑の成立によつて「神の存在」に対する懷疑が固定観念的に武郎の心に定着してしまつていたからであるという。

次に私も見解を述べておきたい。私はこの文章に關しては素直に読み取っている。〈今の余には常住の信仰を興へられなかつたのも「汝の行爲學者とバリサイ人より勝れずば」というパウロの言葉に對抗して苦惱する完全徹底主義の性格が原因しているのである。すなわち行爲義認的意識がある故に「常住の信仰を興へ」られなかつたけれども、

へされども余は感謝す。余は余の懷疑を神の存否、基督の聖否等に挿まざるなり。余は實に惡鬼の爲せし如く是を信じて戰くなり。』というように読むのが自然であろう。このような読み方を肯定していると思われる文章がこの直後に続いている。

へ余の煩悶は他にあり。余凡てを知り凡てを信じ得るの立場に立ち、而して尙基督信者の當然入り得可き信仰と實行とに進達し能はざる是なり。神は尙余の不順を憐み給ふ可きや。(中略)願くは我を牢より救ひ出し給へ。』

もし仮りに「神存在せず」という「信仰なき人」又は「完全に信仰喪失した人」ならば、このような信仰の動搖を日記に書くはずがない。すなわち動搖する必要もないからである。わずかであつても信仰心があるからこそ動搖している文章も書けるのであると考える方が妥当であろう。

感情と感激の宗教

有島は明治三十六年八月二十九日、渡米船中で、久満、猪股両君と文学について論じ合つたことと、日本の諸宗教(儒教、仏教、神道)と各国民族の特性についての私見とを日記に書いている。

文学論では「烈しき不健全文學の勃興を主張」し、「感情の激發を説」き、そして「日本民族最大の特徵は感情の鋭き發作なり。之れを惡導すれば則ち放逸、之れを善誘すれば則ち、感激。余は是を以て基督の尊き教訓は、必ず我が民族には未曾有の天啓なりと思ふ。如何となれば基督教は、感激の宗教なればなり。」と書いている。(八月二十五日伊豫丸で横濱出航、九月八日米國上陸、シヤトル港)

多淚感激の人・有島が「日本民族最大の特徵は感情の鋭き發作なり」と「基督教は感激の宗教なり」との認識を持つていたことに注意しておこう。基督教が感激の宗教であるとの認識は、既に半年前、パウロ神学に反抗し、ヨハネの

愛の神学に感激していた頃から持つている。すなわち明治三十六年二月二十五日の日記には、「ヨハネ、汝の想の何ぞ高くして清き。汝の宗教は感激の宗教なり。然り良心的の感激、我は思ふ、宗教の強固にして偉大にして崇美にして深遠なる基礎は是れなりと。我は全く感激によりて、基督と神とに到りぬ。」という記述があるからである。

さて今日の日本人にもよく知られているシュライエルマッヘル (F. E. D. Schleiermacher 1768—1834) の『宗教論』『信仰論』によれば、宗教体験とは「直観と感情」、すなわち「絶対依存感情」であるという。この『宗教論』『信仰論』の特色と精神はドイツの普及福音教会宣教師たちによつて日本にも紹介されていた。そしてシュライエルマッヘルの思弁的傾向を継承している自由主義神学が、明治二十年代から明治末年まで、伝統のない日本の教会に大きな波乱をまき起していたのである。『近代日本とキリスト教』明治篇 創文社二〇五頁から二〇九頁、『事典』の「シュライエルマッヘル」「シュライエルマッヘル学派」「自由主義神学」、等の項目を参照されたい。札幌とはいえ、同時代にこのようなキリスト教界の中に有島も属していた以上、間接的に自由主義神学に共感共鳴させられていたと推測できよう。すなわち「日本民族最大の特徴は感情の鋭き發作」であり、「基督教は感激の宗教」であると認識している有島武郎が、自由主義神学の底流にある汎神論的人間中心的「絶対依存感情」的傾向におのずから共感共鳴させられていたという推測である。そして推測が正しいとするならば、自由主義神学なる語が正統的神学に対して用いられるものであることを考慮して、この共感共鳴が動搖の一因となつていると考えられる。

明治三十二年二月二十日、定山溪での入信、明治三十四年三月二十四日、独立教会入会、信徒として日曜学校教師として活躍していた札幌時代でも間接的に自由主義神学の影響があったと推測されるのだが（推測の一例に明治三十四年五月十二日のローランド宣教師の説教などが挙げられる）、直接には明治三十六年一月から渡来する八月までの期間、麴町区下六番町一〇番地の自宅から諸教会に出席していた東京時代に影響を受けていたのである。（明治三十四年七月九日、札幌農学校卒業、十二月一日から翌三十五年十一月三十日まで一年志願兵）「芝教會」で牧師や信徒

の〈偽善〉を見抜いたり（明36・1・11）、〈平河町の教會に萩原なる人の説教を聞〉きに行き、牧師は〈全く心靈上の經驗を有せざる〉と失望したり（明36・4・19）、〈牛込教會に福田丈二氏の説教を聞く。無意義。〉と痛感したこともあつた（明36・5・10）。

しかし自由主義神学の影響を最も強く受けていた牧師として有名な海老名、名、正の説教には『植村正久と其の時代』第五巻 教文館、感銘を受けているのである。まず二月十五日（日曜日）の「聖哲オリゲナス」についての説教に共感している。〈海老名氏の説教を聞きに出掛けた。……今日の演題は「聖哲オリゲナスを思ふ」と云ふのであつた。近來なされたる氏の説教としては實に智慧と力と信念とに満ちたものであつて、僕は慚なからぬ恩恵を受けた事を感謝せねばならぬ。僕は茲に備忘の爲めにオリゲナスの爲人を記して置かう。（オリゲナス傳略す。）オリゲナス（Origen's 185頁―255頁）は三位一体を説明するのに表現上異端的な用語である「從屬主義」（父↓子↓聖靈）を用いたアレクサンドリア学派を代表する神学者哲学者である（『教理史』（上）竹内寛 Y M C A 同盟出版部）。それから二ヶ月半後の五月三日（日曜日）の日記を見てみよう。〈午後神田一橋に社會教育講話會あり。海老名の「Lessingの社會教育」と云へる題目あり。之れを聞かんがために到りぬ。……海老名氏は病氣のために遂に來り得ずとの事にて余は失望して歸れり。〉時代思潮への鋭い洞察力のある海老名講話を有島は期待していたのであろう。そして二週間後の五月十七日には「新生命の發達」という雄弁なる説教を聞き大いに勇氣を与えられるのである。

〈朝河野氏を訪ふ。海老名氏の説教に伴ひ行かん事を約したればなり。然れども彼女は今日牛込の教會に行く可き必要ありければ余は獨り本郷教會に到りぬ。今日の説教は「新生命の發達」と云へるものなり。前回より續きたるものなれば其一半を聞きしに過ぎず。説に至りては他の奇はなけれども、一々經驗より出でたる聲は、確かに人心の琴線を振ふなり。彼の説は愈々老成して、壯年の人の云ふ能はざる所を云ふ。彼は漸く尊敬せらる可き牧師の年齢に近づけり。されども余は尙かに彼に於て其老成の餘りに早からざるかを思ふ。されども余は確かに大なる勇氣を興へら

れぬ。彼の元氣は人を振作す。

このように自由基督教の重鎮・海老名弾正の説教に、武郎は「大なる勇氣を興へられ」ているのである。先にも少し述べておいたが自由主義神学の根はシュライエルマッヘルの神学のうちに見いだされている。そして彼の宗教理論の特色は（宗教体験とは「絶対依存感情」である）、明治二十年代から当時の哲学や宗教学専攻の者にはもとより広く基督教界や一般の知識人にも知れわたっていた。〈基督教は感激の宗教なりとの認識をもつ武郎が、シュライエルマッヘルの神学の流れをくむ自由主義神学的思潮に共鳴することは当然であったとも言えよう。尚、海老名弾正の説教「オリゲネスの基督教」〔『新人』四卷三號〕と「新生命の發達」〔『新人』四卷七号〕とをやつと入手できた。次の第六章「自由主義神学との関係」では、武郎が説教のどのようなところに「恩恵を受けた」り、「人心の琴線を振」われたのかをも検討してみたい。

神がかり的表現

有島日記には先に挙げた明治三十四年五月十二日の「神が言はせ給ふ如く覺えて」、二十六日の「神の指軽く我が胸に點じたるを覺えて」という傍点部分の記事が示すように、神がかり的表現が見られる。感激しやすい武郎が誇張した表現であると考えられる。更に神秘的靈的超体験記事と言われている日記文を見ておこう。それは明治三十六年四月二十九日の記事である。

「今は寢ぬべき時なりと思ひて廊下に出でし時抗す可からざる力ありて余を藏の前に導きたれば余は其處の階の上に坐しぬ。首は自ら垂れて涙は云ひ知らざる悔恨と共に胸より流れ出でたり。正に大能の御手の余を捕へ給ひし時なりき。余は畏怖に震ひたれども、云ふ可からざる懐しさもて其手のなし給ふ儘に任せぬ。主余に祈禱するの力を給ひ

き) (他にも同種の記事あり。明32・2・23、明32・4・4、明32・4・6、明33・6・5、明36・3・8、明36・5・15、明36・7・28)

原田義人氏はこの日記を挙げて「これは普通の意味では神秘的体験と呼ばれるものに近いのではないか。」と指摘している。「有島武郎の再評価について」『文学』昭32・4)。また、川鎮郎氏は「神秘主義的超体験主義と汎神論的色彩」が有島の信仰にあるとし、クエーカーリズムの影響と見ている。そしてその影響はキリスト教信仰の把握についてはマインラスであり「このマインラスの考え方が結局は彼を信仰から離反させて行く」と、透谷の背教の場合と同様視している。「有島武郎における「神義論」的懷疑の成立」『言語と文芸』昭42・7)。

私はこれ等の説を全面的には肯定できない。何故ならば既に第一章から第三章までで考察した通り、パウロとの対決が、離教の第一原因であるからである。そして神秘的霊的超体験思わせる多くの記事には、その体験も少しは認められると思われるのだけれども、それだけではなくむしろ「基督教は感激の宗教なり」と認識しており、熱しやすい性格（「私の父と母」）の有島が誇張した神がかり的表現も多く含まれているからである。更に、有島の超体験主義は特にクエーカーリズムだけから強い影響を受けたのではなく、曹洞宗中央寺での禅道修業、カーライルの「衣裳哲学」^{サウアー、リザウス}からも同等に、いやクエーカーリズム以上に、影響を受けていたからである。何故なら武郎自身、新渡戸バイブルクラスに出席し続けていたが、それであるのにクエーカー主義に感銘を受けた記述を残していないからである（笹淵友一氏も（六八五頁）、小泉一郎氏も同意見。「有島武郎論」東京女子大学比較文化研究紀要第一巻 昭30・9)。

それではここで「カーライルの哲学」「禅」「クエーカー」についてその特徴を簡単にまとめておこう。まず哲学事典（平凡社、岩波書店）から要約すると次のようになる。

カーライル (Thomas Carlyle 1795～1881) はイギリスの思想家で、カント、フイヒテに影響をうけ、汎神論的世界

観であると言われる自然的超、自然主義、いわゆる「衣裳哲学」を説くに至る。人間は神の命令と肉体の命令との矛盾に苦悩し、その極に達すると一種の悟りの境地、すなわち我を絶滅した境地に達し、そこでは自然は神の生きた衣裳とされ、同胞にたいする親愛の念が生まれる。そして「享樂を愛せず、神を愛せよ」ということを「永遠の肯定」とよんでいる。

次に仏教辞典で「禪」の項を見ておこう。

法界次第卷上には「禪は是れ西土の音なり、此に棄惡と翻ず。能く欲界の五蓋等の一切諸惡を棄つるが故に棄惡といふ。或は功德叢林と翻じ、或は思惟修と翻す」と云へり。仏道修行の綱要たる戒・定・慧の三学は持戒清淨にして禪定靜寂なることを得、禪定靜寂にして眞智開發することを得るものなれば定は甚だ主要なるものなり(富山房 大5初)。

俗縁を離れ繫縛を断ち慮を静め心を明かにして眞正の理に達する(大東出版 昭40)。

迷いを断ち、感情を鎮め、心を明らかにして眞実な理法を体得することをいう(誠信書房 昭42)。

靜慮。心を一つの対象に専注してつまびらかに思惟すること(法藏館 昭40)。

続いて「クエーカー」の特徴を次の文献を参考に要約しておこう。(シドニー・ルーカス編・入江勇起男訳『クエーカーの眞義』日本基督友会刊、笹淵友一『「文学界」とその時代 上』北村透谷の「宗教観」の項、『事典』の「基督友会」「フォックス」の項、川 鎮郎「神義論的懷疑の成立」プロテスタントの一派・クエーカー派は、創始者ジョージ・フォックス(George Fox 1624~1691)が自「の魂の内」に「内なる光」(Inner Light)・内在神を見出しておの「いた(quake)」という靈的体験から始まっている。イエス・キリストは神その人ではなく、神はイエス・キリストのようなお方であるという(ルーカス)。であるから歴史的キリスト以上に永遠に生きるキリストが強調される(『事典』)。すなわちキリスト論が正統派程の重要性をもっていない(笹淵一五一頁)。そして聖書は尊重されるが、「聖書の言葉」を「神の言葉」と

は呼ばない。靈感を与え聖書を書かした聖靈は聖書以上のものだからである。沈黙にして、無形式の礼拝の中に靈的体験を求めるのである。

以上のように「カーライルの哲学」「禪」「クエーカー」の特徴を見てきて気付くことは、共通点は超自然的神秘的体験である、ということである。特に静慮じやうりょを繰り返して遂に一切諸悪を棄てた時、真実な理法を体得できるという禪道と、神の命令と肉体の命令との矛盾に苦悩し、その極において我を滅した悟りの境地を説く「衣裳哲学」との類似性に注目しよう。この共通性類似性に気付けば、參禪修行を続けている武郎が、新渡戸の「衣裳哲学」論を直接受講してへ殊に其所論大に佛敎（殊に禪學）に酷似せる所あり（明30・6・1）と感銘を受けたのは納得できるわけである。

さて新渡戸は既に明治十九年、米國留學中ボルティモア友会會員としてクエーカー主義信仰を確立していた。その新渡戸が説くクエーカー主義に対しては感銘を受けた記述を残していないのに、同じ新渡戸が説く「衣裳哲学」論に対して衣裳哲学と禪學の両者は酷似せりと次のような感激文を残している。

此頃 Sartor Resartus の講義益々佳境に入り、人をして聳耳張目思はず快を呼ばしむるもの多し。殊に其所論大に敎（殊に禪學）に酷似せる所ありて、此人佛書を讀みしにあらざるかの感を抱かしむる事極めて多しとす。國の東西（佛を問はず眞理は同一點に歸する所見る可く、又世の古今を問はず正當なる人心が同一方向に向つて走るを見は、吾人は轉た各自佛と同じく Carlyle と同じく或る一大眞理を grasp する事を得るならんと考ふ（明30・6・1 20歳）。そして更に有島は、森本に質疑をなしつつカーライルの〈Everlasting No 及び Everlasting Yea を讀するを得〉（明30・12・21）、ヘカーライルは熱性の文豪（明31・3・13）であり、〈perfect man〉ではないが〈great man〉であ

り、へ火の如き人、内村鑑三、同様、に限りなく、魅力ある人であると次第にカーライルを理解するようになっていく（明31・7・15）。〈Carlyleは彼（内村、著者）が私淑する所なりとは定論なり。然らば Carlyleとは如何なる人か。余は無論彼が世界大偉人の一人たるを否定する事能はず、然れども世界の偉人と雖も決して perfectなるものには非ざるなり。〉（明31・7・15）と日記に書いている。

このように新渡戸、内村、森本たちがカーライルから学び得たものに啓発されつつ、有島は自分なりにその強烈な個性に魅せられたのである。すると先に引用した明治三十年六月一日の日記にある新渡戸の「衣裳哲学」講義に対する共感の記事は、寛容温厚な新渡戸が理解したカーライルにであるよりも、カーライルその人と彼の哲学と禅学との酷似に共感共鳴したものと見るべきであろう。この見方の是非は、六年後へカーライルと新渡戸氏とは其天分に於て異邦人なり。〉（明36・7・26）という武郎の言葉が端的に語っている。

ともあれ禅として衣裳哲学には超体験的神秘主義思想が内在していると言えよう。明治三十、三十一年、二十歳前後の農学校時代に、参禅しつつカーライルと衣裳哲学に感銘を受けた武郎は、三十二年二月入信し、三十六年八月留學までは熱心なキリスト者生活を続けていた。その頃の日記の一例が、先に引用した三十六年四月二十九日の記事である。であるからその記事には、原田、川、両氏が指摘している神秘的靈的超体験が、二十歳前後の体験を考慮して、少しは認められると先述しておいたのである。しかし繰り返すが、その体験を思わせる日記文の多くは、へ基督教は感激の宗教なりとの認識をもち、熱しやす性格の有島が誇張して書いた神がかり的表現であると見做すべきであろう。

この見方を更に支持しうる根拠に次のような注意すべき点が挙げられる。それは有島の神秘的靈的超体験を思わせる記事は聖靈の働きによるものか否か疑問が残るといふ点である。この点は非常に難しい問題である。『事典』の「啓

示「聖靈」「神秘主義」、『辞典』の「イエス・キリスト」「聖靈」、山谷省吾『パウロの神學』（長崎書店 昭11）第六章「靈に於ける生活」、等の項目を研究し、熊沢義宣『聖靈の信仰』（東神大出版委員会 昭51）を参考にしながら、プロテスタント正統信仰の立場で「聖靈」について要約すると次のようになる。

神との關係はキリストを通しての啓示の言葉、言葉を媒介とする。啓示の言葉とは聖書の言葉が聖靈の内的証示によって人間に迫る神の言葉である。すなわち聖靈はキリストを信仰者にまで持ち運んで来る神である。故に聖靈の働きとは聖書の言葉を媒介とする働きである。三位一体の第三位である聖靈を思弁の対象にするならば、それは新約聖書の聖靈經驗とは異なる。パウロもヨハネも神人融合の神秘主義を異端視した。

このような要約文を基準に、先に引用しておいた神秘的靈的超体験記事と言われている日記文（明36・4・29）を見てみると聖書の語句そのものがやはり少ない。最も聖書的な語句としては「大能の御手」ぐらいである。前に期日を挙げておいたが、神秘的超体験を思わせる日記文は、その他七ヶ所ある。それらも一通り見ておこう。

「Carlyle が言ひけん。“O Nature! — or What is Nature? ……” 自然を味ひ能はざる人は不幸なる哉。……彼の月、此の枯木、湛然として知らざる如きも而かも其中より一種の浩氣 はとばし 迸りつゝあるを見ずや。」（明32・2・23）

「嗚呼、野も來れ、山も來れ、我は惡魔と戦うて、戦ひ休める時は森本兄の懐に入りて、共に神の膝下に息はんのみ。」（明32・4・4）

「二人（我は森本兄に伴へり）砂濱に横はり、此の天地の sublime に接して、無限の感慨あり。……。嗚呼天地は神より遣されたる惱める人の慰手なり。……。自然は神の被服なりと云はん。」（明32・4・6）

「座邊の景物一として天來の本體を流露して神の面影を宿さざるなきに拘らず、余唯一人外面に神の威容を存して心惡魔の如し。」（明33・6・5）

「神に謝す、我が此無に等しきが如きものを用ひ給ひて、人の子の身に眞理の一片を囁かしめ給ひし事を。……。」

而して彼等の我に聞きしものは寧ろ奇蹟と云はざる可けんや。(明36・3・8)

へ……、無名の社に到り神田川を下瞰し、遂に得堪へずして祈る可き所も知らず跪きぬ。主よ、牧者よ、赤兒の如く意を表はず事能はずして唯叫ぶ祈に耳傾け給へ。「聖靈云ひ難きの悲しみもて我が爲めに祈る」。神は讀む可きかな。(明36・5・15)

へ月照りて金星の影殊に美し。……、恰も天父の胸に倚れるが如く覺えて、幼兒よりもをさなげなる祈禱を捧げぬ。(明36・7・28)

以上のように超体験を思わせる日記文には、引用されている聖書の語句はやはり少ない。そして「衣裳哲学」的の神祕体験を意味する文が散見している。更に、熟しやすい武郎がおおげさに書いた神がかり的表現も認められよう。そういういは既に第一章で述べた通り、入信当時の日記にも聖書の語句は引用されていなかった。〈神〉という語はあつても、何章何節から引用していると分る語句は全くなかった。また、有島日記には〈聖靈〉という言葉が少ない。明治三十二年から三十七年の五年間に、私の調査では明治三十二年二月十日、五月十三日と三十六年一月十一、五月十五日の唯四日だけである。〈靈〉(明33・5・25)、〈靈魂〉(明36・5・8)という言葉とは当然区別しなければならぬ。

このように考察してきて、「聖靈の働きとは聖書の言葉を媒介とする働きである。」という要約文を考慮すると、神祕的靈的超体験と言われている有島の体験は、キリスト教の聖靈の働きによる体験ではなさそうである。とすると神祕的靈的超体験を思わせる日記の文章は、正統信仰に立つ人の体験の文章ではなく、主に「衣裳哲学」や禪道修業、そしてクエーカーイズム、等に影響されていた武郎が誇張して書いた神がかり的文章である、と言うことができるであろう。

明治三十六年頃は武郎も正統的信仰を確立していた。しかし常にその信仰には動揺があった。そのことを、主に「観想録」にある信仰の動揺と思われる記事と、当時のキリスト教界の神学思潮や武郎に影響を及ぼしている思想との関連で、正統信仰の立場から見えてきたわけである。

第六章 自由主義神学との関係

まず自由主義神学の概要と海老名彈正の信仰について簡単に知っておかなければならない。それで次に挙げる文献を参考にしながら要約しておこう。

- 1 『新人』（新人社 23巻9号 大正11・9）
- 2 海老名彈正『新人の創造』（教文館 昭35）
- 3 加藤常昭『日本の説教者たち』（新教出版）
- 4 『キリスト教大事典』の「自由主義神学」（桑田秀延）
- 5 『植村正久と其の時代』（教文館 第五巻）の「日本に於ける獨逸神學の影響」
- 6 比屋根安定『日本基督教史 全』（教文館）
- 7 『近代日本とキリスト教』明治篇（創文社）

自由主義神学なる語は、大体〈正統的神學〉に対して用いられるもので、聖書や教会の教理を客観的に主張するところから生ずる強制や抑圧に対し、人間の主体的な活動の意義と余地とを認める神学である。したがって聖書やキリストや信仰の理解が、批判精神や科学的な歴史研究や宗教的経験や信仰の実存的な把握と結びつけられる。十九世紀

の自由主義神学の根は、シュライエルマッヘルの神学とヘーゲルの哲学に見いだされる。十九世紀において、ヘーゲル哲学の影響を受けたF・C・パウルは歴史の批判的神学を唱え、A・リッチュルはシュライエルマッヘルに従つて信仰と宗教経験とを尊重し、主著『義認と和解』で贖罪論を批判した。そしてこの神学の根は教理史家A・ハルナック、宗数史的研究のE・トレルチへと受け継がれて行く。

日本では明治二十年、ドイツ普及福音教会のP・W・スピネル、二十一年、アメリカのユニテリアン教会のA・M・ナップ、等の唱える自由神学が日本の教会指導者の関心を呼び、特に能本バンド出身で組合教会の横井時雄、金森通倫、宮川経輝、小崎弘道、海老名彈正、等に強い影響を与えている。進歩的な自由派の頭領であり本郷教会牧師として活躍する海老名彈正は次のような信仰に立っている。

聖書は神を知る参考書であり、キリストはキリスト者の兄弟であり、キリストの十字架がなくとキリスト者は赦さ
れている、キリスト教は日本精神の発達した宗教形態である。我々にとって最も重要なのは信仰的体験である。そし
てヨハネ、オリゲネス、シェライエルマッヘルの神学と信仰を迎らねばならない『新人』の「確信の根拠」、加藤常昭著
233頁。

これに対して横浜バンド出身で富士見町教会牧師植村正久は正統信仰の立場で、海老名のキリストを「人間」と見る見方と贖罪論軽視と汎神論的信仰とを徹底的に批判した。明治三十四年九月十一日から三十五年七月二十四日まで続いた有名な「海老名對植村の神學論争」がそれである。日本の神学史上最大の論争である。これまでの記述が「自由主義神学の概要と海老名彈正の信仰について」の要約である。

この論争の翌年、すなわち明治三十六年二月十五日(日曜)、有島は海老名の説教を聞き、へ尠なからぬ恩恵を受けた事を感謝せねばならぬ。』と言ひ、へ僕は茲に備忘の爲めにオリゲナスの爲人ひととなりを記して置かう。』とまで感銘を受け

ているので、その説教を我々も聞く必要があろう。「オリゲネスの基督教」（基督教の本義其九）と題するその説教は『新人』（第4巻3号 明治36年3月1日發行）に掲載されてある。それでまず説教の内容を調べつつ、有島が説教のどのようなところに共感共鳴していたのかを推測し検討を加えてみたい。

「オリゲネスの基督教」は六つの項目から成っている。^{アレキサンドリア}①「歴山府のロゴス宗教」、②「オリゲネスの人格」、③「信仰と智識」、④「神観」、⑤「世界観」、⑥「救済観」である。当然のことであるが、これは明治三十年代に海老名が自分で理解し得たオリゲネスについて説教したものである。また、この説教の元になったオリゲネスに関する文献は『新人』には明記されていない。（おそらくドイツ観念論哲学者が紹介するオリゲネス論を参考にしていたと推測しておこう。）

①「歴山府のロゴス宗教」では、最初からヨハネを賛辞する説教である。「ヨハネがロゴス發展を諂ふてより、有識の人々は其高調を驚嘆し、クリスチャンの宗教的意識はこの調ならでに語ふべからずと心付き、天下相競ふて之に唱和し、ロゴスの奥義を尋ね究めんと務めたのである。」この第一声を二十五歳の武郎はどのように受け止めたであろうか。説教を聞く十日前、二月五日には「僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。」と日記に書き、七日前、二月八日にはヨハネ伝八章「姦淫の女」の話を「殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。」と感激している。そして二月十五日、冒頭からヨハネをたたえる海老名の説教に聞き入ったのであるから、一週間後の聖日、三月一日の日記に「余は約翰より基督に來りて、狭き道より廣き廣き花野に出でたるが如く感じぬ。」と書くに至った気持ちも分るわけである。『植村正久と其の時代』第五卷の二五三頁に、山路愛山の「我が見たる耶蘇教會の諸先生」なる論述がある（初出は『太陽』明治43年10月、第16卷16号）。それによると「海老名君は雄辯なり。海老名君の聲は朗々として玉を轉ずるが如し。容貌は何處までも堂々たる紳士なり。」とある。説教をしている明治三十六年頃の写真（第五卷

の二四九頁)を見ると堂々たる髭があり、福岡柳河藩士の息子らしい威厳が感じられる。四十七歳、働き盛りの海老名の説教を、帝大や男女高師の学生たちで満堂になる中で、若い武郎も聞き入っているのである。

(2) 「オリゲネスの人格」では、歴山府の監督デメトリウスに生まれ、皇帝の迫害にも屈せず殉教した人生が語られ、新プラトン学派哲学にも通曉し、四十歳を過ぎてヘブライ語を学習し原書の写本研究を続ける熱心さが語られている。そして「斯の如くオリゲネスは基督教の眞理を眞熱誠なる情感に驗し、其強健なる意志に試み、又其明確にして博大なる智識は質して、一大識見を聞いたのであれば、吾人は彼れが多く罪惡の深きを語らずして、却て意志の自由なるを主張したるの當然なるを認めねばならぬ。」と説教は続くのである。ここで注目すべきところは、「罪惡の深きを語らずして、却て意志の自由なるを主張した」というところである。この言葉は例え一時期であろうと、当時の武郎には一つの光明を与える言葉であつたに違いない。と言うわけは、性に関する罪(明32・1・5、4・17)、不従順の罪(明34・3・18、明36・1・1)に悩み続け、人間に自由の意志が果して与えられているのか否かと新渡戸教授に質疑したが(明36・1・8)、まだ充分に納得できずに約一ヶ月過ぎていた頃であつたからである。また、父レオニダスと共に殉教者たらんと欲した十六歳の時の有名な事実も説教されている。「レオニダスは從容として縛に就き獄に投ぜられたるが、オリゲネスは其父と併に殉教者の冠冕かんかんを受けんと欲し」たけれども、「母は斷じて之を許さず」、それで獄中の父に対して、「オリゲネスは一片の書を其父に寄せて、我等母と兄弟との故を以て決して意志を變じ給ふこと勿れと言ひ送つた。」このような説教を聞いて武郎は大いに励まされたに違いない。この話は、説教に「恩恵を受けた」日の「觀想録」にも「備忘のために」記されている。へ十六歳にして父の死に渡されんとする時己れも亦名譽ある殉教者を欲して、官廳に己れも基督教信者である事を届出でようとしたが其母の諫止する處となつて己むを得ず思ひ止り、父に書を致して遺族の事など懸念せずに潔き死を遂げん事を忠告したさうである。なお、私の使用する新潮社全集第九卷(昭4年)には(オリゲネス傳略す)となつていたので、叢文閣全集第一卷(大正14年)の「觀想

録」に約三頁にわたって記されてある「オリゲネス傳」を私は使用している。それには出典は明記されておらず、今日までの研究水準（例えば有賀鉄太郎『オリゲネス研究』長崎書店 昭18）に較べまだ不十分であるが、当時としては標準的な「オリゲネス傳」であると見えよう。武郎は、オリゲネス時代は思想的に混乱していた時代であったことを、この「オリゲネス傳」で記している。へ當時は實に思想の混亂時代であつて殆ど統一がない様であつたが、よく調べて見るとかうだ。即ち希臘の哲學なる Plato や Aristotle 若くは Pythagoras や又は羅馬の Stoic 哲學や或は遠いペルシヤ、バビロニヤ等の多神教まで地中海沿岸に入り込んで澎湃たる大潮流を形造つて居つた。それでオリゲネスは當時のあらゆる思想に通曉していなければ基督教の本義を弁證することができないと考へて猛勉強を続けるわけだが、その猛勉強ぶりを海老名は次のように説教で語っている。

「彼はクレメントの門に出入して、プラトーンやゼノンの哲學の如何ばかり興味あるかを看得したのであるが、又夥多のノスチク異端派の人々や異教人に交際して、異邦哲學の決して輕んずべからざることをも承知したのである、乃ち深く哲學の門に入つて之を考究するにあらざれば、基督教の眞理を天下に唱道すべからざるを看破し、彼れが神學教授として纏ひ來りたる衣服を脱して、哲學者の服裝に改め、その頃名聲噴々たる新プラトーン學の教授たるアンモニウス、サクシアスの門人となりたるは、則ち彼れ自身の名聲が噴々として普く基督教徒に知られ、又異端者及異教徒に知られたる齡三十内外の時代であつた。」

このような説教に影響を受け、武郎もオリゲネスの猛勉強ぶりを略記している。へ智識の廣汎なる事も驚く可く、當時の門下には正統派の信者や哲學專修者などが續々集つたから、彼れは是れ等の人によりて其把持して居る所の詳細を問ふて略思想界の大勢に通じたが、未だ其不足を感じて三十歳の時己れの名譽は灼々として當時を動かしてゐた時にも拘らず、僧衣を脱し儒服を着けて或る哲學者の門に趨り根本的に勉強した。

これまでの引用文を検討して気付くことは、有賀鉄太郎『オリゲネス研究』一一頁にある次の文が適切な指摘であ

る、ということである。すなわち「ギリシア・ローマの古代文化とその宗教とを有つ國家及び社會に對してキリストの福音を迫害と困難とに耐へつゝ辯證しなければならなかつた事情は、古代東洋の豊富な文化的宗教的遺産を承繼ぐ日本に於ける基督者の事情と相似たものがある。」という文である。ここでわれわれは、海老名や武郎が自分たちの立場がこのオリゲネスの立場と相似ていると感じた、と推測できるであらう。そしてわれわれの推測の正しさは次の事実が間接的に証明していると言えよう。すなわち海老名が三ヶ月後の五月十七日、「新生命の發達」(『新人』第4巻7号、明治36年7月1日発行)という説教で「けれども、吾日本の如く、基督教キリスト教のなき國に於ては、吾人は直に矛盾衝突たぢらむじゆんしゆつとくを感じざるを得ぬ。」と語り、この説教を聞いた武郎が「人心の琴線を振ふなり。」(明36・5・17)と感動を記している事実があるからである。

(3) 「信仰と智識」では、「智識と信仰とは兩々相徒つて始めて基督教を組織するのである。この智識と信仰との關係に基いて、彼は聖書を説明した。人に靈生身の三要素あるが如く、聖書にも三要素がある。」すなわち物質的、教訓的、靈的であるというように、有名な三要素が語られ、統いてオリゲネスが新約聖書を重視していることを次のように説教している。

「オリゲネスは新約書の眞理が舊約書中に包藏せられるが如く、永遠の眞理が新約書中に包藏せられて居ると主張したのであれば、彼は永遠の眞理は新約聖書以上なるものと認めて居つたやうである、然かし同時に彼れは新舊二書に矛盾を見出す異論者の淺見を喝破して、却て其内容に、ロゴス、發展の秩序あるを認め、永遠の眞理と新約書の記事との矛盾を指摘する異端を駁して、新約書を以てより大なる顯現の準備となしたるは、實に驚くべき卓見といはねばならぬ、」

「信仰と智識」では、このような説教を聞いたのである。さて武郎が海老名の説教を聞いた頃から三ヶ月程の間の彼の読書傾向を見ておこう。まず聖書注解書としては、Dod's "Gospel of St. John" (明36・2・8、同3・1)や

『The 20th Century New Testament』(明36・3・15)として後に内村鑑三の『聖書注解全集』(教文館)に収録された雑誌『聖書之研究』(明36・2・13、14、同3・1、同4・4、その他)は常に熟読し、次にキリスト教関係書では、トルストイ『我が宗教』(明36・3・21、22、23、25、26、29)、ニコル博士『基督傳』(明36・9・1)、シェンケーヴィッチ『クオ・ヴァーデイス』(明36・4・28、29、30、同5・1、2、4)、内村鑑三『求安錄』(明36・4・21、22、23、26)、『基督信徒の慰め』(明36・3・19)、村田『ルーテル傳』(明36・3・2)、等の書籍を読んでおり、キリスト者としての勉強も怠らなかつた。すなわちこのような読書傾向が示すことは、「智識と信仰とは兩々相待つて始めて基督教を組織するのである。」という説教の言葉を素直に聞き入れ、それからも実践し続けていることを推測させることであると言えよう。そしてまた「オリゲネス傳」にて武郎が、オリゲネスは學術知識を尊重し「智見によりて神を見る」眞理探究派のキリスト者であると、次のように記している文章に注目しておこう。

「基督教徒の中に當時二派があつた。一方は自ら眞正の基督教徒と稱へた方であつて、學術智識と云ふ方には殆ど無頓着で、羅馬の滅亡を豫言したり人民の罪惡を數へたりしたから最もひどい迫害を受けたのである。他は正統派から異端と稱へられたる方であつて、其方の人々は概して靜肅な態度を取り充分な研究をなして、基督教の眞味を發揮し様と勉めた。(略)オリゲナスはかゝる時代にあつて、基督教の中異端派の首領として出現したのである。(略)又信者と云ふものを二つに分けた、即ち信仰によりて神を見る人と、智見によりて神を見る人との別である。彼れは勿論後者を高いものとしたが然し何れにも滿腔の同情を持つたのである。」

この引用文の中でオリゲネスの立場を武郎が支持していることは既に明らかである。次に武郎の聖書に関する読書傾向であるが、第一章で掲げてある一覽表「話題にした聖書」の項を見れば分る通り、話題にした回数はいくつに立腹(10回)よりも新約聖書(45回)の方がはるかに多い。イサヤとヤコブの相続権との関連から予定説を誤解して立腹した武郎は、創世記とロマ書を話題にしてパウロに反抗し始め、その反動としてヨハネの「愛の神学」に傾倒して行

くのであるが、それにしても新約聖書の方を多く読んでいることになる。〈僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。〉(明36・2・5)、ヨハネ伝八章「姦淫の女」の〈此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。〉(明36・2・8)というように、ヨハネに傾倒宣言して、一週間後に海老名の「オリゲネス論」を聞いている状況を考慮しよう。パウロに反抗していてもヨハネに傾倒して行けば、キリスト教が福音をもたらす宗教である限り、旧約よりも新約に親しむ結果となり、「永遠の眞理が新約書中に包蔵せられて居る」という説教の言葉に共感共鳴したであろうことは容易に推測できるのである。次にオリゲネスの新約重視について武郎も次のように書いている。〈舊約聖書には body, soul, spirit がある。我々は其 spirit まで入つて之れを味はねばならぬ。此 spirit なるものは即ち他日新約聖書を胚胎したものである。同じ様に新約聖書にも body, soul, spirit がある。新約聖書の spirit を透して我々は偉大なる天の彼方に達し得るとなした。すなわち旧約から新約へと眞理は一貫して発展しているという見方で新約重視である点では、海老名の説教と武郎の「オリゲネス傳」とは共通していると言えらる。

ここで「歴山府のロゴス宗教」に関連して補足しておこう。二世紀のギリシア弁証家・ユステイノス〔Justinus 100頃～165〕はストア哲学の中心思想のひとつ、ロゴスの概念を用いて、キリストの意味の解明を企てた〔竹内寛『教理史』上 Y M C A 同盟出版部 65頁 有賀32頁〕。いわゆる「ロゴス・キリスト論」であり、海老名の言う「ロゴス宗教」である。そして三世紀頃は特にアレクサンドリアではロゴス宗教が高調されており、当然ヨハネ伝が重視されていた。オリゲネスを含め当時の神学者たちは、パウロの贖罪論重視よりも愛と赦しの、ヨハネ的思考で神学を続けていた。まして学究肌のオリゲネスが個人的にもヨハネに傾倒したのは自然であつたらう。尚、新約聖書の中でパウロ書簡がヨハネ文書と同等に重視されるようになったのはアウグスティヌス (Aurelius Augustinus 354～430) 以後である。

武郎が「オリゲネスの基督教」と題する海老名の説教を聞いて〈恩恵を受けた事を感謝せねばならぬ。〉とこころは、

〔1〕〔2〕〔3〕までの説教であるべきであった。すなわちヨハネがロゴス発展を高調していること、真理探究の殉教者オリゲネスの生涯、信仰を深めるための勉学を通しての知識の重要性、等を説教から学びとっている。これらの事實は正統信仰の立場からも肯定され得る歴史的そして教理史的事実であるからである。それ故に恩恵に感謝できたことは幸福であったのであるが、この勢いで〔4〕〔5〕〔6〕の説教にまで感激し多少なりとも影響を受けたことは、晩年から振り返って見ると、やはり不幸であったと言わなければならない。すなわち〔4〕〔5〕〔6〕の説教は、武郎に対しては、正統信仰離反を助長する結果をもたらしていたからである。当時の武郎にその違いが分る由もなかったのであるが。〔4〕〔5〕〔6〕の説教とは、今日で言う自由主義神学と同じ思考であると誤解されやすいオリゲネスの思想を、的を得たかのように海老名が得意とする自由主義神学の立場で誇張して説教に生かしているところである、と見てよい。確かにオリゲネスの三位一体論には説明不十分なところもあるのだが（例えば「御子従位論」）、「然し彼を偏狭な傳統主義者とする事も、又彼を當時の自由主義神学者と見る事も、共に誤つてゐる。」と有賀氏は見ており（48頁）、P・ネメシエギ教授も、オリゲネスが贖罪をパウロ程に重視していないからと言って、いわゆる汎神論的思考をしていたわけではない、と断言している⁽¹⁾。それでは説教の中の注意すべきところだけを見ておこう。

4 「神観」で海老名は、「オリゲネスは天父に祈禱すべきであつて、神子ロゴスには祈禱すべきにあらずと主張する。」と語っている。確かにオリゲネスの「祈禱論」^{「プロセウヤ」}第十五章には、「祈り（Prayer）は父なる神にのみ捧げらるべきもので、御子に對して捧げらるべきものでない」とあるが、さすがに有賀氏も昭和十六年に、「是は後の完成せる正統主義の三一神論から見れば明かに異端である。」と明言している（60頁）。とは言え、オリゲネスのいわゆる「御子従位論」は、明治三十六年当時からそれ以後にかけて、海老名の信仰を調子づかせる結果となった⁽²⁾。そして、動搖しやすい武郎がこのような「御子従位論」を耳にしていたことは、やはりマイナスであったと言えよう。というわ

けは、六年六ヶ月前の明治二十九年九月から約一年間、クエーカー宗の信仰を確立していた新渡戸教授のバイブル・クラスに毎朝参加していたという日々があるからである。既に第五章で要約紹介しておいたように、クエーカー宗ではキリスト論（したがって十字架の贖罪論）が正統派程の重要性をもっていない。武郎は新渡戸の聖書講座に感銘を受けたという記述を日記に残してはいないが、クエーカー宗のキリスト論と「御子従位論」とに正統信仰から離反しているという共通要素があることは明らかであるので、やはり武郎にはこの部分の説教はマイナスであったと言えよう。

(5) 「世界観」で注意すべきところは、人間の精神は霊界に肉体は墮落した物質界に属している、という古代ギリシアの宗教を思わせるような次の説教である。

「人界は靈界と物界との混合である。其精神は靈界に属すれども其身體は物界のもの。其靈はもと上天の靈界に生活して居たれども、罪惡を犯して物質界に墮落し、……人界は天界と下界との間にはさまりて、活殺二門を往來しつゝある。けれどもロゴスは其救濟の恩賜をこの人界に下し給ひたれば、人界はこの救主ロゴスの聲援によつて、惡魔の誘惑を攘ひ、其慾情を制し、靈其ものゝ光明を放つて、物質界を脱却すれば、物界は變じて靈界となり、人界一變して神子界となる、是れ即ち天國。」

オリゲネスの『原理論』と『ヨハネ傳註釋』にこの部分の説教の基になっていると考えられる次のような記事があるので、比較し共通する重要点を検討しておきたい（有賀335頁）。

「精神的生命から墮落し且冷却することに由つて、魂（*Psyché*）は今それが在るところのものと成つたのであるが、併し其は其が始に在つたところのものに歸り得る能力を有してゐる。理性（*Nous*、精神、知性）は落ちることによつて魂となつたのであるが、其が再び徳を具へたときには、理性となるのである。」（『原理論』II. 8.3.）「それ故、魂は理性（精神）または靈（*Psyché*）より低いものであつて、此の意味に於ては精神と肉體との中間に在るものである。」

『ムハネ傳註釋』XX XII. 18.)

このオリゲネスの記述と海老名が理解したオリゲネスに関する説教とから「靈魂不滅」を説くプラトン哲学の影響を読みとることは容易である。そして共通する重要な点は、墮落した人間の魂は、不等号で表わすと

靈界、精神、理性、魂、物質界、肉体

という上下関係に苦しんでおり、ロゴスの声援によって欲情を制し物質界を脱却すれば靈界すなわち天国へ行ける、という人間救済観である。既に第一章で論述しておいた通り、武郎の信仰は入信当時から靈肉二元分裂に悩み動揺し続けていたのである。その武郎が、人間は靈界と物質界との間にはさまりて活殺二門を往来しつつあるという説教を最初の感激の勢いで聞いた時、やはり何か刺激を受けたに違いない。そしてその刺激は、靈肉二元分裂の悩みを解消せずに、武郎が気付かない中に悩みを深める結果をもたらす要因の一つになっていったと考えられる。既に第三章で論述した通り、靈肉二元分裂の悩みを解消するには「十字架の贖罪」を正しく理解しなければならぬのであるが、武郎にとって不幸にも「十字架の贖罪」を軽視してもよいと誤解されやすいような説教が次に続いているのである。

(6) 「救済観」では、十字架が絶対として強調されていないことの当然の結果である贖罪論の曖昧さが目立つ説教に注目しておかなければならない。

「基督の十字架と復活とはオリゲネスが史的事實として受け入れ、救済に大關係あることと認めた所なれども、彼は之を以て唯一の救済とは思はず、彼は或る多數の人々には此史的事實が救済の根據と認められるなれども、或る人々は此十字架上の基督を超越してロゴス其ものゝ實質を會得し、其愛と光明とを看取して天父に親近し奉るを得た。」

この部分の説教と同じ内容を確かにオリゲネスは言っている。単信者の福音は時間的・体的福音、すなわちイエス・キリストであり、完全者の福音は永遠的・靈的福音、すなわち永遠のロゴスであると言うように、オリゲネスは福

音を二つに分けている。それではその一部を引用しよう（有賀130頁）。

「體的福音、即ちイエス・キリストとその十字架につけられ給ひし事との外には何をもち知らないと肉の人間に云ふところの福音、を説く必要のあるときには之を爲さなければならぬ。然しながら靈的に完成し靈の果を結ぶところの人々が天の智慧を慕つてゐるのを見るときには、我々は彼らをして、肉と成り給うた状態からその始めに神と俱に在した姿に歸り給うたロゴスに參與せしめねばならないのである。」（『原理論』II. 1. 4）（注4）

しかしここで注意すべきことは、オリゲネスが、最終的に把握すべきは永遠の福音であつて、時間的福音である十字架の贖罪はそれへの窓であり踏段であるからと言つて、贖罪を軽視しているのではない、ということである。そのことを示す彼の言葉を聞いてみよう（有賀137頁）。

「その御受難こそは、恐らく我らがロゴスに就ての最高窮極の觀想に到るときすらも全くは忘れ得ないものであり、彼が我らの身體に在り給ひしことによつて我らをそこに導き入れ給ふとの眞理をも忘れ去ることは出来ぬであらう。」（『ヨハネ傳註釋』I. 16.）

この言葉を引用して有賀氏は十字架の贖罪が永遠の福音と本質的に結ばれていることを指摘している（有賀137頁）。繰り返すが、オリゲネス時代の神学はヨハネ伝が中心であり、オリゲネスもヨハネに忠実であつたのである。であるからパウロのように十字架の贖罪を強調していないからと言つて決して汎神論的思考をしていたのではない。しかしながら海老名が理解したオリゲネスの「救濟觀」の説教文を見る限りでは「十字架の贖罪」軽視と誤解されやすい内容である。特に説教の最後をかざる次の文に注目しよう。

「彼の十字架の下に懺悔涕泣するを以て、基督教の本領と思惟する人の如きは、自己の意志の薄弱と情感の邪僻と知能の迷妄とを自白するもの、オリゲネスの基督教の如きは到底其識り得べき所ではない。」

確かにオリゲネスは単信者と完全者とを分けてはいたが、これは海老名らしい誇張した説教である。十字架に懺悔

し涙すること、基督教の本領が分ったと思うような人は、知情意の劣っていることを自白するようなものだ、というのである。

霊肉二元分裂に悩む若い武郎がこのように「十字架の贖罪」軽視と誤解されるような説教を聞いてしまったことは不幸であったと言えよう。何故ならば、既に汎神論的神秘思想の多少の感化を武郎が受けていたので、海老名の説教がその感化を深め正統信仰離反を助長させるのに力があつたことは、容易に考えられるからである。汎神論的神秘思想の感化と言えば、(4)のところでも触れたことだが、六年六ヶ月前の明治二十九年九月から新渡戸の聖書講座に出席して十字架の基督でなくとも救済はあり得ると説くクエーカー宗の存在を知り、更に一年後の明治三十年六月一日、カールイルの「衣裳哲学」と「禅学」との酷似に気付き、(4)の東西を問はず真理は同一點に歸する所見』て勇気づけられているなどの事実が、感化を多少受けていることの証拠として挙げられよう。

約一年前に植村正久が、海老名の信仰が汎神論的であると鋭く批判したのは当時の教界人であるならば周知のことであるが、基督教は儒教や神道と連続していると考える海老名であれば『新人の創造』134頁、自由主義神学と同じ思想である」と誤解されやすいオリゲネスの神学思想の真意を誤解し、その思想の中で自分の考えと類似するところを誇張して説教に生かすことは容易にあり得ることであろう。それにしても武郎は(1)(2)(3)の説教は良いのであるが、(4)(5)(6)の説教にまでへたからぬ恩恵を受けた事を感謝せねばならぬ。というように影響を受けてしまったことは、不幸であったと言わなければならない。説教を聞いた明治三十六年二月十五日から五ヶ月後の七月二十二日、内村鑑三に贖罪論について質疑したが、やはりへ余は氏の持説に對しては、遺憾ながら賛成の意を表する能はざるもの』というように疑問が晴れなかつたこと自体、既に海老名の説教に影響を受けていた証拠である、とも言えよう。

以上までの論述が、説教の内容を調べつつ、武郎が説教のどのようなところに共感共鳴して影響を受けていたかを

推測し検討を加えたものである。武郎は「近來なされた氏の説教としては實に智慧と力と信念とに満ちたもの」と日記に書いているので、以前にも何か聞いていたのかも知れない。一ヶ月前の明治三十六年一月九日、森本厚吉と角筈の「内村氏を其家に訪」い、へ彼處を辭してより共に海老名彈正氏を訪ひしかども遂に彼に面する事を得ざりき。とあるので、かねてより海老名名の話を書きたいと願っていたのである。二年前の明治三十四年八月、森本たち三人と「札幌獨立教會」を編纂した際、明治二十五年、海老名が札幌に来て教会の獨立に「熱心に賛成の意を表せられ」た事實を知った武郎であればなおさらである。それで三十六年二月十五日、待望の海老名名の説教、題して「聖哲オリゲナスを思ふ」を聞いたのである。それから三ヶ月後、その間に予定説に疑問を抱きつつも（明36・4・20）、真面目に勉学と信仰の生活を続け、季節は新緑の五月になった。河野信子を愛しく思うが故に悩み続ける頃である。五月十七日（日曜日）の日記を見ると、再び海老名名の説教に勇氣づけられている記述がある。

「朝河野氏を訪ふ。海老名氏の説教に伴ひ行かん事を約したればなり。然れども彼女は今日牛込の教會に行く可き必要ありければ余は獨り本郷教會に到りぬ。今日の説教は「新生命の發達」と云へるものなり。前回より續きたるものなれば其一半を聞きしに過ぎず。説に至りては他の奇はなけれども、一々經驗より出でたる聲は、確かに人心の琴線を振ふなり。彼の説は愈々老成して、壯年の人の云ふ能はざる所を云ふ。彼は漸く尊敬せらる可き牧師の年齢に近づけり。されども余は竊かに彼に於て其老成の餘りに早からざるかを恐る。されども余は確かに大なる勇氣を興へられる。彼の元氣は人を振作す。」

さて「大なる勇氣を興へられ」た説教「新生命の發達」を雑誌『新人』（第4巻7号 明治36年7月1日發行）で見てもこう。前回の説教「新生命」（『新人』第4巻6号 明治36年6月1日發行）の続きである。「キリストを信ずるといふ事に由て、新生命」を得るのであるが、その新生命は「戦ひに戦つて」發達するといふ勇ましい説教である。特に武郎の「へ心の琴線を振」つたところは次に引用する逆境における戦いであろう。

「吾人の心は新生命に満ち溢れて居る。さりながら、吾人を圍める社會は、舊精神の社會である、如何にして、矛盾を感じずに居られやうか。若し夫れ、吾人の家庭が基督教的家庭でなかつたならば、吾人は、父母妻子とも衝突せざるを得ぬ。是れ一種の逆境で、誠に苦しい境遇と言はねばならぬ。けれども、彼相撲取が其敵を見て元氣を増すが如く、民族が、戦争によつて其元氣を鼓舞作興するが如く、吾人も亦、舊精神との戦に依て、益々其元氣を鼓舞し、精神を作興することが出来るのである。諸君、吾人何ぞ戦を恐れんや。吾人の胸中新天地あり、昂々然として道を守る。どうして戦はずに居られやうか。吾人は戦に依て、益々元氣を鼓舞し、益々新生命に入るべきである。」

明治三十二年二月末、武郎は基督教入信を札幌から東京麴町の家族に知らせた。そして三月三日、家族から猛反対の手紙を受けた。特に武郎に参禅を勧めていた祖母静は「失望悲痛極まる所を知らず、三ヶ月後の六月十四日、ついに他界してしまった。武郎は自分の入信がかくも家族に衝激を与え、果ては祖母の死を早めたという苦い体験の思い出が無意識層に退行していたが、四年後、海老名の説教によつて蓄積されていた苦い思い出(心的エネルギー)は発散させられ勇気づけられたであろうと考えられる。「益々其元氣を鼓舞し、精神を作興することが出来るのである。」という勇ましい言葉を聞いた武郎は「へ心の琴線を振」われたのである。そして「へ々経験より出でたる聲」で、説教は「戦ひに戦つて」行こうと次のようにしめくくられているのである。

「オリゲネス曰く、神は自らを救ふことが出来る様に望み給ふと、誠に深い意味である。パウロも、オーゴスチンも、ルーテルも、戦ひに戦つて、大なる品格を得たのである、諸君よ屈する勿れ、吾人は、大に精神的戦闘をやらねばならぬ、此戦争、此争闘の中に、平安は宿つて居るのである。……神の旗下に縦横無盡に奮闘勇戦し、益々深く新生命の中に入つて、眞の品格を養成する、即ち新生命の發達である。」

「朗々として玉を轉ずるが如」(山路愛山)くりズミカルに、しかも力強い説教である。この説教を海老名の風貌と雄弁な口調を想像しながら朗読してみよう。確かに勇気づけられ加速度をつけた調子になってくるのに気付くであらう

う。本多秋五氏が有島の文章を評して「調子のついた雄弁健筆体といったところがある。「熱し易い頭」のせいかも知れないが、僕にはキリスト教の説教者の、あの加速度をつけた調子が連想されるときがある。」(『白樺』派の文学)と指摘しているが、若い武郎の「確かに大なる勇氣を興へられぬ。彼の元氣は人を振作す。」という感動は、後の文章作成に何らかの形で反映していると言えよう。

五月十七日から二ヶ月過ぎた七月二十六日(日曜日)にも海老名の本郷教会へ行っているが、この時は「平凡なる説教なりし。」で終っている。説教は二ヶ月後に掲載されることになっているので、七月二十六日の説教は九月一日発行の『新人』(第4巻9号)にある「健全なる人生觀」であろう。説教は「健全なる精神は、健全なる身體に宿る」で始まり、「深き信仰なくんば、其人の人生觀は、決して健全なる者にあらずと。」で終っている。これまで聞いてきた説教に較べて、これは確かに「平凡」だと思つたであろう。健全なる身體であるが故に、性欲を罪として悩んでいた当時の武郎にとつては不満足な説教であつたのだろう。であつても二十五歳の武郎に対して海老名が与えた自由基督教の感化は、結果として、正統信仰離反を助長する役割を果たしたことには変りない。

さて武郎が聞いた自由基督教(正統基督教に対して)の説教は總大将・海老名のものだけではなさそうである。明治三十六年二月十五日の海老名の説教を聞く二十日前、一月二十五日(日曜日)の宮崎湖処子の説教を聞いているのがそれである。

〈本郷の或る會堂に〉は「聽衆僅かに十三四名」ではあつたが、〈されど一種嚴肅敬虔の氣は我其中に拾ひ得たるを信〉じ、〈記念の爲め彼の説教の全部を〉四頁半にわたつて日記に記録している。「同情」という題も武郎好みである。説教の核心は、人が罪に苦悩する時、〈此時我に唯一の同情者一人あり。此時我等の傷を癒すものは基督の同情あるのみ。〉というところである。しかし考えてみれば分る通り、同情とは人間の感情の一つの表われであり、同情者が来て人も人は完全に救済されはしない。そして『旧約新約聖書語句大辞典』(教文館)によれば、聖書には同情という語

句が旧約に三ヶ所（イザヤ63・15、サムエル上23・21、詩篇69・20）、新約に二ヶ所（ルカ7・13、ペテロ第一3・8）の五ヶ所しかないことも、キリスト教ではそれ程重要な意義を持っていないことを示している。言うまでもないがキリスト教ではキリストは単なる同情者ではなく唯一の救済主である。ただ同情心が人間社会で大切な心掛けであることには変りない。聖書解釈に人間の主体的にして自由な解釈を認めるのが自由主義神学であるが、とにかく湖処子の説教にもキリストを人間化して自由に語っているところが、あると言えよう。

宮崎湖処子（1864～1929）は明治十九年五月、日本一致派牛込教会にて受洗し、二十年代からの自由主義神学の嵐が吹き続ける中で、三十一年ディサイブル派教会（東京滝野川の聖学院はこの系列である）に転じ、神学校教授、牧師になったのである。であるから湖処子が牧師になるまでのキリスト界の思潮と、詩人としては「ワーズワースの汎神論的自然観の影響」（笹淵前頁）を受けていることと、「同情」の説教にも人間化されたキリストが語られていること、等を考慮すれば、武郎が聞いた自由キリスト教の説教は總大将・海老名のものだけではなく、宮崎湖処子からも自由キリスト教の説教を聞いていたことになる。しかも感動の余り〈彼の説教の全部を〉四頁半にわたって日記に書き残しているのである。更にこの説教を他の人にも知らせたく思い、十六日後の二月二十五日には、〈河野氏夫人の爲めに、宮崎湖処子の演説の大體を筆記し、午後より彼の草稿を携へて、河野氏夫人を訪ひて渡している。

以上のように武郎が自由主義神学に感化された説教に感動し影響を受けてきていることを見てきたわけであるが、この事実と第一章で述べてある二元分裂的性格とが、正統信仰離反そしてやがて欧米留学後の背教宣言と続く人生行路を歩むことになる根本原因となっている、と考えるのである。

自由基督教に共鳴共感すること自体が正統キリスト教からの離反につながることを意味するのであるが、武郎は直接に正統的キリスト教の説教を聞き、反発していたという注目すべき事実があるのである。それは一番町教会（富士

見町教会の前身)で、藤村 操の自殺をとり上げた植村正久の説教を聞いているという事実である。すなわち五月十七日、海老名の「新生命の發達」に勇氣づけられてから十二日後の五月二十九日の夜、「生るとも何の甲斐あらんや」と題する植村の説教がそれである。一高生・藤村 操の死が、世の中の特に若者に与えた影響は計り知れないものがあった。武郎もこの〈深慮す可き大事件〉に刺激され、五月二十九日と三十一日の日記に七頁に渡って「自殺」や「人生と死」について書いている。それでは武郎の氣持を日記の一部から引用して聞いてみよう。

〈余は二十九日の夜、一番町教會に植村氏の説教を聞きぬ。題は「何の生甲斐かある」と云へるなりき。而して彼は徐ろに厭世觀に對する持説を吐露し初めぬ。事は漸く彼の少年に及べり。余の心臓には急に一道の血ありて湧り入れを覺えぬ。我が世界の大教師は嘗て一人の靈魂をも輕んじ給はざりき。彼は姦淫を犯せる一賤女子にさへ其無限の愛憐を瀉ぎ給ひぬ。彼の血を稟け骨を傳へたる可き植村氏が、眞面目なる聽衆の前に立ち、此眞面目なる大問題の解釋を試みんとするに當り、如何に眞面目なる同情を以て彼の憐む可き少年に加へ、惜愛の涙を此暗きに入りたる靈魂の上に瀉ぐかを見るを得可きかを思ひては、余は教職の今更に尊偉なるものなる事を羨まずんばある能はざりき。而して見よ、余の歡喜は失望にまで投げられたり。余の夢想の天上は實想の地下なりき。余は植村氏によりて世が嘗て有せざりし少年に對する同情の聲を聞かんと待ち設けたりき。而して氏は唇邊の冷笑を以て彼の少年の死を弔ひ終りぬ。曰く「彼は哲學書一卷の厭世家のみ」と。余の熟したる血は索然として冷え終りぬ。死生に對する尊敬なき批評、世に此の如く卑陋ひょうろうなる事なし。世に此の如く無情なる事なし。世に此の如く男らしからざるものなし。余は滿腔の不滿足を以て空しく歸途に就きぬ。爾後是れを思ふ事念々。〉

少し長い引用になったが、武郎の悲痛なまでの落胆ぶりと植村に對する激しい憎悪と反感の氣持が充分に読み取れよう。説教は、一冊の哲學書などで人生価値なしとする厭世家は輕薄極まりなしであり、更に武郎が憧れているカアライルを虚妄なる汎神者なりと批判しているのである。それでは武郎が憤慨した植村の説教「生るとも何の甲斐あら

んや」の一部を『植村正久と其の時代』第五卷から抜萃しておこう。

「夫れ世界は廣し。人生は多方面なり。眞理の大海や深し。一冊の哲學書、甚だしきは雜誌の片言隻語を讀み覺えたるまでにて、氣短にも、否淺慮にも人生の價値毫も存せずと斷言し、獨り醒たる厭世家を以て自ら任ず。輕薄も亦極まれりと謂はざる可らず。カアライル、エモルソンの如き汎神者は、神ならぬ人類を尊び英雄崇拜者となりて、聊か其の宗教心を満足せしめたるのみ。人格的の神は宗教心の對象なり。宗教心を研究せば斬の如く無神説の非なるを知る可く、汎神説の虛妄なるを覺るべく、基督教の神儼かに存在するを認むべきなり。基督を離れては有神論も學者の見解に過ぎず。耶蘇曰く、我を見るものは父を見るなりと。基督教の神は哲學思想の結果に非ず。」

このような説教文を読む限りでは、確かに自殺せし哲學青年に対する同情は全く見られず、著者も心情的には武郎の憤慨に通じるものがあるのである。しかし日本基督教会の總師・植村正久ほどの牧師であれば、自殺した青年への同情はあつても敢て言外に出さず、毅然たる態度で自殺に対するキリスト教本来の立場で説教したのである。参考のために『事典』の「自殺」の項を見てみると、自殺は神に対する傲慢な反逆罪という見方で一貫している。

「プラトン、アリストテレスは、人間および国家の理念に反するとして否定、ストア派は人間の自由意志の發現であり、心の動かされない無感動の幸福の極限として肯定した。キリスト教初期には多少の異論もあつたが、神の意志に対する傲慢な反逆であると考え、また自殺をのぞむほどに絶望することは罪であるとした。中世の教会は、自殺は、最も大きな罪であり、特に神の律法と自然法にそむくと見た。宗教改革者たちもほぼ同じ立場をとる。現在のカトリック教会は教会法によって自殺者の埋葬を禁じている。プロテスタント教会も自殺に対しては否定的である。」

このような引用文を見るだけでも、植村の説教の本質が自殺に対する基督教本来の立場を堅持していることは分るが、聞く者に感情的には反感と躓きを与えやすいであろう。しかし「誠の福音は一見矛盾と躓きを与える」（例えば『カールバルト・著作集』14）16頁（新教出版）という意味のことを語るバルトの見解が真であるならば、確かに武郎は

無情と思える敵しい説教に躓き、へ爾後是れを思ふ事念々」とあるように、後々まで冷血な説教として心で反抗していたのである、と言えよう。加えて留意しておくべきことは、汎神論的人間中心的な自由主義神学の説教の方が最初は聞く者に好感を抱かせるが、そのような自由基督教の信者たちはやがて信仰動揺そして離反の人生行路をたどっているという実例が多くあることである。(一例として日本組合教會の金森通倫、横井時雄たちの人生。ただ海老名は例外であることを植村も認めているが、詳細は『福音新報』第三四一号(明治三十五年一月八日)を参照されたい。)

石丸晶子氏は、植村の説教と武郎との関係について、教会指導者と武郎との間の意識の断絶を指摘しているのが、「天上の人」と「地下の鬼」(『世紀』昭48年3月号)、その断絶を少しでも縮めるためにも、武郎は立腹して帰らずに、説教後、植村からもう一度丁寧になんか話してもらえたらと悔いが残るのである。何故ならば、もし武郎がこの説教に躓かなかったならば、後に「迷路」列車に乗せられて自殺という終着駅に着くことはなかったであろうと推測されるからである。ともあれ自由主義神学に感化された説教に感動し影響を受けつつ、次第に正統信仰から離反していく過程をこの章で見えてきたのである。第四章で「私は、有島は神学的基盤の固まらない日本キリスト教界の動揺による犠牲者である、と見做している。」と述べたが、このことを具体的に論証するための一例として第六章「自由主義神学との関係」を論述してきたわけである。

(1) 昭和五十二年十一月二十五日(金曜日)の午後、練馬区石神井にあるイエズス会のカトリック神学院で、ネメシエギ教授にオリゲネスについて質疑する機会があった。その時、要点の一つとして次のように答えておられる。「贖罪をパウロ程に重視していないからと言って、オリゲネスは決して汎神論的思考をしていたのではない。それはヨハネ文書に忠実であったことが証明している。そしてオリゲネスは比喩的解釈をしているが、神中心に聖書を考える立場を貫き、決して人間の主体性を生かした合理的な自由主義神学的歴史の見方をしていたのではない。」

当日、私は氏の論文「父なる神の子ら——オリゲネスの神学思想をめぐる——」(『カトリック神学』第十一号 一九六七
年六月 上智大学神学会)を受手し、勇気づけられて帰宅した。

(2) 明治三十六年から十九年経た大正十一年の九月一日発行『新人』(第23巻9号)に、「確信の根據」と題する説教文が掲載されている。その中に、基督と基督者が兄弟であると見ること、「御子従位論」の内容と似ている記述がある。そして十字架の贖罪輕視を明白に表現しているところにも注意しておこう。

「バイブルは参考書として讀む。基督も神の子である。彼は兄である。我は弟である。彼は神我は罪の子とのみ見る事は出来ぬ。基督御自身も我々に對して親しく兄弟と仰せられ、我が神、汝の父と云はれて居る。私は三位一體論に就て異端となつた。三位一體は私の信ずる所である。基督が第二位を占める神であると云ふ考は宗教意識を満足せしめる。基督の十字架の血を見なくては赦さんと云ふのはクリスチャンの神ではない。我々の神は限り無く之を赦し給ふ神である。」

以上が「確信の根據」と題する説教文からの抜粋引用である。さて海老名がこのような内容の説教をするようになった原因について簡単に推測しておこう。この章の最初の「海老名の信仰」で述べてある通り、明治二十年代からドイツやアメリカから入つてきた自由主義神学を、海老名も組合教会員の中では積極的に受け入れた者の一人である。その思考でオリゲネス神学の中で誤解されやすい「御子従位論」「贖罪論」を、正に誤解して受け入れたことが後の説教にも反映しているためであると推測しておこう。

(3) 昭和五十三年八月、第六章を脱稿して六ヶ月後、五十四年二月に、待望のオリゲネスの名著『諸原理について』(小高教訳 創文社 昭53・12)を入手した。日本における最初の邦訳書である。(ギリシア語原文は断片しか残つておらず、三九八年、ルフィヌスのラテン語訳からの邦訳書である。)孫引きが気になつていたので、第二巻八章「魂について」の三の一部に相当する本文の有賀訳(大部分は、ルフィヌスのラテン語訳からの邦訳と思われる。)と、それに相当する小高訳とを対比してみた。幸いにもほとんど同じ翻訳文になっている。

「魂は義人に固有な熱火から、神的火の参与から冷えきつたことから、*anima*、即ち魂と呼ばれるのではあるが、この魂も、初めにあつた熱火の状態にもどる能力を喪失したのではないと考えられるのであるまいか。精神が自らの状態(*status*)と品位からはずれて魂となり、魂と呼ばれるのであつて、改められ、矯正されれば、精神としての先の状態にもどるといふことである。」(小高 168頁)

なお、小高氏は表題について次のように解説をしている。「元來、我が国で本書が言及される場合には、『原理論』という訳語が用いられてきた。しかし本書のギリシア語原題は *hysteron proteron* であり、*hysteron* という言葉の複数形が用いられている。従って、正確には『諸原理について』と翻訳されねばならない。」(小高 29頁)

(4) 第二卷十一章「救済の約束について」の四の一部に相当する本文の有賀訳と、それに相当する小高訳とを対比してみた。小高訳の比喩的表現の内容と有賀訳の内容とは、両者は本質的には同じであるが、表現としては大変異っている。それでは小高訳から抜粋引用して見ておこう(191頁)。

「神によってなされたものは見えるが、その理拠は「理解されないまま」隠されている。神のわざとして神によって造られたものを我々は目にして、その理拠を知ろうと、名状し難い程の願望に精神は燃え立つ。彼らはつまり、精神を真理探求の努力と愛に向け、将来もっと深く教えられるために準備すること、大きな益を手に入れるのである。略図、下絵が我々の主イエス・キリストの尖筆によって「我々の心の板」に描かれるなら、「我々もそのようになるのである」。現世にあって真理と知識の下絵を有している人々には、将来完全な像の美しさが加えられるに違いないことが確認される。」

以上の引用文の中で、「神によってなされたものは見える」「略図、下絵」、「真理と知識の下絵」等は単信仰の時間的・体的福音に相当し、「その理拠」、「将来完全な像の美しさ」等は完全者の永遠的・霊的福音に相当していると読み取れば、有賀訳も小高訳もほぼ同じ内容になるのだが、それにしても両者の表現の違いはどういうわけであろうか。

まず「ギリシア語による原文は若干の断片を除いて失われており、その全貌を知るにはルフィヌスの手になるラテン語訳によるほかはない。」(小高 25頁) ことを知っておいて、有賀著『オリゲネス研究』676頁を次のように要約抜粋すると両者の表現の違いが分ってくる。

「ルフィヌスはオリゲネスの思想の正統性を主張するのあまり、正統信仰に合致しない點(特に三一神教義に關するもの)は異端者によって挿入せられたものとして之を省略するか、訂正をし、餘りに簡單と思はれる所には加筆している。『原理論』に關する限り、全體の六分の一強のギリシア語原文を取戻すことを得るのであるが、その部分を之と對應するラテン譯とを比較するならば、兩者の差異を目のあたりに見ることが出来る。但し第三卷一章「自由意志」及び第四卷一章から三章「聖書の靈感とその解釋」においては、その差異は極めて少い。それ故『原理論』を用ひる時には、常にかゝる事實に留意して、批判的にこれを爲さなければならない。」

以上の要約抜粋文から判断できる第一のことは、(有賀氏も小高氏もルフィヌス訳で邦訳したのであるが)有賀氏は先に挙げた第三、第四巻の章以外はルフィヌス訳に批判的であったということである。であるから第二巻十一章の四は、たまたまギリシア語原文の断片が残っており、その断片で有賀氏は邦訳したのかも知れない。またはP・ネメシエギ教授が推測するよう
に、オリゲネスに批判的であったヒエロニムスが訳した『原理論』から有賀氏は邦訳したのかも知れない。(昭和54年2月12日、著者は教授に尋ねてみた。)いずれにせよ十一章の四の有賀訳はルフィヌス訳そのものの邦訳ではない。

要約抜粋文から判断できる第二のことは、小高訳より有賀訳の方がギリシア語原文に近いということである。

第二部 裏切者意識と潜在信仰

第一章 キリストに対する裏切者意識

内村鑑三から後継者と目され、独立教会、遠友夜学校、どこでも真面目なクリスチャンで通っていた有島の場合、「基督と社会に対する裏切者意識と潜在信仰とは同意語なり」を本稿で論証することにする。

有島とキリスト教といえば、明治三十二年二月、定山溪入信、三十六年八月から米国留学中信仰的懐疑、四十三年五月、札幌独立教会脱会、という三大事実がある。これまでの「有島武郎とキリスト教」に関する主な論文を挙げておく。

- (1) 小泉一郎「背教者としての有島武郎」(『本の手帖』昭森社 昭和42年)。(2) 「有島武郎論―特に彼におけるキリスト教の問題―」(東女大比較文化研究所紀要第一巻 昭和30年)。(3) 笹淵友一「有島武郎とキリスト教をめぐる諸問題」(『明治大正文学の分析』所収 明治書院 昭和45年)。(4) 佐占純一郎「有島武郎における虚無への転落」(佐古著作集7 春秋社 昭和35年)。(5) 小玉晃一「有島武郎覚書―「迷路」周辺―」(『青学大一般教育』論集』第一号 昭和35年)。
- (6) 山田昭夫『有島武郎』所収(明治書院 昭和41年)。(7) 瀬沼茂樹「留学前後の有島武郎」(『文学』昭和39年10、12月)。(8) 安川定男『有島武郎論』所収(明治書院 昭和42年)。(9) 宮野光男「有島武郎研究」(梅光女短大『国文学研究』第一一六号 昭和40年11、45年11)。(10) 川鎮郎「有島武郎における「神義論」的懐疑の成立」(『言語と文芸』53号 昭和42年)。(11) 上杉省和「有島武郎のキリスト教離反について」(瀬沼・木多編『有島武郎研究』所収 右文書院 昭和47年)。

(12) 野島秀勝「有島武郎論」(『文学界』昭和41年1月)。

以上の諸論文の共通点を要約すれば、笹淵論文を除くと、有島はキリストの影響を強く受けたが、結局、聖書信仰離脱という見解が定説として導出できるのである。

しかし研究者がしばしば引用する「惜みなく愛は奪ふ」(以後「奪ふ」と略記) 十八章アンチ・キリスト論、「『リビングストン傳』第四版の序」(以後「第四版序」と略記) 贖罪論否定等の記事だが、その記事を文字通り受容できないところに「有島武郎の人と文学」の複雑な魅力があるのである。

本多秋五氏は短編「卑怯者」の主人公〈彼〉を有島と見做し、作品中の〈彼〉の言動から有島の性格を臆病、優柔不断と判断された(『白樺派の文学』新潮35年)。私も同見解である。であるなら有島は自分自身を卑怯者、裏切者、臆病者と認めていることになる。卑怯・裏切意識とは、自分の本心、良心そして或る対象相手に不従順、反逆することに対する負目、悔俊、罪意識であり、従って対象相手正当視に通じやすい意識である。「卑怯者」の場合、目撃者〈彼〉こそ子供の正当を牛乳配達人に弁解すべきだという自己良心を裏切った意識が問題となる。つまり子供と自己良心を裏切った自分を卑怯者と称することは、裏切者と称することと同意義になるわけである。思へば有島の人生は常に卑怯・裏切意識をいだいた人生であった。私小説「卑怯者」の実例があるだけでなく、キリストや社会に対しても同じ意識であった。

棄教者、非キリスト者であったなら、教会脱会後、無関心か反キリスト論で、貫しているはずである。しかし有島には棄教者として、貫性がない。その原因は二元分裂的優柔不断な性格に起因するところ大であるが、根本的にはキリストに対する裏切者意識つまり潜在信仰に起因していると考えるのである。信仰なしに裏切意識もないからである。それで信仰潜在根拠八点を年代順に挙げて検討を加えておこう。

(1) 〈余は余が主なる基督が、余等の爲めに余等の犯せる罪の爲めに十字架にさへ就き給ひしを知り、信じて云い

盡し能はざる感謝を覺えるものなり。此事實は餘りに顯著なり。……されども此大事實も今の余には常住の信仰を與へず。……「汝の行爲學者とパリサイ人より勝れずば」と云はれし聲雷の如く余が耳に響き來る時余は何を以て、余は信仰篤し、余は基督信者なりと云ひ得可きや。されども余は感謝す。余は余の懷疑を神の存否、基督の聖否等に挿まざるなり。余は實に惡鬼の爲せし如く是を信じて戰くなり。〔觀想錄〕明治三十六・九・十四この記事について笹淵友一氏は「有島が贖罪を否定してないことは極めて明白である。」と言っておられる。有島の徹底主義という資質は行為義認に傾倒しがち故、へ常住の信仰なしとしながらも、へ余は余の懷疑を神の存否、基督の聖否等に挿まざるなり。〕という記事に至っては神信仰明白であらう。

(2) 明治四十三年五月、三十二歳、独立教会脱会后、大正六年六月、三十九歳、「奪ふ」発表。その十八章に反キリスト論がある。へ基督の生涯の何處に義務があり、犠牲があるのだらう。人は屢々いふ、基督はあらゆるものを犠牲に供し、救世主たるの義務の故に、凡ての迫害と窮乏とを甘受し、十字架の死をさへ敢て堪え忍んだ。だからお前達は基督の受難によつて罪からあがなはれたのだ。お前達も亦彼れにならつて、犠牲獻身の生活を送らなければならぬ。私は私一個として基督が私達に遺して行つた生活をかく考へることはどうしても出來ない。基督は與へることを苦痛とするやうな愛の貧乏人では決してなかつたのだ。基督は私達を既に彼れの中に奪つてしまつたのだ。山田昭夫氏は有島のキリスト像を「キリストの有島化というべき惜しみなく奪う愛の超人的理想像」と評している。背教者有島を論証するためにしばしば引用される十八章、つまりキリストの神性否定論は反キリスト意識によるリビドー発散と見做せるのである。志賀直哉、武者小路等のキリスト教との決別を例に出すまでもない。近代日本の作家中、有島ほど激しくキリスト神性否定を論じた者はいない。反逆とはキリストに無関心であるのではなく、常に強く意識すればこそできるのである。つまり「奪ふ」という評論は題名が示すようにキリストから自由になつていない証言論文である。

(3) 聖書劇『三部曲』は、大正八年十月、「聖餐」をもって完結した。「聖餐」第三幕にある私は既に世に勝つた。というイエスの言葉は『三部曲』全体の結論になっている(『三部曲』序論)。ヨハネ伝十六章三十三節にあるこの言葉は十字架と復活の勝利を意味する信仰的神学的にも重要な言葉であり、内村鑑三は三十三節だけで十二頁費やして解説している(『聖書注解全集』第十卷教文館)。その他「クララの出家」は人間愛の苦悩からついで神の愛を直指す心境を扱った信仰物語として注目すべき作品である。笹淵友一「クララの出家」の主題—文学研究における性心理学的方法的な可能性と限界—なる論文があることを紹介しておく。

(4) 絶望の粒良達二氏に神の摂理を暗示し、約百記を奨め、新たに生れ出ることを祈るというパウロを思わせる激励書簡がある。へそれはどれ程の苦しみだかよくお察し申す事が出来ると思ひます。然し攝理が何を兄に求めてゐるかを誰が大胆にも云ひあてる事が出来ませう。……約百記を讀んで御覽なさい。それが架空の戯曲であらうとも實感的な苦惱と解脱は濃厚に現はされると私は思ひます。唯あの記事には神があります。神を信じられない兄にとつてそれは一つのつまづきには違ひないけれども、何等の暗示をも兄に提供し得ないとは思はれません。……萬望兄が絶望失意のどん底から勇ましく跳ね返つて新しい世界に生れ出て來られるやうに祈ります。(大正九・二・二十一) 誠実同情の有島であるだけでなく、この激励文からはキリスト者有島の面目躍如たるものが読み取れよう。

(5) 粒良氏へ激励書簡を書いて二十日後、竹崎八十雄牧師に信仰告白する書簡を送っている。へ私は基督教會からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。いくら離れようとしたつてその圏外に出るには基督は大き過ぎる事を感じてゐます。あなたの基督に對する信仰からいふと私は基督を離れ切つたものといふ事になるかも知れませんが、私はそれは少し無理ではないかと思ふのです。(大正九・三・十一) 『文学』昭二十九・十一) この書簡はキリスト者有島を論証するのに不可欠な資料である。教会去つて基督離れずの文面から米國留学時代からの有島の師・キリスト者トルストイを偲ばせるものが感じられよう。この書簡は「有島の信仰が単なる外界の影響として片づけられない」(笹

淵) ことを意味しているといえよう。

(6) 『リビングストン傳』第四版の序(大正九・三・二十二)には「神と直接の交換をした事の絶無」(贖罪論が全然私の考へと相容れない事を知った)がある。決定的背教宣言として佐古純一郎氏等が引用するところである。しかしこの後に、「將來私が超人的な信仰の對象を觸む事が出來て、再び信仰の生活に這入るやうな時機が來るかも知れない」という信仰可能性を述べた記事がある。この記事によつても「彼がキリスト教から完全に自由になつていなかつた証明である。」(笹淵)といふことが言えよう。完全な棄教者ならば、「神との交換絶無」公言直後、將來の信仰可能性について論述することはまずないからである。

(7) 潜在信仰と無意識層にある影の幼少体験懐古とが、共にリビドー(ユングの「心的エネルギー」)を發散した。この發散が「一房の葡萄」(大正九・八)を初めとする生活童話となつたのである。大正期童話童心主義に有島が啓發されたものは、幼な子の心と信仰とは密接不可分であるという再認識であつた(マタイ18・1~5、19・13~15。マルコ10・13~16。ルカ18・15~17)。

(8) 『リビングストン傳』第五版の序(大正九・九・二十四)には再び注目すべき記事がある。ヘリビングストンを通して私自身の信仰を世に傳へたいと言ふ動機も小さなものではなかつた。今でも私はリビングストンは傳へたい。然し私には傳ふべき信仰はない。……私は信仰を有たないからと云つて信仰ある人を輕蔑はしない。……森本君は私が名を除くのを好まないに違ひない。私は又私でこの書の長短何れに對しても自分の名を残して森本君と責任を分つのが至當だと思つてゐる。……第四版序言に關して諸種の雜誌新聞が加へた主要な批評を卷末に附しておく。殊に基督教の機關刊物が興へて下さつた批評は、今日の基督教界が一つの思想をどれ程の關心を以て取扱つてゐるかを證據立てるものとして、私が特に後日の爲めに保存しておきたいと思ふ所のものだ。信仰ないと言ひながら、今でも伝道者リビングストンを伝えたい、信仰者輕蔑せず、翻訳共著である故、自分の名を除かない、「第四版序」に対するキ

リスト教界からの批評を後日の爲めに保存しておく等、以上の文面から判断できることは、有島のキリスト教への関心が背教宣言後といえども非常に強かつたということである。

以上のような信仰潜在根拠八点を総括してみると、正面からキリスト攻撃している②⑥を除き①③④⑤⑦⑧は、信仰明白、信仰憧憬、キリスト教関心である。そして②⑥でさえ強くキリストを意識するが故であり、影響から自由になつていない証拠である。こうみて来ると一見一貫性なきに思えるが、有島の無意識層（或いは魂）には潜在信仰が生きていたと判断せざるを得ない。そしてこの潜在信仰がキリストに対する裏切者意識をいだけせ有島を苦悩に陥れる源になつたのである。「奪ふ」「第四版序」は共にこの苦悩に対する自己奪回弁解論と見做すことのできるものである。定山溪入信が本当のキリスト信仰体験でないとは仮定し、その後には信仰体験（聖霊の働きによる神との対話）記事無しとしても、以上八点の根拠を考慮し、有島という人間全体から判断するならば、時機判明せずともとにかく生涯に一度、人格神との出会いがあつたと推測せざるを得ないのである。

根拠八点中、①は脱会前であるが、②から⑧まではすべて、明治四十三年五月脱会届提出後の事実である。

第二章 社会に対する裏切者意識と自殺

潜在信仰はキリストに対してばかりでなく、社会に対しても裏切者意識を有島にいだかせた。大正六年「泰」発表後、大正十二年自殺までの有島の裏切者意識苦悩時代は、第四階級台頭時代でもあった。大正六年、長崎造船スト、ロシア革命、七年、富山米騒動、九年、社会主義同盟組織、八幡製鉄スト、十年、海員組合結成、水平社創設、川崎造船スト、十一年、日本共産党結成、日本農民組合結成等、労働者階級隆盛時代であった。有産階級に属し、かつては聖書熟読と礼拝を続けた有島にとって「金持と乙食ラザロ」物語（ルカ16・19―31）は気にかかる話であったに違いない。金持とラザロ物語を引き合いに出すまでもなく、一般に聖書信仰には清貧、単純、生活高調傾向がある。その一例が有島に強い影響を与えた内村鑑三の信仰中核・カルヴィニズムである。（プロテスタント主義↓カルヴィン主義↓清教徒主義↓W・S・クラーク↓内村鑑三）当時の社会気運に対する有島の「持てる者の罪意識卑怯者意識」は高じて来た。この意識の償いが有産階級滅亡宣言、「宣言一つ」発表（大正十一・一）、共産農園を指す「有島農場解放」（大正十一・七、十八）である。この二大事件こそ持てる者の罪意識補償の象徴・具体化になっているのである。農場解放決断について有島は次の動機四点を挙げている（「農場開放願末」大正十二・四）。

- (1) 親子間に私有財産ある圧迫。
- (2) 文学専念に農場経営煩わし。

- (3) 農民の状態に良心の呵責痛感。
 (4) クロボトキンの影響で私有財産に疑問。

以上四点で(3)は「持てる者の罪意識」、更に(3)(4)は彼の社会主義思想の影響である。さて、本来の教会生活は聖霊降臨後、「いっさいの物を共有にし、資産や持ち物を売っては、必要に応じてみんなの者に分け与えた。」(「使徒行伝 2・44」)という共産生活である。「札幌獨立基督教會沿革」(明治四十一・十二)にも「主一つ信仰一つ洗禮一つ」各々の得る所に従ひ、應分の金を出してこれを維持すべし。等、使徒行伝二章の精神は散見している。つまり(3)(4)は社会主義思想ばかりでなく、キリスト教の影響でもあるのである。更にトルストイの著作言動による感化もあったであろう。

「宣言一つ」は、次の一文だけから判断しても有島の本心から出た評論ではないといえる。すなわち、今後私の生活が如何様に變らうとも、私は結局在來の支配階級者の所産であるに相違ないことは、黒人種がいくら石鹼で洗ひ立てられても、黒人種たるを失はないのと同様であるだらう。という徹底した階級差別観は「お末の死」「フランセスの顔」を書いた有島の本心からの意見ではない。人間の幸福が経済、財産によるよりも「本能としての愛で愛し合つてこそ」(「農場開放顛末」「葦ふ」)生れると強調する有島の幸福観には階級差別観などではなく階級を超越した普遍的人間観に根ざした発想があった。つまり「宣言一つ」とは人間平等意識が根底にありながら、階級闘争激化時代に有産階級者として多少意固地になってまとめた「持てる者の罪意識補償論文」なのである。

この二大事件については既に様々な立場からの先行論文は多いのだが(森山重雄「宣言一つ」(『有島武郎研究』所収 右文書院)、安川定男「宣言一つ」をめぐる論争」(『解釈と鑑賞』 昭和45年6月)、高山亮二「有島武郎研究」(「農場」(「家」)への視点を中心にして(明治書院 昭和47年)等)私は潜在信仰を基にした新見解を論じているのである。もともと有島の社会的関心は、明治三十三年二十三歳の時、遠友夜学校教師、三十七年、社会主義者金子喜一を知り、カウツキー、エ

ンゲルスの著作読書、四十二年、遠友夜学校代表等の事実が示すように、非常に強い。故に二大事件は有島の性格、そして根本的には潜在信仰に起因した社会的関心の結晶・象徴と見做せよう。

父他界後、抑圧されていた創作活動への意欲は爆発し、大正六、七、八年の三年間に「或る女」「カインの末裔」「生れ出づる悩み」等、彼の代表作のほとんどを生み出み出した。その過激な創作活動は、脳疲労を来たし（「旅する心」書後）大正九・十、大正九年からは評論・感想文等を書けど、創作力は減退して行った。そして背教宣言後といえ、キリストに対する裏切者意識は前述通り依然として消えず、この意識と「持てる者の罪意識」とが重なって、第四階級台頭時代の中で、ついに滅亡的虚無的心境に落ちて行った。このように行きづまった時、既に自殺可能性があったと思われる。自己内外との戦いに疲れ果てた後、大正十一年夏頃、たまたま情熱的自由恋愛に適う波多野秋子と親しくなつた。河野信子以来、十九年ぶりに体験した鬱憤発散であつた。しかし自由恋愛は有夫姦（波多野春房）という道徳的社会的不祥事を引き起こした。ついに絶望状態となつたが最後まで有島らしく誠実に責任を痛感して自殺決意した。秋子も有島に殉じた。「奪ぶ」十八章、情死肯定論の実践であるが、自殺原因は複雑である。しかし自殺にまで至る根本的要因は最初から一貫して彼の奥底にあつたキリストに対する裏切者意識であつたことは、これまでの考察過程から論証できたと思う。

第三章 カール・バルトのユダ観と有島との共通性

キリストに対する裏切者意識と自殺という線で、有島武郎に潜在信仰ありとのヒントを得た機会は、カール・バルトの「イスカリオテのユダ観」を読んでいた時である（バルト『イスカリオテのユダ―神の恵みの選び』（川名勇訳 新教出版 昭和38年）。）¹。それでは『神学者カール・バルト』（J・ファングマイアー著 加藤常昭 蘇光正共訳 日基出版局 昭和46年）なる書を要約することで、まずカール・バルト（KARL BARTH 1886～1968）について簡単に紹介しておこう。

ハルナック、カント、シュライエルマッハーに影響を受けたが、第一次世界大戦前まで主流を占めた自由主義神学を徹底的に攻撃した。「天にいる神の聖性」と「地にいる人の俗性」強調、一九一九年、『ローマ書』発表、「神の言葉」「神との対話」「弁証法」神学を確立した。²「我々は神について語るべし、しかし語り得ない、そのことによって神に栄光を帰すべし」という弁証法的論法（第一、二、三命題）は、逆表現すると、A「人間は神について語り得ない」、B「人間は厳しく神について聞き、知り、語り得る」となる。すなわち「神の言葉（聖書）を聞き」、子供のように「驚き」、遅く、語る、バルト神学にとっては、ルターの律法第一、福音第二ではなく、喜びの使信が最初、戒めは福音にとって何ら異質なものでない、となる。罪の裁きは基督によって贖われているが故に、福音に包括される。人間は基督により「恵みの選び」の中にあるという喜びの中で、九千頁以上の『教会教義学』は書かれた。その著作は唯、「彼は、生きておられる」という言葉に傾し、その著作の結語は「み国が来ますように」という終末論的祈りになっ

ている。かくしてバルトは神学におけるアインシユタインと呼ばれている、という。

以上、複雑なバルト紹介になったが、このバルトの立場からイスカリオテのユダを見た場合、あのユダでさえ「神の恵みの選び」のもとに置かれるべき人物だというのである。さてここで『教会教義学』(『Die Kirchliche Dogmatik』)第二巻「神に関する教説」(『Die Lehre von Gott, 1942』)第二分冊「神の恵みの選び」(『Gottes Gnadenwahl』)の第三十五節「個人の選び」(『Die Erwählung des Einzelnen』)の第四項「棄てられた者の規定」(『Die Bestimmung des Verworfenen』)の注(原書308—303頁)にあるバルトのユダ観の一部を、川名勇訳で聞いてみよう。

……パウロやペテロの際にも起こらなかったような仕方でご自分に仕える者とされたからである。すなわち、パウロやペテロたちが後になってやっとあずかれるようになり、証人とさせられた和解の業自体に仕える者とされたからである。これこそユダの引き渡しに関して、何より第一に、また決定的に、目に止めておかねばならぬことである。

このことは、ユダの引き渡しから彼の人格に生じてくる結果が何であるにせよ、それに関係なく成立することである。そして、これこそ、使徒職の積極的課題に対するユダの参与である。彼の参与は、使徒職の基礎づけへの参与であり、神の引き渡しへの参与であるゆえに、きわめて傑出した参与である(196頁)。

—ユダが新約聖書において執拗に「十二弟子の一人」と指示されており、選びという概念が彼にもはっきり適用されているということ……まさにユダにおいて、彼が使徒的事柄に、その罪と咎によってでも仕えねばならないという究極的結果まで明らかにする、あの使徒的事柄の優越的な力とは、彼の上にも下される神の選びの優越的な力なのである。……まさにこの完全に棄てられた者が選ばれ、「十二人のうちの一人」なのである。そしてまさに彼こそが、決定的な個所(祭司長達に銀貨三十枚で引き渡すこと(『マタイ』26・15)著者注)において、ほかのすべての者よりはっきりと、彼がそれであること、すなわち神はその選び給う者をどのような奉仕をさせるために選ぶのかということ、示

し、また確認する（199頁）。

彼の存在と行為の全体は、たとえどれほど悪いものであっても、またたとえ、ほかならぬサタンの權威、価値、威力が彼の背後に立ち、彼を通して活動しているとしても、イエスから彼に分与される優越、光輝、規制のもとでしか動きまわり、体をほすこと以外出来ないものである。その領域は制限された領域であり、しかもこの制限された領域でさえ、イエスのさらに広い領域によって四方から取り囲まれているのである。その悪しき行為も、いつもイエスの救いにみちた行為と関係させられている（200頁）。

新約聖書の選ばれた者とは、棄却のうちに、また棄却のうちから、選ばれた「棄てられた者」であり、ユダがそのうちに生き、しかしハウロにおいて起こったように、ユダがそのうちに死んだ「棄てられた者」である。彼らは本来信仰に召されている「棄てられた者」である。彼らはイエス・キリストの選びに基づき、イエス・キリストが御自分を彼らのために引き渡した事実を注目しつつ、自分の選びを信する「棄てられた者」である（207頁）。

原文もそうである故、翻訳文も以上に難解であるのだが、バルトのユダ観の重要点は把握できたと思う。少し説明を加えておくと翻訳文中「棄てられた者」を、理解を助けるため「人間」と置き替えてもよい。何故ならばバルトに言わせるとキリスト者とは「選ばれている棄てられた者」であるからである。すなわち、すべての人間は「棄てられた者」なのである。ルターの「義人にして同時に罪人」という表現と同じであり、「キリスト者」と呼ぶ際にもこのように弁証法的表現になるのである。裏切者の代名詞ユダ。その裏切行為も、イエスの救いにみちた行為と関係させられている。このユダの行為こそ、イエスがキリストであるという真理を証言する実質的役割「引き渡し」^{ヒンゲル}を果すという。裏切者として後悔の末、自殺したユダは（マタイ27・45）、どこまでも「十二弟子の一人」、「神の恵みの選び」のもとに置かれる人物、「選ばれている棄てられた者」であるとバルトは強調している。

カール・バルトのユダ観に立脚して、ユダと有島武郎との共通性をまとめておこう。有島武郎はキリストに対する裏切者意識に生涯煩悶し、その煩悶が有島の実生活上の思考言動すべてに浸透し、ついに自殺に至らしめたことを第一、二章でみて来た。するとユダも有島もキリストに裏切者意識をいだく自殺者としての共通性がある。信仰なしに裏切意識もない。故にキリストに対する裏切者意識と潜在信仰とは同意語になる。ユダが「神の恵みの選び」のもとに置かれる人物なら、有島武郎も「選ばれている棄てられた者」であるといわねばならない。そして更に、信仰の師・内村鑑三が積極的な神への奉仕者といえるなら、有島武郎は、彼の人生を弁証法的に考慮するならば（キリストを求め、求め得ず反逆、しかしキリストの影響から自由ならず）、消極的な神への奉仕者といわねばならない。

(1) 弁証法神学「Dialektische Theologie」第一次大戦後、ドイツ、スイスを中心に出現した。またの名を「危機神学」へ神の言の神学」と呼ばれ、K・バルト、F・ゴッガルテン、E・ブルンナー、R・ブルトマン等によって代表される。従来の心理学的・歴史的な叙述方法に対して、神学的表現にキルケゴール流の弁証法を採用したためこの名が起った。この神学の特質は、キリストにおける独自の啓示によって全く新しく理解する点にある。神の無制約的な彼岸性と人間の認識的な限界とが、カントとともに理念として理性の要請として認められ、またキルケゴールと結びついて、この限界を人間みずからで超え得ないことが人間の実存を特徴づけていると主張する。信仰は神の奇跡として理解され、聖霊によって事件的に生起する。神の啓示は人間には聖書によって確実になる。『キリスト教大事典』教文館「弁証法神学」の項抜粋 桑田秀延執筆

神学の「弁証法」について「イエス・キリスト」を例に説明しよう。イエス・キリストとは神と人間との間の和解者である。イエスとは、この和解者が人間であることを示し、キリストとは、それが神から遣わされた者であることを示す。このように人間が神について語る時、弁証法的にしか語り得ないのである（『神学者カール・バルト』J・ファングマイヤー著 36頁）。

第三部 增子方式

はじめに

キリスト教文学研究の一つの方式を紹介しておきたい。ある研究対象の人物とキリスト教となると、まず人物が属する教会、その教会の伝統と地域社会のキリスト教的生活習慣、風習なども調査研究しなければならない。しかし、キリスト教が依つて成り立つ唯一の書かれてある根拠は聖書であるので、研究対象の人物と聖書に焦点をしばって調査し、研究の過程において教会や生活習慣も関連して論究に含まれるようになると思える。

それですまず研究対象となる人物が書き記したすべて（全集とその人物が使用した聖書への書き込み、傍線、○印など）から、聖書語句とそれに準ずる言葉を調査し、「人物と聖書」回数別順位」一覧表を作る。有島の場合、マタイ伝、創世記、ヨハネ伝、ルカ伝、士師記と続き、順位が38位ミカ書まで出る。この順位表で既に対象とする人物の聖書の読書傾向が客観的数値で表われてくる。次に順位第1位、マタイ伝調査に入る。全集何巻の何頁の何行目に、マタイ伝何章何節の語句またはそれに準ずる言葉があるという基礎調査である。「人物の全集とマタイ伝一覧表」ができる。『聖書語句大辞典』で調べるのだが、時間と根拠を要する。次に「人物の全集とマタイ伝一覧表」にある同内容の回数が多い順に「人物とマタイ伝」の中の内容別順位」一覧表を作成する。著者は心理統計学者の協力を得て著作品の重みを一応次のような点数で表記することにした。1回につき、日記と書簡、使用している聖書への書き込み、等は10点、評論、感想、初期文集、使用している聖書への傍線、○印、等は6点、小説と戯曲は3点、聖書戯曲

は1点、という点数で重みを表記することにした。この総点数で内容別順位が出てくる。例えば有島武郎とヨハネ伝では、第1位「姦淫の女」14点、創世記では、第1位「アダム創造」10点、マタイ伝では、第1位「山上の垂訓」10点、と出てくる。配点で注意することは、研究対象となる人物の或る物事への関与の度合い、聖書の言葉への感懐の強さ、日常生活を通しての心の変動などが、直接に記述されている日記、書簡の点数は、一律1回で10点ではないということである。記述の質量、すなわち実質点は1回につき20点、25点というような配点もできるのは、対象とする人物を十分に熟知している研究者であって初めて可能なことである。例えばマタイ伝第17位「汝の行爲學者とパリサイ人より勝れずば」は1回の日記を25点として順位が上昇しているのである。有島がキリスト者として自分の行爲に気をもみ、ヤコブ書を重視している心境が明確に日記文から読み取れるからである。(なお、内容別順位決定では、著者はヨハネ伝ではなく創世記から点数方式を導入している。)このように微妙な点数変動を経て作成された「人物とマタイ伝」の中の内容別順位」一覧表を、現在、世界にある四つの教会(一、東方正教会。二、西方公教会。三、アンソニ、カトリック英国国教会(聖公会)。四、プロテスタント教会。)をそれぞれ代表する神学者、司祭に提示し、質疑し、それぞれの立場からの意見、感想、指摘などを求め、これらを集約して共通点を発見するという方式である。この研究方式を仮りに「増子方式」(マシヒコ・メソッドMashiko Method)と呼ぼう。四つの教会を代表する神学者、司祭から直接質疑を得られなければ、各教会が公認する二種以上の聖書注解書で内容別順位を一つ一つ検討解明して、共通点を発見することができる。

この研究方式によって、対象とする人間(漱石、イブセン、トルストイ、シエクスピア、文学者とは限らない、哲学者、経済学者、歴史学者)の国別、時代別、教会別に、パウロ書簡で文学と哲学を完成させた人、ヨハネ文書で救済された哲学的経済学者、共観福音書と旧約予言書で歴史研究を完成させた人、というように特徴がより客観的に理解されるようになる。マックス・ウェーバー、カール・マルクスをはじめとする社会、経済、思想家、ゼーレン・キルケゴールのごとき哲学者についても、同様の研究方式によって、その思想とキリスト教との関連について

のより客観的解明が得られると考えている。四つの教会の中では、一、グリーク・オーストラリアン 東方正教会、二、ローマ・カトリック 西方公教会の神学者、司祭に直接質疑できる著者は研究者として恵まれていることに感謝している。私事で恐縮だが著者は、ホーリネス教会、日本基督教団の教会で信仰生活を続け、立教大学で組織神学を専攻してきた。友人の神学者と牧師、司祭はプロテスタント教会と聖公会に多い。よって四つの教会の中で、三、聖公会、四、プロテスタント教会の立場は及ばずながら著者が担当する。それでは「増子方式」で「有島武郎と聖書」を具体的に調査研究し、その成果を見て行こう。有島は、旧約聖書16巻、新約聖書22巻、合計38巻の聖書を話題にしており、その回数は旧約430回、新約91回、合わせて1341回に及んでいる。平成二年度（一九九〇年）までの調査では「有島武郎と聖書」回数別順位、第1位「マタイ伝」248回、第2位「創世記」247回、第3位「ヨハネ伝」192回である。昭和五十九年（一九八四年）に「有島武郎とヨハネ伝」を『キリスト教学』（立教大学）に発表した当時の順位は、第1位「ヨハネ伝」191回、第2位「創世記」177回、第3位「マタイ伝」166回であったので、原稿を書き続けてきたこの順序で研究を進めて行きたい。「ヨハネ伝」「創世記」「マタイ伝」は「有島武郎と聖書」の中のビッグスリーである。昭和五十九年以後の調査で回数による順位変動はあったが、有島武郎の心を最も感動させた聖書は、ずばり、「ヨハネ伝」であることに変わりはない。

第一章 有島武郎とヨハネ伝

はじめに

有島武郎が書き記したすべて(全集と有島が使用した『新約全書』への書き込みなど)の中から、聖書とそれに準ずる言葉を調査し、彼とキリスト教との関係をより客観的に研究してみようと思う。全集は昭和四年発行の新潮社のと、十五卷中十三卷まで発行された筑摩書房のを使用しているので、筑摩全集が完結してから発表しようと思った。編集部に問い正すと、十四卷は五十九年十一月、十五卷は六十年六月発行予定という。しかしあまりあてにはならない。それで十四、十五巻ともに「書簡集」ではあるが、若い時の書簡ではないので聖書の言葉があっても、これまでの統計にはほとんど影響がないと判断し発表することにした。「有島武郎とキリスト教」関係の記事と言えば、彼の教会批判、フレンド派が禅宗に似ていること、アツシジの聖フランシスコ寺院見学、クラーク博士など話題にするキリスト者、祈祷文、その他で、全集には約80回出ているが、本稿は「有島武郎と聖書」に焦点をしばった論文である。第1位のヨハネ伝から論ずるのであるが、今回は主に集計、統計の一覧表を報告することにする。現在、世界には四つの教会がある。一、グリーク・オリエント東方正教会。二、ローマ・カトリック西方公教会。三、アングロ・カトリック英国教会(聖公会)。四、プロテスタント教会。この中で、三と四の立場は及ばずながら著者が担当する。昭和五十九年二月七日、日本ハリストス正教会(ニコライ堂)の山口

義人司祭に、同年三月二十七日、東京カトリック神学院のベテロ・ネメシエギ教授に、それぞれ主に「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」について質疑する機会があり、貴重な意見、感想、指摘をノートすることができた。今回の両氏の感想、指摘などについて、もし誤記による誤解があったならば、それはすべて著者の責任である。

明治三十年頃から有島武郎が使用したと思われるプロテスタント教会の『舊新約全書』（横濱市山下町 大日本聖書館発行）は新約27巻、旧約39巻、66巻から成っている。⁽¹⁾『リビングストーン傳』に出てくる〈煉獄〉についてはマカベ後書二章四十六節にあるので、西方公教会が公認するドン・ボスコ社の『聖書』（新約27巻、旧約46巻、73巻から成っている）を用いた。有島が書き記したものを整理すると、旧約聖書16巻、新約聖書22巻、合わせて38巻の聖書を話題にしており、その回数は旧約365回、新約828回、合わせて1193回に及んでいる。近代日本の知識人の中で、最も多く聖書を読んでいた一人と言われるわけである。次の一覧表が「有島武郎と聖書」回数別順位」である。

「有島武郎と聖書」回数別順位

順位	回数	聖書	日記以外の全集から	日記	『新約全書』 篇詩附
5	4	3	2	1	
91	98	166	177	191	
士師記	ルカ伝	マタイ伝	創世記	ヨハネ伝	
91	67	128	152	152	
	30	36	25	38	
	1	2		1	

第三部 増子方式

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6
4	4	5	5	5	7	7	10	12	13	14	16	16	19	21	21	24	25	26	30	44	60	82
エゼキエル書	テモテ前書	ヘブル書	マカベ後書	ヤコブ書	ガラテヤ書	雅歌	ヨブ記	使徒行伝	イザヤ書	ヨハネ黙示録	エペソ書	コリント後書	詩篇	申命記	コリント前書	マルコ伝	出エジプト記	ヨハネ第一	ペテロ第一	ロマ書	四福音書	共観福音書
4		3	5	2	4	5	4	8	6	9	16	11	10	20	11	16	22	21	28	19	44	61
	4	2		3		2	6	4	7	4		4	8	1	6	8	3	5	2	25	16	21
						3				1		1	1		4							

	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
	約 620	1	1	1	2	2	2	3	3	3
	不 特 定 (四ヶ所以上)	ミ カ 書	エ レ ミ ヤ 書	コ ロ サイ 書	ピ リ ビ 書	テ サ ロ ニ ケ 前 書	テ サ ロ ニ ケ 後 書	伝 道 の 書	ル ツ 記	ゼ カ リ ヤ 書
		1	1	1	2	1		3	3	3
						1	2			1

この一覧表の回数には三ヶ所以内にあるのを、それぞれ1回に入れて数えた。例えば「ブランド」にある「蹠きの石」はエレミヤ書六章二十一節、ロマ書九章三十二節、ペテロ第一の二章八節にある。エレミヤ書1回、ロマ書1回、ペテロ第一1回として数えてある。また、末光續宛書簡にある十字架上のイエスの「主よ何ぞ我を捨て給ふや」という叫びは、マタイ伝二十七章四十六節とマルコ伝十五章三十四節にある。マタイ伝1回、マルコ伝1回として数えてある。マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝にある言葉は共観福音書1回として数えるし、マタイ伝、マルコ伝、ルカ伝、ヨハネ伝にある言葉は四福音書1回として数えてある。四福音書を除いて四ヶ所以上にある言葉は「不特定」として、この一覧表には入れていない。例えば「ブランド」にある「わが神は妬む神なり」に準ずる表現は多く、七ヶ所にもあるからである（出エジプト20・5、34・14、申命4・42、5・9、6・6、ヨシヤ24・19、ナホム1・2）。

〈罪人〉〈神の裁斷〉〈聖書〉〈アダム〉〈教會〉〈洗禮〉〈魂〉〈神意〉〈人の子〉〈神の御手〉〈羊群は牧者を離れて〉ヘモ
 ーゼが四十年の間アラビヤの砂漠をさまよつた事（半日）などの聖書にある「不特定」用語は、キリスト教用語、
 キリスト教記事に次いで多く、ヨハネ伝の191回より多いことを断っておきたい。そして「不特定」については、38位
 「ミカ書」の後に発表する予定である。現在までの調査結果ではキリスト教用語と記事が約80回、「不特定」聖書用語
 が約60回である。キリスト教用語、キリスト教記事、そして「不特定」聖書用語の多い著作名は、『リビングスト
 ン傳』『ブランド』『旅する心』『イブセン研究』『ホイットマン詩集』『惜みなく愛は奪ふ』『札幌獨立教會』『リビング
 ストン傳』序、『聖フランシスの完全の鏡』序、『聖書』の權威』などである。

「有島武郎と聖書」回数別順位」を見て東京カトリック神学院のネメシエギ教授は感想を次のように言う。

有島の聖書の読書傾向は全体的に見て旧約聖書もかなりよく読んでいると言える。清教徒デモクラツトの人は旧約を大切にしてい
 いたからであろう。15位にある詩篇もよく読んでいと言える。旧約の中でも詩篇だけは、新約重視の教会でも比較
 的によく読まれている。確かに有島はヨハネ伝を一番よく読んでいる。最近のプロテスタントはヨハネではなくマルコ
 である。一番歴史が古く、史的イエスを知るための福音書として適するからである。ギリシア正教会は一貫してヨハ
 ネを重視している。ただ有島にはパウロ書簡が全体として読まれ方が少ないと思われる。

確かに清教徒の流れに在る人は内村鑑三もそうであるが旧約を重視していた。有島も札幌バンドの一員であり、内
 村の『聖書之研究』を愛読し、その『創世記』注解を一つの参考にして「大洪水の前」を創作している。全体として
 パウロ書簡が少ないのは、反パウロ・親ヨハネ宣言（日記、明治36・2・5）をしている当然の結果ではある。

さて一覽表の1位はヨハネ伝191回、2位は創世記17回、5位は士師記91回である。聖書に取材した戯曲『三部曲』

「大洪水の前」「サムソンとデリラ」「聖餐」の中で、「大洪水の前」に創世記が91回、「サムソンとデリラ」に土師記が86回、「聖餐」にヨハネ伝が89回出てくる。聖書戯曲『三部曲』を除いて、それぞれ話題にした回数に創世記86回(48.5%)、土師記5回(5.5%)、ヨハネ伝102回(53.4%)でやはりヨハネ伝のパーセントが一番多い。しかも「聖餐」は四福音書から取材した戯曲であるが、特にヨハネ伝からの話が多い。(例えば「姦淫の女」「弟子の足を洗う」「ラザロの復活」「盲人を治す」等、ヨハネ伝のみの話は「聖餐」に生かされている。)

それではまず「有島武郎全集とヨハネ伝」一覧表(日記を除く)を示すと次の通りである。整理すると1番から12番までである。次に「観想録(日記)とヨハネ伝福音書」1番から39番までの一覧表を示す。続いて「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」一覧表を総計193点を集約して示すと次の通りである。

第三部 増子方式

有島武郎全集とヨハネ伝一覽表

番順	1	2	3	4	5	6	7	8
年齢	22	23	23	23	23	26	26	27
著作名	人生の歸趣	リビングストーン傳	リビングストーン傳	リビングストーン傳	札幌獨立教會	日本文明の發展	Development of Japanese Civilization	露國革命黨の老女
発表年月日	明治33年 一九〇〇年	明治34年3月 一九〇一年			明治34年10月 一九〇一年	明治37年6月 一九〇四年	明治37年6月 一九〇四年	明治38年4月 一九〇五年
新潮卷・頁・行	5・400・16							
築摩卷・頁・行	1・59・11	1・206・19・20	1・206・20	1・208・12・13	1・259・1	1・616・上21	1・607・4・5 下1	1・357・17
章・節	18・38	6・37	14・13・14	21・9・13	2・1・11	19・30	19・30	8・7
要約原文 聖書語句	「真理とは如何なる者ぞ」 來るものは決して捨てざる可し 余の名によりて希ふは與ふ可し 使徒ヨハネが尊敬せし豫言者 カナの婚宴に水酒と化しぬ 十字架から事は終つたと叫ぶ "It is finished" was cried from the top of the cross							病ましくない者女に石を投げよ
同内容番号	13 36 142				18 29	7	6	66 56 137 146 59 60 61 62 63 64 65 151

18	17	16	15	14	13	12	11	10	9			
36	33	33	33	33	32	32	31	31	27			
内部生活の現象	ブランド(初稿) 三十九	ス 或る女のグリンプ 十一	ス 或る女のグリンプ 七	ブランド(初稿) 三十四	ブランド(初稿) 二十六	二つの道 六	ブランド(初稿) 一九〇九年	半 日 一九〇九年	露國革命黨の老女			
一九一四年	明治44年12月	明治44年11月	一九一一年	明治44年3月	明治43年6月	明治43年5月	明治42年6月	明治42年2月				
5・225・9・10						5・116・6・7		1・29・10				
7・97・18	1・470・15	2・125・16・17	2・97・7	1・461・8	1・452・3	10・1	7・9・17	1・432・17	1・357・17・18			
2・1・11	19・5	16・33	4・5・42	18・11	18・38	8・1・11	3・16	8・3	8・7			
の奇跡	カナの結婚の席で最初	荊棘の冠	「我れ既に世に勝てり」 リヤの女	基督に水をやったサマ	何ぞや」 基督の死を味ひし時	ピラト問ふ「眞理とは	罪なき者先づ彼女を石 で擲て	わが神は凡てを愛する に	娼婦やマグダレナのマ リア	疾しくない者彼女に石 を投げよ		
5 29	38	31 127 130	30 150	37	1 36 142	66 137 146 151	56 59 60 61 62 63 64 65	8 9 10 22 24 28 41 53	25 33 34 35 131 132	66 137 146 151	56 59 60 61 62 63 64 65	8 10 12 22 24 28 41 53

第三部 増子方式

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19					
41	39	39	39	39	39	38	37	37	37					
自己描出「カインの末裔」	宣言	自(我)己の考察	自(我)己の考察	迷路(二)	死と其の前後	洪水の前 (未定稿)	サムソンとデリラ (未定稿)	サムソンとデリラ (未定稿)	宣言(初出)					
大正8年元旦 一九一九年	大正6年12月 一九一七年	大正6年11月27日 一九一七年	大正6年11月27日 一九一七年	大正6年11月1日 一九一七年	大正6年5月 一九一七年	大正5年1月 一九一六年	大正4年9月 一九一五年	大正4年7月 一九一五年	大正4年7月 一九一五年					
6・18・4・5	1・80・8・9	5・311・12・13	5・311・2・3	1・359・10・11	4・55・2									
3	7・425下・2	2・324・4・5 20	7・411上・17 411上・1	7・410下・22	3・242・18・19	3・20・11	2・437・1・2	2・425・11・12	2・416・19					
8・7	1・3	15・13	3・16	8・1・11	20・29	8・5	9・1・1・41	12・3	1・3					
まつ石を	石を以て打ち得る者が うな自由	創造に着手する神のや 「身を殺して仁を爲す」 興へ」と	ポーロが「惜しみなく 「身を殺して仁を爲す」 興へ」と	のマリヤ 姦淫を犯したマグダラ	り 神を信ずるものは幸な	せ 奸姦女を石で搏つて殺	心を讀む 盲目サムソンエホバの	ナルドの香油でこの髪 を櫛り	神 創造に着手せんとする					
66 137 146 151	56 59 60 61 62 63 64 65	8 9 10 12 22 24 41 53	19	120 121	11 33 34 35 131 132	66 131 146 151	8 9 10 12 22 28 41 53	32 92 147	66 137 146 151	56 59 60 61 62 63 64 65	8 9 10 12 24 28 41 53	40 58	39	27

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	
サムソンとデリラ	サムソンとデリラ	ブランド(改稿) 三八	ブランド(改稿) 三三	ブランド(改稿) 二六	ブランド(改稿) 六	一切か無か	一切か無か	一切か無か	或る女(一一)	或る女(七)	『リビンググストン 傳』の序	
一九一九年	大正八年十月				大正八年四月 一九一九年			大正八年三月二十八日 一九一九年		大正八年三月二十三日 一九一九年	大正八年三月二十二日 一九一九年	
4・204・16・17	4・188・10	5・45・18	5・37・10	5・28・9・10	5・7・18				2・82・17・18	2・44・4	18・6・77・16・17	
5・103・8・9	5・87・10	7・308・8	7・299・11	7・290・15・16	7・271・4	7・45下・6	7・45上・5	7・44下・9	4・83・17・18	4・46・13	7・379上・5	
9・1・1・41	12・3	19・5	18・11	18・38	3・16	3・16	3・16	20・25	16・33	4・5・42	2・1・1・11	
精神的盲目、心眼は神を穢り	ナルドの香油でこの髪	荊棘の冠	時 基督が死の杯を味ひし	何ぞや 「眞理とや、眞理とは	わが神は凡てを愛する	なり 雷鳴の中より「神は愛	神は愛なり	「奇蹟を見せてくれ」	「我れ既に世に勝てり」	リヤの女	聖酒 基督に水をやつたサマ	奇蹟、カナの婚筵、葡萄酒
21 58	20	17	14	1 13 142	11 25 33 34 131 132	11 25 33 35 131 132	11 25 34 35 131 132	23 92 147	16 127 130	15 150	5 18	

第三部 増子方式

51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41	
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	
聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐 第一幕 エルサレム神殿前	大洪水の前	
									大正8年10月	大正8年10月 一九一九年	
4 ・ 212 ・ 6	4 ・ 212 ・ 5	4 ・ 212 ・ 1 2	4 ・ 211 ・ 5	4 ・ 211 ・ 2 3	17 4 ・ 210 ・ 15 16	4 ・ 210 ・ 13 14	4 ・ 210 ・ 8 9	4 ・ 210 ・ 6 7	4 ・ 209 ・ 16 17	4 ・ 116 ・ 9 10	
5 ・ 112 ・ 1	5 ・ 111 ・ 19	5 ・ 111 ・ 15 16	5 ・ 111 ・ 1 2	19 5 ・ 110 ・ 17 18	14 5 ・ 110 ・ 12 13	11 5 ・ 110 ・ 9 10	5 ・ 110 ・ 3 4	5 ・ 110 ・ 1 2	14 5 ・ 109 ・ 12 13	5 ・ 17 ・ 3 4	
6 ・ 71、 13	2 26 6 ・ 71、 13	2 26 6 ・ 71、 13	5 ・ 17	5 ・ 16	5 ・ 6 8 9	5 ・ 5 7	5 ・ 3	5 ・ 4	5 ・ 1 9	8 ・ 5	
イスカリオテのユダ	イスカリオテのユダの生れ	私はユダヤのカリオテの生れ	「神は働き給ふ私も働く」	「神は働き給ふ私も働いて破つた」	安息目をイエスが平氣らん」	「床を上げて歩いてくれ」	三十八年も池に立ちお集まる	癩病人も誓言も跛者も治る	一番に池に飛び込めば癒す	ベテスダの池で盲人を癒す	奸姪の女を石で擲てを見る
49 50 52 55 57	49 51 52 55 57	50 51 52 55 57	47 141 145	48 141 145	42 43 44 45	42 43 44 46	42 43 45 46	42 44 45 46	43 66 44 137 45 146 46 151	8 9 10 12 22 24 28 53	

61	60	59	58	57	56	55	54	53	52
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐

4 ・ 225 ・ 5	4 ・ 224 ・ 15 16	4 ・ 224 ・ 2 3	4 ・ 222 ・ 12	4 ・ 220 ・ 9 10	4 ・ 216 ・ 16 17	4 ・ 216 ・ 13	4 ・ 214 ・ 3 4	4 ・ 213 ・ 14	4 ・ 212 ・ 7
5 ・ 124 ・ 11	5 ・ 124 ・ 3 4	5 ・ 123 ・ 9 10	5 ・ 122 ・ 2	5 ・ 120 ・ 1 2	5 ・ 116 ・ 9 10	5 ・ 116 ・ 6	5 ・ 113 ・ 15 16	5 ・ 113 ・ 8 9	5 ・ 112 ・ 2
8 ・ 5	8 ・ 4 5	8 ・ 3	9 ・ 41	29 12 ・ 6、 13	8 ・ 1 11	2 26 6 ・ 71、 13	2 ・ 4	8 ・ 5	29 12 ・ 6、 13
姦淫を犯した女を打ち ある時	この女は姦淫を行つて	を捕へて	反抗するマリヤの両手	瞽言よりも憐れな盲目	私達の會計を司つて くれてゐる	あの姦淫を犯した女 ヤ人です	弟子の中私だけがユダ りません	母に「何んの關係もあ だ	石で打ち殺していゝ女 イエスの人々の會計役
8 9 10 12 22 24 28 41	66 137 53 59 61 62 63 64 65	8 9 10 12 151	66 137 53 56 60 61 62 63 64 65	8 9 10 12 22 24 28 41	21 40	49 50 51 52 55 83 84 85	66 137 53 59 60 61 62 63 64 65	8 9 10 12 12 22 24 28 41	66 137 53 59 60 61 62 63 64 65

第三部 増子方式

69	68	67	66	65	64	63	62
41	41	41	41	41	41	41	41
聖餐	聖餐	ニアのラザロの家 聖餐第二幕ベタ	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐

17	4 236 15 16	4 236 12	4 236 7 8	12	4 228 7 }	4 228 6	18	4 227 16 17	4 227 13 14	4 226 9
19	5 135 17 18	5 135 14 15	5 135 9 10	16	5 127 11 }	5 127 10	4	5 127 2 3	5 126 18 19	5 125 14
	11 8	11 11	11 6		8 11	8 10		8 8 9	8 7	8 6

殺せ	66	53	65	53	8	66	53	8	66	53	8	66	53	8	66	53	66	53
蹲みながら地の上に字	137	9	137	56	9	137	56	9	137	56	9	137	56	9	137	56	137	56
を書く	146	10	146	59	10	146	59	10	146	59	10	146	59	10	146	59	146	59
罪のないもの石を投げ	151	11	151	60	12	151	60	12	151	60	12	151	60	12	151	60	151	60
るがいゝ		12		61	22		61	22		61	22		61	22		61		62
弟子のみイエスの傍ら		13		62	24		62	24		62	24		62	24		62		63
に残る		14		63	28		63	28		63	28		63	28		63		64
女よ。訴へた者達は何		15		64	41		64	41		64	41		64	41		64		65
處にある		16																
私も亦あなたを罪に定		17																
めまい		18																
二日間立たうとなされ		19																
なかつた		20																
ラザロは眼つてゐるの		21																
だ		22																
主の命を滅ぼさうと企		23																
んでゐる		24																
	67	68																

80	79	78	77	76	75	74	73	72	71	70							
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41							
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖							
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐							
<hr/>																	
4 238 8	4 238 5 6	238 1 2 3	4 237 18 }	4 237 14 15	4 237 13	4 237 12	4 237 10 11	4 237 5	4 237 2	4 236 17 18							
5 137 8	5 137 5 6	137 1 2 3	5 136 19 }	5 136 15 16	5 136 14	5 136 13	5 136 11 12	5 136 6	5 136 3	136 1 5 135 19 }							
11 36	11 33 34 35	11 32	11 27	11 25 26	11 24	11 23	11 21 22	11 16	11 5	11 9 10							
だ	ラザロは愛せられたの	イエス（涙を流す） した	愛するラザロは死にま	主よ信じます	ある	私が復活であり生命で	も甦る	末の日の復生の時、兄	をほり 甦る	あなたの兄のラザロは	たらうに	兄は死なずに濟みまし	死なう	私達も行つて主と共に	られた	主がラザロを愛して居	晝の間は蹟く事はない
75 76 77 78 79	67 68 69 70 71 72 73 74	75 67 68 69 70 71 72 73 74	67 68 69 70 71 72 73 74	75 67 68 69 70 71 72 73 74	75 67 68 69 70 71 72 73 74	67 68 69 70 71 72 73 74	67 68 69 70 71 72 73 74	67 68 69 70 71 72 73 74	67 68 69 70 71	67 68 69 70	67 68 69	67 68 69	67 68 69	67 68 69	67 68 69		

第三部 増子方式

91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐

4 ・ 246 ・ 4	246 1 4 ・ 245 ・ 18 ・ 1	17 4 ・ 245 ・ 14 ・ 1	4 ・ 245 ・ 8 ・ 9	16 4 ・ 243 ・ 11 ・ 13	4 ・ 243 ・ 1 ・ 2	4 ・ 241 ・ 17 ・ 18	4 ・ 241 ・ 17	4 ・ 241 ・ 15	4 ・ 238 ・ 12	4 ・ 238 ・ 9 ・ 10		
5 ・ 144 ・ 17	5 ・ 144 ・ 13 ・ 14	12 5 ・ 144 ・ 9 ・ 1	5 ・ 144 ・ 3 ・ 4	13 5 ・ 142 ・ 8 ・ 10	5 ・ 141 ・ 17 ・ 18	5 ・ 140 ・ 16 ・ 17	5 ・ 140 ・ 16	5 ・ 140 ・ 14	5 ・ 137 ・ 12	5 ・ 137 ・ 9 ・ 10		
11 ・ 53 54 57	11 ・ 49 50	11 ・ 48	11 ・ 46	11 ・ 43 44	8 30、 4、 7、 8、 20 6	2 ・ 4、 7、 6	2 26 6 ・ 71、 13 ・	29 12 ・ 6、 13 ・	11 ・ 40	11 ・ 39		
殺害決意	祭司長らラザロ復活後にする	一人残らずイエスを信ずるだらう	イエスを殺す計画	た！	死んだラザロが生きだ來ない	私の擧げられる時はま手に	レプタ一枚でも自分勝人である	ユダ―私が會計を司つてゐる	ユダ―私が見る	私を信するなら神の榮	ておけ	洞穴の口の石を除かせ
88 89 90	88 89	88	129	75 76 77 78 79 80 81 82	67 68 69 70 71 72 73 74	49 50 51 52 55 57 83 84	49 50 51 52 55 57 83 85	49 50 51 52 55 57 84 85	75 76 77 78 79 80 81	67 68 69 70 71 72 73 74	75 76 77 78 79 80	67 68 69 70 71 72 73 74

103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐

シモンの家
第三幕

4 263 1	4 262 17 18	4 261 10 11	4 259 1	4 258 4 5	4 254 15 16	10	4 254 8 9	15、 254 1	4 253 13 14	4 253 7	4 249 10 11	7	4 249 5 6	4 248 16 17
5 161 1	18 5 160 16 17	5 159 10 11	5 157 3	5 156 7 8	5 153 2 3	13	5 152 11 12	4	5 152 1 2	5 151 13 14	5 148 1 2	17	5 147 15 16	5 147 8 9
13 6	13 3 4 5	13 37	14 10 11	14 12 16	12 12 13	12	12 10 11	12 1 2	12 1 2	12 24	3 14	12 24	12 24	20 29

見ずして信ずるは幸なり
一粒の麥が地に死ななければ
モーゼが蛇を上げたやうに
一度死ななければ神の國に
逾越節前日とイエス捕縛
復活のラザロを無いものに
主がエルサレムに、棕
梠ホザナ
私が行つた後慰めるもの
天の父は常に私と共に
主のため命も惜しくな
いペテロ
私は今日は洗ひ役にな
らう
勿體ないそれは主人の

102			115 116 117 118 119			111	108 109	93		95		23 32 147
-----	--	--	---------------------------------	--	--	-----	------------	----	--	----	--	-----------------

第三部 増子方式

114	113	112	111	110	109	108	107	106	105	104
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐

13	4 267 11 12	4 267 10	7	4 267 5 6	4	4 266 1 7	7	4 265 5 6	4 265 1 2	265 1	4 264 18、	4 264 9 10	15	4 263 13 14	4 263 12	11	4 263 9 10
7	5 165 5 6	5 165 4	165 1	5 164 18 7	18	5 163 15 7	3	5 163 1 2	5 162 16 17	5 162 15 16	5 162 6 7	13	5 161 11 12	5 161 10	9	5 161 7 8	
13	28 29	13 30	13 26 27 30	12 10 11	13 14 15	12 8	12 7	12 4 5	13 10	13 9	13 8						

に施しに？	節の買物？ 退場	ニダ金袋を携へたるま なさい	ニダすべき事をして來 殺さうと	祭司長たちはラザロも である	互に脚を洗い合うべき でない	私はいつまでも一緒に 準備	マリヤの香油は葬りの とニダ	香油を賣り貧しい人に はない	皆が奇麗になつたので はない	脚だけでなく手も首も	洗わずば關係なくなる 役目です		
107 112 113	112	85 106 107	49 50 51 52 55 57 83 84	97	102 103 104 105 106	96 108	96 109	85 106	49 50 51 52 55 57 83 84	85 107	49 50 51 52 55 57 83 84	102 103 104	102 103

126	125	124	123	122	121	120	119	118	117	116	115
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐

4 269 1 1	4 268 17 18	16 4 268 13 1	4 268 12 13	11 4 268 8 1	4 268 6 7	4 268 5 6	5 4 268 3 4	4 268 2	4 268 1	4 267 18	4 267 16 17
5 166 12 1	5 166 10 11	9 5 166 6 1	5 166 5 6	4 5 166 1 1	5 165 18 19	5 165 17 18	17 5 165 15 16	5 165 14	5 165 13	5 165 12	5 165 10 11
16 31 32	16 29 30	16 22	16 21	15 18 19	15 12 13 14	15 9	14 9 10	14 8	14 6	14 5	14 1 2 3
時が来た然し私は孤獨 を信ず	主が神より出で給へる が来る	再びあなた方に會ふ時 忘れる	婦が産み終れば憂ひを は憎む	私が選み取つたので世 の愛なし	友の爲め命を捨てる程 私も	父が私を愛したように たのだ	私を見たものは父を見 て下さい	主よ、天の父を知らせ 行けない	私に由らなければ父に りません	主の行かれる道さへ知 たい	私のある所にゐて貰ひ たい
		123	124		26 121	26 121	100 115 116 117 118	100 115 116 117 119	100 115 116 118 119	100 115 117 118 119	100 116 117 118 119

第三部 増子方式

	137	136	135	134	133	132	131	130	129	128	127
	43	42	42	42	42	42	42	41	41	41	41
	「聖餐」に就いて	惜みなく愛は奪ふ	惜みなく愛は奪ふ	惜みなく愛は奪ふ	惜みなく愛は奪ふ	イブセン研究	イブセン研究	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐
一九二二年	大正10年2月			日 一九二〇年	大正9年6月5		大正9年2月				
15	7 165 13 14	6 210 7	6 161 10 11	6 161 1 2	6 158 3	356 1 6 355 18 }	6 354 16	4 271 5	4 270 8	4 269 6 7	4 269 4 5
7	8 532 上 3	8 174 4	8 129 9 10	129 1 8 128 20 }	8 126 3	8 460 上 5	8 459 上 17	5 168 16	5 167 19	19 5 166 17 18	5 166 15 16
	8 1 1 11	1 1 1	1 1 1	1 1 1	1 1 1	3 16	3 16	16 33	11 38 44	18 1	16 33
色マリヤ	石で打ち殺さるべき賣	ヨハネのロゴス あるかを	太初が道であるか行で	らない私	太初 <small>はじめ</small> の何であるかを知	言葉 「神は愛なり」天からの 太初 <small>はじめ</small> に道があつたか 行 <small>わざ</small> があつたか	「神は愛なり」天からの 天から聲「神は愛なり」 たいエス	世に勝つたと仰しやつ たいエス	エス ラザロを甦らさせたイ 園 <small>ゲツセマネ</small> に行く	ケデロンの河を渡つて	私 <small>わたし</small> は既に世に勝つた ではない
53	8	133	133	133	134	11	11	16	877567		16
56	9	134	134	135	135	25	25	31	7668		31
59	10	135	136	136	136	33	33	127	7769		130
60	12					34	34		7870		
61	22					35	35		7971		
62	24					131	131		8072		
63	28								8173		
64	41								8274		

148	147	146	145	144	143	142	141	140	139	138										
45	44	44	44	44	44	44	44	44	44	43										
即實の生活	獨り行くもの	即實の生活と宗教	倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に(草稿) 「静思」を讀んで	倉田氏に(草稿) 「静思」を讀んで	倉田氏に(草稿) 「静思」を讀んで	ホキットマンに就いて										
大正12年1月	大正11年12月 一九二二年	大正11年11月 一九二二年			大正11年11月 一九二二年	大正11年11月		前 一九二二年	大正11年11月以	大正10年3月 一九二一年										
		18	7 314 16 17	16	7 314 12 17	301 1	7 300 18 17	17	7 235 15 16	6 383 15										
9 316 下 5	1 6	9 309 上 2	1 14	9 306 下 8	11	9 124 9 10	9 124 6 17	9 110 9 10	15	9 105 13 14	1 23	9 41下 19	1 19	9 41下 13	1 10	9 41下 7	17	8 540 下 16		
2 13 17	20 24 29	8 1 11	5 17	2 13 17	2 13 17	2 13 17	18 38	5 17	2 13 17	2 13 17	4 44	2 13 17	2 13 17	2 13 17	2 13 17	2 13 17	4 44			
宮殿から繩で商人を追	再臨を信じなかつたト	『めす』	女よ『我れ汝の罪を定	働くなり	神は働き給ふ我れも亦	働くなり	てゐます	基督は直接行動を取つ	出ず	基督は繩で商人を迫ひ	何ぞや	ピラト問ふ「眞理とは	働くなり	神は働き給ふ我れも亦	働くなり	基督は直接行動を取つ	を撃退	基督は繩で宮殿の商人	ました	彼は故郷から迫害され
139 140 143 144 149	23 32 92	65 66 137 151	53 56 59 60 61 62 63 64	8 9 10 12 22 24 28 41	47 48 141	139 140 143 148 149	139 140 144 148 149	1 13 36	47 48 145	139 143 144 148 149	65 66 146 151	139 143 144 148 149	139 143 144 148 149	139 143 144 148 149	139 143 144 148 149	139 143 144 148 149	4 44			

第三部 増子方式

番	期	日	章	節	内	容	同	項
6	5	4	3	2	1			
36	35	34	34	32	32			
1	12	11	11	3	2			
1	31	24	24	16	16			
5	1	12	13	9	3			
44	27	4	1	2	16			
		5		1	41			
						キリストの愛 盲人のいやし イエスの愛と死 裏切者ユダとマリヤ の香油塗り バプテスマヨハネの 消極的証言 神の榮より人の榮		

觀想錄（日記）とヨハネ伝福音書

152	151	150	149
30	25	45	45
書簡	クロウエル夫妻宛	末光 積宛書簡	即實の生活 即實の生活
日 一九〇八年	明治41年3月11	日 一九〇三年	明治36年8月22
		14	8 ・ 19 ・ 13
8	13 ・ 19 右 ・ 7	19 20	13 ・ 48 上 ・ 18
	9 ・ 4	8 ・ 11	9 ・ 316 下 ・ 15
			12 13
			9 ・ 316 下 ・ 11
			6 7
			2 ・ 13 ・ 17
			17
			ひ出した
			基督は商人を繩の鞭で
			追ひ出す
			サマリヤの女の他に夫
			造りを許す
			「我も亦汝の罪を定め
			ず」
			“Night cometh, and
			therein no man can
			work.”
			65
			53
			8
			9
			10
			12
			22
			24
			28
			41
			66
			56
			9
			10
			12
			22
			24
			28
			41
			139
			140
			143
			144
			148

28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	
36 ・ 9 ・ 6	36 ・ 9 ・ 6	36 ・ 8 ・ 31	36 ・ 8 ・ 29	36 ・ 8 ・ 28	36 ・ 8 ・ 26	36 ・ 8 ・ 1	36 ・ 6 ・ 30	36 ・ 5 ・ 29	36 ・ 3 ・ 25	36 ・ 3 ・ 22	36 ・ 3 ・ 17	36 ・ 3 ・ 6	36 ・ 3 ・ 3	36 ・ 3 ・ 3	36 ・ 3 ・ 1	36 ・ 2 ・ 27	36 ・ 2 ・ 25	36 ・ 2 ・ 15	36 ・ 2 ・ 12	36 ・ 2 ・ 8	36 ・ 2 ・ 5	
2 ・ 1 ・ 11	9 章 44	4 ・ 1 ・ 42	2 章	1 章	ヨハネ伝	8 ・ 1 ・ 11	8 ・ 1 ・ 11	8 ・ 1 ・ 11	13 ・ 34	13 ・ 34	6 ・ 38 ・ 39 ・ 45	5 ・ 44	1 章	9 章	ヨハネ書	ヨハネ書	5 ・ 44	9 ・ 1 ・ 15	8 ・ 1 ・ 11	3 ・ 16		
カナの婚筵	盲人のいやし	神の榮より人の榮	サマリヤの女	カナの婚禮と宮清め	言葉が人間となる	航海の間を研究に	姦淫の女	姦淫の女	姦淫の女	姦淫の女	相愛すべし	相愛すべし	終りの日を待て	神の榮より人の榮	全聖書の序説	盲人のいやし	ヨハネに學ぶ	感激の宗教	神の榮より人の榮	盲人のいやし	姦淫の女	ヨハネの愛の普遍性
24	2 9 13	6 10 15		14	11 12	8 19 20	8 19	8	17			6 10		2 9	11		6	2			1	

第三部 増子方式

1	位順		
26	回数		
8・11	有島が問題にした章・節(傍線は重要)		
11	「題」(題の範囲の章・節)		
	「姦淫の女」(7・53)8		
	7(「罪なき者先づ彼女を右で搏て」)		
	節(「聖書語句、要約原文」)		
	回数(著作名)(発表又は執筆年月日)		
	年齢(章・節)		
	⑤「日記」(明治36・2・8、5・29、6・30、8・1、39・10・6)25歳、28歳		
	①「書簡」(明治36・8・22、末光續宛)25歳		
	②「露國革命黨の老女」27歳		
	「半日」31歳 ①「二つの道」32歳 ①		
	「洪水の前」38歳 ①「迷路」39歳 ①		

「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位

39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29
36・9・22	大正5・8・3	大正5・8・3	39・10・6	37・9・15	37・8・3	37・8・2	37・8・2	37・7・21	37・7・20	37・7・20
12・13章	14・8	12・23	8・7	19・30	14・18、20	3・16、18	13・31、35	9・41	ヨハネ伝	13・1、20
	マリヤとニダ	子と父とは一つ	姦淫の女	人の子榮光受ける時	十字架の完成	終末の時	神の獨り子	相愛すべし	精神的盲目	規則正しく讀む
4			8 19 20 21			1 7	17 18	2 9 13 27	11 12 22	3

5		4		3		2	
9		10		16		18	
9・1・15	2・41、9章、	3・16 18	30 2 10 26 27 28 29	4 5 6、13・	6・71、12・	44 34 35 36 39 40 43	24 25 26 27 32 33
	「生れながらの盲人のいやし」(9・1・41)	「神は愛なり」(2・23・3・21)	「會計係イスカリオテのユダの裏切り」(13・21・30)	「會計係イスカリオテのユダの裏切り」(13・21・30)	「イエズス、ラザロをよみがえらす」(11・1・44)		
	41(「見える」と言い張るところに、あなたの罪がある。)	16(「我れは神の獨り子なり」と云へりし人の子)	30(ヘユダ金袋を携へたるまま退場)	30(ヘユダ金袋を携へたるまま退場)	23(「あなたを兄のラザロは甦る」(ヨハネ伝のみ))		
41・3・11、	「書簡」(明治	③「日記」(明治32・2・16、36・2・5、37・8・2) 21歳・26歳(3・16) ①ブランド(初稿) 31歳 ①「自(我)己の考察」39歳 ②「一切か無か」41歳 ①「ブランド」41歳 ②「イブセン研究」42歳(3・16)	④「聖餐」41歳 ②「日記」(明治34・11・24、36・9・22) 23歳(12・4・5)	④「聖餐」41歳 ②「日記」(明治34・11・24、36・9・22) 23歳(12・4・5)	⑧「聖餐」41歳		「自己描出」(カインの末裔)「41歳」①「大洪水の前」41歳 ⑩「聖餐」41歳 ①「聖餐」に就いて」43歳 ①「即實の生活と宗教」44歳

第三部 増子方式

10	9	8	7	6
6	8	8	9	9
2・1 11	14 6 8 9 10 11 13	6 8 9 14 15	13 ・ 1 3 4 5	1 ・ 1 3 27、 1 章全体
「カナ婚延」(2・1 12)	「イネスは父に至る道」 (14・1 14)	「弟子の足を洗ふ」(13・ 1 20)	「ベテスタの池で盲人を 治す、安息日問答」(5・ 1 18)	「創造者であるロゴス」 (1・1 15)、「バプテス マのヨハネ」(1・19 34)
9「カナの婚宴に水酒と化しぬ、 奇蹟」(ヨハネ伝のみ)	6「わたしによらないでは、父の みもとに行くことはできない」	5「私は今日は洗ひ役にならう」 (ヨハネ伝のみ)	17「神は働き給ふ。我も亦働くな り。」(ヨハネ伝のみ)	1「へ太初に道があつたか行があつ たか」
②「日記」(明治36・8・29、9・6) 25	①「札幌獨立教會」23歳(2・1 11)	②「日記」(明治34・11・24、37・7・20) 23歳(13・1、13・1 20) ⑥「聖餐」 41歳	⑦「聖餐」41歳 ①「静思」を讀んで倉 田氏に「草稿」44歳(5・17) ①「静思」 を讀んで倉田氏に「44歳(5・17)。「盲人 を治す」(5・1 9)が「聖餐」に5回、 他の4回は167節	③「日記」(明治35・12・31、36・3・3、 8・28) 24歳(1・27、1 章全体) ① 「宣言」(初稿)37歳(1・3) ①「宣言」 39歳(1・3) ④「惜みなく愛は奪ふ」 42歳(1・1)
	8「⑥「聖餐」41歳(14・1 23568)			41歳(9・41)
	91011			①「サムソンと デリラ」41歳(9・1 41) ①「聖餐」 41歳(9・41)
				(9・4) ①「サムソンとデリラ」(未定 稿) 37歳(9・1 41) ①「サムソンと デリラ」41歳(9・1 41) ①「聖餐」 41歳(9・41)

16	15	14	13	12	11
4	4	5	5	6	6
ヨハネ伝全体	5・44	・5 18・11、 19	8 12・1 2 3 7	33 16・ 29 30 31 32	17 2・ 13 14 15 16
・1・21・25)	「イエスに関する証」(5 ・30・47)	「裏切られ、逮捕され、 審問」(18・1・19・16)	「ペタニアで香油を注が れる」(12・1・8)	「世に勝つイエス」(16・ 25・33)	「神殿から商人を追ひ出 す」(2・13・22)
「靈的神學的福音書」(1					
15	15	15	7	33	15
つた商人達を撃退しました。	つた商人達を撃退しました。	つた商人達を撃退しました。	この油を蓄へておいたのだ。	33「私は既に世に勝つた。」	15「彼れは繩を以つて宮殿に巢喰
争でよく信じる事を得んや。	争でよく信じる事を得んや。	争でよく信じる事を得んや。	争でよく信じる事を得んや。	争でよく信じる事を得んや。	争でよく信じる事を得んや。
④「日記」(明治36・2・25、2・27、8	④「日記」(明治36・1・1、2・15、3	④「日記」(明治36・1・1、2・15、3	④「日記」(明治36・1・1、2・15、3	④「日記」(明治36・1・1、2・15、3	④「日記」(明治36・1・1、2・15、3

第三部 増子方式

22	21	20	19	18	17	
4	4	4	4	4	4	
53 54 57	11 46 48 49 50	20 24 29	18 38	12 23 24 28	4 4 1 1 42、 16 17 18	13 31 34 35 37
(11・45 57)	「イエズスを殺す計画」	「ピラトの尋問」(18・28 38)	「ギリシヤ人、イエズに 會ひに来る」(12・20 36)	「サマリヤの女」(4・1 42)	「最後の教訓」(13・31 38)、「ペトロの離反豫告」 (13・36 37 38)	
53 ヘイエスは時々人を離れて一人 になる。その機會に手早く死刑に 處するのだ)	25 「再臨を信じなかつたトマス」	38 「ピラト「眞理とは如何なる者 ぞ」と問ひぬ。」	24 「一粒の麥が地に落されて死ね ばこそ」	18 「他に夫を造つた」基督に水を やつたサマリヤの女(ヨハネ伝の み)	34 「爾曹相愛すべし」	
④「聖餐」41歳	①「死と其の前後」39歳(20・29) ①「一切が無か」41歳(20・25) ①「聖餐」41歳(14・5) ①「獨り行くもの」44歳(20・24 29)	①「人生の歸趣」22歳 ①「ブランド」(初稿)32歳 ①「ブランド」41歳 ①「静思」を讀んで倉田氏に」45歳(18・38)	①有島が『新約全書』に記した(明治36・8 41・9) 25歳と30歳間に(12・23 28) ①「日記」(大正5・8・3)38歳(12・23) ②「聖餐」41歳(12・24)	①「日記」(明治36・8・31)井戸のほとりにありしサマリヤの女(4・1 42) 25歳 ①「或る女のグリンプス」33歳(基督に水をやつたサマリヤの女) ①「或る女」41歳 ①「即實の生活」45歳(4・16 17 18)	③「日記」(明治36・3・22、3・25、3・8・2) 25歳(13・34、13・34、13・31 35) ①「聖餐」41歳(13・37)	

23	24	25	26	27	28	29	30
3	3	2	2	2	2	1	1
19・30	15・9 12 13 14	6・37 38 39 45	14・12 16 18 19	16・21 22	12・10 11	4・44	7・6 8 30、 8・20
「イエズスの死」(19・28 29 30)	「イエズスはまことのぶ どうの木」(15・1・17)	「終わりの日を待て」(イ エスは生命のパン」(6・ 22・59)	「聖靈を興える約束」(14 ・15・31)	「悲しみが喜びに変わる」 (16・16・24)	「ラザロスに對する陰謀」 (12・9・10・11)	「預言者は自分の故郷で は敬われない」(4・44)	「イエズスの兄弟の不信 仰」(7・1・9)、「イエ ズスはメシアか」(7・25 ・30)、「イエズスはこの 世の光」(8・20)
30	13	39	16	22	10	44	6
「十字架の上から」事は終つた」と 叫ばれてから二千年	「友のため命を捨てる程の愛な し」	「凡て父の我に賜ひし者をわれ 一をも失はず、末日にこれを甦ら すは即ち我を遺し、父の意なり」	「私が行つた後慰めるものが天 から送られる」	「別れ去つても、又再びあなた 方に會ふ時が来る」	「復活のラザロを無いものに」	「彼は第一その生まれ故郷から 迫害されました」	「主は「私の擧げられる時はま だ來ない」と云つて居られる」
①「Development of Japanese Civili zation」(明治37・6・10 修士論文ハヴァ フォード大学) 26歳 ①「日本文明の發 展」(明治37年6月10日) 26歳 ①「日記」 (明治37・9・15) 26歳 (19・30)	①「自(我)己の考察」39歳(15・13) ② 「聖餐」41歳(15・9・12・13・14)	①『リビンググストン傳』23歳(6・37) ①「日記」(明治36・3・17) 25歳(6・ 38・39・45)	①「日記」(明治37・8・3) 26歳(14・ 18・19・20 英文) ①「聖餐」41歳(14・12・16)	②「聖餐」41歳	②「聖餐」41歳(12・10・11)	①「ホキットマンに就いて」(大正10・3) 43歳	①「聖餐」41歳

	34	33	32	31
総計 193	1	1	1	1
	12 ・ 12 13	21 ・ 12 13	3 ・ 14	15 ・ 18 19
		「湖畔における顯現、朝の食事」(21・1・14) 「エルサレムに迎ええられる」(12・12・19)	「ニコデモとの對話」(3・1・21)	「この世の憎しみ」(15・18・27)
		13 へ主がエルサレムにお出でになつたあの日、棕櫚の葉を振りながらホザナホザナとお祝ひ申した。▽	13 へ神は故らに人の子に生れて、同じく食せり▽	19 へ私があなた方を今の世から選み取つたのだ。だから世の中はあなた方を憎むのだ。▽
		①「聖餐」41歳	①「リビングスト傳」明治34・3・29	①「聖餐」41歳

以上、三つの一覧表の中で、特に「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」の著作原文を著者と共に読んで、日本ハリストス正教会（ニコライ堂）の山口義人司祭は感想とともに次の三点を指摘する。

第一点は、まずミサ（聖体機密）^{ギリク・オソドックス}がない。東方正教会ではヨハネ伝は機密（西方公教会の秘蹟に相当）^{ローマカトリック}を中心に読む。プロテスタントの有島にこの読み方がないと言うのは無理かも知れない。正教会でもヨハネ伝は神学書と見ており、『新約』（正教本会版、一九六一年）の目録の最後は「神學者イオアンの黙示録」となっている。ヨハネ伝の特徴は「しるし」「サイン」であって正教会では「休徴」という。

第二点は、イエスの神性より人性を見ていることである。有島はイエスを神の子・キリストと見ることよりも、イ

エスが非常に不思議なことを行なった、めずらしいことを言ったという人間イエスの面を強調する読み方をしている。(安息日にベテスタで盲人を治す、カナの婚筵で水を酒に変える、縄で商人を撃退する、姦淫の女に「我も爾を罪せず」と言った、等。)

第三点は、有島のヨハネ伝の読み方は、自分とかかわりあるところから入り、忠実に心に響いたところを書き出し、よく読んでいると言える。社会主義に関心を示していた当時の有島のこと、確かにイエスは有島が言う即實主義者と見てよい。でも全体を見て欲しかった。有島が小石川の自宅から(東京市麴町區下六番町十番地) 神田駿河台のニコライ堂に来たら、司祭の服装や教会の儀式を見て驚いたことでしょう。

「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」の著作原文を著者と共に読んで、東京カトリック神学院のペテロ・ネメシエギ教授は次の二点を感想とともに指摘する。

第一点は、六章五十三節から五十七節、つまりミサ(聖体秘跡)がない。「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる。」(56節)この言葉がない。

第二点は、十七章が全然ない。「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためであります。」(21節)つまり、内なるキリスト、相互内在、ヨハネ的神秘的一致を示す言葉がないということである。「行って戻る」ということをオリゲネスは強調している。

おわりに

今回は、両氏の感想と指摘を紹介するまでにして、「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」第1位「姦淫の女」

からの解説は次の第二章で論じよう。

(1) 有島が使用した『新約全書 詩篇附』(横浜市山下町六十番地 大日本聖書館 明治三十四年八月二十九日發行)と全く同じものを、昭和五十七年十一月十一日、友愛書房で入手してきた。そして拙論「有島武郎が使用した新約聖書」(『解釈』昭和58年9月号)を発表した。既に明治三十二年十二月五日發行で同じ大日本聖書館發行の『舊新約全書』を入手してあった。二冊の聖書と日記にある聖書からの引用文を対比し、明治三十二年と三十四年というほぼ同時代の發行時期と同じ發行所であることから推測して、「有島武郎が使用したと思われるプロテスタント教会の『舊新約全書』は、」と本文に書いたのである。尚、明治三十年代に有島が使用した英文の聖書については調査中である。

第二章 ヨハネ伝内容別順位1～21位解説

「有島武郎とヨハネ伝」では、四つの一覧表と、有島のヨハネ伝の読み方に関して、正教会山口義人司祭、東京カトリック神学院ネメシエギ教授、両氏からの意見、感想、指摘を紹介した。本稿は「内容別順位」第1位「姦淫の女」からの解説と総括を、両氏の意見も参考にしつつ、論ずるものである。昭和六十年三月五日、立教大学で「26号合評会」があった。その際、速水敏彦教授から統計学的研究方法の紹介、その他ご教示を受けた。その後の研究で、話題にする回数が同数ならば、日記、書簡、評論、感想、紀行、文集、小説、戯曲、童話、詩歌、翻訳、等の順と数と有島の力の入れ方などを考慮して、内容別順位を再検討した。その結果、26号の「内容別順位」一覧表にある順位に、回数の同数に限り、変動が生じていることを断っておきたい。尚、今回は、紙面の都合で第21位までとし、以下第34位までは省略する。

まず有島がヨハネ伝を中心にヨハネ文書に惚れ込んだわけを四点にまとめて論じておこう。

第一点「姦淫の女」(8・1～11)の話があるからである。心の中の姦淫の罪に苦しむ生真面目な武郎にとって、この話は、武郎自身が救われたような、正に福音であった。「罪なき者まづ彼を右にて撃べし」(8・7)その結果、「罪なき者一人だになし」という事実は、武郎に平安と勇気を与えへ殊に余は、此節を新約聖書中深く愛讀しぬ。余

は之れを讀む毎に云ふ可からざる美感胸に逼りて、余の如きすら清き高き涙に誘はれざるを得ざるなり。√(明治36・2・8)と日記に記すに至るのである(内容別順位第1位)。

第二点 ヨハネは愛の使徒と言われるからである。ロマ書の子定説を二重決定論と誤解し、反パウロとなつた武郎が、その反動として愛のヨハネに傾倒していった。実生活においても、人一倍愛を求め続けていた武郎は「僕はどうかしてもヒーロよりはヨハネに行き度くなる。僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。」(明治36・2・5)と日記に3回も強調している(内容別順位第4位)。ヨハネ伝を中心にヨハネ文書に惚れ込んだわけについて論述しているが、ヨハネ伝を除くヨハネ文書では、ヨハネ第一の手紙が26回、黙示録が14回話題になつており、特に第一の手紙にある「神は愛なり」(4・8・16)が13回も出てくる。正に普遍的な言葉である。

第三点 ヨハネ伝は思想的神学的に深い思考思索を要する福音書であるからである。理論的思考を得意とする思想家有島にとつて、書き出しが敵か得意味深長なヨハネ伝の内容には傾倒させられたのである(内容別順位第6位)。(尚、島崎藤村が注意を払つたのは、ヨハネ文書ではなくパウロ書簡、特にロマ書に傾倒している。)

第四点 裏切者ユダの心理描写に秀れているのは共観福音書ではなく、ヨハネ伝であるからである。明治四十三年五月、札幌独立基督教会脱会届提出と背教宣言以後、一例として「聖餐」を含む聖書『三部曲』(大正八年十二月叢文閣)を書いている事実などを考慮するならば、有島には裏切者意識が潜在していたと思われる(裏切者意識と潜在信仰)。この意識がユダに関心を抱きつつヨハネ伝にのめり込ませるのである(内容別順位第3位)。

以上、四点にまとめてみた。本稿で関係するヨハネ文書とは、具体的にはヨハネ第一の手紙四章八節と一章一節の二カ所だけである。

ヨハネ伝の中でも特に重要なところ(例えば11・25、3・16、9・41、14・6、5・44、17・21、13・34など。有島は17・21を注目しなかった。)とヨハネ伝にしかない話(姦淫の女「ラザロの復活」「ペテスダでのいやし」「弟子の足を洗う」「カナ

の婚筵「私は世に勝つた」「ニコデモとの対話」等）などは必ず話題にし、的確に読み、有島らしい感想を述べている。しかし全体を見て分ることだが、有島のヨハネ伝の読み方にも欠陥がある。それは総括で述べることにしよう。それは第1位から有島の生涯と書き記したすべてと関連させつつ解説していこう。

内容別順位1位は「姦淫の女」(7・53～8・11)である。話題にすること、なんと26回である。二十五歳から二十七、三十一、三十二、三十八、三十九、四十一、四十三、四十四歳にわたり、受洗した青年時代から晩年まで一貫して書いている。若い頃から温厚な顔に似合わず、旺盛な性欲を内に秘めていた。「若みづから制ること能はずば婚姻するも可」(哥林多前書7・9)というパウロの言葉を、自制できない奴を軽蔑すると曲解し、へ……そんな人は結婚するがいゝ」と云つた言葉は私の癪に障る言葉だつた。(大正八年三月二十二日、四十一歳『リビングストーン傳』の序)。以後「序」と略記)と憤慨した。

清教徒クラーク博士の影響下に形成された札幌バンドには、真剣嚴肅な信仰と禁欲清貧の生活を重じる気風があつた。〈藝術家としての生馬の性格には、私のやうに清教徒的な矛盾の半面がない。〉へ私は清教徒のやうな清い生活をし、(序二)というやうに、武郎自身も自分が清教徒の末席にいることは意識していた。禁欲清貧を重んじる札幌時代の生活環境の中で、〈自分の性慾と信仰との間に始終苦しんだ〉(序二)。〈學二——然し先生はさうは考へられなかつたのです。基督の言葉の、女に對して心を動かしたものは姦淫を犯したものだと言ふあれをきびしく御自身の上にあてはめられたのでせう。〉(死と其の前後)大正六年五月(三十九歳)とあるやうにマタイ伝五章二十八節の言葉は生真面目な武郎の心を攻め続けたであろう。五章二十八節に触れることだけでも二十五歳から三十九、四十一歳とわたつて4回にも及んでいる(二十五歳、明治三十六年三月一日の「日記」に1回。三十九歳、大正六年五月「死と其の前後」に1回。四十一歳、大正八年十月三十一日「聖餐」に2回)。〈自分の性慾と信仰との間に始終苦しんだ〉という実際の例を「序」

と「日記」とから見ておこう。

へ祖母の臨終を、眼の前に控へた嚴肅な場合に立ちながら、ある夜中に、その看護婦がふしだらな寝衣のまままで、私の寢室に或る事を訴へに來た時には、私は必要な事だけを云ひ聞かせて、事なくその女を階下に送り返しておきながら、心の中では十分にその女の人を辱かしめてゐた。(二序「明治三十二年六月十二日 午後九時四十分、祖母靜他界。武郎二十一歳三カ月、入信決意後四カ月」)

へその宿屋には十五歳位の少女がゐた。余はその少女を大變に可愛いと思ひ、遂に彼女を捕へて、接吻した。彼女は余に抗ふ所か、明かに余にすがつて來た。自由な自然兒となつて、彼女にしたいだけのことが出來たらどんなにいいだらう。ああ！ 余は何と云ふ變な譯のわからぬ者であらう！ (略) 十二時の黒松内行き汽車に乗る。若い婦人の傍に腰を下す。彼女も亦美しいと思ひ、出來るだけ彼女に身體を寄せようとした程、自分は好色なのである。然し、今度は非常な羞恥と墮落の氣持が伴つた。(明治四十一年七月二十九日 三十歳四カ月 欧米留学後、母校予科教授に昇進して二カ月の頃、狩太の有島農場視察中)

特に今日のような性風俗汨濫時代であれば、色情を抱いて女を見ることが姦淫の罪であるなどという意識は、大方麻痺していると云えよう。ところが明治三十二年二月、入信決意の二十一歳の時以來、生真面目な武郎は心で姦淫を犯している自分いつも苦しんでいる。この武郎にとって「姦淫の罪を赦された女」の話は、へ涙に誘はれざるを得ざる(明36・2・8、二十五歳)ほどに嬉しかった。自分自身が許されたように嬉しかった。しかし四十四歳までに26回も話題にしておりながら、すべて姦淫の罪が許される感激を強調するだけの読み方に、足りないところがあったのである。足りないところとはすなわちイエスが最後に云つた言葉「再び罪を犯す勿れ」を重視していない点である。更にもう一点、ニコライ堂の山口義人司祭も認めておられるが、「許されたことを契機として以後、神と人のため積極的に生きよう」という読み方が当然含まれているのである。しかし武郎にはこのような読み方が不足しているの

ある。許された感激で嬉しい嬉しいという読み方だけのためにこの話があるのではない。

カトリック・サレジオ神学院のダルクマン神父は、「姦淫の女を許すのは、イエスが迷える一匹の羊を発見した時の態度と同じである」と云われる。すなわち、迷い滅びる一匹の羊と石で打ち殺される女に対して、今後は迷わないよう、今後は罪を犯さないようにと、イエスは羊、女を救うのである。

第2位は話題にすること18回の「ラザロの復活」である。ここでは次の(イ)(ロ)(ハ)について論じなければならない。(イ)「イエスの涙」、(ロ)「イエスの生死観」、(ハ)「ヨハネ伝のみ」。

(イ)「イエスの涙」はヨハネ伝十一章三十五節とルカ伝十九章四十一節の二回である。特にラザロの死に対してマリアたちが嘆き泣き悲しむのを見て、心を動かされた人間イエスの涙は注目される。有島文学の特徴の一つは〈死〉とともに〈涙〉を描いた点にあると云われる(山田昭夫『有島武郎』明治書院74頁)。芸術家としての有島がここを見逃がすはずがない。「聖餐」では次のように書いている。

人々マリアの悲しみに同情して皆涙を流す。キリスト深く心を動かし、

イエス——何處にラザロは置いてあるのだ。(涙を流す)

男——主が泣いてゐられる。

このイエスの涙は自分のためではなく、相手のために流す涙である。

(ロ)「イエスの生死観」(11・2526)がこの場面でマルタに語られている。東京カトリック神学院のネメシエギ教授が指摘されるように、イエスのこの言葉は聖書全体から見て大切である。更に「聖餐」の主題となり得る重要な言葉でもある。有島はちやんとイエスの台詞で書いている。

イエス——私が復活であり生命である。私を信ずる者は死ぬとも生きるだらう。あなたはそれを信ずる事が出来るか。

(ハ)「ヨハネ伝のみ」に「ラザロの復活」物語がある。有島がこの物語を重視したのは、三幕劇の構成上どうしても必要であったからである。

第一幕「エルサレム神殿の前の廣場」（これは著者が名付ける。「姦淫の女」）

第二幕「ベタニアのラザロの家」（ラザロの復活）

第三幕「シモンの家」（最後の晩餐）

第一幕で、「姦淫の罪」のため石で殺されるところをイエスに救われたマリヤが、第二幕で愛する兄弟ラザロに死なれる。悲しみのどん底にいる時、イエスが死んだラザロを復活させる。そのイエスが第三幕で十字架の死を覚悟しているのを、マリヤが本能的に知る。香油で葬りの準備をするマリヤに、（私は既に世に勝つた。）という復活を予知される。

このようにマリヤが次第にイエスをキリストと信じて行く心的過程がよく分る。更にどの幕も「死から生へ」という聖書の意図に沿った劇的な構成である。こういうわけで、どうしても「ラザロの復活」物語が第二幕に必要であったのである。尚、聖書では別々の女性だが、三幕劇に共通なマリヤは有島の創作である。

第3位は話題にすること16回の「會計係イスカリオテのニダの裏切り」である。

ヨハネ伝で話題にする回数の上位は、26回「姦淫の女」（7・53～8・11）、18回「ラザロの復活」（11・1～44）、16回「ニダの裏切り」（13・21～30）、10回「神は愛なり」（2・23～3・21）であり、34位までである。第2位「ラザロの復

「活」は戯曲「聖餐」のみに18回台詞が出てくるだけで、日記、書簡、評論では話題になっていない。結局、有島にとって最も関心が深い聖書の中の話は「姦淫の女」と「ユダの裏切り」と言う内容的集計結果を得た。さて本稿は、特に有島のユダ観に注目した論考である。明治三十六年、二十五歳、アメリカ留学中の有島のユダ観には、〈同情〉の念のあるマタイ伝のユダに近いところがあった。その後、聖書を読み続ける中に、ユダを厳しく見つめるヨハネ伝のユダ観に変わって行く。大正八年発表、「聖餐」におけるユダの言動がそれである。有島自身の心に住むユダとの格闘を反映しているように思える。参考のために、正教会、公会、プロテスタント教会から見たイスカリオテのユダ観を紹介しておこう。昭和五十九年二月七日、ニコライ堂の山口義人司祭に、同年三月二十七日、東京カトリック神学院のネメシエギ教授に、質疑しておいたからである。

有島の心には常に裏切者意識が潜在していた。明治三十二年二月、二十一歳の時、一度神を信じキリスト者として生活した人間が、明治四十三年五月、三十二歳の時、独立教会に退会届を提出した。そのことによるキリストに対する後ろめたさのような気持が潜在していた。〈私は基督教會からは離れましたが基督を離れたとは思ひません。〉(竹崎八十雄牧師宛書簡 大正9・3・11 四十二歳) という発言は本音であろう。有産階級に属する有島に対して〈彼はラザロの如く窮迫の極に陥り〉(『リビングストーン傳』明治三十四年三月 二十三歳) というようにルカ伝十九章「金持ちと乞食ラザロ」物語や、〈金持ちが天國に入るのは駱駝が針の目を潜くぐるより難事だ〉(『序』大正八年三月 四十二歳) という共観福音書(マタ19・24、マコ10・25、ルカ18・25)の言葉などは、持てる者の罪意識を抱かせていたのである。このようにキリストに対する後ろめたさ・裏切者意識が、武郎に何らかの償いの行動をさせるのも、リビドー発散として自然であろう。退会後に聖書劇『三部曲』(大正八年十二月 四十一歳)を創作したのも、「有島農場解放」(大正十一年七月十八日 四十四歳)を実行したのも、償いの実践と見ることもできよう。このように裏切者意識をもっていった有島がユダに関心を向けていたのも当然である。入信決意後二年九カ月目の日記には、既にユダについて書いている。〈忽ちに

して弟子の一人は不平を漏らせり「此膏を糜すは何故ぞや。之れを齧がば三百有奇のデナリを得て貧者に施す事を得ん」と（仮名は著者）。列座の弟子は其有理の言に動かされて亦其聲に和しぬ。（明治三十四年十一月二十四日 二十三歳）

更に二年後の明治三十六年九月二十二日、アメリカ留学中、ニューヨークのマンハッタン座で「マグダラのマリヤ」を観劇し、ユダに「最も深く感興を」示している。この劇でのユダは、地上王国を実現しそらもない基督に失望し、マリヤに失恋した腹いせも手伝つて「遂に基督を賣る」という筋である。この際の武郎のユダ観は、マリヤと共に「聖書に於ては例を見ざる二大性格なり」へ余等は必ずやユダに同情の一片を寄せざる能はざる可しである。マタイ伝二十六章五十節では、イエスが裏切ろうとするユダを「友よ」とあわれんだように、この時の武郎のユダ観には「同情」のマタイ伝に近いところがあった。しかし伊豫丸に乗り込んでからも特に「ヨハネ傳の研究」（明治36・8・26）を続けていた武郎は、十六年後の大正八年に発表した「聖餐」におけるユダでは敵しいヨハネ伝のユダに近いユダを描いている。明治三十六年九月二十二日の日記にあるユダに関する記事は「四福音書」に一回として数えておいたが、ヨハネ伝にも入るのでここに引用しておこう。

「此夜は英一兄余を Manhattan 座に伴はんとするなり。Mrs. Fiske と云ふ人「Mary Magdalene」を演じつゝあり。（略）同婦人の Mary Magdalene もざる事ながら、最も深く感興を引きたりしはイスカリオテのユダなり。二人ながら聖書に於ては例を見ざる二大性格なり。此劇に於てはユダがマリヤを戀慕し其戀の成らざりし深刻なる失望に加へ、基督の爲す所己れの理想となせし所と何の關りもあらざりしを見、將又己れが戀の敵なりし一羅馬人が其戀に成功してユダに加ふるに激烈なる罵詈を加ふるに至りて、ユダの心は大に動き非常なる煩悶苦痛に陥り、遂に基督を賣るに至りしまでの経路は誠に畏ろしき許りなりき。余は嘗て伊豫丸の船中に三人の牧師とユダを論じて議大に合はざりし事ありしが、今此の劇を見て余は余の所論の誤れるや否やに拘らず益々其根柢を堅ふせらるゝを覺ゆるな

り。若し此に劇作者ありて基督とユダとの性格を書きしとせよ、而してこれを場に登さんとせよ。余等は必ずやユダに同情の一片を寄せざる能はざる可し。(基督に對する無限の痛惜は勿論の事なり) 而して基督が益々よく描かれユダが愈々よく描かるゝに従ひ、此の度は益々加はる可し。)

以上の日記文中へ今此の劇を見て余は余の所論の誤れるや否やに拘らず益々其根柢を堅ふせらるゝを覺ゆるなり。とあるのは、武郎の聖書劇「聖餐」創作への伏線となつていたと見ることもできる。というわけで有島がユダにいかにも強い関心を抱いていたかは、教会退会後の「聖餐」(大正八年十二月 四十一歳)を見なければならぬ。次の一覽表にある「聖餐」登場人物の「台詞とト書」回数」がそれを示している。

「聖餐」登場人物の「台詞とト書」回数

	合計	第一幕	第二幕	第三幕		
ユ ダ	81	20	19	42	台詞	イ エ ス
	48	15	11	22	ト書	
ヨ ハ ネ	86	4	51	31	台詞	マ リ ヤ
	66	11	27	28	ト書	
ペ テ ロ	42	24	18		台詞	マ ル タ
	26	11	15		ト書	
ヤ コ ブ	25	16	9		台詞	シ モ ン
	18	7	11		ト書	

第三部 増子方式

	合計	第三幕	第二幕	第一幕		合計	第三幕	第二幕	第一幕		合計	第三幕	第二幕	第一幕	
一人の若き男	9	4	5	台詞	パリサイ人の弟子	4	4		台詞	トマス	91	16	45	30	台詞
	5	3	2	ト書		1	1		ト書		27	8	7	12	ト書
一人の男	19		19	台詞	甲	8	6	2	台詞	ラザロ	40	6	30	4	台詞
	1		1	ト書		13	3	10	ト書		19	8	8	3	ト書
男 甲	12		12	台詞	乙	25	12	13	台詞	パリサイ人甲	18	11	2	5	台詞
	3		3	ト書		7	3	4	ト書		10	8	2		ト書
群 集	13		13	台詞	丙	20	9	11	台詞	パリサイ人乙	3	3			台詞
	1		1	ト書		6	2	4	ト書		5	4		1	ト書

合計	第一幕	第二幕	第三幕	合計	第一幕	第二幕	第三幕	合計
1	1	1	1	4	4			台詞
2	2	2	2	1		1		ト書
1	1	1	1	2			2	台詞
1	1	1	1	1		1		ト書
2	2	2	2	5	5			台詞
3	3	3	3	1		1		ト書
1	1	1	1	3	3			台詞
4	4	4	4	2		2		ト書
2	2	2	2	3			3	台詞
				2			2	ト書

イエスとマリヤを主人公とする三幕劇であるが、脇役ユダの台詞が九十一回で一番多いのに注目させられる。イエスの台詞は比較的長いがあるが、それにしても主人公より脇役の台詞の方が多いという戯曲は余り例がない。この事実から逆に、有島が裏切者ユダに強い関心をもっていたと言うべきであろう。有島が描くユダの台詞に共通するのは自己中心の心である。第一幕の神殿の広場では、パリサイ人や市民を相手に、へ天國とは、やがて我が主が知ろし召すユダヤ王國の事なのだ。とか、へ主は正義を尊ぶ方だから、姦淫を犯した女を悪魔の如く責め呪はれるに違ひない。とか語る。第二幕ではマリヤに、へ主は「ラザロは眠つてゐるのだ。これから行つて眼を覺してやらう」とさう少し戯談のやうに仰しやつた。へ主は私達が踊り得るやうな笛の調べをかなでようとはなさらない。とか語り、ヨ

ハネには「私はレプター一枚でも自分勝手に費ひ果した事はない。」と強調している。第三幕では、「天国を先づこの地の上に築かなければ……」とイエスに反対し、ついに同じ弟子たちに「お前達はやがて主とユダとどちらが正しかったかを知るだろう。」と金袋を携えて退場する。このように有島が描くユダは、自分は正しいが主は間違っている、というユダである。

四福音書のユダに関する記事ではヨハネ伝が一番厳しい言葉である。「サタンがユダにはいった。」(ヨハ13・27、ルカ22・3)が一回、「滅びの子」(ヨハ17・12)はヨハネ伝だけである。これに対して共観福音書では「その人は生れなかつた方が、彼のためによかつたであろう。」(マタ26・24、マコ14・21、ルカになし)とあり、マタイ伝に至つては、イエスに接吻したユダに対して「イエスは彼に言われた、「友よ、なんのためにきたのか。」(26・50)と、ユダを、われんでいる。有島はヨハネ伝に傾倒していたので、彼のユダ像も共観福音書よりもヨハネ伝に近いのは当然である。山口義人司祭は、東方正教会ではユダはサタンに滅ぼされた人という見解で一致している、と言われる。

ネメシエギ教授は、西方公教会ではユダについての正式な見解はないが、個人的見解として、二重予定が言う滅びの子としてユダが作られているとは言えない、と言われる。ではあるがバルトのユダ論は少々高く評価し過ぎると思う、とも言われる。

プロテスタント教会のカール・バルトは、ユダの行為こそイエスがキリストであるという真理を証言する実質的役割「引き渡し」を果す、と言う。どこまでも「十二弟子の一人」「神の恵みの選び」のもとに置かれる人物である、と言う(バルト『イスカリオテのユダ』川名勇訳 新教出版)。

16回の「ユダの裏切り」(ヨハネ13・21〜30)に関する記事の中、戯曲「聖餐」での台詞十四回(ユダすべての台詞は91回)、日記は一回であるが、本文中に引用したように、日記文だけで三頁に及んでいる。地上王国を実現しそうもない

基督に失望し、マリヤに失恋した腹いせも手伝つてへ遂に基督を賣る」というマンハッタン座で観劇中のユダに同情していた二十五歳頃の武郎のユダ観には、まだ、甘いところがあった。ユダの心理描写に秀れているのは共観福音書（マタイ、マルコ、ルカ）ではなく、ヨハネ伝なのであるが、四十一歳の時に発表した「聖餐」のユダは、有島自身の心に住むユダを反映しているだけではない。すべての人間がユダのように、裏切者なのであることを暗示していると見るべきであろう。

第4位は話題にすること10回の「神は愛なり」である。入信決意直前、明治三十二年二月十六日、二十一歳の頃からヘクリストの愛は世界萬劫の民を救ふに足る」というように「神は愛なり」の認識はもっていた。四年後の明治三十六年二月五日、二十五歳の時、「羅馬書難解と反パウロ宣言」をする。へ僕はどうしてもポーロよりはヨハネに行き度くなる。僕はヨハネの愛の普遍的なるに感ぜざるを得ない。と云って、ヨハネを通して、「神は愛なり」の信仰を深めていった。一年半後の明治三十七年八月二日、二十六歳の時、「互に愛し合いなさい。」（ヨハ13・34）というへ最後の教訓身に沁むを覺え、へ我れは神の獨り子なり」と云へりし人の子の無上絶對なる自尊を日記に記す。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。」（ヨハ3・16）すなわち、「神は愛なり」（ヨハネ第一の手紙4・8）を一貫して強調するヨハネへの傾倒が武郎に記させているのである。後に「惜みなく愛は奪ふ」という題の評論で反キリスト論を展開したのも、へポーロが「惜しみなく與へ」といつた（「自己」の考察）大正六年 三十九歳）ことを知ってのことである。

明治三十八年十一月、二十七歳の時、ワシントン国会図書館で北欧文学、特にイブセン文学を耽読した。その後も、二元分裂に悩んでいた武郎にとって、へ飽く迄も「All or Nothing」といふ一元的の精神（「イブセン研究」大正九年四十二歳）のブランドの生き方は、何か他人のものと思えなかつたのである。パウロに対決し、妻と性の交わりを半

年も断った（序）というような徹底した武郎の生き方と、妥協を排したブランドの生き方とは共通点があった。神のため、母、妻、一人息子をも犠牲にし、ついに大雪崩でブランドが遭難した時、「神は愛なり」の聲、（註）「神は愛なり」の言葉は彼の死と關聯して、何かしら深く考へしむるのである。（註）「イブセン研究（四十二歳）」と高評しているからである。

第5位は話題にすること9回の「生れながらの盲人のいやし」（9・1と41）である。明治三十二年三月十六日、二十一歳の時から明治三十六年二月十二日、三月一日、九月六日、そして明治三十七年七月二十一日の二十六歳の時まで、五年間に5回も日記で話題にして書いている。（註）「此夜約翰傳の第九章を讀む。讀み去りて無限の感慨なき能はず。」（明32・3・16）と三頁にわたって九章（盲人のいやし）について書いたのは、明治三十二年二月二十日、定山溪で入信決意して一カ月後の二十一歳の時である。特に四十一節には注目している。（註）「基督が最後に發したる一言は、實にパリサイ人を驚倒せしめて永遠に吾人を驚醒するものなり。曰く、Jesus said unto them, If ye were blind, ye should have no sin: but now ye say, We see; therefore your sin remaineth.」四十一節に「（註）は更に五年後、米國フランクフォードのフレンド派の精神病院で看護夫として働いている時にも書いてある。患者の取り扱いにも心ない米國の看護人から「ジャップ」と嘲弄されていた頃でもあるから、（註）「余は心より基督の“（註） If you were blind, ye should have no sin: but now ye say, We see; therefore your sin remaineth.”」云ひ給ひし語を味ひ知りぬ。」（明37・7・21）という言葉には真実味がある。有島が5回も日記で話題にした九章には「イエスがどろをつくって彼の目をあげたのは、安息日であった。」（十四節）、「パリサイ人たちが言った、「その人は神からきた人ではない。安息日を守っていないのだから。」（十六節）」というように、イエスの「安息日の労働」の記事が

ある。三カ月後の明治三十七年十月頃から社会主義者・金子喜一と邂逅しており、労働問題にも新たに関心を示し始めていたのである。しかし入信決意直後に「然ど今われら見と申しに因て爾曹の罪は存れり」(9・41)というイエスの言葉を重視していたのはキリスト者として好ましい心構えであると言えよう。何故ならネメシエギ教授も次のように解説しているからである。

無知の人、無信仰の人よりもむしろ、知識人、倫理学者、宗教家たちの方が「見える」という罪を犯しやすいからである。すなわち潜在意識の中で本当のものが「見えない」、自分が「正しくない」と知っているのに、自分の立場と意見を合理化し、自分の精神を安定させようとするからである。

「見える」と言い張る」パリサイ人の罪を、武郎は入信決意直後の二十一歳の時から心に刻んでおいたので、十六年後の大正四年、「サムソンとデリラ」(未定稿 三十七歳)で「サムソンの眼睛が輝いた時には心は盲目だった。醜く盲目になつた時、サムソンの心の眼はエホバの御心をも讀む事が出来る。」という台詞をサムソンに言わしめ得たのである。この台詞に近い言葉は士師記にはない。四年後の大正八年の定稿で、サムソンのこの台詞を一部書き替え、同じ大正八年十二月に発表した『三部曲』(著作集第十輯「大洪水の前」「サムソンとデリラ」「聖餐」を収録)の中の「聖餐」では、金持ちの青年に答えるイエスの台詞として、△自分の眼がよく見えると思ふ人は、どうかすると瞽盲よりも憐れな盲目な事がある。▽と書いている。武郎が日記と戯曲に九章「盲人のいやし」に関する言葉を書き得たのは、「見える」と言い張る」パリサイ人の罪を指摘するイエスの言葉が一貫して心に生きていたからであると言えよう。

第6位は話題にすること9回の「創造者ロゴス」である。明治三十五年十二月三十一日の日記で、二十四歳の武郎は△彼の靴の緒をヨハネだに解き且つ結ぶ事を得ず▽とバプテスマのヨハネ(1・27)に言及し、明治三十六年三月三日、二十五歳になり、△約翰傳の第一章を衷心より理解し得るものは幸なるかな。▽と言って△既に幾度か此章を讀み

へそが何を意味するかをも略知する事を得たり。と自負している。伊豫丸で米國への航海中の八月二十八日にも「ヨハネ傳の第一章を讀んでゐる。十二年後の大正四(一九一五)年、三十七歳の武郎は、「宣言」(初出 千九百十二年十月十日)で、AとY子との恋の芽ばえを「僕は創造に着手せんとする神のやうな自由と昂奮とを感じる。」と書いてゐる。ヨハネ伝一章三節「すべてのものは、これよつてできた。」あたりの影響が文に反映してゐると思われる。確かにこの辺までは第一章を衷心より理解し得るものは幸なるかな。余は實に此境遇に達せん事を希ふ。(明36・3・3)という氣持が心の中にあつた。ところが大正九年六月、四十二歳の時に「私が今までに達し得た思想の絶頂です。」(著作集第十一輯「書後」という「惜みなく愛は奪ふ」一章には、冒頭から「太初に道があつたか 行があつたか、私はそれ
を知らない。」という書き出しがある。明らかに反キリスト教の立場に変わつてゐることを示している。しかも一章の中に三度もこの書き方がある。

このよつた書き方をした第一要因は武郎が米國留学以來、キリスト教に反抗するようになったためである。八月露戰争の勃發と共に突然に起り來つた問題は基督教國對異教國のそれだつた。(略)私の學んでゐた學校の同窓が日本の勝報を得る毎に投げてくれる賞讀はいゝが、その背後には小犬が大犬に勝つたのを面白がるやうな下心の潜むのを見て、私はこの上なく不愉快に思つた。(略)私の若い友人の一人がプロテスタント教の道德は資本主義の道德だと呼んだその言葉は、確かに打つべき金砧を打つてゐると私は思つた。今行はれてゐる基督教ならば——而して信仰ある人々にはさうだと斷言してゐる——私はその信徒たる事を考へ直さねばならぬと思ふやうになつた。(「序」)というよつた、米國一般のプロテスタント教徒に失望し、キリスト教そのものに反抗するよつたになつてゐたからである。(一方、ヨーロッパのカトリック教会の芸術作品には引かれてゐるのだが。)

第二要因はゲーテの「ファウスト」を讀んでゐたからである。歐米留学時代から東京に出で、後は、「Faust」と「Sorrow of Werther」を繰り返して讀むを以て樂みとなし、(明39・12・10)ていた。「ファウスト」第一部「書齋」

の中でファウストは、「太初はじめに言ことばありき」「太初はじめに意こころありき」「太初はじめに力ちからありき」を経て、ついに「太初はじめに行おこないありき」と書くに至って安心している。このところをヨハネ伝の好きな武郎が〈繰り返し讀む〉ことで熟知していたからである。

第三要因は欧米留学時代、社会主義思想に強い関心を抱くようになったからである。明治三十七、三十八年とアメリカ社会民主党に加盟している社会主義者・金子喜一から直接影響を受け、明治三十八年一月八日、〈Bostonにて Engels の “Utopian to Socialism” (『空想から科学への社会主義の発展』著者注) 及び Karl Kautsky の “The Socialist Republic” (『社会主義共和国』) を買〉、前者を〈Socialism の内的發展を叙して精細なり。〉と高評し、明治四十年二月、ロンドン郊外にクロボトキンを訪い、帰国後、明治四十一年一月から札幌で、社会主義研究会に臨んでいる。〈日露戦争によって基督教國民 (プロテスタントの米國民 著者注) の裏面を見せられた。〉(序) 武郎にとって、教会が説く「道ちよ」などではなく、社会主義者が強調する実際の「行おこない」こそが重要なのだという考えを当然もつに至っていたからである。

ロゴス (Logos) とはヘレニズム的に解釈するならば、理性の声、内在する精神であり、ヘブライズム的に解釈するならば、神の自意識、発言である。ヘブライ語の「言葉」 דָבָר (davar) には、incident 「出来事」という意味もある。すなわち「存在のすべてが真理」という意味である。「太初に行ありき」について大山定一氏は「ファウストは、神は永遠に生成するものであり、神の实体はそれゆえ行為であると考えた。」と注を入れている(世界文学大系19「ゲーテ」筑摩 32頁)。すると「ファウスト」にある「太初に行ありき」はヘブライズムの解釈に少し類似していると言えよう。「惜みなく愛は奪ふ」四章で〈私〉に對立する〈外界〉という二つの極の名稱を〈歐洲の思潮ではヘブライズムとヘレニズムの名で〉と言っているが、武郎が〈太初はじめに道ちよがあつたか行おこないがあつたか、私はそれを知らない。〉と冒頭に書いた時、ロゴスにヘブライズム的とヘレニズム的と二通りの解釈があることを知って書いているのかどう

か定かではない。

第7位は話題にすること9回の「ベテスタの池で盲人を治す、安息日問答」(5・1と18)である。「ベテスタでのいやし」の話はヨハネ伝だけである。この話は四十一歳の時に発表した「聖餐」第一幕に出ている。聖書では「三十八年のあいだ、病気に悩んでいる人」(5・5)をイエスがいやすのであるが、有島は「病氣」を「警告」に置き換えている。「聖餐」でもこの話の重要点は、「いやし」そのものより「安息日の労働」についての甲、乙二人の台詞にある。

〈甲——安息日に働いてならぬといふのはこのユダヤの國の堅い御法度だ。それをイエス様が平氣でお破りになつたからいけなかつたのだ。〉

〈乙——けれどもあの時イエスは何んと仰やつた。「わが父なる神は今に至るまで働き給ふのだ。だから私も働くのだ」と仰しやつた。〉

有島が「安息日の労働」に注目するようになったのは、「安息日にもまた主なのである。」(マルコ2・28)という聖書本来の意味を重視していたからというよりも、欧米留学以来痛感していた教会の無力と矛盾に対する反動として、社会主義への傾倒があつたからである。四十四歳の時に発表した「静思」を讀んで倉田氏に「では、キリストは實際にへ直接行動を敢てしてゐる例として書いている。へ又安息日が無意味に、而して多分貧乏な百姓達の生活の脅かしになるやうにのみ守られてゐるのを見出した時、「神は働き給ふ。我も亦働くなり。」といつて、麥畑から平氣で穂を取つて喰ひました。こゝにも彼は直接行動を敢てしてゐます。このやうに安息日でも働くキリストは、有島にとつて次のやうな人物に思えるのである。へ彼は怒れる民衆の一人として、又指導者として權力に依頼してゐます。へ基督は決して時代を超越した理想的理想主義者ではなくして、同時にきびしく現實に即し、その思想を現實の問題に對して、現實の方法によつて闘はした人であつたことを思はせませす。このやうに見てくると、10位のへカナの婚宴に水酒と

化しぬ、奇蹟も、11位の〈蠅を以つて宮殿に糞喰つた商人達を撃退〉する行動も、すべて〈即實主義者〉〈直接行動〉〈行〉の人としての有島のキリスト観が正当であることを実証しているようにも思えてくるのである。⁽¹⁾

第8位は話題にすること8回の「弟子の足を洗う」(13・1—20)である。入信決意後二年半、明治三十四年十一月二十四日の日記で、〈基督の死近づきぬ。(略)彼は「世に在りし己れの民を既に愛し、終りに至るまで之を愛し給ひ」たればなり。〉と書いている。二十四日の書き出しは〈馬可傳(十四章)三節。「ある婦」——ベタニヤのマリヤ〉についてであり、引用文はマルコ伝の〈四節以下。〉とあるが、文そのものはマルコ伝ではなくヨハネ伝十三章一節である。武郎が混同して書いているのであるが、「弟子の足を洗う」話の最初のところである。更に三年後の明治三十七年七月二十日、看護夫として働いている時の日記で、〈余は Moore と云へる一患者を入浴せしめたり。(略)我が主なる神なる基督は、名もなき漁夫や税吏やの足を洗ひ給へり。〉と書いている。武郎は〈余は彼を浴槽に導き其瘦せたる體軀を見て先づ同情動き、母の其兒に對する心を以て丁寧親切に彼を洗〉っているのである。マタイ伝二十章二十八節では「人の子がきたのも、仕えられたるためではなく、仕えるためであり、」とあり、ルカ伝二十二章二十七節では「わたしはあなたがたの中で、給仕をする者のようにしている。」とあり、ヨハネ伝十三章では具体的に「弟子の足を洗う」行為でイエスが範を示している。ヨハネ伝を愛読する武郎も患者の体を洗う体験を踏まえながら〈基督は、名もなき漁夫や税吏やの足を洗ひ給へり。〉と日記に書いた。

「弟子の足を洗う」話は、ヨハネ伝だけにあるのだが、さすがにヨハネに傾倒する有島だけに十五年後の「聖餐」(大正八年(一九一九年)四十一歳)で反映させている。すなわち、第三幕「シモンの家」では十九行にわたり、イエス、ペテロ、シモン、ユダの台詞で「足を洗う」場面を描出している。〈私はあなた方の脚を洗つた。私のした事をあなた方も互の間にし合つて貰ひたい。〉(13・14 15に準ずる)と有島がイエスの言葉を戯曲に書いた時、二十六歳であった十

五年前に患者の「瘦せたる體軀」を洗った体験を回想したに違いない。そしてこの体験とヨハネ伝だけにある「弟子の足を洗う」イエスの言葉とが結び付いているのである。

第9位は話題にすること8回の「イエスは父に至る道」(14・11)である。まだ入信決意後一年足らずの時、アフリカの大探険家であり博愛の大伝道家であるリビンググストンの生涯を伝える『リビンググストン傳』(ブレイキー著)を発見、信仰生活を励まされ感激した武郎は森本と協力して翻訳することにした。それが明治三十四年三月、二十三歳の時、警醒社から出版した『リビンググストン傳』であり、札幌時代の記念碑となる。その中の第七章六十三節で「余の名によりて希ふものには其誰なるを問はず之に與ふ可し」と云へり、というヨハネ伝十四章十三、十四節の言葉を見出し出している。十五年後、大正五年八月三日、三十八歳の時の日記にも「約翰傳十四、八」とある。十四章八節は「ピリポはイエスに言った、「主よ、わたしたちに父を示して下さい。そうして下さい。わたしたちは満足します。」である。この十四章八節に似た言葉は三年後の大正八年十二月、四十一歳の時に発表した「聖餐」第三幕でペテロの台詞として出ている。「主よ、私達に天の父を知らせて下さい。」この台詞は聖書ではピリポの言葉に相当するが、十二使徒の誰が尋ねても不都合な言葉ではないと有島は判断し、使徒代表格であるペテロに「聖餐」で最後の彼の台詞として言わせているのである。この場面でのイエスの台詞は、「ユダの去りし後不安の氣食堂に滿つ。」時、イエスが語る「訣別の説教」(十四、十五、十六章 間垣洋助)と言われるところである。キリスト者にとつて重要な説教であり、その中心は「イエス——私がその道だ。私に由らなければ父の許に行く事は出来まい。」(14・6)である。二十三歳の入信決意直後の時期に『リビンググストン傳』の中から「余の名によりて希ふものには其誰なるを問はず之に與ふ可し」(14・13)の言葉を発見して以来、「イエスは父に至る道」であるという信仰があるからこそ十八年後であっても、有島は6回にわたり、イエス、トマス、ペテロの台詞でこの場面を劇化して書き得たのであろう。

「だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことはできない。」(14・6)というイエスの言葉を本気で有島が戯曲に書いているなら、教会から離れていてもイエスから離れているわけではないことになるろう。

第10位は話題にすること6回の「カナの婚筈」(2・11~12)である。ヨハネ伝だけにある話である。有島にとって救い主イエスは、文字通り「即實主義者」(直接行動)の人であった。第5位「盲人を治す」、第11位「商人を縄で撃退」と同じ、実際に行動するイエスである。

母マリヤはイエスから「婦人よ、あなたは、わたしと、なんの係わりがありませんか。」(2・4)と、一見、拒絶されているにもかかわらず、やんとイエスを信じていた。それで僕たちに「このかたが、あなたがたに言いつけることは、なんでもして下さい。」(2・5)と命じておいた。実際、信じていた通りイエスは、水を酒に変えるという初めての奇蹟を行っている。

有島は、困っている人々のために必要な酒を与えるというイエスの実践に注目しているのである。確かにイエスは「主よ、主よ」と言っているだけでなく、父のみ旨を果す人である(マタイ7・21)。有島がイエスを特に「即實主義者」(「行」の人と見るようになったのは、主に欧米留学時代、明治三十七年暮頃、社会主義者・金子喜一との邂逅、明治四十年二月、ロンドンでのクロボトキン訪問以後である。「内部生活の現象」(大正三年 三十六歳)「リビングストン傳」の序)(大正八年 四十一歳)で「カナの婚筈」を話題にする時は、(有島から見れば「偏靈主義」のパウロを攻撃する格好の話題でもあるのだが)常に実際に困っている人を実物で救うイエスの行動に注目しているのである。

しかし明治三十四年十、十一、十二月と内村鑑三が主宰する『聖書之研究』に掲載した「札幌獨立教會」の中にある「カナの婚宴」に関する文章は、クラーク氏を語った後であるが、砂漠に水がしみ込むような、人手の入らない北海道の大自然に純粹な福音が拡まるような、偏見のない二十三歳の武郎の若々しい心が読みとれる。同じ「カナの婚

宴」を語るにも、入信直後と欧米留学以後では、かくも読み方が違ってくるのである。引用しておこう。

カナの婚宴に厨裡人の知らざる所水酒と化しぬ、奇跡は水へに我等に新意義を興ふるなり、日本の所謂社會なる者が泰西の文明を吸収すると稱し、華麗輕浮なる表面的進歩にのみ眩暈して風に追ひ廻さるる粗殼の如く盲奔せる間に、莊嚴なる檜樹を有し、純潔なる白雪を有し、宏莊なる平野を有し、沈痛なる夕陽を有し、幽邃なる森林を有し、清冽なる河流を有する北海の一隅には、無味の清水主の御手によりて、芳醇なる美酒と化しつゝありしなり。

第11位は話題にすること6回の「神殿から商人を追ひ出す」(2・13と22)である。「解放神学」の神父たちが共鳴しそうなところである。〈即實主義者〉〈直接行動〉〈行〉の人として有島のキリスト観は、晩年の四十四、四十五歳頃に形成されたものである。第7位「安息日問答」(「神は働き給ふ。我も亦働くなり。」、第10位「カナの婚筵」(必要な酒を与える)と同じく、晩年の有島のキリスト観を表わしているところである。しかし一見、時と事情によってはイエスも暴力を肯定していると誤解されやすいところを、有島が強調していること自体、教会の矛盾に対する反動として、社会主義への傾倒が始っていたことを示しているところと言えよう。「右の頬を打つなら、ほかの頬をも向けてやりなさい。」(マタイ5・39、ルカ6・29)というのがイエスの非暴力の態度である。イエスが「両替人の金を散らし、その台をひっくりかえし」(ヨハネ2・15)たことは、「父の家を商売の家とするな」(ヨハネ2・16)と言うための象徴的な出来事であつて、暴力そのものを肯定しているのではない。晩年の評論「静思」を讀んで倉田氏に「即實の生活」では、前述の通り、共に〈基督がリアリズムの立場にあつて〉単なる理想主義者ではなかつたことを強調している。これらの熱っぽい評論は「日記」の中のキリスト論に次ぎ、小説の中のそれよりも確かに重みがある。

第12位は話題にすること6回の「世に勝つイエズス」(16・25と33)である。四福音書を参考資料にした三幕ものの

聖書劇が「聖餐」である。第三幕「シモンの家」で、イエスの最後から二番目の台詞にある男性的な言葉へ私は既に世に勝つた。は、ヨハネ伝だけに、ある言葉である(16・33)。捕縛直前に弟子に語る最後のこの言葉は、既に復活を暗示している重要な言葉であることを有島も充分に認識していたのであろう。戯曲の最後はマリヤの台詞で、その中にも「世に勝つたとは、つぎ、仰しやつたイエス様が……」と独白させている。「或る女のグリンプス」(十二)の田鶴子と「或る女」(一一)の葉子も、△「我れ既に世に勝てり」と心で絶叫するが、ここでは産声を聞く母性の勝ち誇りとして、△思はず幼時から習ひ覺えた聖書の▽「或る女のグリンプス」言葉として引用している。

第13位は話題にすること5回の「ベタニアで香油を注がれる」(12・118)である。高価な香油を注ぐ女は、ベタニアのらい病人シモンの家にいる「ひとりの女」(マタイ26・6、マルコ14・3)、ベタニアにいるラザロの姉妹である妹の「マリヤ」(ヨハネ11・12、12・123、ルカ10・39)、「その町で罪の女であったもの」(ルカ7・3637)の三人である。「罪の女」とは、「七つの悪霊を追い出してもらったマグダラと呼ばれるマリヤ」(ルカ8・2)と同一人物と見做す説もある。以上の四人に関しての定説はないが、現代の聖書学では、文字通り四人別の女性としている。働きの姉のマルタに比べ、妹のマリヤはじつと「御言に聞き入って」(ルカ10・39)いる。一見、行動的ではない。一方、マグダラのマリヤは、イエスの十字架上の死を遠くで見えており(マタイ27・56、マルコ15・40、ルカ23・49、ヨハネ19・25)、復活のイエスに最初に出会っている(マタイ28・1、マルコ16・9、ルカ24・10、ヨハネ20・118)ように行動的な女である。「聖餐」で高価な香油を注ぐ女も、有島が好きな行動的で情熱的なマグダラのマリヤなのである。同時に、イエスを愛し信ずるが故に、イエスの「御言に聞き入って」(ルカ10・39)るために姉のマルタからヘイエス様、妹に少し働くやうに仰しやつて下さいまし。▽(第三幕、ルカ10・40)と言われる女も、マグダラのマリヤなのである。このような解釈は思想家芸術家有島の自由な創作力によってしているのである。デリラがサムソンに言い寄る台詞の中にもヘナルド

の香油でこの髪を櫛り、▽(「サムソンとデリラ」第二幕)とある。有島の意識の中にある女性像が、早月葉子、デリラ、マグダラのマリヤのように罪深く愛に燃える女性であることは、ここでも明らかに言えることである。内容別順位、第1位「姦淫の女」と同じ女性が、第13位の「香油を注ぐ女」なのである。

第14位は話題にすること5回の「裏切られ、逮捕され、審問」(18・11・19・16)である。第12位で話題にした「私は既に世に勝つた」▽に続いてイエスは語る。〈さあこれからケデロンの河を渡つてゲツセマネの園の方に散歩に行かう。私が待ち設けられてある所に行かう。▽(ヨハネ18・1に準ずる)マリヤがすぐへ私達兄弟のものもお連れなさいまし。〉と願うが、イエスは「私達の行く所はあなたの方の行くべき所ではない。イエスはあなた方を永く覚えてゐよう。あなた方の上に天の父の祝福を。▽と「祝福を與へたる後竊かに弟子達と共に退場」(ト書)次の場面は有島の創作であり聖書にはない。イエスが退場した後、マリヤは「イエス様のお命が……▽と心配するが、シモン、ラザロ、マルタらは笑つて取り合わない、という場面がそれである。

さてイエスは弟子たちと「ケデロンの谷の向こうへ行かれた。」(ヨハネ18・1)が、ヨハネ伝だけはゲツセマネの園での血と汗の祈りの場面を敢えて避けている。「聖餐」でも「ゲツセマネの園の方に散歩に行かう。▽までであつて、血と汗の祈りの場面までは扱っていないが、イエスの内面的苦悩は描出している。例えばラザロの台詞で「さう云へばイエス様の今夜のお言葉には淋しい響きがあつた」▽と言わせているのがその一例である。とは言うものの、世の権力者側の人々の妬みと憎しみを一身に受け、誠の人間として恐怖を感じつつ、神からの最大の使命を果す前のイエスの内面的苦悩は、いかなる芸術家と言えども、適確に描出し表現し得ないものであろう。

第15位は話題にすること4回の「イエスに関する証」(5・30・47)の中の四十四節「爾曹は互に人の榮を受けて神

より出づる榮を受けざる者なるに争でよく信ずる事を得んや。である。有島の生涯で最もよく聖書を読み、信仰のよき戦いを続けたのは、明治三十六年、二十五歳の頃である。明治三十六年の日記には、元旦から始まって四回もこの句を引用し、次のように感動を記している。〈願くは此強き言葉を鞭として我が骨の骨を咎ち給へ。〉(元旦)、四十四節への句が胸に泌み入る。〈二月十五日〉、四十四節へなるヨハネ傳の句に到る。余は慄然として震ひぬ。汝健忘の徒よ、幾度此句を忘れんとするや。〈三月六日〉、四十四節へと云へる章に讀み到りて思はず疎然たりき。是れ本年の元旦に聖書が余に教へし大教訓なり。〈九月一日〉。神の言葉を讀みながら、その声を聞かず、この世第一、自分第一の人間にならないよう、自分を戒しめているところである。若々しいキリスト者の日記文ではある。

第16位は日記で話題にすること4回の「ヨハネ伝全体」である。実際にはヨハネ伝を中心にヨハネ文書(ヨハネ伝、ヨハネ第一の手紙、ヨハネ第二の手紙、ヨハネ第三の手紙、ヨハネ黙示録)と言う方が正確なので、第16位で論ずるのではなく、第1位の前の「ヨハネ伝を中心にヨハネ文書に惚れ込んだわけ」四点で既に詳しく論じてある。ここでは日記から有島が一貫してヨハネ文書を勉強していたことを見ておこう。明治三十六年二月五日に続き、二十日後、再度の「反パウロ・親ヨハネ宣言」がある。〈哥林多前書九章を讀み、二十四節以下に到り、云ふ可からざる不快の念に打たれて思はず鉛筆もて其文を塗抹しぬ。(略)我は此點に於てはホーロを離れてヨハネに到らん。ヨハネ、ヨハネ、汝の想の何ぞ高くして清き。汝の宗教は感激の宗教なり。(略)「夫れ我儕が聞き又眼に見、懇切に觀、我が手捫りし所のもの即ち元初より在りし生命の道を爾等に傳ふ」(ヨハネ第一の手紙1・1 著者注)、此の感激なり。〉(36・2・25) 二日後には「昨日から聖書はヨハネの書を精讀し初めた。僕は充分にヨハネに學ばうと思ふ。〉(36・2・27)と書き、六ヶ月後、米國留学途上の時も「余は此航海の間をヨハネ傳の研究に用ゐんとす。幸にして多くの牧師あり、知識を求むるに於て便宜ある可し。〉(36・8・26)と勉学の意欲に燃えており、一年後、フランクフォードのフレンド

派の精神病院で看護夫として働いている時もへ余は聖書の中ヨハネ傳を規則正しく読み居れり。▽(37・7・20)とあるように、着実にヨハネ文書を勉強していることが分る。尚、ネメシエギ教授の次のようなコメントを参考のために紹介しておこう。「ハンガリー語で「海の日」とは静けさ、湖、山奥を暗示し、ヨハネの神秘性を象徴する言葉である。一方、パウロには激しい川が相当している。」

第17位は話題にすること4回の「最後の教訓」(13・31・38)である。題名は「新しい掟」と言ってもよい。旧約からの引用ではなく、イエスは自分の言葉で、「我なんぢらを愛する如く……」と言っているところに注意しよう。山口司祭はヨハネ伝の中でもへ爾曹は互に人の榮を受けて神より出づる榮を受けざる者なるに争でよく信ずる事を得んや。▽(5・44)とへ我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし▽(13・34)の二カ所は重要であると指摘する。有島は五章四十四節を日記で4回(第15位)、十三章三十四節を日記に3回も引用し、感動を次のように記している。へ嘗て地上に現はれ出でし何人かよく基督のに等しき權威を以て「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云ひ得しものありや。▽(36・3・22)、へ朝、約翰傳を讀み「我爾曹を愛する如く爾曹も相愛すべし」と云へる句を再び見出して約翰の崇高の着眼の今更なるに敬服しぬ。▽(36・3・25)、へヨハネ書の中基督が弟子に對して爲されたる最後の教訓身に泌むを覺ゆ。こは實にヨハネ書の特徴なり。▽(37・8・2)このように、有島は、重要なところは適確に読み取っている、ということが分る。

第18位は話題にすること4回の「サマリヤの女」(4・1・42)である。まず米國への航海中での日記の中で、サマリヤの女と富める青年の大きな対照を述べている。ニコルのへ基督傳を讀み、基督の教訓と云へる章に於て、基督が教訓の模範として一は井戸のほとりにありしサマリヤの女、一は基督に來りし富める青年を見て大に感じぬ。是れ實

により対照なり。▽(36・8・31) ここでへ是れ實により対照なり。▽に気付いていることは、有島の聖書の読み方が正しいと評してよいと思われる。すなわちふしだらなことから、夫を五人もかえた女であっても「わたしは、キリストと呼ばれるメシヤがこられることを知っています。」(4・25)と最後はイエスの言うことを聞くようになる。一方、富める青年は「持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そして、わたしに従ってきなさい」。この言葉を聞いて、青年は悲しみながら立ち去った。(マタイ19・22) すなわちイエスの言うことを聞かないのである。この二つの話は、正にへ是れ實により対照なり。▽とすることができよう。「或る女のグリンブス」(明治四十四)と「或る女」(大正八)の内田の言葉に△基督に水をやつたサマリヤの女の事も思ふから……とあるが、サマリヤの女を論じたものとしては、晩年の評論「即實の生活」(大正十二・一)の中の次の文章がある。△基督は此支配階級と結んで居る商人等を見て、繩の鞭にて追ひ出したのである。又サドカイやハリサイの人などに對する基督の態度は皆現在に即しての批判である。サマリヤの女に對する時でもさうである。あの時の基督の言葉(ヨハネ4・18 著者注)は決して現實を離れて云つたのではない。今日の婦人が何等の許すべき事情なくして他に夫を造つたりしても、別に死刑にはならない。基督は之れ等のものを許すべきものとした。▽社会主義と労働運動に関心を抱いた晩年の有島は即實主義を重視した。墮落した僧侶と結託した商人を繩の鞭で追ひ出したキリストは、有島にとって、単なる理想主義者であるのではなく即實主義者であると言うのである。へあの時の基督の言葉▽を引用しよう。「夫がないと言つたのは、もつともだ。あなたには五人の夫があつたが、今のはあなたの方ではない。あなたの言葉のとおりである。」(4・17-18) 間垣洋助氏の注解によれば、イエスのこの言葉は女の罪(女がかんばしからぬことから、五人も夫をかえたこと)を指摘し、その心をしんかんせしめたのである(『ヨハネ福音書』聖文舎 55頁)。以後、女は心を開かれ、イエスの証人となるのである。有島が最も好む話「姦淫の女」を許すのと同じ理由で、へ基督は之れ等のものを許すべきものとした。▽と有島は解釈しているのである。ここでネメシエギ教授の見解を紹介しておこう。

サマリヤの女は三重の差別を受けている。①ユダヤ人はサマリヤ人と交渉せず差別していた。②当ても男性優位社会であり女性は差別されていた。③姦淫の人は石で打ち殺される時代、夫から離縁状をつきつけられて次々と夫を代えていくという女だから社会から圧力を受け差別されている。以上のように三重の差別を受けているどん底の女は、このままでは迷える羊の一匹として滅んでしまおう。それでイエスは姦淫の女を許したと同じ気持ちでイエスの方から言葉をかけているのである。

第19位は話題にすること4回の「ギリシヤ人、イエスに會いに來る」(12・20と36)である。題名は「一粒の麦、十字架上の死の予告」と言ってもよい。武郎は『新約全書 詩篇附』(明治三十四年八月發行 大日本聖書館)を明治三十六年八月七日に購入し、明治四十一年九月十五日、婚約中の安子に贈っている(「有島武郎が使用した『新約全書』」)。その『新約全書』ヨハネ伝十二章二十三節から二十八節までの前後に、武郎は「」印を付けている。その中で「一粒の麥もし地に落ちて死すば……」(12・24)の句は、十字架上の死と復活を意味する重要な句である、ということを知るが故に印を付けているのである。武郎が二十五歳から三十歳の間のことである。次に妻安子臨終の記録である「終焉日記」(筑摩全集 第十二卷 大正五年八月三日には「約翰傳十二、一三三 約翰傳十四、八 哥林多前十三、詩篇二三」)とある。有島が三十八歳の時である。この中でヨハネ伝十二章二十三節は「イエス彼等に答へて曰けるは人の子榮を受べき時いたれり」であり、十字架上で死に復活することを弟子たちに示しているところである。有島がヨハネ伝十二章二十三節を記したわけは、安子の死もやがて復活の栄光であれと祈る気持ちからであろう。かつて婚約中の安子に贈った聖書に、武郎自身が「」印を付けたところでもある。その後、四十一歳の時の「聖餐」第二幕では、イエス「一粒の麥が地に落されて死ねばこそ」、マリヤ「一度死ななければ人は神の國に生れ出る事が出来ない」という台詞で二十四節を生かしている。

第20位は話題にすること4回の「ピラトの尋問」(18・28・38)である。山口義人司祭は、イエスに「真理とは何か」と尋ねることで、逆に尋ねる人の真価が問われる、と言う。すなわちピラトはイエスが真理その者であることを知らないことを白状しているのである。明治三十三年、二十二歳の武郎は初期の評論「人生の歸趣」の中で「彼等は屢々眞理に逢着してこれを捨て去りぬ。」と既に適正な読み方しているので引用してみよう。〈昔者ピラト傲然として眞理其の者に「眞理とは如何なる者ぞ」と問ひぬ。今や理想に燃ゆべき青年の間にすら眞理とは一種の閑文字となりたり。「彼等目に見、心に悟り、改めて匿^{かく}さるゝを得ざらんが爲めに、其の目を昏^{めくら}にし、其の心を強硬にせり。」然り彼等は屢々眞理に逢着してこれを捨て去りぬ。公開の大演説ありて密室の默想なく、人の前に恭敬の貌を爲して神の前に不禮の致を極む。〉若々しい文章である。十年後の明治四十三年、武郎三十二歳の時、イブセンの同名の作品の紹介「ブランド」(初稿二十六)の中で「ピラトが基督に對し、傲然として「眞理とは何ぞや」と問ふて以來、眞理は彼等に取^とりて永久の謎話となりき。」と書いている。更に九年後の大正八年、四十一歳の時には「眞理とや、眞理とは何ぞや」と反問して以來、……と改稿している。そして三年後の大正十一年、四十四歳の有島は評論「靜思」を讀んで倉田氏に「の中で、倉田百三と眞理論争を展開している。その時の反論の一部に次のような文章がある。〈或はいふかも知れませんが。成程その實行的尺度はその實際問題に關する範圍に於ての眞理であるかも知れないが、それは斷じて眞理そのものではないと。私はさう主張する人があるとしたらもう口を噤^{つぶ}む外はないのです。私としてはその言葉は詭辯としてより響いて來ないからです。ピラトが「眞理とは何ぞや」と尋ねた時、基督は呆れて答をしなかつたと聞かされてゐます。私が若しこの場合「眞理そのものとは何ぞや」と反問したら、私も亦呆れられるかも知れません。然し私はピラトではありません。而して呆れる人も基督でないのは確かです。〉以上のように「ピラトの尋問」に對する有島の読み方は、ほぼ適正であると言えよう。ここでネメシエギ教授のピラトについての見方を紹介しておこう。

「真理とは何か」とは懷疑主義の言葉であり、当時のローマ上流社会の人たちの気持であった。ピラトがもしイエスを許すと、一般民衆からピラトはティベリウス皇帝に忠実でないと告げ口される。それが怖い。自分の政治的生命を保つためには、政治犯でないイエスを、民衆が言う通り十字架に付けるのにまかせるのが得策であった。ピラトにとって、イエスは何か夢見る理想家に見えたのである。

第21位は話題にすること4回の「トマスも信じる」(20・24・29)である。共観福音書では十二使徒任命の時だけに記されているが、ヨハネ伝では四カ所に現われている(11・16、14・5、20・24・28、21・2)。有島はトマスには注目している。ヨハネ伝を愛読していた結果であるが、性格上、共通するところがあるからである。有島は敬愛する詩人ホイトマンと同じように、自分をローファー(Lodger)、〈獨り行くもの〉と自認していた。ローファーとは〈放蕩者〉と言うより〈習慣的に専門の目的なく總てのものを同情を以て見ることの出来る者〉と言う意味である。キリストは〈偉大なローファー〉であり、トマスもローファーであると言う。それでは晩年の評論「獨り行くもの」(大正十一年四十四歳)から引用しよう。ヘキリストは當時の有産階級に属しない獨り行くローファーであった。そして終には十字架にさへつけられたのである。後に残った十二人の使徒は堅く團結してその教を盛にしようとした。唯その中に一人のローファーのゐた事を忘れてはならない。それはキリストの再臨を信じなかつたトマスであった。彼はキリストの眞精神が制度化される事に反對した。獨り行くものであつた。この中で、〈一人のローファー〉がいた、〈それはキリストの再臨を信じなかつたトマスであつた。〉とあるが、これは「トマスは彼らに言った、「わたしは、その手に釘あとを見、わたしの指をその釘あとにさし入れ、また、わたしの手をそのわきにさし入れてみなければ、決して信じない」。(20・25)あたりを根拠に言っているのである。復活、再臨など信じない。実際に「奇蹟を見せてくれ」(「一切か無か」大正八)と言うトマスである。更にトマスはイエスから「わたしがどこへ行くのか、その道はあなたがたに

わかつてゐる。」と言われたのに対して、「どうしてその道がわかるでしょう。」(14・5)と尋ねている。このところは「聖餐」第三幕のトマスの台詞では「私には主の行かれる所が何處だかその道さへ知りません。」となつてゐる。このようなトマスは理性的、実証的に理解しようとする性格であると言えよう。思想家有島は理論的思考を得意としていたことと通じるところがあるのである。山口義人司祭はトマスを「普通の人、現代人」と評している。しかし又、一方では情熱的な性格を見せてゐる。イエスがベタニヤヘラザロを復活させに行く時、トマスは「わたしはちも行って、先生と一緒に死のうではないか。」(11・16)と仲間語に語つてゐる。このようなところはベテロと似ている性格であると言えよう。そして芸術家有島も情熱の人であつた。さて、復活を信じなかつたトマスがイエスから「手をのばしてわたしのわきにさし入れてみなさい。」(20・27)と言われ、「わが主よ、わが神よ。」(20・28)「神を信ずるものは幸なり」(「死と其の前後」大正六)と復活のイエスを信ずるには、大きな飛躍を要したはずである(木下順治『新聖書大辞典』キリスト新聞社)。有島がトマスに注目したのは、自分と同じローファーと見做したからであるが、トマスへはキリストの眞精神が制度化される事に反対した。獨り行くものであつた。と言ふのは有島の推測的解釈であつて、聖書に直接この解釈を生み出させる言葉はない。しかしローファーには物事を本質的に把握するという姿勢のあることが「獨り行くもの」から読みとれるので、有島のこの解釈も正当であると言えよう。ただ有島はキリストをへ一箇の偉大なローファーだと思ふ。と評しているが、キリストは単に「獨り行くもの」ではない。「わたしはひとりであるのではない。父がわたしと一緒におられるのである。」(ヨハネ16・32)と言ふように、心は常に父と共に歩む人である。

総括

以上、第1位「姦淫の女」から第21位の「トマスも信じる」まで、有島のヨハネ伝の読み方全体を見てきた。山口

義人司祭が第三点目で指摘しているように、有島は「自分とかかわりあるところから入り、忠実に心に響いたところを書き出し、よく読んでいゝ」と言えよう。しかし、人間、イエスを強調することと（山口司祭第二点指摘）、ヨハネ的神秘的一致を示す言葉を見落すこととは（ネメシエギ教授第二点指摘）、同じ読み方の姿勢からくる結果であり、有島の読み方の欠陥であると言えよう。すなわち、イエスを神の子と見ることより、イエスが非常に不思議な言動をした（「我も爾を罪せず」、水を酒に変える、縄で商人を撃退、盲人を治す）という人間イエスの面を強調することと、「父よ、それは、あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、みんなの者が一つとなるためでありませう。」（17・21）という、内なるキリスト、相互内在、ヨハネ的神秘的一致を示す十七章の言葉が全然ないということは、同じ読み方の姿勢からくる結果であると言えよう。「聖餐」の「私を見たものは父を見たのだ」へ「天の父は常に私と共に」（14・9 10 11）がこれに近いのだが。

清教徒の流れをくむ札幌バンド出身の有島は、教会の伝統的典礼儀式を余り重視はしていなかった。米國から伊太利への船中の日記には「カソリックとか所謂正教的キリスト教は、過去の事である。」（明治39・9・11）と言っている。果せるかな有島のヨハネ伝の読み方にはミサ（聖体機密→聖餐）がない。パンとぶどう酒が司祭の祈りと聖霊の働きによってキリストの肉と血に聖変化するというミサがない（ヨハネ6・53と57）。戯曲「聖餐」は題名が聖餐であるのに、最後の晩餐（マタイ26・21と30、マルコ14・18と26、ルカ22・14と23、一コリント11・23 24 25、ヨハネ伝にはない）という台詞はあるが、聖餐らしくパンが出てくるのは第三幕での「裏切りの予告」（マタ26・20と25、マコ14・17と21、ルカ22・21 22 23、ヨハ13・21と30）の次のような場面だけである。

イエス——（一同に向ひ）私はこれまであなた方と麩麩を分ち合つて食つて来たが、さうして麩麩を分ち合つてゐる人の中に、私を敵に賣り渡さうとするものがある。

弟子の中に驚きの色。弟子達互に不安げに物云ひ交^かせる暇に、イエス麴麩をさきてユダに與ふ。マリヤそれを見て豫覺を得たる如く顔色を變ず。

ヨハネ——(ペテロに何か囁かれ、イエスに向ひ) 主よ、それは誰ですか。

イエス——私と麴麩を分ち合つて食ふもの一人だ、(ユダに向ひ) さあ、あなたはこれから行つてあなたのすべき事をして來たらいいだらう。

この場面はパンは出てくるが聖餐の場面ではない。「聖餐」に直接の聖餐場面がないのは、共観福音書よりヨハネ伝を参考にして創作した戯曲であることにもよるが、聖餐をほとんどやらない有島の教会生活が根本原因である。ミサがないことは既に、山口義人司祭、ネメシエギ教授、両氏から共に第一点目として指摘されているところである。これも有島の読み方の欠陥ではある。しかし有島が活躍した明治三十年代から大正期と言えば、まだ神学的基盤の固まらない日本のプロテスタントキリスト教界であつた。特に、札幌独立基督教会では、明治三十四年三月七日、洗礼、晩餐、廃止決定。有島は同年三月二十四日に入会している。廃止決定後の独立教会では、会員有志が自由に説教を担当しているという状況である(「札幌独立基督教会晩会前と聖書」。今日、プロテスタント教会でも、教会一致運動と関連して、聖餐の重要性が見直されてきている現状である。プロテスタント教会の中にも、有島より九歳若い大崎教会の逢坂元吉郎(明治二十年「二八七年」昭和二十年「一九四五年」)が、既に昭和十五年に、「聖餐論」を著し、「聖餐は聖礼典中の聖礼典である。」「聖餐のない教会は言葉だけであつて、使徒伝承の生命がない。」と重要性を強調している(逢坂元吉郎著作集 上・中巻 新教出版社 昭和五十四年 470頁)。ミサこそ機密の中の機密と言うのであるが、残念ながら有島との面識はなかつた。筑摩書房の全集第十四卷(書簡二)を昭和六十年七月二日にやつと入手した。第十四卷中の聖書の言葉は「サタンよさがれ」(マタイ4・10、16・23。大正12・3・24 唐澤秀子宛)一カ所であり、「有島武郎と聖書」回数別順位」一覧表

にはほとんど影響がない。第十四巻中には、有島がユダに深い関心を抱いていることを示す記述が四通の書簡の中に認められる（大正8・12・24、大島経男宛、大正9・1・17、竹崎八十雄宛、大正9・1・19、吹田順助宛、大正9・3・11、竹崎八十雄宛）。吹田順助宛の書簡では、「聖餐」は「少くとももう一幕を加へ、マリヤを表面に置いて其生活を明らかに同時に其幕にユダを點出してユダの心持ちも同時に表現しなければならなかつたものだと思ひます。」とあり、脇役ユダに注目する構想を述べている。本稿の最初に、有島がヨハネ伝に惚れ込んだわけの第四点目に、有島自身に裏切者意識があり、ユダの心理描写に秀れているのはヨハネ伝であるからである、と論じてあるが、第四点目を論証するための新資料として書簡中のこれ等の記述も貴重なものとなる、と言えよう。

(1) 今日、ラテンアメリカなどに拡まっている解放神学では、貧しい人々を現実はこの世で経済的にも救済することを第一としていと言う。この考え方は大正初期からの日本の社会主義思潮と通じるところがあり、もし当時に解放神学があったとして有島が知っていたならば、その主張に共鳴したことであろう。

(2) 「父から出て父に戻る」ことを共観福音書以上にヨハネは不思議に強調しているのであるが、まずこの点を意識的に強調した後、ヨハネだけが伝える「弟子の足を洗う」話に入るのである。

第三章 有島武郎と創世記

はじめに

拙論「有島武郎とヨハネ伝」(立教大学『キリスト教学』26号 一九八四年)発表当時は、まだ筑摩書房全集14、15巻と別巻が未刊であった。一九八八年に全集が完結したので、再度、調査した結果を発表することにした。「有島武郎とヨハネ伝」の中の「有島武郎と聖書」回数別順位」では、第1位ヨハネ伝191回、第2位創世記177回、第3位マタイ伝166回、第4位ルカ伝98回、第5位士師記91回と続いていた。今回の調査で第1位創世記247回、第2位ヨハネ伝192回、第3位マタイ伝180回、第4位ルカ伝106回、第5位士師記92回、というように首位が逆転したのである。そのわけは、三幕劇未定稿「洪水の前」を教に入れてなかったからであるが、未定稿だけで55回と意外に回数が多く出たために、首位逆転となったのである。有島を最も感動させた聖書は、ずばり、第2位のヨハネ伝であることに変わりはない。しかし統計的ではあるが、話題にした回数が247回である首位創世記については、その内容を研究発表しなければならぬ。今回も東西教会の立場から、貴重な指摘と意見を受けることができた。一九八九年四月四日、東京カトリック神学院のネメシエギ教授に、同年四月七日、日本ハリストス正教会(ニコライ堂)の山口義人司祭に、それぞれ主に「内容別順位」について質疑する機会があり、意見、指摘、感想をノートすることができた。誤記による誤解があったな

らば、当然すべて著者の責任である。

一九八五年三月五日、『キリスト教学』26号の合評会（立教大学にて）の席上、速水敏彦教授に、「有島武郎とヨハネ伝」の中の内容別順位」に含まれる著作品回数について検討するよう指摘を受けた。同じ1回でも日記、小説、戯曲ではそれぞれ重みが異なるからである。立教大学心理統計学の石井 巖教授を紹介され、一九八九年四月五日、著作品の重みを点数表記するための参考意見を伺うことができた。有島文学の分る人、聖書の分る人を教会員、学生達からサンプリングとアンケートに協力してもらって得た基礎資料をもとに、著者が総合的に最終判断して内容別順位を決定した。その際、1回につき、日記、書簡は10点、評論、感想、初期文集は6点、小説は3点、戯曲、パイロソメモは1点、という点数で重みを表わすことを決定した。有島が話題にする創世記の全回数は247回であるが、その中、未定稿三幕劇「洪水の前」が55回、定稿四幕劇「大洪水の前」が84回、洪水の戯曲だけで139回と過半数に達している。

有島が「洪水の前」を発表したのは大正五年一月、三十八歳の時であったが、創作のためのヒントは、既に十四年前の二十四歳、明治三十五年頃、内村鑑三主筆『聖書之研究』創刊号（明治三十三年九月）から約三年間同誌に連載された「洪水以前記」を熟読しながら得ていた。〈余は『聖書之研究』に投書すべき「札幌獨立教會」の草稿を訂正し（明治35・11・15）たり、〈『聖書之研究』を讀んでゐる様子が日記に散見しており（明治36・2・14、15、3・1、4・4、5・15、8・4）、森本厚吉へと共に内村氏を訪へ、〈Resurrection〉贖罪の教理（明治36・7・22）について質疑したり、米國留學中でさえ、ポストンではへ田島君より送り來し『聖書之研究』を讀む、先生の熱誠には敬服の外なし。〉（明治38・1・1）と聖書研究を続けている。さて「洪水以前記」の「善悪二子の裔」「長寿時代」（4・16）5・32）には有島が創作のため注目しそうな注解が続出している。

アダは「裝飾」、チラは「影」の義なり。悪人「掠奪者」レメク、その妻の一人なるアダによりヤバルを生めり。殺伐的牧畜業の開始者ヤバルの弟にユバルあり。ヤバルは性兇猛、ユバルは性情弱、琴と笛とに憂悶をやらんとせり。チラに二子あり。一人をトバルカイン、彼は刃物武器の発見者。妹のナアマ、これは「愛嬌」の意なり。セツ、「代用」の意なり。アベルに代わって正道をこの世に伝うべきもの。レメクにノア生まる。「安息」の意なり。

続いて「ノアの洪水」(6・118・14)にも有島が凝視しそうな注解が続いている。

神の子は、彼の神と人に対する重責を忘れ、俗人の娘をめぐりて妻とせり。これに子を生ましめて、ネピリムに類する勇士をもうくるを得たり。神はいかでか彼に失望したまわざるを得んや。ネピリムは女子は美人にして男子は巨人、腐敗漢、墮落腕力家なり。

以上は参考にしたと思われる内村の聖書注解(教文館『内村鑑三聖書注解全集』第一巻四〇〇頁より引用)の一例であるが、雄大な全人類史的戯曲「洪水の前」「大洪水の前」のヒロイン・ナアマをネピリムとし、へ到来すべき思潮を代表させた(足助素一宛書簡1916・1・8)理想の青年ヤベテを主人公とし、二人の純愛を悲劇に終らせる構想も既に二十四歳の有島の心に練られていたと推察されるのである。その際、有島は父の裸を見たハムではなく、見なかったセムとヤベテの中、「神はヤベテを大いならしめ」(9・27)に注目して、ヤベテを主人公に決めた。更に、人類史と世界史上の事実を考慮してヤベテを主人公にしたと考えられる。

それではまず「有島武郎全集と創世記一覧表」(日記を除く)を示すと、次の(1)番から(22)番までである。次に「観想録(日記)と創世記」1番から25番までの表を示す。続いて「有島武郎と創世記」中の内容別順位を総計247回を集約して示すと次の通りである。尚、内容別順位の総回数は247回から295回と増している。そのわけは例えば、一覧表177番はヘチラとナアマであるが、順位2位25回(同内容番号の数)ヘチラ第二の妻、トバルカイン、ナアマの項と順位5位16回(同内容番号の数)へ女は天使をすら試みようとしている、ネピリムの項との両方に1回として数えられて

第三部 増子方式

6	5	4	3	2	1	番順
23	23	23	23	23	23	年齢
札幌獨立教會	八 リビングストーン傳	八 リビングストーン傳	八 リビングストーン傳	三の二十七 リビングストーン傳	一 リビングストーン傳	著作名
一九〇一年	明治34年10月			一九〇一年	明治34年3月	発表年月日
						新潮巻・頁・行
1・299・1920	1・218・6	1・217・1415	1・217・13	129・2 1・128・17	1・76・1	築摩巻・頁・行
2 2・7、5	4 1・112	3・1113	2・1617	22・114	1・2627 (5・12)	章・節
命の下にはアダムたり得るなり	見よ一杯の粘土も神の給ひし地球は	神が人類の爲めに設け	人類の墮落は到底救治す可きにあらず	捧ぐ エデンの樂園は此世にあらず	等しく神の顯身 (shek inah) なりとせば、 アブラハムが、其子ヤコブ (イサクの間違い。著者注) を犠牲として	要約原文 聖書語句
218 219	10 11 22 25 35 121 209 216	217 107 114 115 122 124 163 173 174	20 21 26 29 36 64 100 102	75 97 172 214 221	25 178 209 210 222	同内容番号

いるからである。それで実順位14位の「二覧表」順番に1717と連記してあるのである。

有島武郎全集と創世記一覽表

7	8	9	10	11	12	13
25	26	26	26	26	26	26
草いきれ	日本文明の發展 (譯)一の一	Development of Japanese Civil- ization I-I	日本文明の發展 (譯)一の二	Development of Japanese Civil- ization I-II	日本文明の發展 (譯)一の三	Development of Japanese Civil- ization I-III
明治36年7月 一九〇三年	明治37年6月 一九〇四年					
1・533・12						
1・351・12	1・615下・17	1・608上・10	1・619上・4	1・604下・25	1・619下・12	1・603下・23
3・16・19	3・7	3・7	2・7	2・7	10・6・20	10・6・20
農場を樂園と思ひ、余 はアダムの如く働き彼 女はイヴの如く アダムとイヴが腰のま わりを無花果の葉で隠 すこと the first task was to gather fig leaves around their loins. エデンの園ではアダム は永遠にひとりのアダ ムのままいた In the garden of Eden, Adam would have remained fore- ever as an Adam, 遊牧民の一部族がエジ プトに定住してハム族 文明を生み出し One branch of these migrating nomads settled in Egypt to produce the Hamit- ic civilization.	27 71 88 89 92 99 103 104	168	9 33 64 111 168	8 33 64 111 168	6 11 22 25 35 121 209 216	6 10 22 25 35 121 209 216

第三部 増子方式

19	18	17	16	15	14
26	26	26	26	26	26
Development of Japanese Civilization II-III	日本文明の發展 (譯) 二の三	Development of Japanese Civilization I-III	日本文明の發展 (譯) 一の三	Development of Japanese Civilization I-III	日本文明の發展 (譯) 一の三
1・589・16・17	1・628上・29 下・1	1・603・26・27	17 1・619下・16	26 1・603・24・25	1・619下・13 14 15
11・1・9	11・1・9	5 27 10 9 18	5 27 10 9 32 6	10 21 31	10 21 31
the Babylonian built the tower of Babel, the scattering of the people (Genesis, Chap. XI),	バビロニア人がベベルの塔を建て、民族が四散した(創世記十一章)	the Aryans proper (Indo-European, Ja- phetic),	the most prominent race of Aryans was the Aryans proper (Indo-European, Ja- phetic),	Babylon and in Arabia to create the Semitic civilization	他の部族はバビロンとアラビアにとどまつてセム族文明をつくつた
18 30 31 96 116 118 211	19 30 31 96 116 118 211	208 16 59 94 130 158 187 201 205	208 17 59 94 130 158 187 201 205	14 93	15 93

28	27	26	25	24	23	22	21	20
33	33	33	32	32	31	30	26	26
北歐文學が與ふる 教訓	北歐文學が與ふる 教訓	北歐文學が與ふる 教訓	も一度二つの道一 に就て	二つの道 八	ブランド(初稿) 十九	日記より 八	Development of Japanese Civil- ization V-I	日本文明の發展 (譯)五の一
		一九一一年	明治43年8月 一九一〇年	明治43年5月 一九一〇年	明治42年12月 一九〇九年	明治41年6月 一九〇八年		
5・500・45	11	5・489・910	5・122・5	5・115・1	1・446・8	1・395・1819	1・559・910	8
1・514・1213	505・2	1・504・9	7・16・6	7・8・14	19・26	2・7	2・1617・3	1・647上・7
24 26 28	19・117	23 3・171819	2・1617・3 ・7	1・2627・2	19・26	19・26	2・1617・3 ・123	2・1617・3
近き にあり	ゴモラの如くならん時	既存の文明がソドム、 ムの末裔野に立てり。 腕と額とに汗せしはア ダムなりき。今もアダ ムはイヴなりき	實に先づ智慧を求めし の末に至るまで	アダムの初めより我々 ふ	其の人はロトの妻の如 く鹽の柱となつて仕舞 減びん	躊躇するものは立ちに 我れ汝を創り	forbidden fruits to the Japanese, the Japanese, 我れ汝を創り	「どうして」は、日本人 にとつて禁斷の木の實 であつた
23 24 119	168	7 217 107 4 218 107 4 71 218 114 20 219 111 11 88 220 115 21 122 29 22 89 122 29 22 121 121 92 124 36 35 163 64 99 163 64 173 100 103 173 100 174 102 104 174 102	218 219	6 10 11 11 22 35 121 209 216	23 28 28 119	24 218 6 217 28 219 10 218 11 220 119 25 35 121 209 216	217 107 4 217 107 4 218 114 20 218 114 21 220 26 220 115 26 122 29 122 29 122 29 35 124 36 163 64 173 100 174 102	107 4 217 107 4 114 20 218 114 21 220 26 220 115 26 122 29 122 29 122 29 35 124 36 163 64 173 100 174 102

第三部 増子方式

37	36	35	34	33	32	31	30	29
37	37	37	37	37	37	36	36	34
サムソンとデリラ 二	サムソンとデリラ 一	サムソンとデリラ 一	サムソンとデリラ (未定稿、二幕劇)	宣言(初出)	宣言(初出)	内部生活の現象	内部生活の現象	裏なる人の叫べる
			大正4年9月 一九一五年	一九一五年	大正4年7月 12月	大正3年7月 叢文閣全集	大正3年7、8 月 小樽新聞	大正元年12月 一九一二年
						5・218・3		
8	2・424・7	416・1	2・419・2	2・408・1	13	2・553上・12	11	7・340上・2
	1・123	2・1617、3	2・415、19	3・16		2・553上・10	18	3・1116
1・123		6	419・2	3・7		2・23	11・119	1320
与えられたその光	エホバが天地を創造し 給うた時第一に呼び醒 されたその光	だ	エバは美しい智慧の果 を取つて醜い罪を生ん だ	アダムがやうに自由に 育つた	神婦に言ひたまひける は我大に汝の懐妊の働 勞を増すべし	僕は裸かで創られた事 を知つて居る	益々高くバベルの塔を 登りつめて行くのだ	弱き小さき頑ななるイ ブの末裔よ
5	217	107	4	218	120	8	18	115
123	218	114	20	219		9	19	122
215	220	115	21	11		64	30	124
		122	26	22		111	96	163
		124	29	25		168	116	173
		163	64	121			118	100
		173	100	209			118	174
		174	102	216			211	217
								218
								114

第三章 有島武郎と創世記

46	45	44	43	42	41	40	39	38
38	38	38	38	38	38	38	37	37
洪水の前 一	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前 (未定稿、三幕劇)	足助素一宛書簡 二	サムソンとデリラ
						一九一六年	大正四年十二月十七日 一九一五年元旦	
12	4	15 16	8 9	5 6	2 4	2 2	13 4	2 4
2・430・10・11	2・430・2・3	2・429・13・14	2・429・7	2・429・3・4	2・429・2	2・429・1	13・342上・18	2・426・3
8・4	4・19・22	21 4・18 19 20	7・13 ・18 ・27	6・9・10・9 5・28 ・32	4 4・16 ・8	5・1 ・17 ・32	6・11 ・9	32・30
聳ゆる、方舟、くアララット山の空に	者、ナアマ、アララット山の麓、遠	者、ユバルⅡ琴笛の人	ノアの妻、セムの妻、ハムの妻	セム、ハム、ヤベテ	地方アララット山の麓	エデンの園の東ノドの	ノアの洪水前を題材とした	エホバを見るものは死ぬのだ
206	41 177 80	91 128 220	53 58	198 200	53 54	137 213	67 117 127 136	135 106 212
	183 184 136 141 151 198 205	140 61 62 77 81 83 85	198 202 204 216 217 218 219	153 180 183 185 189 193 194 195	138			

63	62	61	60	59	58	57	56	55
38	38	38	38	38	38	38	38	38
洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前
一	一	一	一	一	一	一	一	一

16	2 437 15	4	2 437 3	2 436 19	2 436 9	2 436 6	2 435 7	14	2 434 13	2	2 434 1	17	2 433 16	
	6 2		4 22	4 19 22	6 1 4	18、 5、 6、 32、 9	4 19 22		6 1 4	13 14	6 9 11 12		6 1 2 4	
戯れる時節に	天の使さへ人間の女に	名人だ	ンに歸れ兄は劍を造る	ナアマ、兄トバルカイ	メクの娘だけあるな	成程二人の妻を持つレ	るよ(ネ、ピリム)	どんな罪でも犯かさせ	あの娘の美しさは男に	子だ	ノア。お前は私の末の	せた娘ではないか	ナアマ、レメクの生ま	いゝ位だ
					159 162 170 175 177 179 181	55 57 63 73 76 131 154 156	130 158 187			159 162 170 175 177 179 181	55 60 63 73 76 131 154 156	132 155 190	159 162 170 175 177 179 181 156	

第三部 増子方式

71	70	69	68	67	66	65	64
38	38	38	38	38	38	38	38
洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前	洪水の前
—	—	—	—	—	—	—	—
2 ・ 439 16 17	2 ・ 439 15 16	2 ・ 439 15	2 ・ 439 14	2 ・ 439 13 14	2 ・ 439 12 13	10 2 ・ 439 6 }	6 2 ・ 439 5
3 ・ 17 19	6 ・ 5 6 7	3 ・ 23	29 5 ・ 1 3 }	4 ・ 12 16	29 5 ・ 1 3 }	4 ・ 25	13 23 3 ・ 4 }
活きる	粘土に還る事を忘れな	望も起すやうになつた	人の子は罪も作れば非	を逐はれてから、	アダム、エバがエデン	セツの族の主だ	私はセツから九代目の
168	7 27 88 89 92 99 103 104	74 192 216 167 217 171	64 98 102 108 109 163 166 182	51 66 129 147 165	41 117 127 136	51 68 129 147 165	192 69 98 102 108 109 163 166 182
	いで土にしがみ附いて			に住む	カインは流離人 <small>（すずらひびと）</small> とな	セツが私共の遠つ親に	アダムとエバ、智慧の
				り、エデンの東、ノド	當るのだ	吸う	果を食ひ、裸を恥ぢ、
						弟を殺す、大地が血を	エデンの園から逐ひや
						燔祭を顧み給ふので、	れた
						カインは主がアベルの	

79	78	77	76	75	74	73	72
38	38	38	38	38	38	38	38
洪水の前 二	洪水の前 一	洪水の前 一	洪水の前 一	洪水の前 一	洪水の前 一	洪水の前 一	洪水の前 一

2 ・ 443 ・ 15	18	2 ・ 443 ・ 9 17	2 ・ 440 ・ 14	2 ・ 440 ・ 12 13	2 ・ 440 ・ 3	2 ・ 440 ・ 1	2 ・ 439 ・ 18 19	2 ・ 439 ・ 17 18	
7 ・ 4 11	4 ・ 21	4 ・ 19 22	6 ・ 4	2 ・ 7 24	6 ・ 6 7	6 ・ 1 2 4	3 ・ 22		
がい ム	は	ユバル、美しい貴方の 樂は心を躍らせてくれ ます、ナアマの兄の樂	あれはレメクの娘です (ネピリム)	使の胤で生れた女だ	ナアマを見る、屹度天 れる所に生れるのだ	知らない前のやうに忘 だ	幸福は、智慧の味を、 するの無理のない事 だ	エホバの憤りが段々嵩 勝れた女を生み廣めた とは思へぬ程の勇士や 女は天使を迷はし、人 て居る	智慧の果をもう一度嘗 めよう程の非望を抱い て居る
47 52 87 134 142 148 151					3 97 172 214 221	70 150 167 171	159 162 170 175 177 179 181	55 57 60 63 76 131 154 156	169

第三部 増子方式

87	86	85	84	83	82	81	80
38	38	38	38	38	38	38	38
洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二

453 14	2 450 13、	2 450 1 2	449 4	2 448 2 3	447 1 2 6	2 446 16	13	2 445 9 1	2 445 17 18	2 445 11 12	2 444 12												
	7 4 10	4 8	4 21 22	4 22 24	4 20 21 22	4 20 21 22		4 20 21 22	4 23 24	4 22	8 4												
六日間私は食はず眠らず六日の間このあたり	さぬとは限らぬぞ	トバルカインは妹を殺	カインは弟を殺した、	カイン立琴と笛とかな	剣の血の叫び、トバル	て受けよう、母チラ、	の呪ひを七十七倍にし	劍をさし出す、カイン	マ、アダ	だ、弟ユバル、妹ナア	つてお前と俺を生んだ、	二人の妻は、父上によ	れよ	四つレメク凡ての呪の	数に七十七倍して呪は	とってお出でよす	を造るのを何の爲めだ	トバルカインが劍や槍	山見えらる	樹間に遠くアララット			
	47	216	49			82	177	91	45					84							206	41	
	52	217	65			128	183	128	53					128								46	
	79	218	112			194	184	140	58					194								90	
	134	219	126			197	186	152	61					197								136	
	142	220	145				188	157	62													141	
	148		149				189	160	77													151	
	151		164				191	161	81													188	
			196				213	176	85													205	

	95	94	93	92	91	90	89	88			
	38	38	38	38	38	38	38	38			
	足助素一宛書簡	洪水の前 三	洪水の前 三	洪水の前 三	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 二			
日	大正5年1月8 一九一六年										
217・1	8・216 11										
と15	13・404 下・4	2・458 ・16	2・458 ・15 16	459・6 2・456 ・8 9	2・455 ・3 4	2・454 ・13	2・454 ・11	453・6 2・451 ・10、			
	4と10章	5 27、10・2	10、9・18	5・32、6・	10・6と31	3・19	4・22	8・4	3・19	3・19	
態度、思潮の暗示	ナアマに對してセム、ハム、ヤベテが取つた	この世はお前(ヤベテ)を待ち望んで居るのだ、	外に	セムとハムとの子孫の	櫓で泳ぎよる醜い頭を土塊のやうに打ちくだけ、滅び行く土塊よ	母のチラを	アララット山の方にわだかまつた雲は	私の母は土塊です	過ぎませぬ	私はやがて土に歸ります私はいやしい土塊に	をさまよひ歩いた
		208	16 17 59 130 158 187 201 205	12 13			168	7 27 71 88 92 99 103 104	168	7 27 71 89 92 99 103 104	

第三部 増子方式

103	102	101	100	99	98	97	96
39	39	39	39	38	38	38	38
ミレ ー 禮 讚	ミレ ー 禮 讚	ミレ ー 禮 讚	ミレ ー 禮 讚	「聖書」 の 權 威	「聖書」 の 權 威	松 壘	首 途 (初出)
			一九一七年	大正六年三月	一九一六年	大正五年八月 一九一六年	大正五年三月 一九一六年
5 ・ 267 ・ 7	18 5 ・ 266 ・ 17	5 ・ 266 ・ 17	5 ・ 266 ・ 15	5 ・ 241 ・ 13 14	5 ・ 241 ・ 13	5 ・ 539 ・ 15	
7 ・ 132 ・ 16	9 7 ・ 132 ・ 8	7 ・ 132 ・ 8	7 ・ 132 ・ 6	2 7 ・ 350 上 ・ 1	7 ・ 349 下 ・ 18 350 上 ・ 1	1 2 別 卷 336 下 ・	3 ・ 347 下 ・ 18
3 ・ 19	24 1 ・ 13 17 23	3 章 (3 ・	9 ・ 1 7	3 ・ 1 ・ 6	3 ・ 17 19	3 ・ 23 2 ・ 8 ・ 15	11 ・ 1 ・ 9
つて と命じた神の宣告を守 アダムは「汝の額の汗 によってパンを喰へ」 よって	したのも彼女だ アダム樂園から逐ひ出 アダム樂園から逐ひ出 の多産者となる を繋ぐ時、恐るべき力 彼女がアダムとの交渉		いたからだ イヴがアダムを出し抜 ぬ生活が待つて居ます 自ら額に汗せねばなら ません	樂園に歸ることは出来 ません	樂園を出たアダムは又 樂園に歸ることは出来 ません	この園が見られる こう云う時にこそエデ ン園が散つた く摧け散つた	パベルの塔よりもろ く摧け散つた
168 7 27 71 88 89 92 99 104			220 115 122 124 163 173 174 217 218	4 26 29 36 64 102 107 114	168 7 27 71 88 89 92 103 104	192 64 216 217 219 220 102 108 109 163 166 182	18 19 30 31 116 118 211

111	110	109	108	107	106	105	104
39	39	39	37	39	39	39	39
宣言	宣言	宣言	宣言(初出)	死と其の前後	足助素一宛書簡	ミレー禮讃	ミレー禮讃
		一九一七年 大正六年12月	一九一五年 大正四年7月12日	一九一七年 大正六年5月	一九一七年 大正六年4月12日		
1・139・10・11	10	1・139・9	1・77・14	4・59・10	8・254・16	5・267・9	8
381・1	2	2・380・18	2・321・11	3・25・1	13・475下・	7・132・18	17
	3	2	3	2・1617・3	6・11・9	2・18・23	3
	7	23	23	1・1・13	17	17	17
僕は裸かで創り出された事を知ってる	だ	僕は、神の攝理によつてアダムがエバを見たやうに、彼女を見たの	苦悶が心をさいなむ	樂園を逐はれたアダムのやうな焦燥な苦悶が心をさいなむ	樂園を逐はれたアダムのやうな焦燥な苦悶が心をさいなむ	「大洪水前」の批評を末光に聞いた時答へなかつた	人間の御先祖のアダムとイヴとが罪を犯して神様にお叛き申し
8 9 33 64 163	32 105 209	192 216 217 219 220	64 69 98 102 108 163 166 182	217 218 220	102 114 115 122 124 163 173 174	39 212	32 110 209

第三部 増子方式

120	119	118	117	116	115	114	113	112
41	41	41	41	40	40	40	40	40
サムソンとデリラ (定稿)	ブランド(改稿)	藝術論	自己を描出したに 外ならない「カイ ンの末裔」	魂は私に告げる (内部生活の現象)	大なる健全性へ	迷路五	迷路五	迷路二
一九一九年	一九一九年	一九一九年	一九一九年	大正七年十一月	大正七年八月 一九一八年	大正七年八月	一九一八年	大正七年六月
4・159・2	5・22・5・6	6・17・11・12	7・425上・5	15・565・3	5・360・10・11	1・382・10	11	1・359・4
5・58・1	7・284・15	15・589上・2	67	11・1・9	7・212・12・13	3・265・3	7	3・242・12
3・16	19・26	11・1・9	4・14	11・1・9	2・16・17、3	3・1・2・3	39・6・23	4・1・8
は我れ大に汝の懐妊の	神婦に言ひたまひける ころに滅びん	益々高く、バベルの塔に 昇つて行く	視 ^み 汝 ^み 汝 ^み 今日 ^み 斯 ^み 地の ^み 面 ^み よ り我 ^み を ^み 逐 ^み 出し ^み 流 ^み 離 ^み 子 ^み 、 我 ^み を ^み 殺 ^み さん	益々高く、バベルの塔 をのぼりつめて行くの だ	アダムとイヴとが智慧 の果についてなしたや うに	禁断の木の果を敵同志 の内から盗み取るのだ	てヨセフがしたやうな 潔い態度を取るべき時	彼は罪の思ひ出にのみ 生きるカインのやうに パロ(ポテパルの間違 い。著者注)の妻に對し
34	23 24 28		41 67 127 136	18 217 19 218 30 31 96 118 211	20 4 20 21 26 29 36 64 100	20 21 115		216 49 65 86 126 145 149 164 196

129	128	127	126	125	124	123	122	121
41	41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前 (定稿、四幕劇)	聖餐	サムソンとデリラ 三	サムソンとデリラ 二	サムソンとデリラ 二
				大正8年12月 一九一九年	大正8年10月31日 一九一九年			
4・105・12	11 4・105・7 ゝ	4・105・5・6	4・105・4	4・105・2・3	4・213・17	4・202・4・5	4・187・7・8	4・191・4
5・6・11	10 5・6・6 ゝ	5・6・4・5	5・6・3	5・6・1・2	5・113・11	5・100・16・17	5・86・8	5・90・1
5・3	4 19 ゝ 24	4・16・17	4・8	4・1・2	13 20 3・1 ゝ 6	1・1・2・3	13 20 3・1 ゝ 6	2・4 ゝ 15
アダム百三十歳に子をあらん	り。……七十七倍の罰	クと名けたり。	地に住めり。……エノ	エデンの東なるノドの	せり。	カイン其弟アベルを殺	めり	アダムその妻エバを知る。……弟アベルを生
51 66 68 129 147 165	82 84 194 197	41 67 117 136	216 217 218 219 220	49 65 86 112 145 149 164 196		5 37 215	220 114 115 124 26 29 163 36 173 64 174 100 217 102 218 107	6 10 11 22 25 35 209 216

第三部 増子方式

138	137	136	135	134	133	132	131	130
41	41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前
4 106 13 14	11 12	4 106 9 10	4 106 7	4 106 2 3	4 106 2	106 1	4 105 15 15	4 105 14 15
5 7 8 9	6 7	5 7 4 5	5 7 2	5 6 17 18	5 6 17	17	5 6 15 16	5 6 14 15
7 13	6 9 10 9	5 28 32	4 16 8	5 1 32	7 4	1	6 11 14	6 1 2
ノアの妻、セムの妻、 ベテ	首長、セム、ハム、ヤ	ノア 敬虔なるセツ族	地方アララツト山の麓	エデンの園の東ノドの	二百二十五年目の二月	アダム生れてより七千	らん	らしめ、萬有を拭去
43	42 213	41 67 117 127	40	47 52 79 87 142 148 151	47 52 79 87 142 148 151	47 52 79 87 142 148 151	56 155 190	55 159 162 170 175 177 179 181
								59 158 187
								生み其名をセツと名けたり
								ノア、セム、ハム、ヤ
								ベテを生めり
								神の子等人の女子の美
								しきを見て……妻とな
								せり。
								時に世神のまへに亂れ
								て……汝の爲めに方舟
								を造り……
								汝と汝の家皆方舟に入
								るべし。
								四十日四十夜地に雨ふ
								らしめ、萬有を拭去
								らん
								アダム生れてより七千
								二百二十五年目の二月
								エデンの園の東ノドの
								地方アララツト山の麓
								ノア 敬虔なるセツ族
								首長、セム、ハム、ヤ
								ベテ
								ノアの妻、セムの妻、

146	145	144	143	142	141	140	139
41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前 —	大洪水の前 —	大洪水の前 —	大洪水の前 —	大洪水の前 —	大洪水の前 —	大洪水の前	大洪水の前

9	4 ・ 110 ・ 7 8	4 ・ 110 ・ 7	4 ・ 109 ・ 5	4 ・ 108 ・ 18	4 ・ 108 ・ 5 6	13	4 ・ 107 ・ 11 12	6	4 ・ 107 ・ 4 5	107 ・ 1 2 3	4 ・ 106 ・ 17、	15										
5	5 ・ 11 ・ 3 4	5 ・ 11 ・ 3	5 ・ 10 ・ 2	5 ・ 9 ・ 16	5 ・ 9 ・ 2 3	9	5 ・ 8 ・ 7 8	8 ・ 1 2	5 ・ 7 ・ 16、	14 15	5 ・ 7 ・ 12 13	10										
	4 ・ 1	4 ・ 8	2 3 6 ・ 20、 7 ・	6 ・ 18 19	7 ・ 6		8 ・ 4		4 ・ 19 22		4 ・ 18 ・ 21											
	エバのお腹に宿つた子と云ふのはカインばかり	殺した	貰へるのに	動物や鳥までが乗せて	答なのだ	妻達一配偶づゝ這入る	この中には私達親子と	言葉の聞こえ出し	つたから、エホバの御	ノアもいゝお年頃にな	に聳ゆ、方舟 <small>ノアの舟</small>	くアララット山の空際	アララット山の麓、遠	もの、ナアマリ才色	ルカイン <small>ノアの妻</small> の刃物を造る	チラ <small>ノアの妻</small> 第二の妻、トバ	琴笛の人	バル <small>ノアの妻</small> 牧者、ユバル <small>ノアの妻</small>	長、アダ <small>ノアの妻</small> 第一の妻、ヤ	レメタ <small>ノアの妻</small> カイン族首	ハムの妻	
	50	216 217 218 219 220	49 65 86 112 126 149 164 196		48		47 52 79 87 134 148 151	206	41 46 80 90 136 151 198 205													

第三部 増子方式

154	153	152	151	150	149	148	147
41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前
一	一	一	一	一	一	一	一

4 ・ 11 ・ 14 ・ 15	4 ・ 11 ・ 13	11 4 ・ 11 ・ 9 ・ 10	4 ・ 11 ・ 6 ・ 7	4 ・ 11 ・ 3 ・ 4	4 ・ 11 ・ 14 ・ 15	4 ・ 11 ・ 12	11 4 ・ 11 ・ 9 ・ 10
5 ・ 12 ・ 9 ・ 10	5 ・ 12 ・ 8 ・ 9	6 5 ・ 12 ・ 4 ・ 5	5 ・ 12 ・ 1 ・ 2	5 ・ 11 ・ 18	5 ・ 11 ・ 10 ・ 11	5 ・ 11 ・ 8	7 5 ・ 11 ・ 5 ・ 6
6 ・ 1 ・ 2 ・ 4	4 ・ 19	4 ・ 20 ・ 21 ・ 22	8 ・ 4	7 ・ 10 ・ 11 ・ 12	6 ・ 5 ・ 6	4 ・ 8	7 ・ 4 ・ 10

りなんですからね
 アダムもエバも靴のや
 うな子が出来た、セツ
 だ
 六日の後を待つてその
 高慢な口はたゞけ
 人殺しを先祖に持ちな
 がら出過ぎた事を云ふ
 な
 お前達のする事は一つ
 く、エホバの憤りを増
 すばかりだ
 今日から七日を過ぎ
 ず、大水がアララツト
 の山
 カイン族の中には、牛
 羊を飼ひ、笛と琴とを
 造り、武器を鍛へ、
 レメクは二人の妻を持
 つてゐるそれを恥とし
 ない
 なべての女は、天使を

47	70	47	51
52	74	52	66
79	167	79	68
87	171	87	129
134		134	165
142		142	
148		151	

163	162	161	160	159	158	157	156	155
41	41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前
一	一	一	一	一	一	一	一	一

4・119・5・6	4・117・13・14	16	4・116・14・15	4・116・8	4・115・7	4・115・3	4・113・13	4・112・13・14	4・112・1・2					
5・19・16・17	5・18・6・7	10	5・17・8・9	5・17・2	5・16・1	5・15・16	5・14・9	5・13・9・10	5・12・14・15	11				
2・16・17、3	6・2		4・22	4・19・22	6・1・2・4	18、6・10 5・32、9・	4・19・22	6・1・2・4	6・13					
アダムとエバ、智慧の 戯れる時節に	天の使さへ人間の女に だ		兄トバルカインに歸 れ、兄は劍を造る名人	成程二人の妻を持つレ メクの娘だけあるな	(ネピリム) 使にでも罪を犯させる	あの娘の美しさは天の 子だ	ノア―お前は私の末の 子だ	せた娘ではないか	ナアマ、レメクの生ま せた娘ではないか	でも不足のない女	ファエルの嬖妾になつ ても不足のない女	ナアマ待て、大天使ラ 姿をお現はしになつた	このノアに、憤りの御 る	すら試みようとしてゐ る
4 20 21 26 29 36 64 100			177 183 184 186 188 189 191 213	85 91 128 140 152 157 161 176	45 53 58 61 62 77 81 83		208	16 17 59 94 130 187 201 205	156 159 162 170 175 177 179 181	55 57 60 63 73 76 131 154		56 132 190		

第三部 増子方式

170	169	168	167	166	165	164
41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大の水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前
一	一	一	一	一	一	一

120 ・ 1	4 ・ 119 ・ 18 ・ 1	4 ・ 119 ・ 17 ・ 18	4 ・ 119 ・ 16 ・ 17	4 ・ 119 ・ 15 ・ 16	4 ・ 119 ・ 15	14 4 ・ 119 ・ 12 ・ 13	9 10 4 ・ 119 ・ 7 ・ 8
12	5 ・ 20 ・ 10 ・ 11	5 ・ 20 ・ 9 ・ 10	5 ・ 20 ・ 8 ・ 9	5 ・ 20 ・ 8	5 ・ 20 ・ 7	5 ・ 20 ・ 4 ・ 6	1 20 ・ 1 ・ 2 5 ・ 19 ・ 18 ・ 19
4	6 ・ 1 ・ 2 ・ 3	3 ・ 22	3 ・ 17 ・ 19	6 ・ 5	3 ・ 23	1 3 ・ 29 4 ・ 25 ・ 5	4 ・ 1 ・ 11 23 ・ 4 ・ 7 ・ 13
れた女を生む	天の使を迷はし、人とは思へぬ程の勇士や勝	望を抱いてゐる	一度味はつた智慧の果をもう一度味ふ程の非	望を起すようになった	アダム、エバがエデンを逐はれなかつてからひとりでに罪も作れば非望も起すようになった	セツが私達の遠つ親に當る、私はセツから九代目の主だ	血を吸う
		72	104	70 74 150 171		51 66 68 129 147	217 218 220 102 104 111 119 122 124 179 171

178	177	176	175	174	173	172	171
41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前	大洪水の前
—	—	—	—	—	—	—	—
4・121・7・8	4・120・17・18	4・120・15	4・120・14	4・120・12・13	4・120・3	4・120・4	4・120・1・2
5・21・18	5・21・9・10	5・21・7	5・21・5・6	5・21・3・4	5・20・13	5・20・14	5・20・12
1・26・27	1・2・3・4 4・22・6	4・19・22	6・4	3・1・5	3・6	2・7・24	6・6・7
人間なのだ	ホバの御業の誇りなる人間なのだ	野の動物ではない。エホバの御業の誇りなる人間なのだ	三重に呪はれた女	チラは良人の眼を窺んだのだ。ナアマは二重	あれはカインの族の主レメクの娘です	ナアマは二重	三重に呪はれた女
1 25 209 210 212 222				220 114 115 122 124 163 173 217 218	4 26 29 36 64 100 102 107	3 75 97 214 221	70 74 150 167

第三部 増子方式

186	185	184	183	182	181	180	179
41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 一	大洪水の前 一

4 ・ 129 ・ 13	3	4 ・ 129 ・ 1 2	4 ・ 127 ・ 12 13	8	4 ・ 127 ・ 6 7	4 ・ 127 ・ 4 5	4 ・ 127 ・ 3	4 ・ 125 ・ 13 14	4 ・ 122 ・ 14 15
5 ・ 30 ・ 1	10	5 ・ 29 ・ 8 9	5 ・ 28 ・ 1 2	13	5 ・ 27 ・ 11 12	5 ・ 27 ・ 9 10	5 ・ 27 ・ 8	5 ・ 26 ・ 2 3	5 ・ 23 ・ 6 7
4 ・ 22	4 ・ 20 21	4 ・ 22	4 ・ 19 22		3 ・ 23	6 ・ 2	4 ・ 21	6 ・ 2 4	

カインの族の中に生れた勇士達、その人々の中に生れた美しい娘達天の使の樂の音ではないレメタの息子のユバルが
 ナアマは天の使に戀されてゐる
 天國はアダム、エバがエデンの園を追ひ出されて、關係ない
 ヤバルはナアマの兄ではないか。母が違ひまさあ、レメタを父として
 ナアマは人間離れの美しさ、兄のトバルカインとは似もつかぬ姿
 ヤバル、羊牧ひ、幕屋の方に、今夜はユバルが音樂の集りをトバルカイン（劍を振り上げ）早く行け！

200	153	53			192	64	156	55
202	180	54			216	69	159	57
204	183	78			217	98	162	60
216	189	83			219	102	170	63
217	193	85			220	108	175	73
218	194	128				109	177	76
219	195	139				163	179	131
220	196	152				166		154

194	193	192	191	190	189	188	187
41	41	41	41	41	41	41	41
大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二

14	4 135 12 13	4 132 16 17	4 132 2	4 131 6 16	4 131 1	16	4 130 13 14	4 130 1	4 129 16		
17	5 35 15 16	5 33 3 4	5 32 8	32 4	5 31 12、 8	5 31 7 8	4 5	5 31 1 2	5 30 7 4		
24	4 19 20 21	4 21	17 23	3 1 13	4 22	7 1	6 9 14、 14、	4 20 22	4 22	32、 9 18	6 10、 5

ノアの末の息子のヤベ
テが……
トバルカインの妹……
ナアマに戀をしてゐる
(有島の創作)
母上等は父上によつて
お前と私、母のアダも
お前の母のチラも
信心深いノアとその息
子等は洪水の豫言で脅
すし
トバルカイン、劍を差
し出すトバルカイン、
母のチラ?
御先祖アダムがエデン
を逐ひ立てられたの
は、エバの爲
ユバルが琴と笛とを取
つて音楽の集りをする
だらう
レメクの世嗣ヤバル、
ヤバルの弟ユバル、レ

182	64	56	176	85	45	208	16
216	69	132	177	91	53		17
217	98	183	183	128	58		59
219	102	184	184	140	61		94
220	108	186	186	152	62		130
	108	188	188	157	77		158
	109	191	191	160	81		201
	163	213	213	161	83		205
	166						

第三部 増子方式

	201	200	199	198	197	196	195
	41	41	41	41	41	41	41
	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 二
	4 14 14 16	4 14 4	4 14 9 11	4 14 8 9	4 13 17 18	4 13 3	4 13 1
	5 44 12 14	5 42 3	5 41 9 11	5 40 8 9	5 39 18 19	5 38 3	5 37 2
5	27、 10 、 10 ・ 1	5 32、 6 ・	2 8	21 8 4、 4 ・	4 23 24	4 8	4 19
だ	ヤペテはセツの族の寶	音の力を尊ばう	かき立てる私達は樂の	琴と笛の音に命の燈を	がなかつた前には	園から、エホバの憤り	天使の音樂、エデンの
	208	16 17 59 94 130 158 187 205	3 75 97 172 214 221		と樂を奏し居る	らる、ユバル、樂人等	遠くアララット山見や
					れ	私に七十七倍の罰があ	を聞け、カインに七倍、
						アダとチラ、私の言葉	カインは弟を殺した
						メクの妻達!	トバルカイン、先祖の
						おゝアダとチラ!	レ
						よ	メク、七十七倍呪はれ
						82 84 128 194	216 217 218 219 220 220 145 149 164

第三章 有島武郎と創世記

	209	208	207	206	205	204	203	202
	42 43	41	41	41	41	41	41	41
	生活と文學	大洪水の前 四	大洪水の前 四	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 三	大洪水の前 三
10年4月	大正9年5月							
	6・491・8・9	4・157・2・3	4・157・2	4・152・10	5・4・147・1・2	4・146・3・4	4・146・1・2	4・145・5・6
	8・323・16・17	5・56・6・7	5・56・6	5・52・1	19・5・46・15・16	5・45・18・19	5・45・16・17	5・45・2・3
7・18・22	1・26・27・2	9・27	1・18・19・10 1・32	8・4	27・8・4・9	4・20・21	4・17・18	4・20・21
造したのは、神自身の	神がアダム、イヴを創るのだ	は、お前を待ち望んでゐるのだ	洪水後、新しい人の世	にはお前の道がある	ムにはハムの道、お前	ムにはセムの道、ハム	にはハムの道、お前	にはセムの道、ハム
	32 105 110	205 16 17 59 94 130 158 187 201		205 41 46 80 90 136 141 151 198		220 195 198 200 202 216 217 218 219	152 153 180 183 185 188 193 194	44 53 54 78 83 85 128 139
						外に望みない	音楽に秀でようとする	ニバル、ヤバルは兄だ、
						カインの血だ	もの隠れてる、先祖の	で野羊に食物を
						エノクの中に恐ろしい	を探せ、羊の檻の近く	ニバル、兄上のヤバル
						人の命を美しくする爲	を	
						生きなければならぬ		
						方、アララット山		
						アララット山の方に方		
						舟に還つて下さい		
						セムにはセムの道、ハ		
						ムにはハムの道、お前		
						にはお前の道がある		
						洪水後、新しい人の世		
						は、お前を待ち望んでゐるのだ		
						神がアダム、イヴを創		

第三部 増子方式

216	215	214	213	212	211	210
43	43	43	43	43	42	42
Lord Byron Cain 1821	ホキットマンに就 いて	ホキットマンに就 いて	「聖餐」に就いて	「聖餐」に就いて	惜みなく愛は奪ふ 六	惜みなく愛は奪ふ 六
一九二一年 日～5月3日		日 一九二一年		日 一九二一年	一九二〇年	日～8月10日 一九二〇～一九 二一年
	6 ・ 409 ・ 14	6 ・ 405 ・ 12 13	7 ・ 165 ・ 9	7 ・ 165 ・ 7 8	6 ・ 178 ・ 1	6 ・ 181 ・ 9 10
15 ・ 127 ・ 9 10	3 8 ・ 558 下 ・ 2	14 15 8 ・ 555 下 ・ 13	15 8 ・ 531 下 ・ 14	11 8 ・ 531 下 ・ 10	8 ・ 144 ・ 11	14 8 ・ 147 ・ 12 13
16 19 23 ・ 4 ・ 1	・ 4 1 ・ 1 ・ 2	2 ・ 25 9 ・ 18 ・ 27	10 ・ 7 ・ 13 4 ・ 22 ・ 6 ・ マ	・ 17 6 ・ 11 ・ 9	11 ・ 1 ・ 9	1 ・ 27
Adah. Adam cain Lucifer	Paradise ノ外ノ地 つたとしたら 若し天地創造の役に疲 れて、年老いた神があ るものは誰だ	如く裸體で彷徨ひ歩く 樂園に於けるアダムの マ	第一の戯曲に於ける男 女關係（ヤペテとナア マ）	「大洪水の前」で、エ ホバと人にと對する調 和出来ない心の苦しみ	益々高く虚妄なバベル の塔を登りつめて行か うとするのだ	お前の信仰の對象なる 神を、私の姿になぞら へて造つてゐたのだ 益々高く虚妄なバベル の塔を登りつめて行か うとするのだ
182 192 217 219 220	64 69 98 102 108 109 163 166	5 37 123	3 75 97 172 199 221	39 106	18 19 30 31 96 116 118	1 25 178 209 222

222	221	220	219	218	217
44	43	43	43	43	43
驚異	地方の青年諸君に	Lord Byron Act III	Lord Byron Act I	Lord Byron Cain 1818	Lord Byron Act III
日 大正11年1月1 一九二二年	日 大正10年5月1 一九二一年				
7 ・ 193 ・ 7	7 ・ 82 ・ 4				
9 ・ 21 ・ 10	8 ・ 600 上 ・ 8	4	15 ・ 124 ・ 3	15 ・ 125 ・ 12 ・ 14	17 ・ 15 ・ 16
1 ・ 24 ・ 31	2 ・ 8	8 16 19	3 ・ 20 ・ 23 ・ 4	2 ・ 7 ・ 3 ・ 1	3 ・ 20 ・ 23 ・ 4
神の六日目のやうな世界が彼の面を向ける所には用意されてゐる	あなた方がそこに地上の樂園を築くことが出来るか	Eden Gain Adah Abel (dead) Zillah Eye	The Earth near Eden Gain Adah	The Land without Paradise Adam Gain Adah	The Earth near Eden Gain, Adah, Abel (dead) Zillah, Eye.
1 25 178 209 210	3 75 97 172 199 214				

第三部 増子方式

15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	番 期 日 (<small>明治</small>)			
36 ・ 4 ・ 20	36 ・ 4 ・ 19	36 ・ 3 ・ 7	36 ・ 1 ・ 1	35 ・ 12 ・ 31	35 ・ 12 ・ 29	35 ・ 11 ・ 15	34 ・ 9 ・ 16	34 ・ 7 ・ 25	34 ・ 6 ・ 18	34 ・ 6 ・ 18	34 ・ 6 ・ 9	33 ・ 12 ・ 31	33 ・ 12 ・ 31	33 ・ 12 ・ 31				
12 ・ 1 ・ 25	29 ・ 1 ・ 38	12 ・ 1 ・ 3、	49 ・ 24	49 ・ 24 ・ 25	49 ・ 22 ・ 26	4 ・ 24	4 ・ 1 ・ 12	2 ・ 17 ・ 3 ・ 6	49 ・ 24	19 ・ 24 ・ 25 ・ 26	2 ・ 7	3 ・ 20	2 ・ 7 ・ 24、	13 23	2 ・ 17 ・ 3 ・ 6	1 ・ 27 ・ 2 ・ 7	2 ・ 7 ・ 21 ・ 22	章 節
イ サ ク、 ヤ コ ブ の 事	馬 太 傳 一 章 系 圖 人 物	全 能 の 御 手 よ、 僕 は	全 能 手 我 を 救 ひ 出 し	攝 理 を 彼 等 の 上 に	七 十 倍 罪 を 許 し 給 へ	何 故 汝 弟 を 殺 せ る や	智 慧 の 果 を 味 ひ	全 能 手 天 地 を 宇 宙 に	ソ ド ム、 ゴ モ ラ	塵 よ り 生 命 を 造 り	ン	ア ダ ム、 イ ブ の エ デ	始 祖 の 墮 落 と 自 己 欲	神 と 等 し き 身 體 を 稟 <small>ま</small>	始 祖 ア ダ ム、 エ バ	内 容		
		7 11 12	7 11	7		3		1 2 4		1 2					同 項			

觀想錄 (日記) と創世記

	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16		
1	43 ・ 3 ・ 44 ・	41 ・ 1 ・ 28	37 ・ 8 ・ 6	36 ・ 10 ・ 8	36 ・ 9 ・ 15	36 ・ 8 ・ 27	36 ・ 6 ・ 19	36 ・ 4 ・ 29	36 ・ 4 ・ 29	36 ・ 4 ・ 21		
1章	4	1 ・ 1 ・ 2 ・	2 ・ 7 ・	2 ・ 18 ・ 25	4 ・ 24 ・	25 ・ 24 ・ 34	2 ・ 、 3 章	49 ・ 24 ・	3 章 ・ 23	43 推測 21 ・ 1 ・ 36 ・	36 ・ 43 ・	11 ・ 25 ・ 19 ・
the 1st chap. of Genesis...		天地創りし其の御手	土塊もて造れる人	イブ誕生見んアダム	七十七倍する寛容	イサクの子ヤコブ	智慧の果アダム末裔	大能御手の余を捕へ	余は樂園を追はれて	閑を得創世記を読む		
	24		1 2 4 5 22	1 2 4 5	10	15 16	3 8 17	7 11 12 13	3 8			

「有島武郎と創世記」の中の内容別順位

実順位 (順位)	点 (回数)	数	有島が問題に した章・節 (傍線は重要)	「題」題の範囲の章・節	節(聖書語句、要約原文) (「著作名」)	回数「著作名」(発表又は執筆年月日)年 齢(章・節)(注)、「全集と創世記一覽表」 順番すなわち同内容番号
(4)	1	15	2・4・7	「アダムの創造(2・7)	7 (見よ一杯の粘土も神の命 の下にはアダムたり得るなり) (「札幌獨立教會」)	⑥「日記」(明治33・12・31、12・31、 34・6・9、6・18、36・6・19、37 ・8・6) 22歳・26歳(1・27、2・ 21 22、3・20)、①「札幌獨立教會」 (明治34・10) 23歳(2・7、5・2)、 ②「日本文明の発展」(明治37・6) 26 歳、①「日記より」(明治41・6) 30歳、 ①「も一度「二つの道」に就て」(明治 43・8) 32歳(1・26 27、2・7)、① 「生活と文學」(大正9・5・10・4) 42 43歳(1・26 27、2・7 18・22)、①「サ ムソンとデリラ」(未定稿、大正4・9) 37歳(2・4・15)、①「サムソンとデ リラ」(定稿、大正8・10) 41歳、③ 「Lord Byron」(大正10・4) 43歳 (2・7、3・20 23、4・1 2 16 19)、 6 10 11 22 25 35 121 209 216 218 219

	(3) 2	
	(23) 94	
	20、2・16 17 3・11 6 13	
	(3・6)	「禁斷の木の實を食う」
	6	「始祖の墮落と共に此貴重なる天賜を濫用し、悪用し、人は自己の欲する所に従ひて方向なき進路を取りたるが故に」(日記)
③ 「日記」(明治33・12・31、34・9・16、36・6・19)、22 23 25 歳(2・17、3・6 13 23、2 章、3 章)、① 『リビングストン傳』(明治34・3) 23 歳(3・11 13)、② 「日本文明の發展」(明治37・6) 26 歳(2・16 17、3・1 2 3)、① 「北歐文學が興ふる教訓」(明治44) 33 歳(3・11 6)、① 「哀なる人の叫べる」(大正1・12) 34 歳(3・11 6 13 20)、① 「サムソンとデリラ」(未定稿、大正4・9) 37 歳、① 「洪水の前」(大正5・1) 38 歳(3・4 17 13 23)、② 「ミレー禮讚」(大正6・3) 39 歳(3・1 6 13 17 23 24)、① 「死と其の前後」(大正6・5) 39 歳(3・11 13)、① 「迷路」(大正7・6) 40 歳(2・16 17、3・1 2 3)、① 「大なる健全性へ」(大正7・8) 40 歳(3・11 7)、① 「聖餐」(大正8・10) 41 歳(3・11 6 13 20)、① 「サムソンとデリラ」(定稿、大正8・10) 41 歳(3・11 6 13 20)、③ 「大洪水の前」(大正8・12) 41 歳(3・11 7 13 23)、③ 「Lord Byron」(大		

第三部 増子方式

(16) 5	(29) 4	(11) 3
(7) 41	(3) 30	(9) 68
31、 2・7	24、 34 36・43、 25・	7、18、 22、23 1・27、 2・
「神は自分のかたちに人を創造」(1・27)	「イサク、ヤコブの事蹟」(16、17、21、22、25、26、27章)	「エバの創造」(2・22)
1・27、2・7へ神と等しき身體を蒙け特殊なる靈魂を受け(「日記」)	朝創世記を読みイサク、ヤコブの事蹟を読む。Pastoral ageの有様描くが如し。此の如き傳説より基督教的精神を發見せし事は餘程の難事なり。(「日記」)	27へ神がアダム、イヴを創造したのは、神自身の一つの表現である(「生活と文學」)
①「日記」(明治33・12・31) 22歳(1・27、2・7) ①『リビングストーン傳』明治34・3) 23歳(1・26、27、5・1、2) ①「も一度「二つの道」に就て」(明治43・8) 32歳(1・26、27、2・7) ①「生	③「日記」(明治36・4・20、4・21、8・27) 25歳(長男イシマエルとエサウに同情、極めて不公平なる神と批判、パウロにも立腹)	正10・4) 43歳(2・7、3・20、23、 ・1、2、8、16、19) 4、20、21、26、29、36、64、100、102、107、114 115、122、124、163、173、174、217、218、220 ⑤「日記」(明治33・12・31、12・31、34 ・6・9、6・18、36・10・8) 22、23、25歳 (1・27、2・7、8、18、21、22) 25、3・20、 ①「ミレー禮讚」(大正6・3) 39歳(2 ・18、23) ①「生活と文學」(大正9・ 5) 42歳(1・26、27、2・7、18、22) ① 「宣言」(初出)(大正4・7) 37歳(2・ 23) ①「宣言」(大正6・12) 39歳(2 ・23) 32、105、110、209

(12) 7	(6) 6
(8) 37	(15) 38
2・7 8 と25	3・6 7 23
「エデンの楽園」(2・4 と25)	「エデンの楽園から追放」 (3・23)
4と25へアダム、イブの樂し き時 譬へがたなきエデンの 景色は(「日記」)	23へ智慧の果を貪り、アダム とイブに等しかりき。余は樂 園を追はれて暗黒に(「日 記」)
43歳(2・25)、①「地方の青年諸君に」	活と文學(大正9・5)42歳(1・26、27、 2・7、18と22)、①「惜みなく愛は奪ふ」 (大正9・6)42歳(1・27)、①「驚異」 (大正11・1)44歳(1・24と31)、①「大 洪水の前」(1・26、27)、125、178、209、210、222 ①「日記」(明治36・4・29)25歳(3・ 23)、①「聖書」の權威(大正5・10)38 歳(3・23)、①「ミレー禮讀」(大正6・ 3)39歳(3・1と13、17、23、24)、①「宣言」 (初出、大正4・7)37歳(3・23)、①「宣 言」(定稿、大正6・12)39歳(3・23)、 ②「洪水の前」(大正5・1)38歳(3・ 4と7、13、23)、④「大洪水の前」(大正8 ・12)41歳(3・1、4と7、13、17、23)、④ 「Lord Byron」(大正10・4)43歳(2 ・7、23、3・20、23、4・1、2、8、16、19)、64 69、98、102、108、109、163、166、182、192、216、217、219、220 ①「日記」(明治34・6・9)23歳(2・ 7、8、22、3・20)①『リビングストン 傳』(明治34・3)23歳(2・8と15)、① 「松蟲」(大正5・8)38歳(2・8と15)、 ①「ホキットマンに就いて」(大正10・3)

第三部 増子方式

(13) 9	(8) 45	位 1回	回 と39	位 各3	26 27 28	回、 25	9 位 10	(9) 8	(23) 90										
11・1 19						32	27、 10・ 11	5・ 32、 6・ 18											
9)	「バベルの塔」(11・1)							「神はヤベテを大いなら しめ」(9・27)											
	1) 9) ハビロニア人がバベルの塔を建て「民族が四散」(「日本文明の發展」)							27) ヘノアの末の子ヤベテはセツの族の寶だ(「大洪水の前」)											
208 212 213	②「日本文明の發展」(明治37・6) 26歳	13	14	15	16	17	39	42	59	93	94	95	106	130	137	158	187	201	205
	①「魂は私に告げる」(大正7・11) 40歳、																		
	①「藝術論」(大正8・3) 41歳、①「惜																		
	みなく愛は奪ふ」(大正9・6) 42歳、①																		
	③「足助素一宛書簡」(大正4・12・17、																		
	5・1・8、6・4・12) 37 38 39歳(6																		
	・11) 9・17、4章) 9章、⑥「日本文																		
	明の發展」(明治37・6) 26歳(5・32、																		
	6・10、9・18) 27、10・11) 5、10・																		
	6) 31)、②「聖餐」に就いて(「大正10・																		
	2) 43歳(4・22、6・10、6・11) 9																		
	・17、7・13、9・18) 27)、⑤「洪水の																		
	前(5・28) 32、6・9) 10、9・18) 27、																		
	10・2) 31)、⑦「大洪水の前」(5・28)																		
	32、6・9) 10、8・4、9・18) 27)、12																		
	①「内部生活の現象」(大正3・7)、																		
	①「内部生活の現象」(大正3・7)、																		
	①「内部生活の現象」(大正3・7)、																		
	①「内部生活の現象」(大正3・7)、																		

(21) 12	(17) 11	(8) 10
(5) 34	(6) 34	(10) 35
26 27 28	2 1 3	3 17 19
19 1 24 25	1 1 2 3 }	3 17 19
(19・1と29)	・4	「額に汗して働き、土に 帰る」(3・19)
「ソドムとゴモラの滅亡」	「天地創造」(1・1と2 4)	
19「腕と額とに汗せしはアダ ム」(「北歐文學が與ふる教訓」)	1と31「創世記第一章に於け る創造の様々な段階につい ての説明」(著者訳)、「The account given of the stages of creation in the 1st chap. of Genesis...」(「日記」、筑 摩12巻、402頁)	19「額に汗して働き、土に 帰る」(3・19)
24 25 26「ロトの妻を鹽の柱と なし、ソドム、ゴモラを灰の 下に」(「日記」、ロトの妻は著 者注、原文は「人を鹽の柱」)		
19 30 31 96 116 118 211	②「日記」明治41・1・28、43・3と44 ・1) 30 32 33歳(1・1と2・4)、③「リ ビングストーン傳」、④「ホキットマンに就 いて」(大正10・3) 43歳、⑤「サムソン とデリラ」(未定稿)(大正4・9) 37歳 (1・1 2 3)、⑥「サムソンとデリラ」 (定稿)、5 37 123 215	「首途」(初出)(大正5・3) 38歳、18
17 24 26 28) ①「ブランド」(定稿)(大正 8・4) 41歳(19・26)、23 24 28 119	①「日記」明治34・6・18) 23歳(19・ 24 25 26)、②「ブランド」(初稿)(明治42 ・12) 31歳(19・26)、③「二つの道」(明 治43・5) 32歳(19・26)、④「北歐文學 が與ふる教訓」(明治44) 33歳(19・1と 24 26 28)、⑤「ブランド」(定稿)(大正	①「草いきれ」(明治36・7) 24歳(3・ 16と19)、②「北歐文學が與ふる教訓」(明 治44) 33歳(3・17 18 19 23)、③「聖書」 の權威」(大正5・10) 38歳、④「ミレ ー禮讚」(大正6・3)、⑤「洪水の前」、⑥ 「大洪水の前」、7 27 71 88 89 92 99 103 104 168

第三部 増子方式

(18) 16	(15) 15	(2) 14	(7) 13
(6) 20	(7) 25	2位 回と5 回 16回	(15) 26
3・7	4・23 24	4・19 22、6	14 4・1 8
「裸を恥じる」(3・7)	「七十七倍呪はれよ」(4・23 24)	「ネビリム」(6・4)	「カインは弟アベルを殺す」(4・1 16)
7「アダムとイヴが腰のまはりを無花果の葉で隠すこと」(「日本文明の発展」)	24「七度を七十七倍する寛容ありとも」(「日記」)	4「ナアマを見ろ、屹度天使の胤で生れた女だ」(「洪水の前」)	48「アベルの燔祭を顧み給ふので」(「洪水の前」)
正6・12) 39歳(3・7)、①「洪水の前」	181 186 188 189 191 213	①「聖餐」に就いて(「大正10・2」) 43歳(4・22、6・10、7・13、9・18 27)、⑩「洪水の前」(「大正5・1」) 38歳(4・19 22、6・124)、⑭「大洪水の前」(「大正8・12」) 41歳(4・19 22、6・123)	①「日記」(明治35・11・15) 24歳(4・1 12)、①「迷路」(「大正7・6」) 40歳(4・1 8 13 14)、③「洪水の前」(4・1 8 11 13 14)、⑤「大洪水の前」(4・1 8 11)、⑤「Lord Byron」(2・3 20 23、4・18 19)、49 65 86

(14) 20	(23) 19	(37) 18	(1) 17
位回14 6と位 回198	(14) 14	(1) 10	(26) 26
・ 4 6 10 11 12	1 3 29、 7	4 ・ 25、 5、	4 ・ 18 19 20 21
ノア」(5・3・9・28)	「敬虔なるセツ族の首長 ノア」(5・3・9・28)	「アダムの子孫、ノアま で」(5・1・32)	「カイン族レメクの家族」 (4・17・22)
水の前」	5・3・29「私はセツから九 代目のセツの族の主だ」(「洪 水の前」)	14「 ^カ 斯地の面より我を逐出し、 我を殺さん」(「自己描出」カ インの末裔」)	19 20 21「父長レメク、第一の 妻アダ、牧者ヤバル、琴笛の 人ユバル」(「洪水の前」)
・ 4 25、 5・1 3・29、 7・4 6・10 11、 7・4 6・10 11、 7・4 6・10 11、 8	⑦「洪水の前」(4・25、5・1・3・29、 117 127 136)	①「自己を描出したに外ならない」「カ インの末裔」(大正8・1) 41歳(4・14)、 ②「洪水の前」(4・12、8・4)、 ③「大洪水の前」(4・16、8・4)、41 67	(3・4・7・13 23)、①「大洪水の前」(3 ・4・7・13 23)、8 9 33 64 111 163 ⑥「洪水の前」(大正5・1) 38歳(4・ 18・21)、⑤「大洪水の前」(大正8・12) 41歳(4・18・24、8・4)、⑤「Lord Byron」(大正10・4) 43歳(2・7 17、 3・20 23、4・1 2 4 8 16 19)、44 53 54 78 83 85 128 139 152 153 180 183 185 189 193 194 195 198 200 202 204 216 217 218 219 220 ①「日記」(明治36・4・19) 25歳(12・ 1 2 3、29・35、38・1・30)翌日の日 記、明治36・4・20、イサク、ヤコブの 事蹟を讀み立腹に關連、第4位)

第三部 増子方式

(10) 26	(38) 25	(24) 24	(22) 23	(40) 22	(41) 21
(10) 10	(1) 3	(4) 4	(5) 5	(1) 6	(1) 6
8・4	39・6 23	13 6・9 14 10 11 12	6・5 6 7	9・1 7	22・1 14
・4 (アアララット山の麓(8 4)	12 「ポテバルの妻に對して ヨセフがしたるやうな潔 い態度を取る」(39・6)	(6・9 13 14) 「信心深いノアに怒りを 現はし、方舟を造れと」	増す(6・5 6) 「人の子は罪も作れば非 望も起すエホバの憤りを 増す」	「彼女がアダムとの交渉 を繋ぐ時、恐るべき力の 多産者となる」(9・1 7)	「アブラハムが其子イサ クを犠牲として捧ぐ」(22 ・1 14)
4 (遠くアララット山の空際 に聳ゆるを見る) (大洪水の 洪水の前(4・16 21、7・10 11 12、8・	(迷路) ヨセフがしたるやうな潔い態度 を取るべき時が來てゐる	彼等をもて汝の爲めに(松木を 造り……) (大洪水の前) 6 10 (ハバロ(ポテバルの間 違ひ。著者注)の妻に對して ヨセフがしたるやうな潔い態度 を取るべき時が來てゐる)	13 14 (時に世神のまへに亂れ て暴虐地に満盈ちたりき。我 彼等をもて汝の爲めに(松木を 造り……) (大洪水の前)	17 (彼女がアダムとの交渉 を繋ぐ時には恐るべき力の多 産者となる) (ミレール禮讀)	9 10 (アブラハムが、其子ヤ コブ(イサクの間違ひ。著者注) を犠牲として捧ぐる) (リビ ングストン傳)
④「洪水の前」(4・16、8・4)、⑥「大 洪水の前」(4・16 21、7・10 11 12、8・	23、113	①「迷路」(大正7・6) 40歳(39・6)	①「洪水の前」(6・9 11 12 13 14)、③「大 洪水の前」(6・9 11 12 13 14)、56 132 155 190	①「ミレール禮讀」(大正6・3) 39歳(9 ・1 7)、101	①「リビングストン傳」(3の27) (明治 34・3) 23歳(22・1 14) (第4位、イ サク、ヤコブをえこひいきしていると神 を批判、立腹。アブラハムの歴史を読ま ない原因)、2

(34) 32	(33) 31	(32) 30	(31) 29	(30) 28	(20) 27
(2) 2	(2) 2	(2) 2	(2) 2	(2) 2	(5) 50
6 ・ 18 19	4 ・ 1	4 ・ 16 17 18	3 ・ 16	3 ・ 22	26 49 ・ 22 ・ 24 ・
「親子と妻と一配偶づゝ 這入る筈なのだ」(6・18	「エバのお腹に宿った子 と云ふのはカインかば り」(4・1)	「エデンの東・ノドの地 をエノクと名づけり、エ ノクに先祖カインの血」 (4・16 17 18)	「懐妊の勦勞」(3・16)	「もう一度智慧の果」(3 ・22)	「全能の御手よ、我を救 ひ出し給へ」(49・24)
18 19「この中には私達親子と 妻達と諸々の肉なるものが」	「大洪水の前」	16 17「エノクの中にこそ恐ろ しいものが隠れてゐる。それ は先祖のカインの血だ。」(大 洪水の前)	16「神婦に言ひたまひけるは 我が大に汝の懐妊の勦勞を増 すべし」(「サムソンとデリラ」 (定稿))	22「カインの族は、一度味は つた智慧の果をもう一度味ふ 程の非望を抱いてゐる」(大 洪水の前)	24「全能の手のみ我を地獄の 汚穢 <small>よご</small> より救ひ出し給ふ」(「日 記」明治36・元旦)
18 19「大洪水の前」、①「大洪水の前」(6・ 18 19)、48 143	①「洪水の前」、①「大洪水の前」(4・ 1)、50 146	②「大洪水の前」(4・16 17 18)、127 203	①「サムソンとデリラ」(未定稿)、①「サ ムソンとデリラ」(3・16)、34 120	①「洪水の前」、①「大洪水の前」(3・ 22)、72 169	4、9・27)、41 46 80 90 136 141 151 198 205 206 ⑤「日記」(明治34・6・18、35・12・31、 36・元旦、3・7、4・29) 23 24 25 歳(49 ・24)

第三部 増子方式

38	(44) 37	(43) 36	(42) 35	(36) 34	(35) 33
1	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(2) 2	(2) 2
9・18 19 27	1 6・18、 7・	4・1 2	32・ 30	7・ 13	5・1 32
「セムにはセムの行く道	「汝と汝の家皆方舟に入るべし」(6・18、7・1)	(4・1・2) 「アダムその妻エバを知る、弟アベルを生めり」	22) 「エホバを見るものは死ぬのだ」(32・30) ↓ 出エジプト 33・20 ↓ 土師記 13・	「ノアの妻、セツの妻、ハムの妻」(7・13)	19) 「アダム生れてより七千二百二十五年目の二月」(5・1・32)
18・29、 1・32	なり。」「(大洪水の前)」	洪水の前)」	(未定稿 二幕劇)」	ムの妻)」「(洪水の前)」	配偶つづ違入る筈なのだ」(大洪水の前)」
①「大洪水の前」(9・18、19、10・1)	①「大洪水の前」(6・18、7・1)、133	①「大洪水の前」(4・1・2)、125	30、出エ 33・20(ペリシテ人よ、エホバを見るものは死ぬのだ。)」「(サムソンとデリラ)」	13(ノアの妻 セムの妻 ハムの妻)」、43 138	1・32(時。アダム生れてより七千二百二十五年目の二月)」「(洪水の前)」
			照、38	①「洪水の前」、①「大洪水の前」(7・13)	①「洪水の前」、①「大洪水の前」(5・1・32)、40 135

	(46) 39	(45)
(295) 総計	(1) 1	(1)
	2 6 3 3	28 29、 10・ 1
	「動物や鳥までが乗せて 貰へるのに」(6・20、7 ・23)	ハムにはハムの行く道、 お前にはお前の行く道が ある」(「大洪水の前」)
	前) 事はないのだぞ」(「大洪水の 鳥は神の御言葉を侮り笑つた 乗せて貰へるのに……動物や 20へけれども動物や鳥までが へ」(「大洪水の前」(ノアのヤベテ の台詞))	前の行く道がある。洪水の後 に現はれる新しい人の世はお 前を待ち望んでゐるのだ。)
	144 ①「大洪水の前」(6・20、7・23)、	32)、207

以上、三つの表の中で、特に「有島武郎と創世記」の中の内容別順位」の著作原文を著者と共に読んで、日本ハリストス正教会の山口義人司祭は次の五点を意見とともに指摘する。

第一点は、信仰の父アブラハムの話がない。

第二点は、芸術家として男女関係（1～11章）を重視し、作品に生かす読み方。

第三点は、ヨセフの話がない。

第四点は、キリストと関連させて創世記を読んでいない。

第五点は、文学者として人間性探究の立場から読んでいる。

続いて山口司祭は、第2位「禁断の木の實を食う」の中で、〈始祖の墮落と共に此貴重なる天賜を濫用し、悪用し、人は自己の欲する所に従ひて方向なき進路を取りたるが故に〉（明治33・12・31、二十二歳）の〈天賜〉と、第1位「アダムの創造」、第3位「イブの創造」、第5位「神は自分のかたちに人を創造」（1・27）の中で、〈人類は Der Kleine Gott der Welt として神と等しき身體を稟け特殊なる靈魂を受けながら〉（明治33・12・31）と、〈等しく神の顯身（shekinah）なりとせよ〉（『リビングストーン傳』）に注目し、正教会の『旧約聖書』創世記一章二十六節「我等人を我等の像と肖としたがひて造らん」を引用して説明する。〈神と等しき身體を稟け〉とあるが、そうではなくて神の像と肖としたがつて造られているのである。「像」とは、人間の自由意志、理性、道徳的な責任感など。始めから神により既成事実として与えられたものであるから〈天賜〉は自由意志と解してよい。「肖」とは、人間が神との交わりの中に次第に成長してかちとるべき目標として示されたもの。可能性として約束されたものでしかない。人間に關しては将来の可能性を見て満足されたという意味である。「命の息をその鼻に吹きいれられた。そこで人は生きた者となった」（2・7）とあるように、確かに〈特殊なる靈魂〉であり、人間のみであって他の動物にはない。〈顯身〉

とは、正教会では「顯榮」と書き、変容を意味する。

第4位「イサク、ヤコブの事蹟」で、長男イシマエルとエサウを差別し、イサクとヤコブをえこひいきする「極めて不公平なる神」に立腹する有島に対して、山口司祭は、人間は皆違つた力、器が神の恩寵として与えられているのだから、ヤコブにはヤコブの、エサウにはエサウの、それぞれの力が与えられている、人間レベルで立腹しても仕方がない、ヤコブの子である十二人が、十二の族長となるように、と言われる。

第13位「カインは弟アベルを殺す」神は「極めて不公平」であると立腹しているようだが、有島が怒るならここは、弟を殺して罰がないのであるから。

「有島武郎と創世記」の中の内容別順位について

著作原文を著者と共に読んで、東京カトリック神学院のベテロ・ネメシエギ教授は、順に意見を述べ全体として次の二点を指摘する。

第一点は、アブラハムの歴史、信仰の父の話題がない。

第二点は、ヨセフの話がない。

第1位「アダムの創造」、第3位「エバの創造」、第5位「神は自分のかたちに人を創造」の中で、「神と等しき身體を稟⁵け特殊なる靈魂を受けながら」(明治33・12・31)に注目、オリゲネス時代に神に人間のような体があると考えられたことがあったが、神に身体があるのではない。「神と等しき身體を稟⁵け」は有島の間違い。詩篇三十三篇六節にも「天の万軍は主の口の息によって造られた」とあり、「命の息をその鼻に吹きいれられ」(2・7)、「特殊なる靈

魂を受けゝたのは人間だけである。へ等しく神の顯身 (shakinish) (『リビングストーン傳』) とはヘブル語で、モーゼに現れたように、輝かしい現れを意味する。

第2位「禁斷の木の實を食う」、第6位「エデンの樂園から追放」には、へ實に先づ智慧を求めしはイヴなりき (『北歐文學が與ふる教訓』)、「アダムを樂園から逐ひ出したのも彼女だ」(『ミレー禮讚』)、「御先祖アダムがエデンを逐ひ立てられたのは、エバの爲」(『大洪水の前』)というように、有島にも男より女の方が悪いと思わせたい文がある。確かにパウロにも女性蔑視の文があるが(『コリント前』11・3、8、エペソ5・22、著者注)、ガラテヤ書三章二十八節のみ「男も女もない。あなたがたは皆、キリスト・イエスにあつて一つだからである。」と男女平等を述べている。イエスは女性を大切にしている。

第4位「イサク、ヤコブの事蹟」で、神のえこひいきと有島に思われそうな十六章から二十七章にあるイサクとヤコブの話は、古代教会から長く問題であつた。詩篇には、神は造つたもの何一つ憎まない、すなわち万人救済思想がある。一方には選民思想がある。オリゲネスは選民か万人救済かで苦労した。その結果、神は誰をも最初から排斥しない、或る人には少しの恵みを与え、或る人には沢山の恵みを与える、人の見方には限界がある、と考へた。ユダヤ人は自分たちこそ選民であると思つてゐる。選民の解明として予定説がある。カール・バルトは、イエスも旧約時代から予言され続けてきた予定の人である、と言つてゐる。

第7位「エデンの樂園」で、へ幸福は、智慧の味を知らない前のやうに忘れる所に生れるのだ(『大洪水の前』)とあるが、意識がない時が良いとなつてしまひ、聖書学的には当らない。神のみ心ではなく自分の都合いいように行動を決めて良いことになってしまう。やはり日本的又は有島の獨創的表現である。

第8位「神はヤベテを大いならしめ」と第20位「敬虔なるセツ族の首長ノア」。本当はノア一族のみが地球上の人類の始まりではない。バビロニア地方でノアの洪水は起つてゐるが、中国、アメリカにノアの洪水は起つてゐないし、

他の大陸にも人類は生存していた。ユダヤ人の神についての考えがノアの物語で良い方に述べられている。特にセム（黄色アジア人）、ヤベテに関しては狭い意味で選民意識がある。有島がへ優れた民族は純アリア人（インド・ヨーロッパ系、ヤベテ系）（『日本文明の発展』）であると述べているが、世界史の事実はその通りである。しかし教会が分裂しているのは白人ヨーロッパ人の罪である。

地球物理学者竹内 均氏は、ノアの洪水は紀元前二八〇〇年前にメソポタミアを襲った大洪水のことである、その頃は現在より気温が高かったため北上した赤道収束帯の前線が大豪雨をもたらしたからである、と説明している（『旧約聖書』同文書院 19頁）。

第14位「ネピリム」、へ神の子等人の女子むすめの美しきを見て……妻となせり（『大洪水の前』、創6・2）とあるが（へ神の子等）とは天使と見てよい。聖書に神話的断片が入っているところ。ネピリムは、小説家有島にとっては魅力のあるところ。

第16位「裸を恥じる」で、へアダムとイヴが腰のまわりを無花果いっげんの葉で隠すこと（『日本文明の発展』）とあるが、自然ではない。人の心が神の心に通じている時は、裸で恥しくなかった。禁断の実を食べたため、本来の人間の秩序がくずれ、望まずに情欲が出たり、貧富の差が生じたり、死んで土になるなど、一見、自然に思われるが創世記を書いた人には自然ではない。イエスのみがその違いを知らせてくれる。この原罪こそ自然ではないということとは『地上の樂園』（南窓社）の著者カルロス・メステルス氏も言っている。

以上が、山口義人司祭とネメシエギ教授に質疑して得た「内容別順位」についての指摘、意見、感想である。

アブラハムとヨセフが話題にない原因

両氏が指摘する共通事項はアブラハムとヨセフの話がほとんどないという事実である。(実順位21位にアブラハム、25位にヨセフ、と一回ずつあるのみ) 創世記の読み方としては大きな欠点であるが、聖書の師・内村鑑三に影響されたからではなく、有島自身に原因があるのである。すなわち聖書を誤解しているのである。(札幌独立基督教会脱会前と聖書』を参照されたい) イサクとヤコブの相続権と予定説が話題にされると、必ずロマ書九、十、十一章が根拠として引用される。二十五歳の有島はこのロマ書が難解であると日記に記してから(明治36・2・5)、二ヶ月半、今度創世記でアブラハムの家系を調べる。へ朝創生記を読み、イサク、ヤコブの事蹟を読む。此の如き傳説より基督教的精神を發見せし事は餘程の難事なり。極めて僻見なる、極めて不公平なる神として顯るゝを見る。(明治36・4・20) イサクとヤコブの事蹟は創世記十六章から十七章に渡つてあるが、次男イサクとヤコブには恩寵が与えられているのに、長男イシマエルとエサウは一方的に呪われていることになることになると、えこひいきの神へ極めて不公平なる神に反抗した。家父長制度の敵しい明治時代、薩摩藩島津氏の一支族、有島家の長男武郎が同じ長男イシマエルとエサウに同情する気持も働いたであろうが、この時の神としてイサクに対する反感が、父アブラハムに対しても関心を薄めてしまつていたと考えられる。四ヶ月後、明治三十六年八月二十五日、米国留学、明治四十年四月十一日、ヨーロッパから帰国した時の心境は「日露戦争によつて基督教國民の裏面を見せられた。今の基督教に對する私の疑惑は段々深まつて行つた。(『リビングストーン傳』の序)である。翌年、明治四十一年十、十一、十二月、内村が『聖書之研究』に力作「アブラハム伝の研究」を掲載しているが、既に有島には、明治三十六年頃の聖書に對する熱烈な研究心はなかつた。明治四十三年五月、ついに札幌独立教会を脱会。大正十二年六月九日、有島が自殺した翌年、大正十三年一

月、『聖書之研究』に「ヨセフの話」が掲載された。第一部第四章「行爲義認」の中で、「私は、有島は神学的基盤の固まらない日本キリスト教界の動揺による犠牲者である、と見做している。」と述べてある。有島の聖書誤解を權威をもってはつきり正せる教会、そのような教会に恵まれていなかったことは残念である。

第四章 有島武郎とマタイ伝

はじめに

平成二年（一九九〇年）九月二十六日（水）、東京練馬カトリック神学院のネメシニギ教授に、同年十月十一日（木）、日本ハリストス正教会（東京復活大聖堂）の山口義人司祭に、「有島武郎とマタイ伝」の中の内容別順位」に従い有島の著作原文を著者と共に読みながら、質疑する機会があり、今回も貴重な意見、感想、指摘をノートすることができた。まず三つの一覧表を示すと次の通りである。

有島武郎全集とマタイ伝一覧表

7	6	5	4	3	2	1	番順	
23	23	23	23	23	23	23	年齢	
リビングストーン傳 四の三十七	リビングストーン傳 四の三十七	リビングストーン傳 四の三十七	リビングストーン傳 三の三十四	トビングストーン傳 三の三十一	リビングストーン傳 三の二十	リビングストーン傳 一	著作名	
						明治34年3月 一九〇一年	発表年月日	
							新潮卷・行	
8	1・150・7	1・148・13	1・147・18	1・141・20	1・136・18	10 11	1・77・9	頁・行
	8・11 12	18・12 13 14	7・26	28・18 19 20	5・6	10・37 38	4・4	章・節
齒す	の羊を憐れみ給ふ アブラハムと天國に坐 し、國の諸子は哀哭切	事業はなざどりし 九十九の羊より、一頭	砂上に家を築くが如き 在らむ	天地の間、我れ凡ての 力を有てり、汝と俱に	ひ 彼が餓渴く如く義を慕	り の我に協はざるものな	眼は常にパンのある所 にのみ注ぐ 我より父母を愛したも	要約原文 聖書語句
		23 43 93		121 122 123 133 137 209	11 54 71 75 79 85 104 105		40 59 185 194 196 199 201 208	同内容番号

第三部 増子方式

19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8
23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23	23
札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	札幌獨立教會	リビンダストン傳 七の六十七	リビンダストン傳 七の六十三	リビンダストン傳 七の五十四	リビンダストン傳 五の四十
							明治 34年10 月 11 12 一九〇一年				

1 ・ 314 ・ 17	1 ・ 314 ・ 15	1 ・ 314 ・ 3	1 ・ 311 ・ 11	1 ・ 307 ・ 13	1 ・ 307 ・ 1	16 ・ 301 ・ 15	7 ・ 295 ・ 6	1 ・ 214 ・ 9	4 ・ 207 ・ 3	1 ・ 185 ・ 8	9 ・ 27 ・ 46	11 ・ 156 ・ 10	
5 ・ 13 ・ 14	5 ・ 13 ・ 14	8 ・ 22	5 ・ 13 ・ 14	10 ・ 16	7 ・ 9	26 ・ 39 ・ 42	5 ・ 13	5 ・ 6	10 ・ 3	27 ・ 46	7 ・ 7		
ならん	世の光となり地の鹽と ならん	紀を葬らしめよ 十九世紀をして十九世 ならん	世の光となり地の鹽と ならん	「蛇の如くさとかれ」 得たる	パンを得んとして石を 跪き禱る	御心を爲さしめ給へと して	地の鹽たる可き青年を するもの	餓へ渴く如く眞理を愛 するもの	如き無智なる弟子に 基督が、漁夫、税吏の バクタニを呼びし	エリ、エリ、ラバ、サ バクタニを呼びし	求めよさらば興へられ ん		
12 16 18 37 38 39 82	12 16 19 37 38 39 82	28 86 117 142 143 192	12 18 19 37 38 39 82	73 193	8 27 182	163 164 176	44 46 83 90 94 96 157 158	16 18 19 37 38 39 82	121 122 123 133 137 209	3 54 71 75 79 85 104 105	20	24 49 99	14 27 182

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20
30	27	27	26	26	25	25	25	25	23
札幌獨立教會沿革	露國革命黨の老女	露國革命黨の老女	Development of Japanese Civilization	日本文明の發展	末光續宛書簡	末光續宛書簡	末光續宛書簡	末光續宛書簡	札幌獨立教會
一九〇八年	明治41年12月	一九〇五年	明治38年4月	日 一九〇四年	明治37年6月10		日 一九〇三年	明治36年8月22	
5 ・ 93 ・ 10					13	8 ・ 19 ・ 12	8 ・ 19 ・ 8	12 8 ・ 19 ・ 11	8 ・ 19 ・ 9
1 ・ 41 ・ 9	1 ・ 358 ・ 5	1 ・ 356 ・ 2	1 ・ 579 ・ 26	8 9	1 ・ 635 上 ・	16 17 18	13 ・ 48 上 ・	8 9	13 ・ 48 上 ・
22 ・ 37 38 39	8 ・ 20	7 ・ 9	27 ・ 32 ・ 44	1 ・ 18 ・ 25	27 ・ 32 ・ 44	1 ・ 18 ・ 25	27 ・ 46	7 ・ 26	23 ・ 37
す可し、隣を愛す可し	爾精神を盡し、神を愛す可し、隣を愛す可し	「人の子」と同じく枕すべき所だになかりき	石にあらずしてパンなり				「主よ何ぞ我を捨て給ふや」		漁夫と税吏とを使徒となし
91 186	17 86 117 142 143 192	8 14 182	25 45 64 65 77 78 88 95		26 45 64 65 77 78 88 95		9 49 99	5 43 93	30

第三部 増子方式

36	35	34	33	32	31	30
30	30	30	30	30	30	30
札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革	札幌獨立教會沿革
13 5 105 4	5 103 12	5 103 8	5 99 12	5 94 13	5 94 9	5 94 9
422 7	1 421 17	1 420 9	17 1 416 16	1 412 9	1 412 5	1 412 5
32、 7、 21、	6 9 14 26	5 16 45 48、	31 9 36、 26、	31 32 10 11、 21、	5 46、 9、	21 31 32 11、 10 3、 10 3、 46、 9、 10
父は	唯一の天父、我等の天 な有様	牧者を失つた群羊の様 な有様	救は實に税吏や娼婦か ら始まる	成就	神の事業は税吏や娼婦 や漁夫や農民によつて	一粒の辛子種やかて
32 42 57 58 92 140 141	47 97 155 165	169 170 171 177 184 189 190	33 41 60 62 80 101 161 168	169 170 171 177 184 189 190	34 41 60 62 80 101 161 168	21

第三部 増子方式

	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44
35	33 }	32	32	32	34 31 }	34 31 }	34 31 }	34 31 }	34 31 }	34 31 }
ス	或る女のグリンブ	叛逆者	叛逆者	叛逆者	ブランド (初稿) 四十一	ブランド (初稿) 三十九	ブランド (初稿) 三十九	ブランド (初稿) 三十九	ブランド (初稿) 三十七	ブランド (初稿) 三十三
七										十三
大正3年3月	明治44年1月			一九一〇年	明治43年11月					
		13 14	5 137 12	5 137 9	5 137 8	12	1 473 11	1 470 15	4 470 3	1 470 1
	2 100 9	7 31 2	7 30 17	7 30 16	7 30 16	12	1 473 11	1 470 15	4 470 3	1 470 1
	18 21 35	3 1 4	3 14	3 1 2 3	3 1 2 3	27 46	27 29	31 9 36 26	26 45 46	1 18 24
對する問答	ベテロと基督の寛恕に	の子に歡喜	野蜜と蝗で瘦せて、神	ヨハネが生涯の絶頂、	に來る乎	我は爾よりバプテスマ	を受くべき者、反て我	に來る乎	神の國は近づけり、悔	い改めよ
	68 69 87 179 180	50 51 81 112 191	50 52 81 112 191	51 52 81 112 191	9 24 99	55 98	35 97 155 165	163 164 176	13 44 83 90 94 96 157 158	25 26 64 77 78 88 95
										13 46 83 90 94 96 157 158

63	62	61	60	59	58	57	56	55	54
36	36	36	36	36	36	36	35	35	33
内部生活の現象	内部生活の現象	内部生活の現象	内部生活の現象	暗示	新しい畫派からの	眞夏の頃(夢)	草の葉	草の葉	同級生
一九一四年	大正三年七月		大正三年七月	大正三年七月	大正三年二月	大正三年一月	一九一三年	大正二年七月	明治四四年四月
5・221・4	5・216・11		5・209・12	5・209・12	3・444・4	3・443・9	2・5175・1	8・5174・7	18・5157・17
15・550・13	15・546・9	19・793・18	14・789・13	7・8210	6・11214	6・1122	56・75815	4・7583	2122・1589上
7・21	26・613	7・21	26・613	4・10	6・9	6・9	23・37	27・30	5・310
主よ、主よと云ふもの の様に	基督の傍に侍るマリヤ ず	主よ主よと云ふもの盡 々く天國に入るにあら	基督の傍に侍るマリヤ のやうに	子吼した基督	恵み深い在天の神様 「悪魔よ、退け」と獅	天に在します神様 に	牝鶏のその雛を翼の下 に集めようとするやう	羅馬の士卒が基督の面 に唾を吐きかけた	耶蘇は小生の様な人を 天國に入るべければな
61 84 89 129 146 183	169 170 171 177 184 189 190 168	63 84 89 129 146 183	169 170 171 177 184 189 190 168	33 40 185 194 196 199 201 208	32 36 42 57 92 140 141	32 36 42 58 92 140 141	22 48 98	121 122 123 133 137 209	3 11 71 75 79 85 104 105

第三部 増子方式

73	72	71	70	69	68	67	66	65	64
39	39	38	38	38	38	38	37	37	37
死と其の前後	ミレ―禮讚	首途(初出)	洪水の前 三	洪水の前 二	洪水の前 二	洪水の前 一 (未定稿、三幕劇) 一九一六年	サムソンとデリラ (未定稿) 大正四年九月 一九一五年	宣言(初出)	宣言(初出)
大正六年五月	一九一七年	大正五年三月 一九一六年				大正五年一月		大正四年七月 一九一五年	
4・59・14	5・267・1								5
3・25・5	7・132・10	10	3・556上・	457・13	2・456・16、	2	2・424・18	12	2・535上・
10・16	14・11・12	5・3	24	10・6、15・	18・21・22	18・21・22	19	18・20	45
聖書にも「蛇の如く慧	女 ハネを穢 <small>くど</small> らしたのも彼	ヘロデ王をして洗禮 <small>ミレ</small> ヨ	「心の弱しき者は幸なり」	亡はれた小羊	俺はカインの呪ひを七十七倍にして受けよう	呪はれよ	三人の義人の祈る所にエホバは必ずお出でになる	ヨセフにも増した善良な	マリヤが聖靈を孕み給ひしやうに
15 193	172	121 122 123 133 137 209	3 11 54 75 79 85 104 105	67 178 181	53 68 87 179 180	53 69 87 179 180	70 178 181	100	25 26 45 65 64 77 78 88 95
									悉く天國に入るにあら

83	82	81	80	79	78	77	76	75	74	
40	40	40	40	40	39	39	39	39	39	
運命と人	旅する心 六十二	迷路 四	迷路 二	迷路 (首途)	宣言	宣言	自己(我)の考察	クララの出家	死と其の前後	
大正7年10月	大正7年9月 一九八一年			大正7年6月 一九一八年		大正6年12月 一九一七年	大正6年11月 一九一七年	大正6年9月 一九一七年	一九一七年	
5・376・15	2・556・7	1・375・3	11 1・359・10	1・344・11	1・113・2	1・112・16	3 5・313・2 4	1・281・4	5 4・90・4	
7・237・16	6・88・5	3 19 3・257・19	3 3・242・18	3 3・227・18	2 355・15	2 355・11	16 7・412上・19	3 141・13	9 3・54・8	
26・39	5 10 11 14	3 28 27 56 61、 1 1 6		5 3	1 19	1 20	6 3	5 3 8	5 28	
「主よ、死の杯を我れ ず」	「岡の上の市は隠れ ず」	一獻進呈 パプテズマのヨハネが	ダラのマリヤ	白書姦淫を犯したマグ なり」	「心の貧しき者は幸 なり」	ななつかしい方 ヨセフにも増した善良	ひしやうに マリアが聖靈を孕み給 ない	奥へるのに右の手です る事を左の手に知らせ ない	何よりいい事は心の清 く貧しい事だ ものだ たものは姦淫を犯した ものだ	「かれ」と 女に對して心を動かし たものは姦淫を犯した ものだ
13 44 46 90 94 96 157 158	12 16 18 19 37 38 39	50 51 52 112 191	169 33 34 41 60 62 101 161 168	33 121 122 123 133 137 209	3 11 54 71 75 85 104 105	25 26 45 64 65 77 88 95	25 26 45 64 65 78 88 95	130 121 122 123 133 137 209	3 11 54 71 79 85 104 105	108 135 136

第三部 増子方式

	93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	
	41	41	41	41	41	41	41	41	41	40	
	ブランド (定稿)	ブランド (定稿)	藝術論 五	藝術論 四	藝術論 一	或る女 三十	或る女 七	一切か無か	御獄教の中教正	魂は私に告げる	
一三	八	大正八年四月 一九一九年			大正八年三月 一九一九年		大正八年三月、六月 一九一九年	一九一九年	大正八年二月 一九一九年	一九一八年 大正七年十一月 一九一八年	
4	5・15・3	5・10・1				2・27・12	5		4・5	6・20・3	
3	7・27・2	7・27・5	13 14	15 598上・	2 3	15 597上・	12 13 14	15 589下・	4 274・8	4 50・9	
	7・26	6・11	39	19・19、 22・	26・39	7・21	1・23	18・21 35	8・21	5・3	
	「砂の上に築かんとするものよ」	も興へ給へ 我等に日々の糧を今日 を愛して居るだらうか	自分愛する如く他人 を愛して居るだらうか	「此杯を我より離ち玉 へ」	主よ主よと云ふ者盡く 天國に入るに非ず	神我等と共に在し給は ん	答 取り交はされた寛恕問	ペテロと基督との間に ら」	「待つて下さい。老つ た父が疲れてゐますか なり云々」	「心の貧しき者は幸福 く天國に入るに非ず 主よ主よといふ者、悉 より放ち給へ」	
	5 23 43	32 36 42 57 58 140 141	29 186	163 164 176	13 44 46 83 94 96 157 158	61 63 84 129 146 183	25 26 45 64 65 77 78 95	53 68 69 179 180	17 28 117 142 143 192	121 122 123 133 137 209	3 11 54 71 75 79 104 105

103	102	101	100	99	98	97	96	95	94						
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41						
聖 餐 一	聖 餐 一	聖 餐 一	サムソンとデリラ (定稿)	ブランド (定稿) 四〇	ブランド (定稿) 三八	ブランド (定稿) 三八	ブランド (定稿) 三八	ブランド (定稿) 三六	ブランド (定稿) 三二						
		大正8年10月 一九一九年	大正8年10月 一九一九年												
4 ・ 211 ・ 10	4 ・ 210 ・ 11	3	4 ・ 207 ・ 2	16	4 ・ 202 ・ 15	2	5 ・ 49 ・ 1	5 ・ 45 ・ 18	7	5 ・ 45 ・ 6	5 ・ 45 ・ 4	5 ・ 40 ・ 14	14	5 ・ 35 ・ 13	
7	5 ・ 111 ・ 6	5 ・ 110 ・ 6	2	5 ・ 106 ・ 1	10	5 ・ 101 ・ 9	7 ・ 311 ・ 6	7 ・ 308 ・ 8	17	7 ・ 307 ・ 16	15	7 ・ 307 ・ 14	7 ・ 303 ・ 11	17	7 ・ 297 ・ 16
	4 ・ 25	13 ・ 55	26 ・ 13	18 ・ 20	27 ・ 46	27 ・ 29	31	9 ・ 36 ・ 26		26 ・ 45 ・ 46		1 ・ 18 ・ 24		26 ・ 39	
<p>が主が説教をなごつた の息子 ヨルダン河の向岸で我</p> <p>ナザレと云ふ村の大王</p> <p>るべし</p> <p>記念の爲めに宣傳へら るべし</p> <p>此婦のなし、事もその 記念の爲めに宣傳へら るべし</p> <p>けて下さる</p> <p>三人の義人の祈る所に はエホバは必ず耳を傾 けて下さる</p> <p>をその胸には抱き給は ざる</p> <p>荊棘の冠</p> <p>を離れて</p> <p>愛牧したる羊群は牧者 を離れて</p> <p>でしの意氣を以て</p> <p>基督がゲツセマネを出 れり</p> <p>神子降誕の記念日は來 り</p> <p>神の子が苦き杯を我 より放ち給へ</p>															
		109	33 169 34 170 41 171 60 177 62 184 80 189 161 190 168	66	9 24 49	48 55		35 163 47 164 155 176 165		13 163 44 164 46 176 83 90 94 157 158		25 163 26 164 45 176 64 65 77 78 88		13 44 46 83 90 96 157 158	

第三部 増子方式

113	112	111	110	109	108	107	106	105	104												
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41												
聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐	聖餐												
—	—	—	—	—	—	—	—	—	—												
4・218・3	4・217・10	4・216・10	4・215・13	4・215・7	11・12・213・10	4・212・3	15・4・211・14	4・211・13	4・211・11												
5・117・14	5・117・2	5・116・3	5・115・7	5・114・19	5・6・113・4	5・111・17	11・5・111・10	5・111・9	5・111・7												
9・20・21	4・17	23・25・27・29	23・25・27・29	13・13・14・15	13・55	5・28・29	5・19	11・2・4	5・3												
てくれ	まで、その裳に觸らせ	今日こそは私を主の側	天國が近づいたのだ	悪魔のやうに憎み	イエスはパリサイ人を	人の偽善者共	災ひなるかなパリサイ	しい大工の子	お前の主とあがめる卑	幸ひ	のは誓盲になつた方が	女を見て心を動かすも	なる事が出来る	天國に於て大なる者と	者は聞き	は見、跛者は歩み、聾	洗福のヨハネに「誓盲	その人は安慰を得」	「哀しむ者は幸なり。	「心は貧しき者は幸	なり。天國は即ち」
115 153	50 51 52 81 191	110 151	111 151	102	74 135 136	154 160	121 122 123 133 137 209	3 11 54 71 75 79 85 104	121 122 123 133 137 209	3 11 54 71 75 79 85 105											

122	121	120	119	118	117	116	115	114
41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
一	一	一	一	一	一	一	一	一

4 ・ 221 ・ 18	4 ・ 221 ・ 14	6 4 ・ 221 ・ 5	3 4 4 ・ 221 ・ 2	4 ・ 220 ・ 17	7 4 ・ 220 ・ 6	6 4 ・ 220 ・ 5	4 ・ 220 ・ 3	9 10 4 ・ 219 ・ 8
5 ・ 121 ・ 9	5 ・ 121 ・ 5	16 5 ・ 120 ・ 15	3 15 5 ・ 120 ・ 12	5 ・ 120 ・ 9	17 5 ・ 119 ・ 16	16 5 ・ 119 ・ 15	5 ・ 119 ・ 13	3 119 ・ 2 5 ・ 118 ・ 19
5 ・ 9	5 ・ 4	6 ・ 33 34	6 ・ 28 29 30	5 ・ 38	8 ・ 20	11 ・ 28 29	9 ・ 20	19 ・ 13 14 15

子供達のやうにならな ければ天國に行く事は 出来ない	私の妻は十三年血漏を 病んで臥たきり	勞役して重荷に苦しん である、柔和にへり下 つた心で	空の鳥には巢がある、 人の子なる私は枕する 所さへ	「目の代りに目 齒の代りに齒」	野に行つて百合の花を 見、ソロモンの榮華の 極みでも	明日の事を憂ひ慮ふな 今日の事は今日で澤山 だ	悲しまされる者は幸ひ だその人は慰められる 和睦を求めるものは幸 ひだその人達は神の子
105 121 123 133 137 209	3 11 54 71 75 79 85 104	105 122 123 133 137 209	3 11 54 71 75 79 85 104	119	120	17 28 86 142 143 192	113 153

第三部 増子方式

130	129	128	127	126	125	124	123
41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
一	一	一	一	一	一	一	一

12	4 222 11	11	4 222 10	4 222 10	4 222 9	7 8	4 222 6	5	4 222 4	3	4 222 2	4 222 1	4 221 18
2	5 122 1	5 122 1	5 121 19	5 121 19	5 121 18	16 17	5 121 15	14	5 121 13	12	5 121 11	10	5 121 9
	6 1	7 21	19 21	19 21	19 20		19 18 19		19 17		19 16		5 3

所が御國に這入れる譯	眼に見える正義をした	い	悉く這入れる譯ではな	主よ主よと呼ぶものが	さるがいゝ	に、私に従つて生活な	所有物を負しいもの	れないのですか	また天の御國には這入	守つてゐる積りです、	べし	己の如く隣の人を愛す	羅馬の律法ですか、自	らう	律法を守るのがいゝだ	命を得ようとするなら	ればいゝのです	は、どんないゝ事をす	限り無き命を得るに	の御國はその人のもの	謙遜るものは幸ひだ天	等と稱へられる
76	61 63 84 89 146 183				204	124 125 126 127 131 132 195 200	204	124 125 126 127 128 131 132 195 200	204	124 125 126 127 128 131 132 195 200	204	124 125 126 127 128 131 132 195 200	204	124 125 126 127 128 131 132 195 200	204	125 126 127 128 131 132 195 200	204	105 121 122 133 137 209	3 11 54 71 75 79 85 104			

140	139	138	137	136	135	134	133	132	131
41	41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
一	一	一	一	一	一	一	一	一	一

4 ・ 226 ・ 11	4 ・ 226 ・ 8	4 ・ 226 ・ 7	4 ・ 224 ・ 12	12 4 ・ 223 ・ 11	4 ・ 223 ・ 11	11 4 ・ 223 ・ 10	4 ・ 223 ・ 3	18 4 ・ 222 ・ 17	4 ・ 222 ・ 16
5 ・ 125 ・ 16	13 5 ・ 125 ・ 12	5 ・ 125 ・ 11	5 ・ 123 ・ 19	1 5 ・ 122 ・ 19	5 ・ 122 ・ 19	19 5 ・ 122 ・ 18	5 ・ 122 ・ 11	8 5 ・ 122 ・ 7	5 ・ 122 ・ 6
6 ・ 13	7 ・ 3	7 ・ 1	5 ・ 6	29 18 ・ 9、 5	5 ・ 28	18 ・ 6	5 ・ 6	19 ・ 24	19 ・ 22

「主よ、我れを試練に 木を	て、自分の眼に在る 架	兄弟の眼にある塵を見 あなた方も亦裁かれる	人を裁いてはいけない 愛する	饑多渴くごとく正義を 受する	の眼を多ぐり抜いて 右の眼が躓かしたら右	淫 ものは心の中で既に姦 婦女を見て色情を起す	挽脊を首にかけて海に 婦女を見て色情を起す	子供の心虚げるよりは 慕ふものは幸ひである	饑多渴くやうに正義を 通るより	るのは駱駝が針の目を 富んだ者が天國に這入	沈みて退場	一人の若き男半ば打ち ではない
32 36 42 57 58 92 141	138 188	139 188	105 121 122 123 133 209	3 11 54 71 75 79 85 104	108 134 135	74 108 136	136 105 121 122 123 137 209	3 11 54 71 75 79 85 104	204	124 125 126 127 128 131 195 200	204	124 125 126 127 128 132 195 200

159	158	157	156	155	154	153	152	151
41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
二	二	二	二	二	二	二	二	二

4 ・ 252 ・ 4	4 ・ 252 ・ 1	4 ・ 251 ・ 18	18 4 ・ 251 ・ 17	12 4 ・ 250 ・ 11	4 ・ 250 ・ 8	15 4 ・ 249 ・ 14	4 ・ 249 ・ 9	5 4 ・ 245 ・ 4	4 ・ 245 ・ 4
5 ・ 150 ・ 11	5 ・ 150 ・ 8	5 ・ 150 ・ 7	5 ・ 150 ・ 7	2 5 ・ 149 ・ 1	5 ・ 148 ・ 17	5 ・ 148 ・ 6	5 ・ 147 ・ 19	19 5 ・ 143 ・ 18	5 ・ 143 ・ 18
9 ・ 17	26 ・ 39	26 ・ 38	26 ・ 52	26 ・ 35	11 ・ 17	9 ・ 22	16 ・ 25 27 29	23 ・ 13 14 23	23 ・ 13 14 23

古い革袋に新しい酒を 下さい	神よ、これ程恐ろしい 時を早く過ぎ去らして	私の魂は痛んで悲しむ ばならぬ	劍のお蔭で勝つたもの は、劍のお蔭で滅びね ん	私は死んでもを主お疑 ひ申すことは出来ませ ん	うとはしない なた方は踊つてくれよ 私が笛を吹いても、あ なを救つたのだ	あなたの信仰があなた のよみが	命を得ようとするもの はこれを失ひ、失ふも りする	祭司を偽善者と罵つた りする	れで追ひ出された時
	163 164 176	13 163 44 164 46 176	13 44 46 83 90 94 96 157	35 47 97 165	106 160	113 115		110 111	

第三部 増子方式

168	167	166	165	164	163	162	161	160
41	41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
三	三	三	三	三	三	三	三	二

4 ・ 263 ・ 18	15	4 ・ 260 ・ 14	10 11	4 ・ 260 ・ 8	4 ・ 258 ・ 12	7	4 ・ 258 ・ 6	3	4 ・ 255 ・ 2	16	4 ・ 254 ・ 15	15	4 ・ 253 ・ 14	4 ・ 253 ・ 5	5
5 ・ 161 ・ 16	16	5 ・ 158 ・ 15	11 12	5 ・ 158 ・ 9	5 ・ 156 ・ 15	10	5 ・ 156 ・ 9	5 ・ 153 ・ 8	3	5 ・ 153 ・ 2	3	5 ・ 152 ・ 2	5 ・ 151 ・ 11	5 ・ 151 ・ 11	12
26 ・ 6 7	21 ・ 9	26 ・ 17 18 19	26 ・ 31	26 ・ 42	26 ・ 18 45	21 ・ 9 10	26 ・ 2 6	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17	11 ・ 17
イエスの足許に坐し、 な	ホザナ、神の名により て来る小羔は幸なるか な	明日 堂に登場、逾越の節も	別れの備へ、弟子達食 のやうになるだらう	牧人を失つた羊の群れ 来ない	まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない	私が死の杯を飲み盡す まで、理解する事が出 来ない
33	162		35	158	13	158	13	158	13	167	169	33	106		
34	173		47	163	44	164	44	164	44	173	170	34	154		
41			97	176	46	176	46	176	46		171	41			
60			155		83		83		83		177	60			
62					90		90		90		184	62			
80					94		94		94		189	80			
101					96		96		96		190	101			
161					157		157		157			168			

176	175	174	173	172	171	170	169
41	41	41	41	41	41	41	41
聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖	聖
餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐	餐
三	三	三	三	三	三	三	三

4 ・ 269 ・ 6	4 ・ 267 ・ 5	λ 267 ・ 2	4 ・ 266 ・ 18	4 ・ 265 ・ 13	13	4 ・ 264 ・ 12	3	4 ・ 265 ・ 2	λ 265 ・ 2	4 ・ 264 ・ 18	10	4 ・ 264 ・ 9	λ 264 ・ 2
5 ・ 166 ・ 17	5 ・ 164 ・ 18	14 15	5 ・ 164 ・ 13	5 ・ 163 ・ 9	10	5 ・ 162 ・ 9	18	5 ・ 162 ・ 17	16 17	5 ・ 162 ・ 15	7	5 ・ 162 ・ 6	17 18
26 ・ 36	26 ・ 23	26 ・ 20 21 22	21 ・ 9 10 11	14 ・ 1 λ 12		26 ・ 13		26 ・ 10 11 12		26 ・ 8 9		26 ・ 8 9	
ゲツセマネの園の方に 食ふものム一人だ	私と麴麩を分ち合つて の中に驚き	私を敵に賣り渡さうと するものがある、弟子 なつた	主がエルサレムでホザ ナとの歓迎をお受けに なつた	サロメが舞ひをして、 ヨハネの首をへロデ王 に斬らせた		も永久に宣べ傳へられ る		マリヤは葬りの日の爲 めにこの油を、私はい つまでも一緒にゐない マリヤのしてくれた事 も永久に宣べ傳へられ る		高を貧しい人達に施し たら		贅澤な品だ、その賣り 高を貧しい人達に施し たら	その瓶の口を破り、ナ ルドの油もて
13 44 46 83 90 94 96 157	174	175	162 167	72	168 169 170 171 177 184 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	168 169 171 177 184 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	168 170 171 177 184 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	168 170 171 177 184 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	169 170 171 177 184 189 190

第三部 増子方式

186	185	184	183	182	181	180	179	178	177			
42	42	42	42	42	41	41	41	41	41			
惜みなく愛は奪ふ	惜みなく愛は奪ふ 一八	惜みなく愛は奪ふ 一八	惜みなく愛は奪ふ 六	内部生活の現象 (講演) 一九二〇年	大洪水の前 四	大洪水の前 二	大洪水の前 二	大洪水の前 一 (定稿、四幕劇) 一九一九年	聖餐三			
			一九二〇年	大正九年六月	大正九年一月			大正八年十二月				
6 222 15	6 222 9	8 222 7	6 181 8	3 329 2	6 155 12	4 154 16	4 139 18	14 4 13	6 126 5	4 270 3	7	
8 185 10	8 185 4	3 185 2	8 147 11	22 23	8 437 下	18 5 4	5 39 19	5 35 17	14 5 13	5 167 14	18 19	
22 39	4 1 11	26 6 13	4 18 22	7 21	7 12	24 10 6 15	18 21 22	18 21 22	24 10 6 15	26 6 7		
汝自身の如く隣人を愛 てし過た時	四十日を荒野に斷食し 圍繞された	無學な漁夫と娼婦とに ず、神の旨に	く天國に入るにあち	主よ主よといふもの悉	汝の欲する所を他人に 施すべし	亡はれた小羊 倍の罰があれ	七倍の罰があるのな ら、私の爲めに七十七	七倍して呪はれよ	凡ての呪ひの數に七十	失はれた小羊	こはしてしまつて	散歩に行かう、イニス 立ち上る
29 91	1 40 59 194 196 199 201 208	168 169 170 171 177 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	61 63 84 89 129 146	8 14 27	67 70 178	53 68 69 87 179	53 68 69 87 180	67 70 181	168 169 170 171 184 189 190	33 34 41 60 62 80 101 161	158 163 164

195	194	193	192	191	190	189	188	187
44	44	44	44	43	39	39	42	42
倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に 「静思」を讀んで	倉田氏に 「静思」を讀んで	獨り行く者	星座	LOVE THE PLUNDERER	借みなく愛は奪ふ 二〇	借みなく愛は奪ふ	借みなく愛は奪ふ 一八
		大正11年11月 一九二二年	大正11年7月 一九二二年	大正10年7月 11年5月 一九二一〜一九 二二年	大正6年8月 一九一七年	大正6年6月 一九一七年		一八
7 ・ 311 ・ 15	7 ・ 302 ・ 7	6 7 ・ 301 ・ 4		6 3 ・ 310 ・ 5		13 5 ・ 279 ・ 12	6 ・ 228 ・ 11	6 ・ 222 ・ 18
9 ・ 121 ・ 14	9 ・ 111 ・ 14	15 9 ・ 110 ・ 13	3 4 9 ・ 245 上 ・	5 ・ 329 ・ 5	10 7 ・ 151 ・ 9	11 7 ・ 141 ・ 10	8 ・ 190 ・ 16	8 ・ 185 ・ 13
19 ・ 24	4 ・ 1 ・ 11	10 ・ 16	8 ・ 20	17 3 ・ 2、 4	26 ・ 6 ・ 13	26 ・ 6 ・ 13	7 ・ 1 19 ・ 21	8 ・ 22、 9 ・ 24、
富めるものが天國に入	惑 荒野に於ての基督の誘	鳩の如き柔和な人	枕する所なし 巢あり、然も人の子は	狐は穴あり天空の鳥は	悔い改めよ、その人は	天國に入るべければな	「汝等互にさばくなか	汝等も亦我にならへ
124 125 126 127 128 131 132 200	1 40 59 185 196 199 201 208	15 73	17 28 86 117 142 143	50 51 52 81 112	168 33 169 170 171 177 184 189	33 34 169 170 171 177 184 190 161	138 139	

第三部 増子方式

204	203	202	201	200	199	198	197	196	
44	44	44	44	44	44	44	44	44	44
倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)	倉田氏に 「静思」を讀んで (草稿)
						7 315・1 314 18	17 18 7 314 16	2 7 313 1	16
3 4	9 442上 1 2	9 442上 19 23	9 441下 6 7	9 440下 14 15	9 440上 10	9 435下 12 13	9 124 11 10 11	9 124 9 17	9 122 16 15
19 24	33 12 34 23	12 1 8	4 8 11	19 24	4 1 11	33 12 34 23	12 1 8	4 8 11	
は、駱駝が針の目を通	富める者の天國に入る	「爾毒蛇の裔よ」 取つて喰ひました	安息日が無意味に守ら れる時、麥畑から穂を	世界の國々とその權力 を汝に與へよう	も難い、 駱駝が針の孔を通るより	基督の荒野の誘惑	「爾毒蛇の裔よ」 で穂を喰ひました	安息日が無意味に守ら れる時、麥畑から平氣	世界の國々とその權力 とを汝に與へよう
200	124 125 126 127 128 131 132 195	198	148 197	1 40 59 185 194 196 199 208	204	124 125 126 127 128 131 132 195	1 40 59 185 194 196 201 208	203	148 202
									204

209	208	207	206	205
45	45	44	44	44
悲劇 傾く時代の生める	唐澤秀子宛書簡	「静思」を讀んで 倉田氏に（草稿）	「静思」を讀んで 倉田氏に	「静思」を讀んで 倉田氏に
一九二三年 大正12年5月	日 一九二三年 大正12年3月24			
			11 7 ・ 314 ・ 10	7 ・ 300 ・ 18
2 15 ・ 619 上・	15 14 ・ 634 上・	9 9 10 41下・	4 9 ・ 124 ・ 3	10 9 ・ 110 ・ 9
5 ・ 4	23 4 ・ 10、 16・	21 ・ 12 13	21 ・ 12 13	21 ・ 12 13
なり	悲しみあるものは幸福 <small>よきはふ</small>	「サタンよさがれ」 した つた商人達を撃退しま	繩を以つて宮殿に巢喰 つた を基督が繩で追ひ出し	るよりも難い 神の宮の神聖を保つた めに繩を以て商人を追 ひ出しました 神殿に巢喰つた商人達
105 3 121 11 122 54 123 71 133 75 137 79 85 104	1 40 59 185 194 196 199 201	150 205 206	150 205 207	150 206 207

第三部 増子方式

番	期	日	章	節	内	容	同	項
17	36	4	24	36	無抵抗 信仰が見いだす門 山上の垂訓 弟子の覺悟 選民に對する警告 東方博士の訪問 絶對なる神の主權 ソロモン榮華及はず 迷羊を導き給へ 此膏費やすは何故ぞ マリヤの香油注ぎ 東方博士の訪來 迷羊を導き給へ 山上の垂訓 迷羊を導き給へ 絶對なる神の主權 絶對なる神の主權	7	16	
16	36	3	24	36		7	17	
15	36	3	18	12		9	13	
14	36	3	5	1		3	24	
13	36	2	18	12		9	15	
12	34	12	2	1		6	10	
11	34	11	26	10		10	11	
10	34	11	26	8		11	13	
9	34	7	18	12		13	15	
8	34	4	6	29		35	17	
7	34	3	24	36		16	12	
6	33	1	2	1		28	14	
5	32	6	8	11		14	24	
4	32	6	8	22		26	34	
3	32	4	5	3		28	34	
2	31	12	7	13		28	34	
1	30	5	5	39		28	34	

觀錄錄 (日記) とマタイ伝福音書

37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
36	39	39	37	37	37	37	37	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36	36
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
9	12	9	9	9	9	8	7	9	8	8	6	5	5	5	5	4	4	4	4
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
15	22	3	19	13	19	6	27	1	29	25	19	13	8	8	8	30	22	21	19
5	18	6	5	25	23	11	10	18	8	7	5	17	5	27	10	11	4	3	1
・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
20	12	28	3	35	10	27	42	12	20	26	8	20	13	46	16	17	1	1	1
	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
	14	34				28		14									11	17	17
<p>イエスの系圖</p> <p>洗礼者ヨハネの出現</p> <p>荒野の試み</p> <p>笛吹けども踊らず</p> <p>蛇の如く慧</p> <p>何ぞ我を捨て給ふや</p> <p>世の鹽の存在意義</p> <p>芥子粒の如き信仰</p> <p>其人は神の國を見る</p> <p>砂上の樓閣</p> <p>主は枕する所なし</p> <p>迷羊を導き給へ</p> <p>異郷人に一杯の水</p> <p>我れに來れ</p> <p>キリストのみ教師</p> <p>旅人に宿を貸す</p> <p>心の貧者幸なり</p> <p>明日をわづらふな</p> <p>迷へる羊の如し</p> <p>行爲學者より勝れずば</p>																			
	9	8	3		8		9	4	3		3		3						
	13		14				13		14		14		14						
	15		24				15		24		24		26						
	29		26				36		34		34		34						

第三部 増子方式

「有島武郎とマタイ伝」の中の内容別順位

実 順 位 (点数 総回 数)	1	2
105 (20)	5・3468 91013 有島が問題に した章・節 (傍線は重要)	「題(題の範囲の章・節) 「山上の垂訓」「幸いな 人」(5・1と12)
節(聖書語句、要約原文) (著作名) (回数)「著作名」(発表又は執筆年月 日)年齢(章・節)、「全集とマタイ 伝一覧表」同内容番号(注)	3(心の貧しき者は <small>さいはひ</small> 幸いな り)「迷路」(首途) ⑤「日記」(明治32・4・17、36・3・ 1、5・8、6・19、37・9・19)、21 2526歳(5・3と10、5・1と7・28、 5・3813)、②『リビンググストン傳』 (明治34・3)23歳(5・6)、①「同級 生」(明治44・4)33歳(5・310)、① 「首途(初出)」(大正5・3)38歳(5・ 3)、①「クララの出家」(大正6・9・ 39歳(5・38)、①「迷路」(大正7・ 6)40歳(5・3)、①「御嶽教の中教 正」(大正8・2)41歳(5・3)、⑦「聖 餐」(大正8・10)41歳(5・3469)、 ①「傾く時代の生める悲劇」(大正12・ 5)45歳(5・4)、3115471757985104 121122123133137209 ②「日記」(明治34・11・24、11・24)23歳	

3			
(10) 65	4・14810 11、16・23	(4・1~11)	「荒野で誘惑を受ける」
(18)	46、9・1011、 10・3、21・ 3132、26・6 789101112	(26・6~13)	(罪深い姦淫のマリヤ)
		その瓶の口を破り、ナルドの油もて(「聖餐」)	
		10 (「悪魔よ、退け」と獅子吼した基督(「新しい畫派からの暗示」)	
		(26・8910111213)、②「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・12)30歳(4・1819、5・46、9・1011、10・3、21・3132)、①「半日」(明治42・2)31歳(4・1819、5・46、9・1011、10・3、21・3132、27・5661、28・1)、①「内部生活の現象」(大正3・7~8)36歳(26・6~13)、①「内部生活の現象」(大正3・7)36歳(26・6~13)、①「迷路」(大正7・6)40歳(27・5661、28・1)、⑦「聖餐」(大正8・10)41歳(26・2678910111213)、①「惜しみなく愛は奪ふ」(大正6・6)39歳(4・18~22、26・6~13)、①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・6)42歳(4・18~22、26・6~13)、①「LOVE THE PLUNDERER」(大正6・8)39歳(4・18~22、26・6~13)、333441606280101161168170171177184189190	
		①「日記」(明治36・4・22)25歳(4・1~11)、①「リビングストーン傳」(明治34・3)23歳(4・4)、①「半日」(明治42・2)31歳(4・1~11)、①「新しい畫派からの暗示」(大正3・2)36歳(4・10)、①「惜みなく愛は奪ふ」(大	

第三部 増子方式

6	5	4
(10) 53	(9) 58	(6) 56
8 ・ 20 21 22	5 ・ 13 14	18 ・ 12 13 14
22) 「弟子の覚悟」(8・18)	13 16) 「地の塩、世の光」(5・)	14) 「迷い出た羊」(18・10)
20 (人の子は枕する所なし) (「獨り行く者」)	13 14 (世の光となり地の鹽ならん) (「札幌獨立教會」)	12 (九十九の羊より) (「リビングストーン傳」)
29 (21 25歳 (8・20 22)、①「札幌獨立教會」)	13 (1)「日記」(明治36・5・8) 25歳(5・)	10、16・23)、1 40 59 185 194 196 199 201 208
14、①「旅する心」(大正7・9) 40歳	12 (2) 23歳(5・13 14)、③「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・12) 30歳(5・13)	7 25、36・2・
5・14)、12 16 18 19 37 38 39 82	13 (3)「札幌獨立教會」(明治34・10 11)	23、3・1、9・1、39・12・22) 23 25
	13 (4)「札幌獨立教會」(明治34・10 11)	28歳(18・12) 14)、①『リビングストーン傳』(明治34・3) 23歳(18・12 13 14)、
		6 (第5位は58点だが、56点「迷える羊」が第4位に上げられた。迷える羊である自分を導き給えという信仰が、日記に強く記されているからである。)
		⑤「日記」(明治34・7・25、36・2・
		子宛書簡」(大正12・3・24) 45歳(4・
		11) 44歳(4・1) 11、8) 11)、②「静思」を讀んで倉田氏に」(大正11・11) 44
		歳(4・1) 11、8) 11)、①「唐澤秀
		正9・6) 42歳(4・1) 11)、②「静
		思」を讀んで倉田氏に」(草稿)(大正11・

8		7
(12) 47		(9) 51
42 26 45 18 46 36 38 39		32 23 1 44 24 16 25、18 27、19 20
(26・36 46)	「ゲッセマネで祈る」	生「(1・18 25)」
39	「へ主よ、死の杯を我れより 放ち給へ」(「運命と人」)	20 「ハマリアが聖靈を孕み給ひ しやうに」(「宣言」)
23 ①「札幌獨立教會」(明治34・10 11 12) 23 歳(26・39 42)、②「ブランド(初稿)」	①「露國革命黨の老女」(明治38・4 27 歳(8・20)、①「一切か無か」(大正 8・3) 41 歳(8・21)、③「聖餐」(大 正8・10) 41 歳(8・20 22)、①「獨り 行く者」(大正11・7) 44 歳(8・20)、 ①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・6) 42 歳(8・22、9・9、16・24、19・21)、 17 28 86 117 142 143 187 192	①「日本文明の發展」(明治37・6) 26 歳(1・18 25、27・32 44)、①「De- velopment of Japanese Civilization」 (明治37・6) 26 歳(1・18 25、27・32 44)、①「ブランド(初稿)」(明治42・ 6 45・4) 31 34 歳(1・18 24)、 ②「宣言(初出)」(大正4・7 12) 37 歳(1・16 18 25)、②「宣言」(大正 6・12) 39 歳(1・19 20)、①「或る女」 (大正8・3 6) 41 歳(1・23)、①「ブ ランド」(大正8・4) 41 歳(1・18 24、 25 26 45 64 65 77 78 88 95

	13		12
	(8) 32		(7) 35
	50 10・32 33、12・	6・9、11、13、14 7・21、	3・1、2、3、4 6、11、12、14、15、 4・17、11・
	5 15)	「祈るときには」(6・	「洗礼者ヨハネ」(3・
	11(我等に日々の糧を今日も	2(神の國は近づけり、悔い	
	與へ給へ)(「ブランド」)	改めよ)(「叛逆者」)	
41歳(6・13)、32、36、42、57、58、92、140、141	②「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・	193	○印ニカ所(10・16、21)、①「札幌獨立
41歳(6・11)、②「聖餐」(大正8・10)	12)30歳(5・16、45、48、6・9、14、26、32、	①「日記」(明治36・4・21)25歳(3・	教會」(明治34・10、11、12)23歳(10・16)、
(6・9)、①「ブランド」(大正8・4)	7・21、10・32、33、12・50、15・13、16・	1・17)、③「叛逆者」(明治43・11)32	①「死と其の前後」(大正6・5)39歳
11)、②「眞夏の頃」(大正3・1)36歳	17、18・10、19、35)、①「ブランド(初稿)」	歳(3・1、2、3、4、14、15)、①「迷路」	(10・16)、①「静思」を讀んで倉田氏
(明治42・6、45・4)31、34歳(6・	(明治42・6、45・4)31、34歳(6・	歳(大正7・6)40歳(3・1、6、11、12、	に」(大正11・11)44歳(10・16)、15、73
6・9)、①「ブランド」(大正8・4)	11・5)43歳(3・2、4・17)、50、51、52	(大正7・6)40歳(3・1、6、11、12、	
41歳(6・13)、32、36、42、57、58、92、140、141	81、112、191	11・10、11)、①「聖餐」(大正8・10)41	
		歳(4・17)、①「星座」(大正10・7)	
		11・5)43歳(3・2、4・17)、50、51、52	

第三部 増子方式

17	17	16	13	13
26	(3) 26	(3) 30	(3) 32	(7) 32
5・19・20	31 17・20、 13・	24・ 36	10・ 33	7・ 21
「法律について」(5・	(17・20) 「芥子種一粒の信仰」 (24・36)	「絶対なる神の主権」 (24・36)	「キリストこそ唯一の教師」(23・10)	「お前たちのことは知らない」(7・21) 23)
20 (△汝の行爲學者とパリサ	賜へ(「日記」)	20 (△願くは芥子粒の如き信を	10 (△キリストこそ唯一の教師) (「日記」)	21 (△主よ主よと云ふ者盡く天國に入るに非ず) (「藝術論」)
①「日記」(明治36・9・15) 25歳(5・	13・31)、21・30	①「日記」(明治36・5・13) 25歳(17・	①「日記」(明治37・9・13) 26歳(23・	①「内部生活の現象」(大正3・7・8) 36歳(7・21)、①「内部生活の現象」(大正3・7・7) 36歳(7・21)、①「魂は私に告げる」(大正7・11) 40歳(7・21)、①「藝術論」(大正8・3) 41歳(7・21)、②「聖餐」(大正8・10) 41歳(7・21)、①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・6) 42歳(7・21)、61 63 84 89 129 146 183
	①「日記」(明治34・3・3)、36・3・7、4・3) 23 25歳(24・36)	③「日記」(明治34・3・3)、36・3・7、4・3) 23 25歳(24・36)	①「日記」(明治37・9・13) 26歳(23・10)、①「静思」を讀んで倉田氏に(大正11・11) 44歳(12・34、23・33)、①「静思」を讀んで倉田氏に(草稿)(大正11・11) 44歳(12・34、23・33)、198 203 (22点であるが、日記の実質が20点、合計32点になるため第13位)	①「内部生活の現象」(大正3・7・8) 36歳(7・21)、①「内部生活の現象」(大正3・7・7) 36歳(7・21)、①「魂は私に告げる」(大正7・11) 40歳(7・21)、①「藝術論」(大正8・3) 41歳(7・21)、②「聖餐」(大正8・10) 41歳(7・21)、①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・6) 42歳(7・21)、61 63 84 89 129 146 183

22	21	20	19
(3) 21	(4) 22	(4) 24	(10) 25
2・1 6	34 6・28 29 30 33	7・7 9 12	21 19・17 22 18 24 19 20
(2・1) 12	「思い悩んではならな い」(6・25) 34	「求めなさい」(7・7 12)	「金持の青年」(19・16 30)
「學者たちが訪れる」			
1 2 〈東方の博士はるばると 異象に導かれ〉(日記)	34 〈明日の事を憂ひ慮ふな〉 (「聖餐」)	7 〈求めよさらば與へられ ん〉『リビングストーン傳』	24 〈富んだ者が天國に這入る のは駱駝が針の目を通るよ り〉(「聖餐」)
26) 22 23 歳(2・1) 12、①「聖餐」	119 120 ②「日記」(明治33・1・24、34・12・ (大正8・10) 41 歳(6・28 29 30 33 34)、 ②「聖餐」	23 歳(7・7)、①「札幌獨立教會」(明 治34・10 11 12) 23 歳(7・9)、①「露國 革命黨の老女」(明治38・4) 27 歳(7・ 9)、①「内部生活の現象」講演(大正9・ 1) 42 歳(7・12)、8 14 27 182	20)、①「聖餐」(大正8・10) 41 歳(5・ 19)、107、(日記文内容は実質25点。有島 はキリスト者として自分の行為に気をも み、ヤコブ書(2・17)を重視していた (明治36・2・5))。 ⑦「聖餐」(大正8・10) 41 歳(19・16 17 18 19 20 21 22 24)、①「静思」を讀んで倉 田氏に(大正11・11) 44 歳(19・24)、 ②「静思」を讀んで倉田氏に(草稿)「 (大正11・11) 44 歳(19・24)、124 125 126 127 128 131 132 195 200 204

第三部 増子方式

25	25	24	23
(6) 18	(3) 18	(4) 19	(5) 20
18・21・22・35	19・19 22・37・38・39、	21・12・13	36 26・31・35、9・
21・35 「仲間をゆるさない家来」のたとえ話(18・	34・40 「最も重要な掟」(22・	す 「神殿から商人を追ひ出す」(21・12・17)	(26・31・35) 「ペトロの離反を予告」
21・35へペテロと基督との間に取り交はされた寛恕問答(或る女)	37・38・39へ爾精神を盡し、神を愛す可し、隣を愛す可し(札幌獨立基督教會沿革)	12・13へ神殿に集喰つた商人達を基督が繩で追ひ出した(「静思」を讀んで倉田氏に)	35へ私は死んでも主をお疑ひ申すことは出来ません(「聖餐」)
①「或る女のグリンプス」(明治44・1・大正3・3) 33・35歳(18・21・35)、 ②「洪水の前」(大正5・1) 38歳(18・21・22)、①「或る女」(大正8・3・6) 41歳(18・21・35)、②「大洪水の前」(大	①「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・12) 30歳(22・37・38・39)、①「藝術論」(大正8・3) 41歳(22・39、19・19)、 ①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・6) 42歳(22・39)、29・91歳	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(21・12・13)、②「静思」を讀んで倉田氏に(大正11・11) 44歳(21・12・13)、①「静思」を讀んで倉田氏に(草稿)(大正11・11) 44歳(21・12・13)、150・205・206・207	(大正8・10) 41歳(2・1・1・6)、①「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・12) 30歳(26・31、9・36)、①「ブランド(初稿)」(明治42・6・45・4) 31・34歳(26・31、9・36)、①「ブランド」(大正8・4) 41歳(26・31、9・36)、 ②「聖餐」(大正8・10) 41歳(26・31・35)、35・47・97・156

32	30	30	28	28	25
(2) 12	(4) 13	(3) 13	(2) 16	(2) 16	(3) 18
10・3	11・2 2 5 17	12・1 1 8	23・37	8・11 12	27・29 30
「十二人」を選ぶ(10・1 1 4)	「洗礼者ヨハネとイエ ス」(11・2 19)	「安息日に麥の穂を摘 む」(12・1 8)	「ああエルサレム」(23・ 37 39)	「選民のおごりに対する 警告」(8・5 13)	「兵士から笑いものにさ れる」(27・27 31)
3 「基督が、漁夫、税吏の如 き無智なる弟子に」(『リビ	17 「汝踊らず」(『日記」)	1 1 8 「安息日が無意味に守 られる時、麥畑から平氣で穂 を喰ひました」(『「静思」を 読んで倉田氏に」)	37 「牝鶏の雛を其翼に集むる 如く」(『末光續宛書簡」)	12 「衰れなる Kingdom の子 は outer darkness に放置」 (『日記」)	30 「羅馬の士卒が基督の面に 唾を吐きかけた」(『草の葉」)
23歳(10・3)、①「札幌獨立教會」(明	①『リビングストーン傳』(明治34・3) 2 5 17、106 154 160	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(12・1)、 ①「静思」を讀んで倉田氏に(『大正 11・11) 44歳(12・1 18)、①「静思」 を讀んで倉田氏に(『草稿」(大正11・ 11) 44歳(12・1 18)、148 197 202	25歳(23・37)、①「草の葉」(大正2・ 7) 35歳(23・37)、22 56	①「日記」(明治32・6・14) 21歳(8・ 11 12)、①『リビングストーン傳』(明治 34・3) 23歳(8・11 12)、7	180 正8・12) 41歳(18・21 22)、53 68 69 87 179

第三部 増子方式

40	36	36	36	36	34	34	32
(3) 8	(1) 10	(1) 10	(1) 10	(1) 10	(2) 11	(2) 11	(4) 12
7 ・ 1 3	10 ・ 42	25 ・ 35	1 ・ 1 17	7 ・ 13	5 ・ 38 39	11 ・ 27 28 29	24 ・ 6 、 15 ・
(7・1と6)	「異郷人に一杯の水」 (10・42)	「旅人に宿を貸す」(25・35)	「イエスの系図」(1・1と17)	「狭い門」(7・13 14)	「復讐してはならない」 (5・38と42)	「わたしの元に来なさい」 (11・25と30)	「二十二人」を派遣する」 (10・5と15)
て、自分の眼に在る梁木を	3〈兄弟の眼にある塵を見る人は祝福さる〉(日記)	35〈「I was a stranger; and Ye look me in.」(日記)	1と17〈馬太傳第一章系圖の人物を知らんが爲め創世記を讀む〉(日記)	13〈余を窄き門に導き給はん爲めに sinful なる事を〉(日記)	39〈人汝の左の頬を打たば、汝其人に又右の頬を向けよ〉(日記)	28〈悲まんよりは我れに來れ〉(日記)	6「亡はれた小羊」(大洪水の前)
3、①「惜みなく愛は奪ふ」(大正9・	②「聖餐」(大正8・10) 41歳(7・1 42)	①「日記」(明治37・9・19) 26歳(25・35)	①「日記」(明治36・4・19) 25歳(1・1と17)	①「日記」(明治31・12・31) 20歳(7・13)	38、118 39、①「聖餐」(大正8・10) 41歳(5・38、118)	181 27 28、①「聖餐」(大正8・10) 41歳(11・28 29)、116	治34・10 11 12) 23歳(10・3)、10 20 ②「洪水の前」(大正5・1) 38歳(10・6、15・24)、②「大洪水の前」(大正8・12) 41歳(10・6、15・24)、67 70 178

48	43	43	43	43	43	41	41
3	(1) 6	(1) 6	(1) 6	(4) 6	(2) 6	(2) 7	(2) 7
21・9 10	28・18 19 20	21・42	10・37 38	9 5・28 29、18・	18・20	14・1 12	6・1 3
「エルサレムに迎へられ	(28・16 20)	「ぶどう園と農夫」(21・33 46)	「平和でなく争ひを」(10・34 39)	「姦淫してはならない」(5・27 30)	「兄弟の忠告」(18・15 20)	「洗礼者ヨハネ、殺される」(14・1 12)	「施しをするときには」(6・1 4)
9 10 11	11	42	37 38	28	20	1	3
「主がエルサレムでホ	「リビングストン傳」	「最も大なる親石となつた」(「札幌獨立基督教會沿革」)	「我より父母を愛しもの、我に協はざるもの」(『リビングストン傳』)	「女に對して心を動かしたものは姦淫を犯したものだ」(「死と其の前後」)	「三人の義人の祈る所にはエホバは必ず耳を傾けて下さる」(「サムソンとデリラ」)	「サロメが舞ひをして、ヨハネの首をへロデ王に斬らせた」(「聖餐」)	(「聖餐」)
③「聖餐」(大正8・10)	①「リビングストン傳」(明治34・3)	①「札幌獨立基督教會沿革」(明治41・12)	①「リビングストン傳」(明治34・3)	①「死と其の前後」(大正6・5)	①「サムソンとデリラ」(未定稿)(大正4・9)	①「ミレト禮讀」(大正6・3)	①「自己(我)の考察」(大正6・11)
41歳(21・9 10)	23歳(28・18 20)、4	30歳(21・42)、31	23歳(10・37 38)、2	39歳(5・28)、 ③「聖餐」(大正8・10)	41歳(18・20)、 66 100	41歳(14・1 12)、 ①「聖餐」(大正8・10)	39歳(6・3)、 ①「聖餐」(大正8・10)
				74 108 135 136	72 172	76 130	138 139 188

第三部 増子方式

55	51	51	51	51	48	48
(1) 1	(2) 2	(2) 2	(2) 2	(2) 2	(3) 3	(3) 3
4・25	26・20 21 22 23	29 18・6 9、5・	13・55	23・12 18・1 、4、	25・27 29 23・13 14 15 23	9・20 21 22
「おびた だしい病人を治す」(4・23 、25)	「エダ裏切りの予言」(26・20 、25)	「罪への誘惑」(18・6 、9)	「ナザレで受け入れられない」(13・53 、58)	「天國でいちばん偉い者」(18・1 、5)	「律法学者とハリサイの人々を非難する」(23・1 、26)	「指導者の娘とイエスの服に触る女」(9・18 、26)
「おびた だしい病人を治す」(4・23 、25)	「エダ裏切りの予言」(26・20 、25)	「罪への誘惑」(18・6 、9)	「ナザレで受け入れられない」(13・53 、58)	「天國でいちばん偉い者」(18・1 、5)	「律法学者とハリサイの人々を非難する」(23・1 、26)	「指導者の娘とイエスの服に触る女」(9・18 、26)
ザナとの歓迎をお受けになつた」(聖餐)	20 21「今日こそは私を主の側まで、その裳に觸らせてくれ」(聖餐)	13「災ひなるかなハリサイの偽善者共」(聖餐)	3「子供のやうな素直な心になつて、エホバに頼らなければ」(聖餐)	55「お前の主とあがめる卑しい大工の子」(聖餐)	6「子供の心を虚げるよりは、挽巻を首にかけて海に」(聖餐)	20 21「私を敵に賣り渡さうとするものがある、弟子の中に驚き」(聖餐)
103 ①「聖餐」(大正8・10) 41歳(4・25)	21 22 23、174 175 ②「聖餐」(大正8・10) 41歳(26・20)	9、5・29、134 136 ②「聖餐」(大正8・10) 41歳(18・6)	102 109 ②「聖餐」(大正8・10) 41歳(13・55)、	18・1、4、145 147 ②「聖餐」(大正8・10) 41歳(23・12、	③「聖餐」(大正8・10) 41歳(23・13 14 15 23 25 27 29)、110 111、(「キリストこそ唯一の教師(23・10)に有島が感激しているので、第13位から分けてある。)	22、113 115 ③「聖餐」(大正8・10) 41歳(9・20 21

	55	55	55	55	55	55
(250) 総計	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(1) 1	(1) 1
	26・17 18 19	9・17	26・52	16・25	26・63 64	19・13 14 15
	(26・17) 19 「超越の食事の準備」	(9・14) 18 「断食についての問答」	(26・47) 56 「裏切られ、逮捕される」	(16・21) 28 「イエス、死と復活を予告する」	(26・57) 68 「最高法院で裁判を受ける」	13 14 15 「子供を祝福する」
	14 17 18 19 「別の備へ、弟子達食堂に登場、 <small>イブシ</small> 超越の節も明日」	17 18 19 「古い革袋に新しい酒を盛らうとしてはいけない」	52 53 「剣のお蔭で勝つたものは、剣のお蔭で滅びねばならぬ」	25 26 「命を得ようとするものはこれを失ひ、失ふものゝみが」	63 64 「僧上して自分から神の子と名乗つたり」	14 15 「子供達のやうにならなければ天国に行く事は出来ない」
	19、166	159	156	152	64、149	14 15、114
	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(26・17 18)	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(9・17)、	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(26・52)、	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(16・25)	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(26・63)	①「聖餐」(大正8・10) 41歳(19・13)

以上、三つの一覧表の中で、特に「有島武郎とマタイ伝」の中の内容別順位」の著作原文を著者と共に読んで正教会の山口義人司祭は、第1位「山上の垂訓」から順に意見と感想を述べ、総括として次の五点を指摘する。(一)中の文章は著者の解説である。

第一点は、ペテロの登場が少ない。

第二点は、復活にふれていない。

第三点は、十字架がない。

第四点は、文学作品としてマタイ伝を見ている。生きるためではなく、ヨーロッパでは古典として知られる聖書を題材として作品化に生かしている。

第五点は、教会批判がすさまじい。四福音書の中でマタイ伝が一番、パリサイ人、学者、長老を批判している。有島はイエスの批判をそのまま使っている。

第1位「山上の垂訓」は、真面目な有島らしく厳しい勸善懲惡の気持で読んでいる。倫理感の強い常識的読み方である。「義のために迫害されてきた人たちは、幸いである。」(5・10)がないが、迫害が分らなかったたのであろう。教えのため命を捨てることに抵抗があるので、十字架が一度も出てこない。四福音書を一冊にしたトルストイ訳「聖書」も倫理中心であり、有島と同様「山上の垂訓」が一番多い。トルストイは自分で聖書を作ったわけで、ロシア正教会から破門されている。

第2位「マリヤの香油注ぎ」ヨハネ伝では姦淫を許されたマリヤが第1位であるように、有島の心にこのマリヤがいつもいるからであらう。

第3位「荒野で誘惑を受ける」は、マタイ伝の読み方の順位として「山上の垂訓」と共に評価してよい。

第4位「迷える羊」はルカ伝にも平行している。(新潮全集第五卷二二七頁1415行へお前は私に還つて来た。放蕩者のやうにせかせかした氣分で、……藻掻いて居る惨めなお前の姿を見やつて)「内部生活の現象」に、ルカ伝15・11〜22の放蕩息子に關連した文章がある。更に明治三十五年十二月二十九日の日記にもへ主よ、放蕩なる汝の第二子へ悲しむべき放蕩を許し給へとある。

第5位「地の塩、世の光」 仏教的言葉でないキリスト教の言葉が氣に入っている。

第6位「死者をして死者を葬らしめよ」とは冷たい言葉だが、家族とも別れるのが弟子の覚悟である。死者とは肉体の死だけでなく、魂の死、靈的に死んでいる人を指す。

第8位「ゲッセマネで祈る」が12回あるが、二十三歳の時のへ御心を爲さしめ給へと跪き禱る(26・3942)、「札幌獨立教會」が1回だけで、へ苦き杯を我れより放ち給へ(26・39)、「ブランド」「運命と人」「藝術論」が5回もある。

年令と共に自分中心になっても、最後はへ御心を爲さしめ給へがキリスト者だ。

第9位「イエスの死」ではへ何故に神は我れを其胸に抱き給はざる(ブランド)、へ我が神、何ぞ我を捨て給ふや(明治36・5・8)と人間側から助けを求めるが、神の方からの働きかけがない。有島さんの氣持は、遠藤周作『沈黙』に通じている。

第9位「家と土台」では、信仰そのものがへ砂上の樓閣のようだと、有島さん自身の反省と読み取れる。好意的に見れば。

第11位、大きな摂理にあるのだが、へ蛇の如く慧ければ十字架に苦しまなかつたのにと、有島さんは自分のこととして考えている。

第13位「主の祈り」では最初の三つ「御名、御国、みこころ」がない。へ地の鹽、世の光」という言葉は好きだが御旨は敬遠している様子。その結果へ日々の糧を今日も與へ給へ(6・11、「ブランド」)2回、へ我れを試練に遭はせず惡より救ひ(6・13、「聖餐」)給えが2回というように、キリスト者でなく普通の人と同じ自分の助けを求める言

葉が多い。

第13位へ主よ主よと云ふもの盡々く天國に入るにあらず(内部生活の現象)が7回も出てきており、根底には教会、キリスト者に対する反発心があるようだが、こういう批判はいつの時代も変わらない。

第13位へキリストこそ神の御業における唯一の教師である(明治37・9・13) という二十六歳の時の信仰は純粹で良し。

第17位「芥子種一粒の信仰」は、教会を批判する有島にピッタリの言葉となった。マタイ伝はヨハネ伝以上に四福音書の中で一番教会を批判している。

第19位へ人の子は枕する所なし(獨り行く者)であるのに、有島さん自身は「金持の青年」である。

第21位へ野に行つて百合の花を見ソロモンの榮華の極みでも(聖餐)とある。日本人が好む言葉の一つ。しかしイストラエルに咲いているのは百合ではなく、赤いアネモネである。

第24位 イエスがへ繩を以つて宮殿に巢喰つた商人達を撃退した(静思)を讀んで倉田氏に(ように、日本の教会も立派なことを言うなら、それだけの行動をしると有島は言いたのである)。

第25位 キリスト者とはまず神を愛せるから人を愛せる。普通のキリスト者は、神が答えてくれないので、まわりを見渡しへ汝自身の如く隣人を愛せず、「惜みなく愛は奪う」ようになる。

第25位へペテロと基督の寛恕に對する問答)では、罪意識で悩む有島には限りなく許されることが氣に入るわけである。

第28位(武郎を愛し続けた)祖母静はへアブラハム等と席を同じうし、教会の人たちはへouter darknessに放置せられて神を求めつ泣けり(明治32・6・14、二十一歳)とは、人間の心情として充分に考えられる。

第30位(社会主義的労働思想に関心を深めた四十歳頃からの)有島は、無意味に安息日を守っている教会人に対す

る批判として、安息日でも「麥の穂を摘む」労働を強調、イエスのパリサイ人批判に同調している。

第30位「「笛吹けど踊らず」」(明治36・4・30、二十五歳)は、日本人の文の慣用語としての引用であって、バプテスマのヨハネを意識しての引用ではない。

第32位「亡はれた小羊」は「迷える羊」と同じ。

第34位「目の代りに目、齒の代りに齒」とは、聖句と意識せずに又は知らずに使う日本人が多い。

第36位「イエスの系図」マタイ伝には、ユダヤ人たちに当時の新興宗教であったキリスト教を伝えよう、という意図があった。その為には、信仰の父アブラハムからの系図で分るように、ユダヤに普及していた父系家族の系図に順じて、おごそかに最初からイエスの系図をもってきている。

第36位 神を愛するが、神が身近でない二十六歳の有島にとって、小さい者、旅人に「一杯の水」(明治37・7・27)をさし出すことは、気が付かない中に、神を愛することを感じたからであろう。

第43位「天地の間、我れ凡ての力を有てり、されば汝等住きて萬民に教へよ、——而して見よ、我は世界の終局まで、恒に汝と俱に在らむ」『リビングストーン傳』(28・18・19・20) この気持はマタイ伝の結論である。

次に、「有島武郎とマタイ伝」の中の内容別順位」の著作原文を著者と共に読んで、東京カトリック神学院のネメシニギ教授は、第1位「山上の垂訓」から順に意見と感想を述べ、総括として次の五点を指摘する。(一) 中の文章は著者の解説である。

第一点は、ペテロがほとんど登場していない。十六章十八節などが無い。

第二点は、「敵を愛せよ」(5・43、48)がない。

第三点は、譬話が少ない。十三章の毒麦の話のように。

第四点は、二十八章十八、十九、二十節「全世界に述べ伝えよ」というマタイ伝の結論が出ていない。
 第五点は、有島は、自分の心に響いたことを卒直に取り上げている。

第1位「山上の垂訓」では、八つの垂訓の中で五番目「あわれみ深い人たちは」(5・7)、と八番目「義のために迫害されてきた人たちは」(5・10)がない。特に「迫害」は、カトリックの人なら殉教者を思い浮かべる。二十一歳の時の日記文へ山上の垂訓の處を讀み、義者の上げらるゝを見て何とも云へぬ心地となれり。Behold, the righteous shall be recompensed in the earth; much more the wicked and the sinner. (明治32・4・17)の中で「いわんや弱き者、罪人においておや」というのは親鸞の影響がはつきり出ている。「汝の行爲、汝の義、学者とパリサイ人より勝^{まさ}ずば」(マタイ5・20)であつて、親鸞の悪人正機を言っているのではない。マタイ伝は神の言葉の実行を強調する。

第2位「マリアの香油注ぎ」では、マグダラのマリア、ベタニヤのマリア、罪深い女、この三人は同じ人だと考えられていた。(有島も三人を同一人物としている。)現在の聖書学者は別々と見ている。マグダラのマリアは、イエスから七つの悪霊を追い出されている(マルコ伝)。何か精神的病氣。ベタニヤのマリアはマルタの姉妹で、悪の生活がない。イエスの頭に香油を注ぐ。罪深い女はイエスの足に香油を注ぐ。類似点は、イエスがシモンの家に入ること。共通点はマリアの名前のみ。当時、マリアは女性の普通の名前。三人の女性が同じであると断言はできない。マリア・ワルトルト著『マグダラのマリア』『聖母マリアの詩』(あかし書房)の中で、幻を見ていく様子に詳しく語られている。

第3位「荒野で誘惑を受ける」が、マタイ伝の中で話題にされること第3位であるのは、読み方の傾向として正しい。

第4位「迷える羊」ルカ伝にも同じ話がある。九十九匹の羊よりも失われた一匹の羊の発見を喜ぶ。人間と同じような喜びが神にもある。放蕩息子に対するあわれみ。(「父様、どうか此愚かなる迷羊をよきに導き下さい。」(明治36・23)と、二十五歳の有島自身、迷える羊の気持で祈っている。)

第8位「ゲッセマネで祈る」では、話題にすること12回中、(「御心を爲さし給へと跪き禱る」(26・39、42)、「札幌獨立教會」(二十三歳)が1回しかない。ゲッセマネの祈りの中心は(「御心を爲さしめ給へ」)であって、信仰者であればここが何回も出てよいはず。(「苦き杯を我れより放ち給へ」(26・39)、「ブランド」(「運命と人」(「藝術論」)が5回も出ているが、ここは人間が自分の苦しみからの解放の願いである。(しかし信仰者であると同時に作家であれば、まず人間としての苦しみを多く描写するのは止むを得ない。)

第9位「家と土台」では、(「砂上に信仰の堅き樓閣は立つこと能はざるなり」(7・26)、「末光續宛書簡」(明治36・8・22)と二十六節ばかり5回も出ている。本来は、イエスの「言葉を聞いて行、ものを、岩の上に自分の家を建てた賢い人」(7・24)を先に出すべきところ。

第13位「主の祈り」では、最初の三つの祈りが無い。「御名があがられますように。御国がきますように。みこころが天に行われるとおりに、地にも行われますように。」(6・9、10)がない。(「我等に日用の糧を今日も與へ給へ」(6・11)、「ブランド」(「初稿」)が2回、(「我れを試練に遭はせず悪より救い」(6・13)、「聖餐」)が2回というように、自分の御利益、自分のための祈りであって、神第一の祈りが欠けている。(第8位「ゲッセマネで祈る」でも神第一でなく、人間第一の祈りが多い。第13位「主の祈り」でも人間第一であり、教授の指摘の通りである。有島にも(「天に在しませす神様」(6・9)、「眞夏の頃」(2回)、(「我等の天父は」(6・9)、「札幌獨立基督教會沿革」(2回)というように六章九節の「天にいますわれらの父よ」に相当する呼びかけの祈りはあるのだが、同じ九節「御名があがられますように。」がない。)

第13位「お前たちのことは知らない」では、へ主よ主よと云ふもの盡々天國に入るにあらす（7・21、一内部生活の現象）が7回も出ているが、これはニダヤ人だけでなくキリスト者も反省すべきことを言っている。マタイ伝の読み方として、ここを取り上げているのは正しい。

第19位、「金持の青年」に対して「人の子は枕する所さへない。」

第21位、〈明日の日に心わづらふ事をしない。野の花のやうだ。〉（6・28、明治39・9・3）の〈野の花〉は、日本人が好んで引用するところです。『カトリック聖歌集』のポピュラーソングの一つに「野の花」を歌ったのがあります。

第28位「選民のおごりに対する警告」では、浄土真宗の祖母静は（ヘアブラハム等と席を同じう）し、教会の人たちは〈outer darkness に放置せられて、神を求めつつ泣けり〉（明治32・6・14）とあるが、プロテスタント教会、特にファンダメンタリストの人たちなら、このようなことは言わない。しかしテモテへの第一の手紙第二章四節には「神は、すべての人が救われて、真理を悟るに至ることを望んでおられる。」とある。

第36位「旅人に宿を貸す」の〈I was a stranger; and ye took me in.〉（明治37・9・19、25・35）の後には「小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである」（25・40）と続いている。この言葉を実践している人の一人にマザー・テレサがいる。現在、世界中で注目されている社会派神父は南アメリカで活躍中である。解放の神学。

第40位〈裁いてはいけない〉（「聖餐」）とあるが、神第一でなく、人間第一となって教会から離れ、教会を批判すること、人を裁いていることになる。

順位	回数	聖書
17 16 15 14 13 12 11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1	18 19 20 22 24 26 26 29 32 53 66 85 92 106 192 247 248	マタイ伝 創世記 ヨハネ伝 ルカ伝 士師記 共観福音書 四福音書 ロマ書 ペテロ第一 出エジプト記 マルコ伝 ヨハネ第一 申命記 コリント前書 詩篇 エペソ書 コリント後書
	13 19 11 12 23 21 18 26 30 28 50 64 92 75 152 222 209	日記以外の 全集から
	4 8 6 1 5 8 3 2 25 16 21 30 39 25 37	日記
	1 1 4 1 1 2	『新約全書』詩篇附

新「有島武郎と聖書」回数別順位

第三部 増子方式

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18
2	2	2	2	2	2	3	3	3	3	3	4	4	4	5	5	7	8	10	11	14	15	16
ナ ホム 書	歴 代 志 上	サ ム エ ル 記 下	サ ム エ ル 記 上	ピ リ ビ 書	テ サ ロ ニ ケ 後 書	伝 道 の 書	ヨ シ ユ ア 記	ル ツ 記	ゼ カ リ ヤ 書	列 王 紀 上	エ ゼ キ エ ル 書	テ サ ロ ニ ケ 前 書	テ モ テ 前 書	マ カ ベ 後 書	ヘ ブル 書	雅 歌	ヤ コ ブ 書	ガ ラ テ ヤ 書	ヨ ブ 記	ヨ ハ ネ 黙 示 録	使 徒 行 伝	イ ザ ヤ 書
2	2	2	2	2		3	3	3	3	2	4	3		5	3	5	5	7	5	9	11	9
					2					1		1	4		2	2	3		6	4	4	7
																		3		1		

	44	43	42	41
約 860	1	1	1	1
不 特 定 (四カ所以上)		ミ カ 書	エ レ ミ ヤ 書	箴 言 コ ロ サイ 書
	1	1	1	
				1

創世記が177回から247回に増したのは未定稿「洪水の前」を独立作品として数に入れたからである。士師記は「サムソンとデリラ」未定稿を数に入れると100回以上になるので、ルカ伝と逆転して第4位になる。内容実質順位第1位は日記39回のヨハネ伝である。